
come with tomorrow ~ 新しい場所へ ~

結里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

come with tomorrow 新しい場所へ

【Nコード】

N2078N

【作者名】

結里

【あらすじ】

良家の子供たちが主に通う、いわゆるお金持ち学校、私立西龍学園高等学校。

庶民の俺、神崎悠汰かんさきゆうたが馴染めないままも高校生活を送って、二ヶ月が経ったある日のことだった。

俺はとんでもないものを目撃した。

それをきっかけに俺の周りは大きく変わっていったんだ。

* * *

様々な悩みを抱える少年が成長するべく奮闘する物語です。

第一章・・・ 1

まるで見えない檻のなかにいるみたいだった。

最初は狭いものだった気がする。しかし徐々に拡大していった檻。

境は見えなくなったけれど、ただ広いだけで、確実に柵はあると思っていたんだ。

刺々しい有刺鉄線を絡ませて、もしかしたら電流まで流れているかもしれない。

その内側にあるのは期待という名の重圧感。

そしてあらかじめ用意されていた軌道。

やがて。

息ができないほど苦しくなっても、脱け出す、という頭はなかった。

だってその場所しか知らなかったから。

手段も、力も、そして勇気さえも持ち合わせていなかった。

あまりにも子供だったんだ。

* * *

都内近郊の小高い丘の上にある私立西龍学園高等学校。良家の子女が主に通う、いわゆるお金持ち学校だ。

学食では一流のシェフが作っていたり、スポーツ施設なみに立派な設備のグラウンドや体育館があったりする。まだ創立してから十年ほども経ってなく、とにかく全体的に綺麗な建物だ。

しかしこの学生の三割近くには、そんな待遇を夢見たり、制服に憧れたり、そして将来を考え自分もしくは親の希望で、エリートに近づくことを目的に在籍している者がいた。

俺は、この春からここの生徒になった。といってもウチは一般家

庭に毛が生えた程度の中流階級だ。そう、三割の方。

中学までは、多少もてはやされたこともあったが、ここにいると、上には上がいることを痛感する。

（どうでもいいけど）

あまりに違いすぎる世界観を見せつけられると、笑うしかない。入学していちばん最初に学んだことだ。

俺は教室から見える空をぼんやりと眺めていた。窓側の後ろから二番目のいつもの指定席。

発行源となる太陽はここからでは見えないが、オレンジ色に染まる空と巻雲が瞳に映る。

耳からは流行りのバンドの新曲。適当にiPodに詰め込んで、規則性もない楽曲をランダムに聴いていた。

教室には俺ひとり。

すでに今日の授業はすべて消化されている。クラスメートはとくに部活やら塾やらで次の工程をこなしているはずだ。

（放課後、誰も教室にいないなんて信じらんねえ…）

ふつう友達とアホなこと喋ったりしないか？今までがノンキすぎたんだろうか。それともこの学校のやつらが忙しすぎるのか…。

とにかく俺は馴染めないでいた。入学して2ヶ月も経つのに、気の合いそうなやつが見つからない。

（俺に問題があるんだろうな）

ここでは俺が異端だから。

「何を聴いてらっしゃるの？」

イヤホンから流れるハスキーな女性アーティストの　俺は考え事に集中していて、このときまで気づかなかったが、いつの間にか曲が変わっていた　声に混じって、少し高めの声が聴こえた。

「またおまえか…」

視線を向けながら俺は言った。

そこには学級委員長の西龍院玲華^{せいりゅう うれい}が立っていて、俺のiPodを見ていた。

玲華はこの学校の理事長の娘で、財閥の孫という生粋のお嬢様だ。

整った顔立ちで、それを覆う枝毛ひとつない薄い茶色がかった髪の毛は毛先で巻いている。

いまは、なぜか真剣にディスプレイに注がれて伏せがちだったが、ぱつちりとした二重の目。そしてすつと通った鼻筋。透き通るような白い肌に、ふつくらとした唇。

彼女の美貌は学年、いや学校一だ。

短すぎず長すぎないチエックのスカート。衣替えが終わったばかりの、龍のシルエットをした校章が左胸にあるカッターシャツと、首元にある紅いリボンをきっちりと着こなしている。

成績も良くて教師の信頼も厚い。

……… っ て隣の席のオギワラが評価してたな。… ハギワラだっけ？
玲華の素性を知った時は、いまだきいるのかそんなやつ、と目をむいたが…… 俺には多少やかい人物だった。

玲華は思い出したかのように、たまに俺に話しかける。それは決まって俺が一人でいる、この放課後の教室でだった。

さすがに声と喋り方で顔を見なくてもわかるようにはなるほどに。
「またあの話？」

不機嫌丸出しで俺は玲華からiPodを取り返した。とくに驚きもせず彼女は優雅に笑った。

「ええ。神崎^{かんざき}さま」

玲華は…… いや、ここの生徒のたいがいと同級生だろうとなんだろうと様をつけて呼ぶ。

親しくなれば別みたいだが、それはなんだか躰の厳しい上流階級の証みたいに俺には思えた。嬉しがってかなんなのか、真似するやつも多いからそれはさらに染み渡る。

でも俺は慣れない。

（ムシズ… は言いすぎだな… そう、寒気が走る。ってやつか）

「神崎さまは学校一の運動神経の持ち主ですもの。ぜひ運動部に入

つていただきたくて」

「あのなあ…。だから俺はおまえが言うほどのもんじゃねえんだよ！なんつかいも言ってるけど！」

そう玲華はいつもこんなことを言う。

なにを勘違いしているのか、何でもいいから部活に入れと、けしかけるために教室に戻って来るのだ。

たぶん教師にでも言われているのかも知れない。いつも孤立して問題児の要素がある俺を、なんとかしたくて責任感のある玲華は引き受けたのだろう。

いい迷惑だ。

「いいえ。テニスのときなど素晴らしかったですもの」

テニス……。体育のときに試合形式でやらされたんだ。

「俺、あんどき負けたはずだけど」

「あれは本気ではありませんでしたわ」

そうでしょう、とにつこり玲華は笑う。俺はiPodを鞆に押し込むと、ため息をついて席を立った。

「もういいよ」

そのまま席から離れる。

「また、お逃げになられるんですの？」

後ろから掛けられた声は、責めるでもなく諭すでもない、ただの質問だった。それは逆に意外で、俺は振り向いた。

初めて彼女に言われた言葉。

玲華は澄んだ瞳だった。だけど読めない。

「なんとも言えば。とにかく俺は…やりたいようにやるだけだから」

放っておけばいいのに。

玲華だってなんかの部活に入っていることは聞いている。それを中断させてまで、俺に構わなくていいから。

俺が教室から出るまで、玲華はもう何も言わなかった。

（よく言うよな、俺も）

やりたいこともないくせに。

教室を出て角を曲がるとそこに一人の女生徒が立っていた。まっすぐに俺を見つめて…いや睨みつけている。

あひかり せいら
浅霧世羅。

玲華ほどの派手さはないが彼女も美人だ。

首のあたりで切り揃えられた黒く艶々しい髪の毛。薄い切れ長の瞳。長身でモデル並みにスタイルが良い。

玲華が陽に例えるなら、世羅は影。

（オギワラが言うには…）

よく喋りよく笑う玲華に比べて世羅は無口だ。

世羅は学級委員の副委員長でもあるから、ということもあるかもしれないが、真逆のふたりは仲がよく、いつも一緒にいることが多かった。

我がクラスのツートップ。

顔と家で選ばれたとしか思えない。

世羅も由緒ある家のお嬢様だとかいう話だ。

「あいつなら教室にいたぜ」

玲華を探しているのかも知れない、と思って俺は言った。すると世羅の表情が変わった。瞳に力がこもる。

あ、と俺は気づいた。

ああー、これが睨まれてる表情かおか。先ほどまでのほただ目つきが悪かったただけだったのだ。

世羅は何も言わずにまっすぐ長い足をこちらに伸ばした。俺もとくに立ち止まる理由がなくて、世羅に向かって歩を進める。というか出口に。

その間、視線は一度も合わなかった。そしてすれ違いざまポツリと世羅は吐き捨てるように呟いた。

「無礼者」

少なからず驚いたが俺は振り返らなかった。おそらく世羅も、こちらは見えていないと思ったから。

まさかこんな芝居めいた台詞を、校内でしかも同じ年の女子に言われるとは思わなかった。

（でもまあ…、何でも有りなんだろうな。ここでは…）

無礼ってなんだろう。

やっぱり西龍院様とか呼ばないといけないのだろうか。舌噛みそ
うだ。

（玲華様ってんならちよつと良いかもしれない）

アホなことを考えながら俺は学校を後にした。

* * *

居場所がない……。

家にはあまり居たくなって教室で時間を潰していたのに、そこにも居れなくなると途端に行き場を失う。

ゲーセンもそろそろ飽きたし、立ち読みするために行く古本屋も店主に睨まれるようになった。金もない。

（やば…、ネタ切れ）

とりあえずぶらぶらと繁華街を歩く。

居場所は自分でつくるものだ、と何かの本で呼んだことがある。けどつくり方は載っていなかった。

だいたい世の中とはそんなもんだ。

見出しに注目して雑誌を買ったとしても、引っ張られるだけ引っ張った挙げ句、最終的には期待を裏切られる。

（…って何のハナシだ、そりゃあ）

仕様もない思考回路に嫌気を感じながら、結局俺はいつもの古本屋に来ていた。店主の視線を感じながら構わず物色する。

意外と俺の神経は図太いかもしれない。

いつものように少年漫画のカテゴリ！。

（あ、続き入ってる）

俺は目当ての漫画を見つけて手を伸ばすと、隣に別の客がずっと

立った。多少気が散るが贅沢は言えない。タダ読みだからな。

「よお、ちゃんと飯食ってるか？若者」

一コマ目も読まないうちに隣から声が降ってきた。低いバリトンの男の声。

つい周りを見渡すとこの棚には俺しかいなかった。

やっぱり俺に言ってるんだよな。

「……………」

無視だな。

俺は漫画の続きを優先してページをめくった。

「無視すんなよ。神崎悠汰^{ゆうた}くん」

はつきり名前を呼ばれて、つい顔を上げた。

三十前後の優男。それが第一印象だった。声や喋り方から、もつとおっさんだと思ったのにどこかミスマッチだ。

そいつは分厚い眼鏡をかけていて、髪は男にしては長めで後ろに束ねている。服装といえばジーンズにＴシャツという、ラフと言えば聞こえはいいがそうとはお世辞にも言えない、つまりだらしない格好をしていた。

見た目で何者が想定出来ない。

もちろん俺の知り合いにはこんな怪しい奴はいない。

「誰あんた。誘拐でもしようってんの？」

「……………。それも良いかもな、ラクそうだ」

ニヤニヤ笑って男は俺を下から上まで見ながら言った。男より下に評価されたみたいでムカつく。

俺は漫画を棚に押し込めるとさっさと古本屋から出た。

漫画の続きという誘惑はわずかに心残りだったが、不愉快な人物と一緒にいるほど物好きな性格ではない。

「あ、でも違う違う」

後ろから男も追ってきて、あっさり俺の横に並ぶと構わず話の続きを شدした。

「逆なんだよな」

「逆？」

怪しいと思いながらも俺は聞き返してしまっていた。身長は俺より少しだけ高かった。

少しだけなのだ。

なのに脚は間違いなく長くて、俺は振り切ろうと必死に早歩きしてるのに難なく男はぴったりとくつついてくる。

会社や学校帰りの人がたくさんいたが、苦にもならないようですリムにすり抜けていた。やっぱリム力つく。

「オレ、探偵してる久保田修次くほた しゅうじってんだ」

「……………ホントにいたんだ。んなもん」

探偵なんて、やっぱりめちやくちゃ怪しい奴だったのだ。

「いたんだなあーこれがある。…しかも最強に男前で頭のキレル優秀な探偵が！」

「恥ずかしいノリやめろよ」

男の、久保田の顔を見たら冗談なんてこれっぽっちもない、真剣な表情で言っていた。うげっ。

「そんでさー、今回はおまえを護るのがオレの仕事なワケ」

「は？」

「三日前見てはいけないモノ見たろ？それでおまえの母ちゃんからの依頼。事件解決までおまえの護衛」

俺の足が思わず止まった。

（三日前）

心当たりは嫌になるほどある。

久保田はうつすら笑んでいた。ほらみろ、だから言っただろ？と言いたそうだった。

「……………」

「だからさ、おまえ大人しく俺に護られろよ」

俺は完全に頭にきて、さらに速く歩いた。

「いらねえよ！そんなもん！」

「あら。反抗期？」

「うつせえ！」

ウルサイ。反抗期と呼べるほど単純なものじゃない。こんな今日会ったような男に解つてたまるか。解られたいと思わない。

（なんで…あの女！）

気分が悪かった。いまさら母親面したいわけでもあるまいに。

「つーか、なんでついて来るんだよ！」

本気で逃げてるのに息切れひとつせず、久保田は横にいた。

「言つたろ？護るためだつて」

「俺も言つたと思うけど…いらねえつて！」

怒鳴ると想像したより怒りの声色が含まれた。悔しくなつてとうとう俺は走つて逃げた。人混みを利用して意味もなく角を曲がる。

悔しかった。あんな男にすべて負けた気がした。身長や脚の長さだけじゃない、心の余裕も俺にはかなわない。

そして未だに親の保護下にいないてはならない俺自身にも、腹が立った。

気づいたら久保田はどこにもいなかった。逃げ切れたとは、不思議にも思えない。久保田が追うのをやめたただけだ。

（くそっ…）

俺は完全に居場所をなくして、家に帰らねばならなくなった。

* * *

三日前 俺は非日常な場面に遭遇した。

中学時代の友人宅に久しぶりに遊びに行った帰りだった。ゲームして馬鹿話をたくさんして…雨がかなり降っていたけれど、高校生になってから初めて心が晴れていたんだ。

なのに……。

まるでその安らぎをぶち壊すように、その場面は目に飛び込んできた。

いつもは歩かない道のり。夜はかなり更けていた。深夜といって

もいい。すべてのものが寝静まっているんじゃないかと思った。

住宅街と繁華街の外れを繋ぐ簡素な歩道橋を俺は歩いてた。そして何気なく、本当に何気なく下の道を見たんだ。人通りはそのときまったく無かった。車はたまに通る程度。

そんなとき、人影が二つ見えた。暗かったし傘もあつたから男か女かも判らない。そいつらは俺から見て左側の歩道を歩いてた。最初は離れていた人影。

俺もそちら側に向かって歩きながら、なんとなくそこを見ていた。こんな時間にどんなやつだ？と自分を棚に上げて思っていたかもしれない。

後ろを歩いてた影がだんだん手前の影に近づき…重なった、と思ったたらふたつの影は見えなくなった。あれ？と思って眺めていると、やがてひとつの影が現れた。あとから思い出すと、こちらは傘を持ってなかった気がする。大手を振って走って逃げていたから。

片方の影がもう一人を路地に引きずり込んだんだ、とゆっくりした頭で導き出したときには俺は走り出していた。ただ事ではない何かを感じ取ってとにかく走った。

動機がヤバかった。予感があつた。見てはいけないものがそこにある予感。

怖い、見たくないと思ったのに、走る脚は自分の意志とは切り離されて、ただ倒れたやつに向かって行つたんだ。

それは男だった。五十すぎぐらいの。

うつ伏せに倒れていて、背中から赤いものが流れていた。血は雨と混ざり合つて道路をどこまでももつたっていた。

俺は頭が真っ白になって、そこからの記憶があまりない。気づいたら警察が駆けつけてきて、話を聴かれていたから俺が通報したんだとは思っけど…。

何回もしつこく刑事に同じ質問をされた。

そこで、最近起こっている通り魔事件と同じ殺害方法だったことを知ったんだ。それは深夜の雨の中、無差別に人を殺している事件

だ。どれも背後から正確に心臓をひと突きされている。四件目で俺が初めての目撃者らしい。

そんなこと知るか、と思った。殺された人には申し訳ないけれど、俺の許容範囲を遥かに超えている。俺は、忘れることにしたんだ。

* * *

（なのに：護衛だ？）

余計なことを、俺に断りもなく。一言ぐらい文句を言ってやろうと思ったのに、家に帰っても母親は居なかった。いつものことだ。

家政婦の咲田^{さきた}さんがいつものように両親とも今日は帰らないと伝えてきた。四十歳くらいのふくよかな女性だ。

あの日、警察から俺の身柄を引き受けたのも咲田さんだった。

「なあ、あの人に言った？あの日のこと」

「まあ、お母様のことあの人だなんて…。はい、逐一報告するように言われてますので」

咲田さんは恐縮した表情を見せながらも俺を責めた。自分では責任がとれない、ということか。

黙っていてくれと頼んだのだけど…仕方がない。雇っているのは俺じゃなくて親だ。

「あつそ」

「夕食の準備ができてますので好きなときにお召し上がりください」
素っ気なく部屋に帰ろうとした俺に事務的に咲田さんは言った。

それには適当に答えて2階に上がる。

隣の兄貴の部屋にちりと目をやった。

居るか居ないのかいつも分からない。だいたいは塾に行ってるが、部屋に居たとしても勉強してるようで、あまり出てこない。

俺は自分の部屋に入るとそのままベッドに寝転がった。

落ち着かない部屋。

机もベッドも洋服でさえ親が与え、すべて親の趣味で置き場から何もかも決められている。物心ついた頃から俺は何に対しても兄貴に勝てたことが無かった。そんな俺に、両親は哀れむような蔑むような目でいつも詰った。

何故出来ないんだ。こんな簡単な問題が。

ダメね悠ちゃん。お兄ちゃんを見習いなさい。

悠汰、惣一の邪魔だけはするな。

いい子にしてみなさいよ。あんたは一人で何も出来ないんだから。

飽きるほど聞いた言葉。この中で俺に決定権はなに一つない。

学校も親が選んだ。学のない俺にせめてハクがつくようにでもしたかったのか。俺は家のなかでいつしか孤独を感じるようになった。それでいて、いつも少し離れた場所から見張られている気分。うんざりだ。

だから俺は見切りをつける。ここはただ衣食住を与えてくれるだけのところ。

お前にはがっかりだ。

小学校の頃そう言われたとき、父親とはまともに話してない気がする。父親は医師だ。別にでっかい総合病院の院長とかそういうものではなく、ただのひとりの医師。いつも病院にいて帰ってこない。父親は息子二人にも医師になってほしいようだった。

兄貴は男子校で進学校の高三だ。おそらく医学部の道へ進むのだろう。

俺はきつと諦められてる。

それでいい。だれも俺に期待をするな。

そして母親は……。

（なんで探偵なんか……どういっつもりだ）

母親はなにをしているのかはつきり知らない。執筆的なことを以前していたと思うが、そんなに家を開けなければならぬ仕事ではないはずだ。だから……、知らない。

知らないでいたかった。

第一章・・・2

次の日も普通に学校はあるわけで。

俺はサボる理由も見つからなかったから今日も学校へ行く。

耳にはiPodのイヤホン。すりきれるほど 何年も前のテ

ープじゃないんだからこの表現は妥当じゃねえよな。でもぴったり当てはまるからまあ、いいか 聞いている曲がランダムによって選ばれて、またかかっていた。

（意外と真面目だなー俺）

あの日の次の日も俺は学校へ行った。本当に神経図太いのかも。

「ごきげんよう」

たまにすれ違う顔見知り…っていうかクラスメートがそんな挨拶をしている。

「朝はおはようでいいじゃんか」

欠伸を噛み殺しながら俺はぼやいた。

「おもしろいひとだね、神崎くん」

誰にも聞こえないように言っつもりだったのに、気づいたら隣の席の男子生徒が、上品な、それでいて無垢な笑顔で横にいた。

ええと…。

「萩原」

「萩原ですよ！はぎわら！」

オギワラじゃなくてハギワラだったか。

「悪い。二択だったんだけど」

「もしかしてまだクラスメートの名前覚えてないの？」

萩原は短めのサラサラのヘアーを揺らして呆れながら俺を見た。

まだ萩原は会話を続けるつもりだと雰囲気気づいて、仕方なくiPodを引き抜いた。

「……………悪い」

別に自ら孤立しようと思っているわけではないが、あまり人の名

前を覚えるのは得意じゃない。

「もう忘れない。ハギな、ハギ」

「まったく…萩でも萩でもいいけどね、名前も覚えてね。拓真^{たくま}だから」

どこか怒ったような顔を見せつつも萩原は屈託なく笑った。

いいやつじゃん。

ああ、とかうん、とか答えてそのまま二人で教室に行った。そういえば、初めはこいつも様をつけて呼んできたことを思い出す。最初に萩原にそう呼ばれたから必死で抵抗したんだった。

「そついえば知ってるかな？」

教室のドアを先に開けて萩原は振り向きながら訊いた。俺より背が低く、見下ろすかたちになった。

「なにが？」

「今度ある球技大会の希望者を今日のホームルームで決めるらしいよ」

「……………それはまた……………」

玲華が喜びそうなことだ。俺は球技大会なんてものがあることも知らなかった。

席につくと視線を感じて前の方を見た。俺たちの会話を聞いているたかのように、真ん中の自分の席から玲華が綺麗な笑みを見せていた。

「うわっ玲華さまの微笑みだあ」

なぜか隣の萩原が赤面している。

「心酔しすぎだ、ハギ」

「お、覚えられないからって略さないでよ！いいだろうっ憧れなんだから」

「ふうん」

「神崎くんはいいなあ。笑いかけてもらって」

「ちよっと待て！その表現はなんだよ。かなりの誤解が含まれてる」「良いじゃないか。あの笑顔を見れるならなんでも！」

だんだん萩原がむきになってきた。鼻息が荒い。
そんなもんかねえ…と俺は頬杖をつく。

萩原はもう他のクラスメート達と挨拶していた。あの人懐こい笑顔で。彼は男女問わず好かれるタイプだな、と容易に分かった。
それに比べて俺はまったく社交的とはいえない。

（どこかおかしいのかもしれない）

大事なネジを一本か二本どこかに置いてきたのかもしれない。
とにかく何もやる気が起きないんだ。

（めんどくせ…）

最近教室にいて座っていると、こんなことをしていて良いのか、という気分になる。

人が一人、目の前で死んだのに。眼を閉じるといまでも焼きついて離れない、血に染まった死体。こちら向きに倒れていて、見開かれた眼は俺を捕えていた。あのとき、あの男に意識はあつたのだろうか。

例えば俺がもっと早く歩道橋を降りていたら、彼は死ななかったのではないか。俺がもっと早く気づいて声を上げていれば、殺人犯を思い止まらせることが出来たのではないか。

考えてもしようがないことだっていうのはわかってる。

（でもまとまりつく…忘れようと思うのに）

あの眼がそれを許さない。

ぼうとそんな事ばかり考えていると、担任の杉村がいつの間にか教壇にいて喋ってた。

杉村は二十代後半の若い男の先生だ。女生徒の受けがいい。

俺はチャイムすら気づかなくなったのか、とわずかながら危機感を覚えた。これは重症かもしれない。

「……ということで、これから球技大会のメンバーを決めるために抽選をしようと思う。西龍院さん」

「はい」

玲華が杉村に変わって教壇に立つ。背筋が伸びていて凛、として

いた。

黒板に競技名をずらずら書いていく。チヨークの字でも達筆だった。本当に彼女は完璧なのだろうか。どこかに欠点はあるのだろうか、少なくともいまの俺には無いように見えた。

書き終わると振り向いて皆に一枚ずつ紙を配った。そしておもむろに白い箱を教壇に置く。

「まずは皆様のご希望の競技を伺いたいと思います。やりたいスポーツを書いて今日中にこの箱に入れてください」

前の席のヤツから紙が回されて、俺も一枚取って後ろに回した。用紙には第一希望から第三希望まで書く欄があつて、一番下には名前の欄があつた。

（なんでこんなまわりくどいやり方…）

拳手させれば良いじゃないかと思う。何で黒板にわざわざ書いたんだ。もしかしたら、まわりくどいのが玲華の欠点？

どうでも良いことを考えながら用紙を机に押し込んだ。「ご希望の多かった競技は、僭越ながらわたくしが厳選なる抽選をさせていただきますわ」

それで良いかしらと、完璧な笑みを浮かべた彼女に、逆らう生徒はいなかった。

いや、それどころか萩原を筆頭に男も女も、教師である杉村も見惚れている。

（ダメだこいつら…）

情けない。とくに心動かされていないのは、俺と世羅だけだった。一番廊下側の前から二列目の席にいる世羅を何気なく見ていたら、一回眼が合つてぷいっと逸らされた。

（はは…嫌われたもんだな）

前から視線を感じて再びそちらを見ると、玲華がまた悠然と微笑んでいた。

（……………）

俺が一抹の不安を覚えたのは言うまでもない。

* * *

その不安は案外早くかたちになった。

いつものようにひとりで放課後の教室で時間を潰していると、玲華が入ってきたのだ。

「ごきげんよう神崎さま」

「今日もかよ」

俺は隠すことなく深いため息をついた。ある意味予想できたこととはいえ、二日続けて襲撃に來られることは今まで無かったことだった。

「ふふ。そんなに嫌なお顔なさないで。今日は別のお話ですの」「別のハナシ？」

少しだけ興味を惹かれた。運動関係以外で話をしたことがない。

「ええ。ここではなんですので、わたくし達の部室に來ていただけませんか？」

「いやだ！」

「ま。はつきりおっしゃるのね」

断られることは想定内だったらしく、玲華は本当に可笑しそうにクスクス笑った。いくら睨み付けても、彼女が動じたことは今までに一度もない。それも氣にくわない理由のひとつだ。

「俺はひとりで過ごすのが好きなんだ。ほっといてくれ！」

「それは困りますわ」

「知らねえよ。話あんならここで話せば」

「あら。それでは神崎さまが困ってしまうわ」「は？」

言っている意味が解らなくて、ついまじまじと玲華の顔を見た。すると玲華の口元の笑みはそのまま、形の良い目だけが細められた。

「四日前、のことですの」

「！」

俺は絶句した。

* * *

玲華について長々とした廊下を歩く。

俺たちの教室は西の棟にあるのだが、部室は東の棟にあるのとこのだった。北側までは実験室や音楽室などの移動教室で行くことはあるが、東側はあまり用がない。

だいたい文化部の部室は東の棟にあるらしい。校内は本当に広かった。

「そついや何の部活やってんだ？」

あまり興味はなかったが、話すことが無くてとりあえず訊いた。

他に聞いただいたいはたくさんあったが、確かにあの話は誰にも聞かれない場所でしたかった。

（いや、本当はしたくないんだ）

忘れたいのだから。でも、この期に及んで逃げ出すわけにはいかないのも確かだ。

「部活…とは言えないかもしれませんわね」

「どういうことだ？」

「憩いの部とでも言いましょうか…活動内容はそう、憩いですわ」
わかんねえ。俺は頭を押さえた。

「つまり、なんにもしてないってことか？」

「ふふふ。あまりお気になさらず…。なんでしたら入部して下さってもよろしくてよ？」

「いや、いい」

面倒くさそうなのは断るに限る。もう一度玲華はふふつと含み笑いをした。

「ここですわ」

玲華が案内した場所は普通の教室ではなかった。

左右に向かい合わせになるように、金箔の龍が二匹　　龍は匹、
なのか？　　小さいけれど、存在感があつてまず目についた。全
体的には真つ赤で豪華な扉。

中と言え、あきらかに生徒というよりどこぞの社長が使つてそ
うなデスクが二つ窓際にあつた。その上にはそれぞれパソコンが置
いてある。その手前にはこれまた大きく、真つ赤なソファ。俺が足
を伸ばして寝れそう。床にはふかふかの絨毯。

間違いない。大企業の社長室だ。実際にはそんなところ入ったこと
ないけど。用がないから。

「趣味わりい」

つい悪態をついてしまったが、玲華は怒ることなくやっぱりクス
クス笑った。

しかし変わりに奥に世羅がいて、こちらを睨んできた。なんにも言
わないが、何となくわかる。

（はいはい、無礼でしたね）

もうどうでもいい。ここまでくると驚きを通り越して呆れてくる。

「あれか、理事長のコネか？」

気づいたら、ついまた無礼なことを言ってしまった。だけど
それにも玲華は動じることがない。

「神崎さまはこういうの、お嫌いそうですわね」

「別にいいんじゃない」

俺は関係ないし。

そう思いながら奥に入るともう一人男子生徒がいた。隅っこにあ
てがわれた2人よりは小さめの机に座っている。そちら側にはたく
さんの本棚にびっしり本が埋まっていた。

俺に気づくとそいつは慌てて立ち上がって近寄ってきた。眼鏡を
かけていて年下に見える。でもネクタイの色で同い年だということ
が判断できた。おそろしく童顔だ。

ちよつと地味めの彼は、尻尾があつたら犬みたいに降ってるだろ
うと思えるくらい嬉しそうに言った。

「うわあ、あなたが噂の神崎さまですね。ぼく、隣のクラスの高田^{たかだ}ひでかず秀和^{ひでかず}って言います！よろしく」

高くうわずった声を出して、そいつは何の躊躇いもなく右手を差し出してきた。握手しろっていいのか…。

「噂ってなんだよ！」

変わりに俺は秀和の頭を小突いてみた。

「痛っ！ひどいつつ」

涙ぐんで秀和は額を両手で押さえながら後ずさった。なんつーか、反応が新鮮…。

「知らぬは本人ばかりか」

その時やや低めの女性の声が聴こえた。ため息混じりに呟いたその声は世羅だった。

男の秀和より低いんじゃないだろうか。いや、秀和は特別かもしれないが。だけどチラリと違和感が生まれる。わざと低く、抑えて出してるような声。

（昨日もそういや低かったか）

しかし昨日はたった一言で、ちゃんと声を聞いたのは初めてかもしれない。

「無礼な振る舞いをする場違いなやつがいる、という噂だ」

（こいつ…）

世羅は鼻で嘲笑^{わら}って言うてきた。それはまるで挑発しているように見えた。

「くだらねえ。用が無いなら帰る」

女の挑発に乗るほど愚かではないつもりだ。俺は怒鳴りたいほどの、ム力つく気持ちを押し殺して踵を返す。

わざわざ来てやったのに。

「お待ちになつて。世羅もダメよ。まだあの話を聞いてないわ」

間を取り持ったのは玲華だ。あの話、この二人も関わってるのか。

「申し訳ありません神崎さま。二人の無礼はわたくしが謝ります。

だからどうかソファにお掛けになってくださいませ」

お嬢様に、というか女に頭を下げられて俺はビビった。調子が狂う。それと同時に、どこまで完璧なのかと恐ろしくもあった。

「別に、そんないらねえけど」

仕方なく俺はソファにどさりと座った。顔がふてくされたようになるのが、自分でも止められない。

悔しいかな、ソファの座り心地が硬すぎず柔らかすぎずで、最高に良かった。

「ありがとうございます。お茶をお持ちして」

俺に礼を言っ、後半は秀和に言っていた。

お茶とかもあんのか。本当に俺が知ってる部屋とは天と地ほどの差がある。

玲華も向かいのソファに腰を落着かせたが、世羅が近づくことはなかった。ふんつとそっぽを向いている。

（あっちの方が人間っぽいかな）

また聞かれたらひと騒動起こりそうなことを考えていたら、秀和が紅茶をテーブルにおいた。

「どうも…じゃない、サンキュー…」

一応気にしながら俺は秀和に礼を言った。少し落ち込み気味だった秀和は、見て分かるほど喜びを表情に表した。やっぱり犬みたいだ。

「で、四日前って？」

まずは相手の話を聞きたくて俺から切り出した。玲華は無駄ひとつない動作でミルクを紅茶に入れると、優雅に一口飲んで口を開いた。

「ええ。神崎さまが目撃されたあの事件ですわ」
「やっぱり、その話か。」

俺の動機が速くなった。

「なんで知ってんの？」

「噂になっているの、ご存知ではなかったんですね？」

「え？」

「あの事件はいま世間の誰もが注目しています。とくにこの界限は被害地ですもの。これだけいろいろなお家のご子息ご令嬢がいる学院で、漏れない方がおかしいですわ」

ああそう。

口に出さなかったが俺は嫌悪感を覚えた。軽く考えすぎていたようだ、と気づかされる。では先ほど秀和が言った噂の中に、このことも含まれていたのか。

「でもぼくは疑ってませんからね！神崎さまのこと」

なぜか必死の形相で、ソファの横から秀和が尻尾を振る…ように見えた。

「疑われてんのか？俺は」

むぎつと秀和のほっぺをつねってみる。もち肌でよく伸びた。

「いひゃっ。ひはいはふ。らはらうらはっふえはふえん」

痛っ。違います。だから疑ってません、と聞こえた。

手を離しながら、構いたくなるタイプだなーとしみじみ思った。

「で？」

玲華に向き直りつつ紅茶を飲む。熱かった。

「あまり、お噂のことをお聞きになっても驚かれませんかね」

「まあ…注目されんのはイヤだけど、馴染めてない学校でなに言われてもどうでもいいし……」

強がりでもなく本音だった。それよりも気づかなかった自分に腹が立つ。

もつと周りに目を向けるべきだった。おもしろおかしく語られているのかもしれない。

通り魔事件の初めての目撃者が、学校で無礼なやつだったら、無責任に騒ぎたくなる気持ちも分からないではない。けどもし馬鹿にされてんなら、黙ってられない。こっちから特別なにかする気はないけど、言われてんのに気づかないなんてもつと情けないじゃないか。

一瞬玲華に哀しみに似た表情が陰った気がした。しかしすぐに話

に戻ったから、真相は分からなかった。

「それでは、これもご存知ないかしら」

玲華がティカップを置く。

「神崎さまが目撃した被害者のことですわ」

「……………」

被害者のこと。正直あまり考えないようにしていた。知るとどんどんリアルさを増す気がして、聞きたくなかった。

考えると、あの眼が浮かぶから。

「……名前、なら刑事に聞いた」

「そう、梶剛志さん^{かじつよし}。浅霧家の使用人の方でしたわ」

「えっ？」

ガチャンとティカップが音を立てた。

俺の右手が当たったんだ。みつともなく取り乱してしまった。

浅霧家って…世羅の家だ。

（その使用人って…）

「本当に何も知らないんだな」

世羅が呆れたようにこちらに向かってきた。しゃがみ込んだまま
でいた秀和の隣に、腕を組みながら立った。

「そのようなこと言うものではありませんわ」

「玲華はその男を過大評価しすぎだ。彼は結局なにも知らない」

「ちよつと待てよ。つまり何か俺から聞きたいのか？」

俺が目撃者だから？

世羅は見下したように俺を見た。

「玲華はそのつもりだったようだが、もういい。事件のことはもう
忘れたいのだろう？」

見透かされてる。

蔑んだ眼は、臆病者と言っていた。それが分かって俺はカッとな
って立ち上がった。

「勝手に期待して勝手に見切りつけてんじゃねえよ！」

「怒鳴ればすむと思っているのか。やはり下劣だな」

「やはりってなんだよ！すかしてんじゃねえ！」

「ちよつと……」

玲華が止めようと立ち上がったのが眼の端に映る。

その時。

前触れもなく、扉が勢いよく開かれた。

「おお！麗しの僕のハニー！今日も元氣かい？」

そして同時に現れたのは、ふわふわの髪の毛を首の辺りまで伸ばして、アクセサリーをいっぱい着けた男子生徒だった。ネクタイが青だから2年生だ。瞳も青かった。不自然な蒼。カラコンだ。顔はへにやへにや笑ってる。というか鼻の下が伸びていた。

一瞬俺たちは固まった。なに、こいつってのが俺の第一印象。あんまり近づきたくない。

「あ、綾小路さま」
あやのこうじ

あの完璧だと思われた玲華も一瞬怯んでいた。おそるべし。

綾小路と呼ばれた男子生徒は、空気の読めないままズス力と入ってきた。玲華のまえで、ふにやふにやした顔から瞬時にきりつとした表情に変わる。

「一日ぶりだね。寂しかったかい？マイハニー。僕は寂しかったよ」

「綾小路さま。も申し訳ございませんが只今取り込み中でして……」

「ふむ」

綾小路はようやく周りに目がいったようだった。固まったままの俺のところまでそれが止まる。

「なんだい？この男は。見ない顔だね」

それはこつちが言いたい、とキレかけたが、なんとなく言わない方が良いと思った。関わりたくない、こういう人種。

「あの、ですから、ね。また今度お話ししよう」

玲華はぐいぐい押しやって、綾小路を外に出そうとした。

「嬉しいよ玲華。デートの約束だね」

そう言っただけ玲華の両手を握りしめる。

なんというか、綾小路はめげなかった。ある意味強い！見習いた

くはないが。

玲華の顔は俯いていて髪の毛で見えなかったが、捕まれた手がふるふると震えている。

（おいおい、大丈夫か？）

玲華も誰も歓迎してないことが分かったから、なんとかしないといけない気がしてきていた。しかし一步踏み出そうとしたところで、世羅に肩を押され止められた。

「そうですね。いまはお互い、いろいろとお忙しいようですから！また、今度、時間が合ったときに！」

ひきつりながらも笑顔を保ち、玲華はとうとう綾小路を追い出した。重そうな扉がやはり重い音を立てて閉じる。

室内につかの間、静寂がながれた。玲華は握り拳を両手に作っている。

あれ？つてやつとそのとき俺は違和感を覚えた。そして。

「んもー！ー！ちょーム力つくー！ー！」

（あ？）

一瞬我が耳を疑った。いま発せられた言葉はいつたい……………。

「なにあれえ？すっげ鳥肌！見てよ世羅ー」

玲華が腕をまくりながら世羅に愚痴っていた。世羅はぼんぼんと玲華の頭を優しく叩いた。

「偉い偉い。よくかわしたな」

「ホントにもう、いい加減しつこいのよーあのバカ」

「しかし毎日これでは身がもたんだろ」

「そうよね。なんとか対策練らないと、こっちが参るわ」

「いつそのことはつきり言ったらどうだ？」

「ダメ！分かってるくせに世羅、意地悪よ！もうー」

「あのー、玲華さま。とりあえず神崎さまにフォロー入れた方がよろしいのではないか、と…」

秀和が俺を見ながら代弁してくれた。

情けないほどに俺は呆氣にとられて、何も言えなかったのだ。

「あー…。ちつ、あのクソ綾小路のせいだっ」

玲華は髪をかき上げながらぼそぼそ呟いていたが、悲しいことにすべて俺の耳には届いていた。

俺はやつと状況を理解した。やっぱり、完璧な人間などいないということだ。

「つまり…それが地か……」

覚悟を決めたようで、玲華は元の位置に戻り座り直し、脚を組んだ。なんか態度も違う。

「そうよ！悪い？」

「いや…悪くねえけど」

とりあえず俺も座る。

「別に言いたきゃ言えば？」

「言わねえよ」

「あたしは困らないわよ」

「だから言わないって…」

なんかどつと疲れて俺は紅茶を飲み干した。ぬるくなっていたけど、猫舌だからちょうど良い。

「意外ね」

玲華は指を絡ませ頼杖をつくように身を乗り出してきた。

「どうせ俺は信用されねえタイプだよ」

「そんなことないわよ」

「うそつけ。たった今まで疑ってただろ」

「そうじゃなくて。まだちゃんとあんたのこと知らないからさ」

よく気の利く秀和が紅茶のおかわりを持ってきた。玲華にも入れ直す。

「だって、あたしが話しかけてもすぐ逃げてたじゃん？」

ふふんと玲華は笑った。

「逃げてねえだろ」

「逃げてたわよ。いつもめんどくさそうだし」

「ぐっ……」

地を解放させた玲華は容赦がなかった。

でも変わらないところもあった。昨日と同じで、その目には責めも何もなかったのだ。純粹に会話を楽しんでいるだけなのかもしれない。

「とりあえず、この本性を知っているのは学校ではここのメンバーだけよ。だからよろしくね」

「わかったって」

（結局バラされたくねえんじゃねえか）

わざわざ念を押すぐらいには、そうなんだろう。なんだかアホらしくなった。

「メンバーって……ここって結局なんなんだ？部活？」

「言っただしょ、憩いの部」

「三人で？」

「そうよ」

素っ気なく言い張る玲華に秀和が助け船を出した。

「理事長が与えた玲華さまの居場所です」

「ヒデ！あなたなに余計なこと言ってるの」

秀和は玲華に鼻を摘ままれていた。痛い痛いと言わめている。やはり秀和は構われキャラか。

へえ、と俺は意外に思った。玲華でも居場所を欲したりするのだ。

「ああ、そうだ。バカのせいで話それちゃったわね。事件よ事件」

秀和を解放しながら玲華は言う。そのとき気づいたが、世羅はもう自分の席に座ってパソコンをいじっていた。無口だと思われていたが、そうではなさそうであることは分かった。しかしやはり何を考えているのかは掴めない。

「ああ、でも俺本当になんも知らないんだけど」

「うーん、それは分かるんだけどー。ただ、あたしたち犯人探しをしようと思ってるのよ。それで協力してもらおうと思って連れてきたんだけど……世羅が暴走しちゃって」

犯人探し。思いもよらない発想で俺は目を瞠った。金持ち

の子供の暇潰しか？

「やめとけよ。警察に任せればいいだろ」

俺の言葉は弱々しく発せられた。

動揺してる……？ だけど何に對しての動揺なのかが自分でも分からない。

「その警察がだらしないから！ もっと早く捕まえていれば梶さんは死ななくて良かったのよ！」

對して玲華の言葉に、目に、力がこもる。やがてその瞳は僅かに潤んで赤くなった。

「親しかったのか？」

「あたしんちと世羅んちは昔から仲良くて、よく遊びに行ったりしてたの……梶さんはあたしにも優しくかったわ」

「そうか」

それしか言えなかった。目の端に世羅がぴくりとこちらを見たのが映った。けどとくになにも言ってこない。自分の方が近い存在だったろうに、全部玲華に任せてた。

俺を引き込むことに反対だからだろうか。

「関係者が身内にいてね、あなたが警察に言ったことまでは知ってる。……それ以外で、なんでも……どんな些細なことでもいいの。なにか思い出したことがあったら教えてくれる？」

「わかった。いまはなにもないけど、思い出したら言う」

気づいたらそう、答えていた。

警察で言ったこと以外の情報なんて、なにもない。玲華はほっと息を吐き出した。笑みが戻る。

「ありがと。じゃあここを捜査本部にするわ。いつでも来ていいからね」

あまりに玲華の目が真剣で、俺はそれに押されたんだ。熱い想いで。

でも俺は怖かった。いまも忘れられないあの眼。血の臭い。もしも……と考えてしまう思考。だけど本当に怖いのは別のところにあ

る気がする。

そう思うのは、犯人が捕まれば少しは安心できるはずなのに、本音ではやめてくれ、という気持ちがあったからだ。そっとしておいでほしいんだ。波風たてずに、凧のように。

ただ、その一番の恐怖の原因がたちになっっていなかった。もやもやと、だけど確実に重く俺に押し掛かる。

「大丈夫ですか？ 顔色悪いですよ」

秀和が顔を覗き込んでいた。

「なんでもない」

俺は秀和の眼鏡を取って頭に乘せた。

「うわっなにするんですか！？」

秀和は眼鏡を直しながら怒った。せつかく心配したのに、とぶつぶつ呟いている。

その姿を見て和んでいると、玲華が立ち上がりながら言った。

「あー、そんでさー神崎さまー？」

俺は間延びした口調と呼び方のミスマッチにずっとこけそうになった。

「やめてくんない？ それ」

「ああ。神崎さまってやつ？ いいじゃない。気持ちよくない？」

「寒気が走るんだよ！ 呼ばれるたびに！」

「日本語おかしいわよ」

玲華は机に行き、そして引き出しを開ける音がした。

「日本語？」

「寒気がする、でいいんじゃない？ まー意味は通じるけど」

間違いに俺はちよつと赤面した。寒気は走らないのか！ 悪寒は、走るよな…。

「じゃあさ悠ちゃん？ 悠汰ちゃん？」

とくに面白くもなさそうに玲華は続ける。

「馬鹿にしてんのか！？」

カッとなって怒鳴りつける俺の目の前に、ぼんと真っ白い箱が置

かれた。それを見て勢いが半減する。サッカーボールくらいの大
きさで、上の面にだけポストのような細長い入り口が設けてある見
覚えのある箱。そう今日の朝一番に見た箱だ。今日一日は教室の後
ろに置かれていた。

「悠汰くん。あたし今日中って言ったんだけどなー」

腰に手を当てて、中腰になり俺の目の前で玲華は不敵に笑った。

玲華様は口が悪くてもお綺麗でした。

俺は完全に消沈した勢いを、力ない笑いで返す。

「いや、あの…、俺なんでもいいから」

「うわあ、あの神崎さまを完全に押さえつけてるう」

少し離れたところで、感動したように目をキラキラさせて秀和が
両手を口元にもっていた。

「ヒデてめえ」

俺は玲華から逃れるように秀和に飛びかかった。

「いま言ったのはこの口か」

後ろから動きを抑えて両方の頬をつねる。

「ひゃ！やへてー」

「ちよつと逃げんじやないわよ！」

「だから！あいたところに入るから、それでいいだろ？」

「それだと厳選なる抽選にならないのよ！」

「勝手に決めたことだろ、変えろよそこだけ」

「とにかく、まだ少し時間あげるから考えといてよね。一番得意な
やつよ！」

玲華はそう言うつと箱を机に片した。音を立てて引き出しをしまつ。

「……………」

なんでそんなにこだわるのか、俺にはわからなかった。まわりく
どいやり方も、もしかしたらなにか意味があるのかも知れないと思
えた。

「いひゃいれす！おうはなひへふはあい！」

抗議の声を秀和が言い、やっと俺はまだ掴んだままだったことに

気づいた。

「あ、悪い」

手を離すと、頬をさすりながら秀和はさつと俺から離れた。

第一章・・・3

次の日から少し顔をあげて、周りを見渡すようにした。

そしたら簡単に気づくことができたんだ。確かに稀にはあったが、俺を見ながらヒソヒソと話してる連中がいる。あれから何日か経ってるから、これでも噂話をするやつは減ったのだろう。

そして視線は常に感じるようになっていた。それは学校だけでなく登下校でもだ。家に帰るまで消えない。

（これは、キツいかも…）

気づかなければ良かったと、いまさら思ってもすでに遅かった。一度知ってしまったら、それは無にはならない。

事件に関することといえば、なにも思い出すことはなかった。だからあれから玲華の部屋には行っていない。

（…っていうか、あれがすべてだ。思い出すことなんかあるわけがない）

俺の記憶を占めているのは被害者の情報だけで、加害者については遠くから見た影しかないのだ。

なんとなく学校でも居心地が悪くなり、どこに行こうかぶらぶら歩いていると、校門のところで男が待ち構えていた。

「ちよつと時間いいか？」

それはあの日俺から事情を聴いた刑事の一人だった。事件の日から十日が経っていた。ニュースや新聞を見ても新しい情報はとくに公開されていない。

「なんの用？」

俺は苛立ちをわざと隠さず訊いた。いまさら話すことなどないのに、わざわざ目立つところで話しかけられたのだ。

「聞きたいことがあるんだ。付き合ってくれ、茶でも奢るから」

刑事はボサボサの頭にヨレヨレのスーツを着ていた。見るからに暑苦しい。無精髭が生えていて、実年齢より老けていそつだ。それ

を差し引いても三十代後半くらいか。

断ろうと思っただが、どうせ時間を持て余していたし、ついに行くことにした。決して奢りにつられたわけではない。

後ろから帰宅部の生徒がざわついている。もう少し後に出ればよかったのかもしれない。でも、もうどうでもいい。なんでも好きに噂すれば良いんだ。

しばらく黙って歩いたあと、刑事が一度だけ振り向いて言った。

「悪かったな」

ええっ。ちよつと反則な謝り方。わかってやってるはずなのに。

それには答えずに、ただ黙ってついて行くと近くのパーキングに刑事の車があった。シルバーのセダン。

「どこ行くだよ」

「まあいいから乗ってくれ」

「言わないと乗らない」

なぜかヤケになって俺は立ち止まった。

「あのな、誘拐しようってんじゃないんだが」

ため息と同時に刑事は呟いた。

誘拐という言葉で、少し前に出会った怪しい探偵のことを思い出す。そう言えばあいつはどうしてるんだろうか。護衛するとか言いながら、あれから一度も会っていない。

「それとも怖いか？お坊ちゃん」

ふと意識を別のところへ飛ばしているうちに、刑事が近寄ってきてそう言った。

「誰がお坊ちゃんだ！」

ムカついてさっさと俺は助手席に載った。挑発だってわかっていたが、ついに行くと決めたのは俺だ。

「結構」

刑事は嬉しそうに笑って自分も運転席にその身を滑り込ませる。そして車は発進した。

「どうだ？学校生活は」

おもむろに刑事が訊いてきた。あまりに唐突だったから、俺はつい突っ込んでしまう。

「親戚のおっさんか！」

「ははは。こんな生意気なガキは甥っ子にしたくないな」

「俺だつてイヤだ。こんなだらしのない叔父」

いや叔父ではなく伯父になるか、おそろくだが。親父は何歳だっけ？と、まったくどうでもいいことを考えてしまった。

（じゃなくって）

「親戚でもなんでも、気になったから訊いたんだ。君が日常を取り戻せているか知りたくてね」

前をむいたまま刑事は言った。

日常……。それはどこまでのことを言っているのだろう。まったく支障がないわけではない。油断すると、襲ってくるかのように脳裏に浮かぶあの光景。しかし学校には普通に行ってるし、ご飯も普通に食べている。俺は無神経なのだろうか。

「別に普通」

答えてから少し不自然な間が空いたな、と感じた。

「そうか普通か。それなら良かった」

そのとき笑った刑事の顔は少し若く見えた。やっぱり無精髭が邪魔だと思う。

改めて周囲を見渡して、はたと俺は気づく。この道は。

「気づいたか？」

俺の様子を見て刑事が訊いた。わずかに俺の手が震える。

「なんだよ？どっか茶でも飲みながら話すんじゃないかったのか？」

「その前に現場検証の続きだ」

刑事の目が厳しいものに変わっていた。そう、ここは俺が見たあの殺人現場に続く道だったのだ。

「それならやっただろ！あの日に！」

「続き、と言っただろう？もう一度確認したいことがあるんだ」

（そんな……）

あれから、俺は一度もここに来ていない。来れなかったのだ。怖くて…。

容赦なく車は現場に近づいていく。住宅街に沿った道。その割りには広くて、歩道橋があるのだ。いまは交通量が多かった。

俺が通った小さい歩道橋が見えてきた。あの日の光景とフラッシュバックする。だけど今日は晴れているし、いまは夕方だ。全然明るい。

（大丈夫。大丈夫だ……まだ…）

自分の鼓動を確かめるかのように、左の拳を左胸に当てる。

車を少し離れた路肩に停車させて、刑事が後方確認しながら降りた。俺もなんとか降りたが、それ以上進めなかった。足が出ないのだ。

「大丈夫だ。なにも心配する必要はない」

動かない俺に気づいて、刑事は俺の肩を押した。

確かにそうだ。ここにはもう何も無い。加害者も被害者の遺体もマンションの入り口に奥まった通りがある。その路地だった。隣の壁もマンションだ。規制テープは無くなっていたが、路地に近づく、白いチョークで型どられた線がうつすらと残っている。

そうだ、こういうふうに倒れていた。こちらに向かつて。

「犯人はあっちから来たんだよな？」

刑事が歩いてきた方とは反対側を指差した。

「そう」

「そのときナイフは持っていたか？」

「……わからない。見えなかったから」

「見えなかった、ということは犯人は傘を差してた？」

あの日も何度も聞かれた質問。わざわざまた繰り返すことになんの意味があるのか。

「……いや…持っていない」

「持ってなかった？あの日はわからないと言ったよな？」

静かに…だけど厳しい声で刑事はたたみかけてきた。俺は顔が上

げられなかった。ただ深く考えないように淡々と答えるしか出来なかった。

息がしにくい。

「あとから考えたら…刺したあと、…逃げるとき持ってなかったと思っ…」

「そうか。では殺された梶剛志さんについてだが…君が駆けつけたあと動いたりしたか？」

被害者の名前を言われて、どくんと鼓動が鳴る。

「わからない。暗くて…」

「ここから見たんだよな？マンションの灯りがついていただろう？」

「わかんねえよ！なあ、もういいだろ！」

叫ぶように発した声に、行き交う人々が何事かこちらを見ながら通りすぎて行った。最悪だ。

「逃げるな！君にしかわからないことなんだぞ！梶さんの無念を晴らしてやれ」

鋭く響く声にどくりと心臓が脈打つ。……知らねえよ、と思った。俺だって望んで目撃者になったわけじゃない。

気づくと、刑事は逃げ腰になっていた俺の腕を掴んでいた。だから、逃げられない。

「ホントに…わからないんだ……」

苦しい。苦しく漏れる息の間に、なんとか言葉を乗せようと声帯を動かす。意識しないと呼吸が出来なかった。

「わかった。もういい」

刑事は俺の腕を離し、代わりに肩を掴んで車まで促した。

諦められたんだ。俺の態度が不甲斐なくて、なにも情報を持ってなくて幻滅させた、と感じた。

「なにも気にするな」

だけど刑事はそう言って俺の頭を軽く叩いた。ガキ扱いしやがって。

* * *

それから刑事は本当に俺を喫茶店に連れていった。現場からも俺の家からも離れた国道沿いにそれはあった。刑事はアイスコーヒを頼んだ。

「遠慮せず何でも頼んで良いぞ」

「じゃあこれ」

俺は写真付きの大きめのパフェを指差した。イチゴがどっさり乗っていて、チョコレートが所々絡めてある。下に二千八百円と書いてあった。

「あ、甘いものが好きなんだなー神崎君は」

引きつった笑いを見せながらも刑事はウェイトレスに注文してくれた。

別に特別甘いものが好きというわけではない。ただ冷たいものを口にしかかった。普通のアイスクリームでも良かったが、まあそれはおまけだ。

「悪かったね今日は。待ち伏せするような真似をして」

「真似じゃなくて待ち伏せだろ」

「悪態つけるほどには元気になったか」

「……………」

嫌な奴だ、こいつは。さっきから見透かすようなことを言うてる。

「そう睨むな。ほら来たぞパへ」

「パへってなんだよ」

「……………」

やっと刑事を黙らせることに成功した俺は、ウェイトレスからパフェを受け取って一番上のイチゴから食べた。

「ウマいか？パ・フェ！」

「わざわざ強調しなくてもいいから」

「奢り甲斐の無いガキだな」

「パフェ代にビビるおっさんよりマシ」

「口の減らねえ……まーかわいい口答えだけどな」

刑事は俺の頭をくしゃくしゃと撫でた。強めに。

「あつぶねっ！鼻につくだろ！クリームが！」

「それを狙ったんだけどな」

頬杖をつきながら、刑事はにまにまと笑った。どっちが口が減らないのか問いただしたい。

しかし、さつき見せた厳しさはどこにもなかった。

「なにか……、なにが聞きたかったんだ？結局同じことばかり聞いて……」

本当は、まだ聞くべきことを秘めている気がした。わざわざ現場まで行つてする質問ではなかった気がしたから。

「まあな。でも同じことを何度も聞くことにも意味があるんだ。実際に今日、別の答えを君はした」

刑事の顔がただのおっさんから、刑事のそれに^も変化した。

「しかしあのままあそこにいたら君がもたないと思つたんだ」

「……」

「だからここで聞く」

こんなところでも俺は大人に守られている。見透かされて擁護されて。どこまで周りに、他人に迷惑をかけて生きなければならぬのだろうか。

そんな俺は嫌なのに。俺が嫌なんだ。

「………なに？」

「……まずはこれを見てくれ」

刑事はポケットから、すつと何やらテーブルに置いた。小さな透明の袋の中にひとつ、服のボタンが入っている。

「あ……」

見慣れたものだった。西龍学園のカッターシャツの小さなボタンだ。

「あのあと調べたとき、現場に落ちていたものだ」

「え？どこに？」

「殺害された場所から一メートル位離れた溝に、入り込んでいた。君のか？」

あの日帰ったあと、気づいたことがあった。

上から三つ目のボタンが、引きちぎられたように無くなっていたのだ。ちょうどネクタイに隠れていた部分。

「た、たぶん……」

「多分？どうやって取れたんだ？」

「わからない」

「わからないはずないだろ？君のだと言うなら、原因があつて取れたはずだ」

俺の記憶には空白の時間があつた。遺体を発見して警察に通報するまでの。

おそらくそれはただの数分。だけど、俺は110番にかけた記憶も霞んでいてほとんどない。だとしたらそのときしか考えられない。あの道は普段通らないからなおさら……。

「わかんねえ、覚えてないんだ！」

つい、また俺は叫んでいた。刑事は難しい顔をしてじつと俺を見つめていたが、やがてため息を吐いた。

俺に言いような不安が襲う。また、諦められた？

「実はな、これはここだけの話なんだが……」

おもむろに刑事は、ボタンが入ってたポケットとは別の内ポケットから黒光りした手帳を取り出す。あれが噂の警察手帳か、と一瞬思ったがただの黒い手帳だった。開いて中を見ながら続ける。

「今回の事件だが、通り魔に見立てた別の犯行である疑惑が浮上している」

「え？」

声のトーンを落として刑事は続けた。

「解剖の結果、いつものナイフとは違う凶器が使われたことがわかった」

なんでそんな大事なことを俺に言っただ。ただの一介の、目撃者でしかない高校生に。

まさか、と俺はひとつの考えにたどり着いた。

「それで、君は梶剛志という男と面識はあったのか？」

（やっぱり、そういうことかよ）

刑事のその言葉に、俺はすかさず睨みつけた。

「俺を疑ってんのか？」

「捜査とはあらゆる可能性をみて、ひとつひとつそれを潰していくんだ。そして残ったものを追及していく」

刑事は慣れたように淡々と語る。

「これはそのひとつの可能性にすぎないよ。わかるか？君は疑われなくなったら自分の無実を自分で立証しなければならんだ」

刑事の話し方はまるで、それが大人の世界だと言われた気がした。

「立証って…」

「難しく考えることはない。ただ事実を俺に話してくればいい」
事実…。

最初から嘘なんてなにひとつついてない。

「……面識はなかった。名前もあの日初めて聞いたから」

それどころか、浅霧家の使用人だということも後から知った。あとは何もわからない。

「芹沢君の家にはよく行くのか？」
せりざわ

芹沢純平。じゆんぺい あの日遊んだ俺の中学の時の友人だ。

「あんときが今年初…」

「たまたま平日に行った友人宅からの帰りに、たまたま目撃したというのか？」

「そうだよ！」

俺はやっぱり苛々した。なぜあの日で、あの時間帯に帰らなくてはならなかったのか、と遠回しに訊かれている気分だった。そんなの俺が訊きたい。

刑事は俺が答える度に手帳に書き込みをしていた。

「では犯人だが…傘を差してなかったと言ったが、レインコートでも着ていたのか？」

「ホントに暗くて遠かったんだ…わかんねえよ」

「犯人の背丈とかは？例えば梶さんと比べてみて」

「……そこまで、真剣に見てなかったから」

「他に、犯人について覚えていることはないか？」

「なにも……」

「路地に駆けつけてから…気づいたことは？」

「そんな余裕はなかった。」

俺は口を開くことが億劫で、ただ首を横に振った。事実を話すことが立証することになる。そう言われたのに、事件の核の部分になると俺にはわからないことしかない。どうすれば良いか、完全に見失ってしまう。

「わかった。……ほら、手止まつてるぞ、食えよ」

刑事の醸し出す雰囲気柔らかいものに変わった。もう終わりと
いうことか。

「梶さん」

ふと俺から喋りかけると、刑事はすぐ驚いた顔をした。それに
少なからず俺も驚きながら言った。

「浅霧家の使用人って聞いた……」

「ああ…確かそのご令嬢が同じ学校だったな」

刑事にはすでに調査済みのことだったようだ。

「なんであんなとこ歩いてたんだ」

世羅の家はあの付近にはない。

どこかと聞かれればそれはわからないが、違うことだけは知っていた。あの辺は俺が小さい頃からいるテリトリーだったから。金持ちが住んでるという話しは聞いたことがない。

「自宅がああ殺害されたマンションなんだ」

「……住み込みってわけじゃないんだ」

俺は溶けかかったアイスにスプーンを突っ込んで、ようやく食べ

ることを再開させた。

「彼は運転手だからな」

「ふうん。じいやとかじゃないんだ」

勝手にそう思っていた。しかし庶民の俺にはじいやだろうがばあやだろつが、具体的に何をしているのか知らない。咲田さんのような家政婦とは違うのだろうか？

「ところで、ずっと気になってたんだが…」

しばらく俺が食っているところを黙って見守っていた刑事が、ふと窓の外を見渡しながら言った。

「君の周りに怪しい奴がいるな」

怪しいヤツ…。

「それってもしかして…」

「心当たりあるのか？」

俺も気になっていた。常に感じる視線。家に帰るまで消えない、ということは裏を返せば家にいる間は離れている。

事件解決までお前を護る。あいつはそう言っていた。本気だったのか。

俺は刑事に探偵のことを話した。別に言う義理なんてなかった。だけど……目の前の男にどこかいい人というのを感じたせい、警察の為せる技とでも言うのか……気づいたら話す気になっていたんだ。

「その探偵の名前は？」

「ええと……くぼ…大久保？…ちがう………久保田だ！久保田」

「久保田修次か？」

くぼたしゅうじと何回か心で繰り返す。

「あー、たぶんそんなん。…知り合い？」

「俺は知らないが、何度か捜査現場に現れて、ちょっとした騒ぎになっただけ」

捜査とかもすんのか、あいつは。俺もつられて窓の外に視線を移した。どこにいいのか全然わからない。

「今回も捜査とかしてんのかな？」

「それはないだろう。神崎君には護ることしか言っていないんだろう？いくらなんでも依頼がなければ調査までしないと思う」

実際俺は会ってないし、と刑事は続けた。

好奇心でしてゐるんじゃないのか。テレビや漫画とは違うみたいだ。しかし俺にはもうひとつの問題があった。乗り越えなければならぬ壁、と言つても今の俺には過言ではない。目の前のパフェだ。

「あ……。もういらねえ。甘い」

半分過ぎたところで俺はスプーンをぶっさして手から離れた。匙を投げる、ってこういうことかと冗談じゃなく思った。

「ばっ、食べよ全部！まだこんなに残つてゐるじゃないか！」

刑事が焦っていた。

「クリーム多すぎなんだよ。あとチョコ邪魔」

「おまえなー2800円だぞ！にせんはっぴゃくえん！」

「ケチくせえ」

「けちっ……………、やっぱりお坊ちゃんだなーおまえー」

刑事は頂垂れてテーブルに突っ伏した。なんかその言われ方はムカつく。

「庶民だろ、俺なんか」

「わかつてねえな、おまえ」

刑事は頬杖をついて上目遣いで俺を見た。

確かに比べていたかもしれない。学校の連中と。もつと苦労してるヤツはいくらでもいることは知っていた。でも知識として、だ。

なんか悔しくなつてもう一度スプーンを握つたら、刑事はそれを見て笑った。馬鹿にしたような笑みではないことはわかった。

「そうだ。連絡先教えてくれるか？待ち伏せしないために」

住所と家の電話番号は事情聴取されたときに伝えてある。刑事の言っているのは、日中とれる連絡先のことだろう。

「俺、携帯持つてないから」

本当は持たせてもらえなかった、というのが正しい。 高校入学

と同時に父親にねだつたら、お前には必要ない、の一言で一蹴された。

変わりにくれたのが、クロノグラフの腕時計だった。十代の子どもがもつようなものじゃない、高そうで立派な時計。時間を無駄にするなと言添えて。

「笑えるよな。いまなんて小学生だつて持つてんのに」

時間を確認するために携帯電話が欲しかったんじゃないくて、ちゃんと他人と通信したくて、勇気を出して言ったのに。暗に、くだらない友人をつくる暇があつたら勉強しろと父親は言っていた。

自虐的な気持ちになつた俺に、刑事は優しい笑顔をみせて言う。

「そんなことないだろ？俺の子供も持たせてない」

「子供っ！いんのか？」

聞き返してから、いてもおかしくない歳だと気づいた。多分だけど。なにをそんなに俺は驚いたんだか…。

「いるよ」

「いくつ？……つてかあんた何歳？」

まずはそこからだ、と俺はびしっとスプーンを突きつけた。

「内緒だ」

しかしあつさり刑事はかわした。何が内緒だよ、女か。

「じゃあこれ、俺の連絡先な。なにか思い出したことがあつたら連絡くれ」

刑事は手帳にさらさらとペンを走らせて、ビリビリ破つて俺に渡した。十一桁の数字の羅列の上にはフルネーム。池田浩一郎いけだこういちろう、と書いてあつた。変な話だと後から思ったが、このとき初めて俺は刑事の名前を認識した。

第一章・・・4

やっぱり、というか想定内というか、火のないところに煙はたたないというか、因果応報：は、ちよつと違うな。つまり刑事が校門に來たことで、さらに俺の噂は広まったらしかった。ひそひそ話してる生徒に目線を向けると、決まっばつの悪い顔で逸らされるのだ。

（もう好きにしてくれ…）

なかばうんざりしながら、俺は放課後を待つて玲華の部屋に向かった。

一応協力することになった手前、昨日のことは報告しようと思ったのだ。

「……それはいけませんわ。落ち着きなさつて」

しかしあの豪華な扉な前で玲華の声が聞こえてきた。あの喋り方、來客中ということか。

俺は数秒扉の前で一度迷った。

（あとにしょ…）

なんとなく俺は入りにくさを感じて踵を返した。

「いいじゃないか玲華。僕らは周り公認なんだよ」

しかし俺はこの声で立ち止まった。聞き覚えのある声。ぽんと鼻の下を伸ばした一人の男が俺の頭に浮かび上がった。

「いけません、こんなところで。ダメです…あつ」

なにやら不穏な空気を感じ取ったときには、俺の体は勝手に動いていた。躊躇わず扉を勢いよく開く。

「玲華!？」

そこには、机に押し倒すように屈めている綾小路の背中があつた。両手は玲華の両腕を掴んでいるのだ、と一連の流れでわかる。まず綾小路が振り返って、少し遅れて玲華と目が合った。

「悠…神崎さま……」

「お前はあのときにいた……………なんだ？何しに来た！」

綾小路は玲華を離して俺に詰め寄ってきた。負けずに睨み返す。
「センプイこそなにやってんですか？」

「キミには関係ないことだ！出ていきたまえ！」

綾小路は俺の胸ぐらを掴むと部屋の外に追い出そうとした。見た目にそぐわずかなりの力だったが、意地を張って踏ん張る。なんて言ってやるうか考えている隙に玲華が口を開いた。

「出ていくのは綾小路さまの方ですわ」

「なに？」

綾小路の力が緩んだ。

「彼はここの部員ですの。彼を追い出すというのなら、わたくし許しません」

玲華は薄く笑みを浮かべて、真剣で力強い眼差しをしていた。綾小路が目を見開いくのが見えた。

「ただど少なからず俺も驚いた。圧倒されていたんだと思う。」

「このままでは済まさないからな」

ぼそりと俺にだけ聞こえるように呟いて、綾小路は出て行った。それを見送ってほっと息を吐くと玲華に向き直った。

「大丈夫か…？」

「ヤバかったわ。もうすぐで蹴っ飛ばすところだった」

憎しみの色を込めて玲華が言った。

「蹴っ……………」

なにを？とは聞かないことにしよう。

玲華はさっと机に戻ってパソコンを打ち出した。

「なんかごめんねー。あいつに恨まれたね」

「いや俺は問題ないけど……………」

「うん、そうだと思った。でもありがと。助かったわ」

こんなにサバサバしてるものなのだろうか？女って……………。玲華が特別な気もするが。

「あのバカ。あたしが一人になるの、見計らってなーにが二人きり……………」

だねよ！」

パソコンを打つ指に力がこもる。やっぱり怒っていた。俺はやつとここで室内を見渡す。

「世羅は？」

「なんか先生に呼ばれて職員室行ったわ」

「ヒデは？」

「風邪で休み！」

なるほど、と納得する。その隙に綾小路は来たのか。

「あ、ねえ今の世羅に言わないでね」

玲華がパソコンから顔を上げて言った。

「なんで？」

「なんでも良いから言わないで！」

玲華の声は語調が鋭く、俺の心を貫く。珍しく余裕のなさを感じ取った。驚いていると、ふっとその眼が伏せられた。

「トラウマ、あるのよ。きつといまのこと知ったら、あの子あのバカになにするかわからないから……」

トラウマ……という言葉が重く感じた。それがなにか気になったが、聞くことは憚れたし、玲華もこれ以上言うつもりはないようだった。だからただ、わかったとだけ答えた。

「でもあいつ、綾小路って言ったか……大丈夫か？また来るんじゃないかね？」

「大丈夫。他に人がいれば大胆なことはしてこないし、あたしも気をつけるわ」

またしてもさざりと言い切る。俺は玲華の隣の世羅の席に座った。キヤスター付きの事務用の椅子。

「本性だせば？」

「それができたら苦労しないわよう。一応家との繋がりはあるしい」
玲華はとても重いため息をついた。それでもキーボードを打つ手は止まらない。

「家？そう言えば公認ってぬかしてたな」

「ぬかしやがつてたわね！もう！お祖父様の会社の取引先の息子とかそういうハナシで、えらく押してきて、お祖父様がつい“あ、うん”って頷いたのを認めてもらったと勘違いしてるのよ！」

しまった、カタカタと鳴っていたはずのキーボードからガチガチと聴こえる。家の話か。だったら俺にはわからない話だ。

「まあ、それでもいいよやバくなったら出すわ。それより今日はどうしたの？逃げなくていいの？」

「逃げる逃げる言っつなよ。話すべき情報が無かったから来なかった！それだけだ」

「教室にもいなかったじゃない」

「……………」

確かにそう言われるとなにも否定できない。

俺は誤魔化すように伸びをした。ぎしっと椅子が唸る。

「それで？なにか思い出したの？」

「思い出したっつーか…新情報っつーか…」

「昨日の刑事から？」

「……………知ってたのか？」

「人の噂なんてね、一日もあれば広まるのよ」

「はあああああ」

まったく、油断もスキもない。

「ほらっため息ついてないで教えなさいよ」

「……………今回の、事件だけ通り魔じゃない可能性があるっつてさ」

玲華の手は止まらなかつたが、明らかにスピードが減速していった。ディスプレイを見つめていて、斜め後ろにいた俺にはその表情は見えない。

なんとなく、疑われたことは言いたくなかつた。噂で、なにか読んでいるのかもしれない。玲華は鋭いから。しかし結局晴らせたかどうかは不明だったから、言わなかつた。

「そう……………だったらなおさら解決しないとね」

玲華は振り向いて微笑んだ。いままで見た中で一番美しいんじゃない

ないかと思った。なおさら、という台詞で一言にまとめているけれど、玲華も気づいているだろう。

無差別に殺す通り魔が、犯人ではなかった場合の意味を。もしもそれが確かならば……、梶剛志という人物は、怨恨の果てに殺された、という可能性がより浮き彫りになる。

……彼女は強い。強くて優しいんだと思う。猫を被っけていてもその芯の部分は隠しきれない。だから綾小路も夢中になるのかもな、とらしくもなく少しだけ思った。

「……俺、ちゃんと頭使うわ……」

「は？いきなりなに言ってるの？」

吐き捨てられた言葉にちよつと前言撤回したくなった。だけど確かにわかりにくかったかも、と思つて頭を掻いて誤魔化する。

「いやー…ホントはあまり考えないようにしてたから」

「じゃあ、もう逃げない？」

にやにや笑つて玲華が訊いてきた。変な汗が滲んだ。僅かにキヤスター使つてじりじり下がる。

「ま、まあな」

やっぱり見透かされていた。それが俺の感想。

俺はやつと気づいたというのに。あの恐怖の正体を……。薄々は分かつていたのかもしれない。でも、いつまでも逃げてばかりもいられないだろう。玲華がこんなに強いのに。

「もう逃げない」

自分自身に言うようにその言葉をつむいだ。

「いーんじゃない？」

玲華の言葉はそれだけだったけど、声に笑みが含まれていた。もうパソコンに向き直っていたから顔は見えなかった。

「なにしてんだ？さつきから」

体重を移動して玲華のパソコンを覗き込もうと近づく。

「クラス全員のデータを打ち込んでるのよ」

語尾にハートマークがついてそんなテンションで玲華は答えた。

俺の動きが止まる。

「今度の球技大会のためにね」

「げえっ！」

俺は床を蹴つてできるだけパソコンから…いや、玲華から離れた。キヤスターという機能は最高で、かなりの飛距離を稼げた。

「言ってるそばから逃げてるしいー」

恨めしげな顔で玲華が非難している。

「あー、どいつもこいつも人気ある競技希望しすぎなのよねー」

玲華は今度はマウスをカチカチいわせていた。離れたままそれを見ていると、俺はふとあることに気づいた。

「もしかして…わざわざ投票させて抽選形式にしたのって…」

「ふふん。気づいた？」

ニタリと玲華が笑う。

「もちろん、それぞれの一番向いてる競技を当てはめるためよ。やりたいものじゃなくてね。拳手制にしたらそれがバレるじゃない？」なんてやつだ。やつぱり少しではなく前言撤回だ。

「でもちゃんと考えてんのよ。あまりに希望とかけ離れてても怪しまれるしさー。あーくそっ、こいつもテニス、サッカー、バスケか中途半端にどいつもプライドありそうだしなあ」

聞かせられない。とてもではないが、あの陶醉きっていたハギとかクラスメートには絶対に聞かせられない。俺は頭を抱えた。

「でえ？結局どれにすんのよ、あんたは」

「なんでもいい」

「またそーいうー…」

「苦労してんだろ？それを少しでも減らそうとしてやってんじゃねえか」

キツと睨む玲華にすかさず俺は言葉を被せた。

「だめ！あんたは最優先だから」

「じゃあ卓球…」

「じゃあつてなによ？卓球バカにしてんじゃないわよ。アレだって

真面目にやったらハードなのよ」

ピンポンとは違うのよ、カットとかあるんだから、と玲華は諭しにかかった。ああ？

「じゃあいいじゃん。それガンバリマス」

「だめよ！もつと派手で華のあるやつしなさいよ。卓球なんて誰でもいいわ」

「おまえが一番バカにしてんだろ！」

俺はついシャーっと席に戻った。

そのとき目に入った。綺麗に並べられたデータがエクセルに打ち込んでいるのを。全員の名前の横に、パワー、テクニク、スピード、体力、集中力、そして経験値の数字が一人一人打ち込まれている。そして身長体重スリーサイズまで…えええ？

「すげえ…」

つい本音が盛れた。

得意気に笑って玲華はマウスをクリックした。

「こんなのもあるわよ」

パツと画面が変わる。一人一人別れていて、写真の横には六角形^{ヘキ}のグラフ。一目でそれぞれの能力がわかった。見やすい。

「これ、おまえが？」

「そうよ、全部あたしの判断だけど一寸の狂いもないと思うわよ」
洞察力も凄いが、パソコン技術も凄い。そしてその執念も凄かった。どれにまず驚けば良いかわからない。

「なにしたいの？おまえ…」

「うつわあ、悠汰に呆れられたー。サイアク」

「いや…誰でも呆れると思うけど…」

「しょうがないでしょ！なんとしてでも優勝したいのよ、あたしは！」

優勝、という二文字に俺は愕然となった。そして玲華のすべての行動が附に落ちた。

ああ、そう、としか答えられない。

「だからはやく決めてね！あー、そうだ！中学ではなにやってたの？」

「なにも……」

「信じらんない。もったいない！才能埋もらせて楽しい？」

「あのさ、そもそも過大評価しすぎるとか思わねえ？」

「思わないわよ。してないもの、評価」

聞き捨てならないことを聞いた気がした。俺の眉がおもいつきりしかめられる。

「な、な………」

「だって本気出してやらないんだもん。見てよ、コレ」

玲華はマウスのホイールをグルグル動かした。俺のページに止まる。

「え？」

俺のデータはすべてゼロだった。それは能力値がゼロということではなくて、データが入力されてないためのゼロ。

「なんで……」

「わからないのよ、あんたは。……最初のテニスときはホントに驚いたわ。対戦相手だった喜多川くん、知ってる？中学では全国クラスの大会に常連で出てたのよ」

なぜか悔しそうに玲華は語った。

「そんな相手に悠汰は互角に闘っていた。でも途中から手を抜いたでしょ。しかも集中力が切れた、とかじゃなくて周りが騒ぎ出してから」

俺は玲華の言葉を遮るように立ち上がった。軽く聞こえるように、努めて明るく言う。

「やっぱり過大評価してんじゃないか。あれはなに？ビギナーズラックっていうの？……たまたまだよ。初めてやったから、たまたまうまくいったんだ。運だよ運」

「初めてって言ったわね？…バカねえ。さらにあたしの期待値上げてどーすんのよ」

玲華は苦笑いでそれに答えた。どういう表情をしようか迷ったうでの苦笑に見えた。

言うべきことが見つからなくなって、俺は話を逸す。

「だいたいなんでそんなに優勝にこだわってんだよ」

「やるからには勝たないと意味ないでしょ？力、貸してよね」

「………… ホントにそれだけか？」

「聞いてから後悔しても知らないわよ！」

一か八かでふるいをかけたら、またこんなこと言うし……。

「その返し、きたねえ」

「なによ、教える変わりになんかしろつかは言っていないでしょ」

「じゃあ教えるよ」

「ふふふふ」

不敵に笑う玲華にビクリと俺の体が反応した。はやまったか？

右手の人差し指をピツと立てて玲華は続けた。

「優勝したらお父様からご褒美もらえるのよ、なんでもひとつ！」

「…………… はあ？」

お父様ということは理事長か。入学式のときに見た程度しか知らないが、子煩悩のようだな。親バカともいう。

「物欲かよ？」

「そうよ、冷蔵庫もらうの。この部屋に！これからの季節には必須だと思わない？」

両手を広げて、さも当たり前のように言う玲華に、俺は力が抜けた。ビビって損した気分だった。

「あ………… つと、報告終わったから帰るわ。またな」

片手を軽く降って出口に向かって歩く。

「ちよつと、まだ話は終わってないわよ？」

突然の変化に玲華は戸惑った声を上げた。俺は少し考え込んで、一度だけ振り向いて笑った。

「どのスポーツを選んでも、同じなんだよ……結局」

ちゃんと笑えたかわからない。だけどいまの俺に成すすべはもう

ないとわかった。結局は、俺の問題だから。

「……………っ！球技大会、月末だからねっ！ギリギリまで待つから」
玲華の諦めない、力強い言葉が最後に聞こえたけど、そのまま扉を閉ざした。

心の扉までは閉ざさないように気をつけたから、そこだけは進歩
だろ？、と誰に言うでもなく思ってしまった。

第一章・・・5

止めどなく押し寄せる恐怖。暗雲が垂れ込める天みたいに徐々に、
たが確実に濃く蝕んでいく。どこまでも覆う黒雲。

足掻くように手を伸ばしても、ずっと拡散するだけだった。払つ
ても払つても意味がなく、やがてまた形成される。

でも俺は掴んだ。掴むことができたんだ。雲の中にある、恐怖の
正体を。

そこにあつたのは期待。

そして…勝手に期待をされて、幻滅されることに怯えている自分
がいた。

。どちらも物心ついたときから始まっていた。両親の手によって

トラウマ？ …… そんな大袈裟なものじゃない。ただ俺は逃げ
出したただだから。トラウマに至るまえに。一度逃げると癖がつく
とわかっていながら…それはもう、どうしようもなかった。

もう逃げない、と玲華に答えた。親にも刑事にも、そして玲華か
らも逃げていた。まずはそれを認める。自分の弱さを見ることが、
別の恐怖があるけれど、まずはそこからだ。

（悪いな、玲華。ひとつずつじゃないとムリみたいだ）

そしてこの日の夜、もう一度俺は事件現場に行くことにした。

夜にしたのは人の目に触れたくなくて…あと、思い立ったのがそ
の時間帯だったから、というのもある。腕時計は二十一時三十分を
指していた。

いつものようにiPodを耳にぶっこみ、俺は家を出た。

咲田さんは住み込みじゃないから帰っていないし、兄貴は多分勉
強だ。邪魔するものは誰もいない。

雨は降ってなかったが星が見えるほど晴れてもいなかった。いま
の俺の気分にぴったりだ。

梶さんの無念を晴らせ。

刑事の池田に言われた。正直なところ、申し訳ないがそこまで想う気持ちにはまだなれない。俺はいつだって自分のことばかりだ。嫌になる。

（けどまだガキだから）

ガキ扱いされてム力つくのは、子供の証拠だってこともわかってる。

（でもちゃんと思い出すから）

見たことは全部。目を逸らさずに。いまはそれで許してほしい……。そう思いながら、まず歩道橋から下を眺めた。いまは車の往来も多いし、ポツポツ帰宅に急ぐ人がいた。そのなかであの日の記憶を刷り込ませる。

まず梶剛志を見だしたのはあの辺りだったな、と確認する。そして次に見つけたのが後ろにいた犯人の影。

…… やつぱり、ここからでは顔まで見えない。でも着ていた服くらいは判然できたはずだ。

（犯人はなにを着ていた？…… 黒い服？…… いや、スーツかも知れない）

ではレインコートを着ていた？…… ダメだ、そんなイメージはない。

そこまで考えて、はたと我に返る。

（イメージってなんだよ）

俺は真実を見に来たはずだ。固定概念は消さなければならない。

しばらく考え込んでから、俺は歩を進めた。歩道橋を降り、現場に近づく。

気を紛らわすために聴いていたBGMは、ドラムの刻むビートが俺の鼓動に重なり合うかのように鳴っていた。速いテンポに押されるように足が動く。

iPodを持ってきて良かった。些細な助力だったけれど、前に進むことの難易度が確実に低くなっていたから。それでもあの場所

に近づくにつれて、俺の鼓動は速くなる。狂ったメトロノームみたいに規則性もなくリズムの先をいく。

（ここだ…）

あのときと同じ位置に俺は立ち止まった。その瞬間、感じた衝撃が蘇る。

（そうだ。それでいい……………それから、俺はどう想った？…………なにを見た？）

今にも逃げそうになる脚を意識的に踏ん張り、隅々まで視線をやった。

左側には猫が入り込めるほどの溝。グレーチングがあり底は見えない。ボタンが落ちていた位置はおそらくここだ。

視線を中央に戻して、倒れていた姿を思い浮かべる。そして記憶を辿っていった。

恐怖と血の臭いがした。そしてあの見開かれた眼が現れた。

わかつている、すべて幻だ。

周りの気配が消え、iPodの音楽も、他の余計な音もいまは何も聴こえなくなっていた。ただ感覚を目の前に集中させていたからそして、まるでかつて父親と対峙したときのような感覚になっていった。

逃げたいのに逃げられなかったあの時期。

すり変わっていた。

返ってきたテスト用紙をテーブルに置き、それを挟んで向かい側に父親が座り、荒げた声で責め続けられた。毎晩毎晩繰り返し行われた叱責。手も、出ていた。俺は見えないロープで縛られたように動けなかった。

何でこんな点数しか取れないんだ？本当に俺の子か？部活がやりたいだろ？そんな暇があったら勉強しろ！こんな成績でどうやって生きてくんた。次に満点が取れなかったらこの家から追い出してやる！

そしてだんだん俺は呼吸が乱れ出したんだ。息苦しくて死ぬんじ

やないかと思つた。

だけど父親は医者だったから冷静に対処した。情けのひとつもかけられないままで。

それから、叱られるたびに息ができなくなっていた。いつもそれで逃げられると思うな！って、終いには放つとかれるようになった。

（ヤバっ……）

昔のことに意識がリンクし過ぎて、気づいたときには遅かった。

俺はまた、息苦しくなっていた。意識して空気を全身で吸う。しかし吸ってるのに酸素が入ってこない。苦しみから襟元を無意識に握り締める。

「……はあっ、はあっ、あっ……」

じきにそれもままならなくなり、俺は立っていられなくなった。

左手で胸元を押さえ、いつの間にか目の前に迫ってきていた地面に右手をつく。そしてその手と唇が痺れだす。気づいたときには、右側から道に倒れ込んでいた。

「過呼吸か？」

ふいに耳に声が届く。

それと同時に音楽も流れ出した。本当は途切れてはなかったはずなのに、そう思った。このとき流れていたのはハスキーな女性ボーカーの曲。

苦しくても明日はくるから

大丈夫だから 悲しまないで

顔をあげて 一緒にいこう

そんな歌詞が流れてた。笑われるかもしれないけど、俺に言われている気分がしたんだ。

その通りに顔を上げて声の主を見たかったけど、出来なかった。激しい耳鳴りと悪寒までしてきて、うずくまることしか出来なかつ

たんだ。

* * *

呼吸が整い、落ち着いたときには俺は車に乗っていた。まだぐったりとダルさが抜けなかったから、後部座席に寝転がったまま運転席を見ずに言った。

「やっぱり… あんだだっ たんだ」

「まあな」

声の主は久保田だった。久保田はすぐに俺を担ぎ上げると、乗ってきた車の後部座席に移動させた。青いコンパクトカー。

狭いけどあの場所にいるよりは良いと判断した、と後から言っていた。

刑事と来たとき、やはり遠くから見ていたらしいことも。

久保田はずっと背中をさすったり、胸の辺りを押したりして、大丈夫だゆっくり息をしると繰り返してくれた。

「ペーパーバック法はあまり良くないと最近聞いてな。とりあえず場所を移動して様子を見ようと思った。ごめんな、すぐに楽にさせられなくて」

落ち着くのを待つてそう言つと、運転席に戻った。そのまま今に至る。どこに向かつて走っているか聞けていない。

気分も気持ち的にも最悪だった。乗り越えようと思った壁は乗り越えられず、それどころか昔の症状まで再発してしまった。しかもまた他人に迷惑かけて…。

「過換気症候群か、女性に多いと思っていた」

「…んな大袈裟なもんじゃねえよ、っーか偏見やめろ」

でも一番最悪なのは自分だ。感謝したいのに、素直に言えない。特に大人相手だと。

「あ、そうか。ごめん」

嫌味のひと欠片も感じない言い方で、さらりと久保田は謝った。

調子が狂う。前はあんなにムカついたのに。

（雰囲気変わった…？）

どこがどう変わったかと聞かれれば解らないが、そう思った。だからそのまま伝えた。

「ああ、探偵だからな。いろんな人格持つてるんだ」

なにが探偵だからなのかまったく分からない。しかし人格変わるやつ多すぎる。しかも俺の周りだけ集まってないか？

「なあ……本当に護衛してたんだな」

「嘘だと思った？」

後部座席からは久保田の表情が見えなかったけど、柔らかい口調で訊いてきた。

なんかつられる。つられて、口調が静かになる。

「いや…でも家に帰るまでしか、ついてきてないと思ってた」

「そうだな。今日は油断したよ」

「……もしかして発信器とかつけてる？」

ふとひとつの可能性に気づいて俺は上半身を起こした。もう体は辛くなかった。

「言えないな」

「否定しないってことはそれが答えだろ」

「もしそうなら、怒る？」

バックミラー越しに目が合った。声の通りで穏やかな目だった。それを見ると怒る気も失せる。

「怒ったってやめないだろ？」

「確かに」

ふっと笑ったその顔を見て、今なら言えると思った。でも気恥ずかしくて俯く。

「……今日は…その、ありがとう」

「なにもしてないよ。襲われてたわけじゃないし」

「……でも安心した」

襲われてたよ、過去に。そう言いそうになったけど、あまりに自

虐的すぎてやめておいた。

それからしばらくして車は俺の自宅の前に止まった。

ああ、俺が落ち着くまで適当に走っていてくれていたんだ、つて
ようやくそこで気づいたんだ。大人のやることの深さに脱帽する。
敵わねえな。やっぱりまだ俺はガキだ。

「なあ今回の事件、捜査してないのか？」

車から降りる直前、ずっと気になっていたことを聞いた。

「刑事になにか聞いた？」

「まえに捜査現場に現れたことあるって」

「そう……、でも今回はそれどころじゃないかな」

答えるとき少し視線を逸らされた。なにかあるのか？とちよつと
気になったけど、もう一度お礼を簡単にいってドアを閉めた。

* * *

明日はくるから大丈夫。

登校するのにiPodを聴いていたら、またあの曲が流れていた。

（よくかかるな…）

適当に入れすぎてタイトルも忘れてしまったような曲なのに、最
近決まって一回はかかる。

どんなに苦しくても、明日がくるから大丈夫なんておかしい。

（明日がくるからイヤなのに…）

ふとそこまで考えて少々後悔した。またネガティブ側に思考がい
っているようだ。ちよつと悔しくなつて次の曲にしようと本体を手
にとつたが、それも負けたみたいで悔しい。

「おはよう。どうしたの？神崎くん」

どうしようか迷いながらiPodを見つめっていると、後ろから肩
を叩かれた。

「あーハギかー」

そこには以前の俺のぼやいた言葉を聞いて、律儀に挨拶を変えて

きた萩原がいた。なんだかんだよく話しかけられるな、こいつには。
「その呼び方固定するつもり？」

不満そうに頬を膨らませながらも、萩原は俺の隣で立ち止まった。
先に行くつもりはまたしてもないようだ。そういえば萩原には様と
呼ぶのを変えてもらっていたな、と気づく。

「えーと……拓真だっけ？」

「当たり前」

爽やかに、嬉しそうな笑顔を見せると、拓真はiPodを覗き込
んできた。

「それで何を見てるの？iPod？」

ホントにこいつは好青年だ。アイツとかソイツとか見習わせてや
りたい。そう思ってまず思い浮かんだのが、綾小路の顔だったりし
た。

「そう、この曲ばかりかかるから悔しくて。かと言って飛ばすの
も悔しいだろ？」

「その理屈よくわからないよ」

拓真はうつんと唸っていた。

「そうかあ？悔しいだろ？普通」

「普通、飛ばすんじゃないかなあ？だってボクなら、そういう曲は
耳に残ってリフレインされるともっと嫌だから」

目からウロコだった。すげーと俺は目を輝かせた。

「そういう考えもあるんだな。すげー頭いいな拓真」

頭をぐしゃぐしゃにしてやったら、やめてよと怒られた。なんか
どっかでこの逆の光景を見たな。

そう思いながら何気なくiPodを操作していると、あれ？と俺は
あることに気づいた。そしたら横から見た拓真が先に口を開いた。

「これプレイリスト設定してるよ……ええっ？いまの会話になっ
？わざと？」

信じられないという眼差しで拓真に見つめられる。ええっ？

「そんなはずねえよ、だって俺はずっと全部の曲をランダムで……」

あ、と俺にひとつのビジョンが浮かぶ。

「玲華だ…あーいーっ……」

何日か前にジツとこのiPodを持って見ていたのを思い出す。あのときしか考えられない。そんな設定をする時間はなかったはずだが、あのヘキサゴンを見せられたあとではそれも可能かもしれないと思える。

「玲華さまっ!？」

なぜかぎよつと拓真が目を剥いていた。

* * *

「玲華!どういうことだ、てめえ…」

なんとか抑えて拓真と登校したが、教室で玲華の姿を見つけると、我慢できなくて俺は詰め寄った。

「やめなよ神崎くん」

後ろから拓真が押さえにかかってきたが、そんなのは無視だ。ここまで歩きながら設定したのは玲華だと、いくら説明しても信じなかった。まったくなんなんだ?この信頼度の違いは。

「ごきげんよう神崎さま、萩原さま。どうなさいましたの?」

しまった、猫かぶり中だった、と今さらながら気づく。優雅に微笑む玲華に拓真はぼうつとなっていた。

「これ設定したのおまえだろ?」

力が抜けそうだったが、引っ込みがつかなくて、やや声を抑えながらもiPodをグイツと玲華につきだした。

「お気づきになりました?あまりに楽しそうに鑑賞なさっていたものだから、つい」

悪びれもせず口元に手を当てて、おほほと笑っている。

ほらみろ、と拓真を見たがまた心酔中だった。おいおい。そのうち鼻血でも出すんじゃないか、と本気で心配してしまった。

「ですがなかなか気づいてくだらないんですもの、つい先日確認

してしまいましたわ」

「は？いつ？」

「球技大会のお話をした前の日でしたでしょうか」

「あの日に設定したんじゃないのか？」

「いいえ。あのときはそんな時間ございませんでした。それより前……かれこれ二十日は経つてますでしょうか………本当に今日お気づきに？」

呆然としている俺だけに見えるように、玲華の瞳がキラリと光った。ように見えた。

今日とか強調してんじゃねえよ！ちくしょう。

反論しようとしたとき、はたと気づいてしまった。そこにいた全員が俺たちを見ていたのだ。ひそひそと話す小声のなかに、なんであの二人が……？と聞こえる。そう言えば皆の前でこれほど会話するのは初めてだったか。本性まで知っているのに変な話だ。

世羅もすでに来ていたが、無関係を決め込んでいる。

「ああ、そう」

それだけでまとめて席の方へ振り向いた。これは部屋で話をつけてやる。意図を問いたさないと気持ち悪い、と思いながら。

「いかがでした？わたくしの選曲は？」

だけど玲華は気にしてないとも言うように、話を続けた。

俺はしばし目をパチクリさせて止まる。そうか、こんなことを気にするようなタマではなかったか。

彼女が猫を被っていたのは、最初から喋り方だけだった。向けられる態度……はちょっと悪くなったかもしれないけど……表情や眼差しに変化はない。常に芯は貫いている。

きっと彼女は俺のことを考えて、一人の時を狙って話しかけてきたんじゃないか、とさえ思えてきた。

「バツ力、最悪だよ。趣味悪い」

「もともとご自分でダウンロードなさってるのに……」

つい笑いながら非難したら、これ見よがしに玲華はため息をつい

た。あー悪かったな。

「そうなんですよ、玲華さま。しかも神崎くんときたら聞き飽きた曲なのに、飛ばすのが悔しいと言っんですよ」

陶酔から溶けた拓真が、裏切って先ほどの出来事を語っていた。

おい！

「あら、悔しいという定義がおかしいですわ。きっとランダムだと思いいになつて、これは選ばれた曲だから試練だ！とでもお考えになつたのかしら」

「さすが玲華さま。そおですよ。だから一ヶ月近くも気づかなかつたんでしょうね」

「おい！2人とも、悪口は本人のいないところでやれよ！」

あーなんか頭痛くなつてきた。丁寧語でバカにされると、余計にム力つくことを俺は体感した。

「それでは陰口になつてしまいますわ」しまうよ」

二人の反論がユニゾンした。ちくしょう！

第一章・・・6

「なあ……おいって……無視すんなよ」

長々ある廊下。俺は玲華の後を追いつながらなんとか朝の疑問をぶつけていた。

「う、る、さ、い、ですわ」

「……………」

ものすごい迫力で睨み付けられた。

一応まだ誰が現れるかわからない廊下、しかしいまは俺たちしかない、ということで、猫かぶった状態と地との境目にいるようだった。それゆえにアンバランスで怖い。

一緒にここまで来ていた世羅は、一人スタスタ歩いて部室の鍵を開けていた。鍵にまで龍があらわれていて豪華だった。

「だってさーあんととき以外iPodさわるチャンスなかったじゃんかよー」

ぼやきまくる俺をさっさと無視して玲華は部室に入った。続いて俺も入る。

「まだ言う？やだもーあなたしつこいー」

すでに口調が変わっていた。地になっても言う気はないようだ。ちっ。

それを確認したら俺も諦めた。

「じゃあもういい」

ため息を吐きながらソファに寝そべると、やっぱりこいつは心地いい肌触りだった。部屋に欲しいかも。無理だけど。

俺はそのまま直帰しようと、教室から持ってきていた学生鞆からiPodを取り出して、仰向けになりながらいじった。最近確認せず再生しかなかったが、確かにスタンダードプレイリストが二十曲くらい設定されている。

一番上にあるタイトルは『come with tomorrow』

。ふーん。

そんなに売れてはいないが、何かのCMのタイアップだった曲だ。
「気をつけなさいよ。先生に見つかったら没収だから」

パソコンの電源を入れながら玲華が言う。それには生返事で返して、くつろいでいると扉が開かれた。

綾小路か、と思い顔を向けたら秀和だった。秀和は高い声で元氣そうに言った。

「お休み頂きましてご迷惑かけました！」

「2日ぶりねー」

玲華がヒラヒラと手だけ振って返していた。世羅はうむ、と頷くだけだった。なんの迷惑なんだいったい、と思いながら見ている俺を見つけて、秀和こちらに掛けてきた。

「うわあ、神崎さまがいるう」

はっはっ舌をだして喜んでいる犬が想像できる。

「風邪だつて？大丈夫かよ」

「はい！もうすっかり！嬉しいなあ、神崎さまに心配してもらって」
「してない。いま思い出した」

「そ、そんなあつさりきつぱり即答しなくても…」

クウーンと鳴くように秀和は落胆した。本当に表情がころころとよく変わる。確かに肌が艶々しているし、健康そうだった。

「あ、早速ばくお茶いれますね。皆様なにを飲みたいですか？」

かいがいしい秀和は、ダメーシなど初めからなかったように奥の方に向かった。その背中に向かって玲華と世羅はそれぞれパソコンから目を離さず頼む。

「あーありがと！あたしレモンティね」

「抹茶を頼む」

「はい！神崎さまは？」

聞かれて俺は少し考えてから、立ち上がって秀和の方へ行く。なにがあるんだろう、と興味を惹かれたのだ。

秀和の机がある左側にその一角はあった。ソファのある位置から

は見えなかったが、カップなど置いてある棚と、キッチンまではいかないがちゃんと水道がひいてあった。そして小さなテーブルに電気ポットがおいてある。最近有名なすぐに沸くというやつだ。

「いろいろあるんだな」

棚には紅茶や抹茶、ほうじ茶、ジャスミンティーや煎茶に玄米茶などあらゆる種類のお茶があった。

「ええ！ぼくの仕事です」

「ふーん。あ、コーヒーもある。じゃコーヒーで」

「かしこまりました！」

嬉しそうに秀和はカップを並べたり、お湯が沸くのを待っていた。慣れている、というか秀和にむいているみたいだ。それで次は冷蔵庫ね…、と俺は妙に納得してしまった。

「確かに…ここまでであると、次は冷蔵庫が欲しいって気持ちもわかるかも」

「知ってたんですね、神崎さま。そうです、この部屋に冷蔵庫は合わないって最初お許しにならなかったんですよ、理事長が」

俺たちの会話に玲華が反応してこちらを見ていた。俺はすぐに後悔の念に襲われる。

「そう思うでしょー？ひどいでしょー？いたたまれないでしょー？だからさ、お願いね、球技大会。悠汰のも置いてあげるから」

しまった。やっぱり話がそこに戻ったか…。

正直、不安な要素はまだある。最近かたちになったものだ。俺は玲華が言うほど運動神経に秀でているわけではない。だからきつと当日はがっかりされるだろう。

幻滅、される。

それに過呼吸だ。もう大丈夫だと思っていた。だが昨日再発したことで、またいつなるかと心配になる。

俺は話を逸らそうと、手前にいた世羅に歩み寄った。世羅もパソコンになにやら打ち込んでいる。

「おまえはなにやってんだ？」

「あ、コラ！無視してんじゃないわよ」

世羅は迷惑そうにこちらを見たが、俺が覗き込むのを拒みはしなかった。変わりに……。

「スケジュール調整だ」

と、冷たい声で言われた。

確かにになにかの表がずらずらと画面に写っている。日付とクラスと時間と場所とスポーツ……。これは！と俺は気づいてしまった。気づいたら玲華が世羅を挟んで、腰に手をあて悠然と立っていた。

「球技大会の練習よ。お昼休みと放課後に少しずつそれぞれのクラスが予約を入れているの」

「練習っ？」

そんなものまであるのか、と俺は愕然とした。

「だからさ、昨日ギリギリまで待つって言ったけど、よく考えたらそんな余裕ないのよ！これっぽっちも！」

「そりゃあ……タイトだね」

「だね、じゃないわよ、タイトなのよ実際。一応予約はしといたけどさーまだ他のメンバーも発表してないし……やばいのよ」

玲華の顔色が青ざめたようにみえる。俺はため息だけ残して定位置に戻った。そうソファだ。

「それで結局、希望はどれよ？まだ決まってるの？」

「だけど玲華はついて来た。仕方ない。本当のことを話そうか。一瞬そんなことがちらついたが、やっぱり駄目だと思い直す。言いにくい。」

俺は重く口を開いた。

「卓球は……ダメなんだっけ？」

「だめっていうか。………本当にないの？得意なやつ」

「そうなんだ……しかも………」

言葉を切ると、玲華も向かいのソファに座って覗き込む。

「しかも？」

「怒らないで聞いて欲しいんだけど………」

「なによ、怒らないわよ」

「なんの競技があるか、全部知らないんだ」

「……………」

ちよつと殊勝に話を続けていたら、最初は神妙な面持ちだった玲華がいまは怒りに震えていた。

オコラナイって言ったのに。

「いまさらなに言ってるのよ。あたしが何のためにあの日、黒板にわざわざ全部書いてあげたと思うの？ いやー信じらんないー！」

絶叫したかと思うと、パソコンまで戻り二枚の紙を持って勢いよくソファに座り直した。ばんとその紙が置かれる。

「聞いてなさいよ！ 男子はサッカー、バスケット、クリケット、ゴルフ、バレー、バドミントン、卓球……………」

「ちよつ！ なんだよその量は！」

ずらずらと読み上げる玲華に俺は血の気がひいた。冷やかな目で玲華が見据えてきた。

「うちの学校、スポーツに力いれてんのよ。だから競技大会は3日に渡って行われるのよ、知らなかったの？」

「しら、知らない……」

なんとか答えるも俺の声は弱々しいものだった。ちようどそこで秀和がそれぞれの飲み物を持ってきた。俺たちを見てクスクス笑っている。

「おまえなにすんの？」

俺の前にコーヒーを置いた秀和に訊いた。少しだけ悔しげに響いてしまった。

「ぼくはバスケです。もし当たったらよろしくお願いしますね」

余裕たっぷりの笑顔で秀和は答えた。

「ヒデのくせに生意気」

「ええっ！ どうしてですか？」

秀和は目を丸くしていた。自覚なしか。

ふうとため息をついて競技大会の用紙を見る。二枚のうちのもう

一枚は前に配られた希望を書く用紙だった。ここで書けということか。

「ちよつと考える」

初めて前向きな発言をすると満足そうに玲華は机に帰った。自分も戻ろうと移動しかけた秀和を呼び止め、低い声で囁く。

「そういえばなんでおまえは入部したんだ？　つかホントに部活か、ここは」

まだ部活動として納得できなくて俺は聞いた。玲華に聞いてもはぐらかされるか、無視されるかだけだから。それに、ここにきてもやることがないし、玲華なんて学級委員の仕事をしていた。ただの憩いというのも納得できる話ではある。

しかしそれならば玲華の人気度からいって、他の生徒がいないことと、逆に秀和がいることが不思議だった。

「ぼくは西龍院家の使用人の息子なんですよ。玲華さまのご厚意で置いてもらってるんです」

僅かに驚いてへええと呟いた。また使用人か。

「ここは正式には同好会ですね、部費おりてないんで」

「あー、まあ必要なさそうだしな」

「でも理事長がなにかと気になさってて、直々にこの空間をお造りになったんです」

「……………」

なんとということだ。かなりのベタ甘らしい。

「いい親子愛ですよね」

両手を胸の辺りで組んで秀和は言った。

「感動してくれてもいいわよ」

聞いていたらしい玲華が割って入った。

「するか！」

呆れはするが感動する余地がどこにある？　つい玲華を見て突っ込んだ。

やーねーカルシウム足りないのかしら、と玲華はパソコンに向か

つて呟いている。本当になんであんなに皆が陶醉しているのか疑問だ。

それを無視することに決めた俺は、体重を戻すと秀和に向き直って内緒話をするように囁いた。

「他の連中、入りたがるんじゃないの？」

「そうなんです。玲華さまが立ち上げた同好会ってことは、生徒会長に内緒してもらってたんですけど、どこから漏れちゃって最初は希望者が殺到したんですよ」

それはまた光景が容易く想像できる内容だ。

「だから玲華さまがあらゆる策略……じゃなくて、入部テストをお考えになさったんです。掛け持ちしてる人は駄目っていうところで、すでにどこかに入部していたかなりの人が落選しました。残りは……」

「ヒデ！あんなにベラベラ余計なことチクってんのよ！」

せつかく声を潜めて訊いたのに、秀和が高い声で普通に答えるから当の本人に聞こえていた。

「す、すみません！」

さらに高く上ずった声で謝る。多少責任を感じた。

「ヒデ、小声で話せよ。……使用人の息子ってことは昔から玲華のこと知ってんの」

「はい、そりゃあもう」

「昔からあんな性格？」

「ああ。そうですよ。身内以外には完璧な振る舞いをなさっています。でもご家族やばくたちにもとてもお優しいんですけど、ときに欲に目が眩むと、目的のためには手段を選ばない感じになっちゃうんです。この間も……」

「秀和！男のおしゃべりは嫌われるわよ！」

「も、申し訳ございませんっ！」

きつちり名前を呼ばれて鋭い制止をかけられると、謝りながら秀和はあわてふためいて俺から離れていった。話し出しは完璧だったのに、秀和の声はだんだん高くなっていったのだ。だから俺のせい

じゃない。睨むな、ヒデよ。

幼少期から猫かぶるのは身についてるわけか、と俺は納得した。多少のことでは崩れない完璧さがあるのは、ここ数年でつくものではないだろう。いろいろ苦勞したのかもしれない。

しかし…と俺は手元の紙を見直した。どれもハードなスポーツだな。面倒くさい。

ひじ掛けに全体重をかけて迷っていると、とうとう綾小路が入ってきた。

「やあ、玲華！1日ぶりだね」

めげる、もしくは諦めるという言葉を、知らないらしい綾小路は今日もウザかった。やっぱり毎日一回は来てんだろうな…こいつは「ごきげんよう綾小路さま」

慣れたもので玲華は何事もなかったように、優雅にお辞儀していた。これが上流階級のたしなみというやつだろうか。

「デートの日は決めたかい？次の週末はどうだい？」

「部活の練習があるのでありませんか？わたくしも同様ですの」

「僕はきみのためならいくらでも時間を作るよ。それに玲華、いいかげんここで何をしているのか教えてくれないんじゃないか？」

「あら、いけませんわ。サボりなど綾小路さまに似合いません」

いけしゃあしゃあと見事に応じているが、俺には玲華の青筋が見えた、気がした。すっかり活動内容を見無視してるあたりがすごい。

しかし、綾小路は何を勘違いしたのか頬を赤らめて、そうかい？などと答えている。

これはこれで成立してるのかもしれない、と思えてきた。

「今度試合があるんだ。応援にきてくれるかい？」

「ええ、もちろんですわ、時間が合えばいいんですけれども」

「ああ、もう！なんて愛らしいんだい玲華！いつなんどきだって離したくないよ！」

綾小路はくねくねと体をくねらせたと思ったら、ガバツと両手を広げて玲華に近づいた。おい、ヤバいんじゃないか？そう思い立

ち上がろうとしたとき、それより一瞬速く世羅が口を開いた。

「綾小路様、部員の方々があなたのことを探しておいでのようなのだ。もう行かれた方がよろしいのでは？」

いつの間にか世羅は窓際にいて、下を見ていた。あたかもその下に部員がいるように。助け船をだしたんだ、と俺は気づいた。綾小路に恥をかかせないように配慮して。それも玲華のためになることなんだろう。

不思議な感じがした。ただ仲が良かっただけではない、なにかを感じる。これが幼なじみというやつなのだろうか。俺には持っていない感じだ。

「残念だなあ。また会いにくるよマイハニー」

お花が背後に飛んでるようなイメージで綾小路は玲華から離れた。振り返り扉から出ようとした瞬間、ふいに綾小路がこちらを見た。

目が合った。つかの間のフリーズ。そして。

「ああ！おまえは！またしてもこんなところにつ！」

いままで気づかなかったのか！驚愕の声をあげる当人よりも俺はそのことに驚いた。背後ではなく脳に花が刺さってんじゃないのか？

「どーも」

関わりたくなかったが世羅を見習って挨拶してみた。驚きが去ったら綾小路は座ったままの俺を見下すような目で見てきた。

「貴様が神崎悠汰だな。調べたぞ貴様のことは。玲華にちよっかいかけるのはやめたまえ」

（うわー敵視されたした。マジ勘弁）

調べたって何をだよ、と思う。しかし、ここでキレるような真似はしない方が利口だってことを今ならわかった。だから短く一言で答える。

「だだの部員デス」

「そんな虚言を吐いたって無駄だ！調べたと言ったのが聞こえなかったのかい？貴様はこの部に登録されていない！生徒会長に確認済だ」

うわーあつさりバレてる。生徒会長にまで手を回すなんて意外と暇人じゃん。

「これから登録なのですわ」

「昨日のことといい、なぜきみはこんな男を庇う!? 騙されているんだね? そうだろ?」

間に入った玲華に綾小路は慌てていた。ちなみに最後の一言は俺に向けられたものだ。どうやったら騙せるんだよ、と聞きたい。

「おっ! それは球技大会の案内! なにをやるんだ? 貴様は」

あーもう、面倒くさい。綾小路は俺の手元の紙を見て詰め寄ってきた。嫌なものが見つかつて俺は顔をしかめた。

「まだ決まってマセン」

「だったらテニスにするんだ! 僕のまえにひれ伏すがいい」

綾小路はテニスをするようだ。またテニスかよ、と俺はため息をついた。

「いやデス」

「なんだと? 貴様逃げるのか?」

「逃げマス」

「ふっざけるなああ!」

なげやりに答えていると綾小路が胸ぐらを掴んで俺を立たせた。しまった、適当に答えすぎたか。

「だったらクリケットにしろ!」

「なんでですか?」

ふと怪訝に思う。

「僕はクリケットにも出るからだよ!」

「なんで二つもでるんですか?」

「知らないのか? 貴様。一人ひとつは出るのが決まりだが、それでも空きがでる。そこに僕のような優秀な人材がかり出されるのさ」

綾小路は前髪を掻きあげながら得意気に笑った。玲華を見ると、ヤバいという顔をしている。俺にも二つの競技をやらせようとしていたようだ。

冗談じゃない。ひとつでもこんなに不安なのに。

「だったらそれ以外を選びマス」

「はっ、とんだ腰抜けだな。僕にやられるのがそんなに怖いとは」
掴んでいた俺をようやく放すと、馬鹿にした笑いをした。

「こんな男に玲華がどうかできるとか、なんて僕はバカなことを考えてしまったんだろう」

らしくなかったねと自己完結している。

「きみは優しいからこんな情けない男に同情したんだね？でも僕は心が広いから許すよ」

一人で大騒ぎをして、一人で納得して綾小路は出ていった。なんというか幸せなやつだ。

「ちよつと、なんでなにも言い返さないのよ」

だけど玲華は怒っていた。我慢できないと顔に書いてある。心外だ。相手にしないように必死だったのに。

「言い返したほうが良かった？」

「当たり前でしょう。もしあたしに遠慮してとか、そんなんだったらぶっ飛ばすから！」

なるほど、どうやら玲華の方が心外だったらしい。

ああそうと返しながら、俺は腰を降ろすと鞆の中からペンをとった。

「昨日のこととはなんだ？」

おもむろに世羅が切り出した。一瞬だけ玲華がフリーズする。

「昨日も勝手に勘違いして勝手に俺を目の敵にしてたんだ」

つまらなそうに俺は言い、球技大会の希望を書いた。第一希望、ゴルフ。第二希望、バドミントン。第三希望、バレーボールと記入する。サッカーやテニスはほぼ走らないといけないから、これで完璧だと自己満足して玲華に渡した。

「これでよろしく。じゃあまたアシタ」

逃げるように出ようとする俺に玲華は呆氣にとられたようだった。
「なによこれ、本当にあいつの挑戦受けないつもり？」

不満そうな声を聞きながら俺は部屋を後にした。

* * *

その夜部屋のパソコンを開くと、純平からメールがきていた。

俺は携帯がないからパソコンのメールだ。携帯は許さないのに、パソコンとかiPodとかをあつさりと思い与えた両親はどこかおかしいと思う。というか、基準がわからない。

メールには、あの日交わした他愛ない話の続きと、最後にまた遊びにこいよと締めくくっていた。俺の家の事情やら、中学時代の愚痴や憤り、すべてを知っている数少ない友人。だけどあえて触れてこない。

不意に、意味もなく、泣きそうになった。

……胸に足りない部分がある。泣けば少しは満たせるかもしれない、と思う。

この部屋が感傷的にさせてるのだ、とも思う。
だけ……。

もう少し頑張りたい。それは決して簡単じゃないけど、少しずつしか進めないけど、前に行く。

だからそれまで純平には会わない。会えない。醜くすぎるまでにはまだ至ってない。

足掻きたいんだ。

俺は他愛のない部分だけの返事を打ち込み送信した。

第二章・・・1

足掻きたいとか強く思ったわりには、一夜が明けたとたん、さっそく俺は挫けていた。

でも考えられなかった事態とか、理解不能とか、そんなことは全然なかったはずなのに、心構えが足りなかったんだ。すごくびっくりした。

（見間違い…とかじゃねえよな）

でも何度見直しても変わらない。俺の手元には玲華が皆に配った、球技大会の決定通知。内容はバレーボールと…テニスにされていた。

「この日程で練習をしていきます。ご報告が遅れて申し訳ございませんでしたが、さっそく今日から頑張りましょう」

にこやかに玲華が微笑むとクラス全体の士気が高まった。

「なにかご質問のある方はいらっしゃいますか？」

「はい！」

なんか黙っていられなくて、俺はすかさず手を挙げた。

玲華の目が細められる。やだー、無視したいいつて思ってるのが見え見えだった。でもすぐに取り繕い完璧な学級委員長に戻る。

「はい、神崎さま」

「希望と遠く離れてるんだけど」

「確かに皆様のご要望にこたえられましたら、それが一番いいのですが……」

「気にしないでください玲華さま。僕たち頑張ります」

クラスメートの一人が立ち上がって言ったのを皮切りに、あらゆるところから声が沸きだした。

「そうですわ。西龍院さま、気にすることありません」

「神崎くんは贅沢なんだよな」

「玲華さまにあって言って振り向いてもらおうとしてるんだ」

「イヤー不潔ーっ」

「おまえら喧嘩売ってんのかっ！」

俺が冷や汗をかきながらその場を制したとき、ぱつりと誰かが呟いた。

「僕も納得できないな」

ちょうど静かになった瞬間の呟きはとても響いた。周りの注目がそいつに集まる。

喜多川だった。テニスでかなりの好成績を修めてるやつ、という玲華からの情報が俺の頭に浮かぶ。

「喜多川くん部活に入ってる人は、その競技はできないんだよ。だからテニスは……」

「知ってるよ！」

おずおずと拓真が先読みして教えたのを、喜多川は真つ赤になつて叫んでた。

「そうじゃなくて……どうして僕がひとつで神崎くんはふたつなんですか？」

数の問題らしい。彼は運動部にさえ入ってないのに……と喜多川がぼやくと、周りも同調しだした。

「確かにおかしいよなあ」

「それなら僕も納得いかない」

「西龍院さま、神崎さまに弱味でも握られてるんですか？」

「もしかして神崎くんが脅してたりして」

「イヤーサイテーっ」

あのなあと呆れながらも、俺は何も言わずに玲華を見ていた。

内心、よしよしもつと言え。もっと騒ぎが大きくなって見直しになれば良い、と思っていたのだ。

クラスのボルテージが最高潮になったとき、玲華が口を開いた。

「皆さまお静まりください！」

そこにいる全員を黙らせることのできる、透き通った、力強い声だった。上に立つ人間が持ち合わせている声。ピリッとそれが教室

を走った。

「わかりました。では他の希望に添えなくてご不満をお持ちの方も含めて、練習をみて最終決定をします。実力がすべてです。それで調整いたします」

そこには笑顔ひとつで皆を納得させた、あの日の玲華はいなかった。ただ静かに厳かに命じたみたいに思えた。それでも反論するものはいない。

悔しかつたら力を誇示しろということだ。わかりやすい。わかりやすいけど一番厳しい。

ごくりと生唾を呑む音が聞こえた。たぶん喜多川とか運動部に入っている連中だろう。

* * *

その日の放課後からすべての学年、すべてのクラスの練習が始まった。体育館もグラウンドも使用権利は予約制で、その間は本来使用している部活も時間が短縮される。全校生徒がそれぞれそういうシステムだから、不利だと嘆く者はいないのだろう。

といつてもたかだか約二週間だ。二十日後には大会本番。

（みんな熱すぎ……。ただの球技大会だろ！校内の！）

俺は流れる汗を拭いながら心だけで愚痴る。それは喋ってる余裕も時間も、体力もないためだった。

向かいのコートにいる喜多川が、ネット越しに俺を睨んでる。その手には白いボール。

喜多川もバレーボールだったんだ。それをコートにきて初めて知る俺もどうかしているが、本当にそれどころじゃなかった。気持ちに余裕なかった。

（賞金とかないんだろ？）

喜多川がボールを高々と上げ、ジャンプしながら右手で打つ。まっすぐボールは俺のところに迷うことなく突っ込んできた。

（なのになんでっ………いつ、てえ！）

なんとか両腕で弾いたが、速くて重いボールは俺の腕を破壊する気だと思った。レベルが違う。

だいたいバレー部でもないのにジャンプサーブするか？普通、と聞きたい。

六人制でローテーションでまわってるのに、喜多川は俺ばかり狙うし。いや、喜多川だけではなかった。ほとんどの男子がそうだったのだ。

侮られているんだ。狙い目だと思われる。もしくは調子にのるなど、制裁をくだしたいのかもしれない。出る杭は打たれる。

（だからつてうぜえ！）

一度敵コートに渡ったボールがこちらに戻ってきた。当たり損ねたアタックで。

後列にいた山仲^{やまなか}というクラスメイトがレシーブし、それが俺の上上がった。トスもせずに俺は怒りに任せてボールを打った。バツクアタック。

たまたま喜多川に向かって行き、近くで落ちた。

フェイントみたいになって、おもしろいくらいに決まった。本当にたまたま、偶然。

「くそっ！」

喜多川が悔しそうに地団駄を踏んでいた。さらに闘志がみなぎっていく。

（やべ……）

ひやひやしながらやった初日の練習はなんとかこなせたけど、俺の見せ場は後にも先にもその一回だけだった。

* * *

運動不足がたたって疲れきった体を、引きずりながらあの部室に行った。玲華のために用意された部屋。

おかしな話だと自分でも思うけど、ここしか思いつかなかった。
人の目が見つからない場所に行きたかった。

（違うだろ。そう思うこと自体がおかしいだろ。人の目って…あの
三人もいるのに）

自分の考えに愕然とする。いつのまにか本当に俺にとっても憩い
の場になっているとも言うのか。

でもいまそんな余裕がない。深く頭を働かせる余裕がなかった。
ぐちゃぐちゃと余計なことが頭をよぎったのに、部屋に行くと当の
本人も世羅もいなくて、秀和だけだった。

「うわっ！大丈夫ですか？神崎さま！」

俺を見るなり秀和は慌てていた。そんなにひどい顔をしているの
だろうか。

「ちよつと休ませて」

倒れるようにソファに横になった。衝撃で僅かに体が沈む。

秀和は慌ててるわりには行動が素早く、すぐに透明なグラスが近
くにあった。

「み、水っ、水ですよ。飲めますか？」

「わりい…」

上体をゆっくり起こしてそれを受けとる。冷たい水が喉を通り、
熱くなった体を冷やした。気持ち少し落ち着く。

秀和にグラスを返して、再び俺はソファに沈んだ。頭がくらくら
して、世界がまわってるみたいになっていた。気持ち悪い。苦しい。
意識して呼吸を落ち着かせる。

（まだ…大丈夫…大丈夫だ）

「あの…ぼく自販機でなにか買ってきましようか？スポーツドリン
グの方が良いかも」

秀和の言葉に、右腕で目を覆いながら顔をしかめる。そんなのは
変だ、と思う。

気を遣いすぎている。秀和は俺のパシリでもないし、もちろん使
用人でもない。そこまでする義理はないはずだ。

「いいから、ここにいろ」

「えっ？ええっ？」

秀和に焦りが加わった。言い方を間違えたな、と気づいた。でも体がダルくて訂正する気力がない。

「あ、寂しいんですね。大丈夫ですよ、ここにいますから」

（違う！）

予想通りの勘違いをして、秀和は俺の様子を窺いながら側から離れなかった。

「……………玲華と世羅は？」

「まだ女子の方は練習中ですよ。バレーより遅くから開始してますから」

同じクラスの俺より、隣のクラスの秀和の方が詳しいのはなぜなんだろう。

玲華がラククロスで世羅がバスケットだな、とまわらない頭で思い出した。ラククロスなんてルールも知らない。世羅はあの長身だからバスケットに向いていそうだ。

しかしたった一時間程度、本気で動いてこれだ。体育のときいかにサボっていたのか認識させられる。

「冷やしたタオルお持ちしました」

やっぱり落ち着きなくパタパタと秀和が動いていた。

「あのさあ、氣い遣いすぎて疲れない？」

「いいじゃないですか。気持ちいいんだから」

さらりと言つて勝手にタオルが額に乗せられた。ひんやりしていて、確かに気持ち良かった。きっと性分なんだろうな。こいつの。

「サンキュ……」

「いいえ。神崎さまこそ気を遣わずになんでも言うってください。できないことはちゃんと断りますから」

思い出したように秀和は付け足した。できたやつだ。同い年なのに、こんなにも心遣いで負けるとは。

（勝てたやつもないけど…）

少し自己嫌悪に陥りながらもしばらく休憩していると、二人が帰ってきた。

「ただいまー疲れたー。あ、ひとり死んでる」

「彼はまだ生きてると思うぞ、玲華」

「ひとり死にかけてるー」

「そうだな。それが正しい」

「もつと鍛えないと当日ヤバいんじゃないの？」

「二週間で鍛えさせればいい」

「玲華さま世羅さまももう少し労ってあげてくださいよ。入ってきたときはもつと死にそうな顔色してたんですから」

女子二人が帰ってきて、一気に室内が華やかになった。

それはそれでいいけど……やかましい。内容が煩^{めづ}かった。反応するのが煩わしい。

陰口が嫌なのは以前聞いた。だけどこう目の前ではつきり言われると、応える義務がでくるような気になる。でも体がそのテンションについていけない。

「あれ？マジな感じ？」

玲華のトーンが下がって心配そうな声色が混じった。それを聞いて、やっと、俺はぐつと腹に力を入れて起き上がる。意地が八割。心配させたくない気持ちはいったの一割だった。残りは多少体力が戻って可能だったから。

「うるせえよ……。これくらいでくたばるか」

「寝てていいわよ。最初の方だけ見てたけど、ちゃんと頑張ってたからね」

意外にも優しい言葉をかけられて、思わずぎよっとなった。最近、いろんな人に優しくされてる気がする。

（なんで……？）

わからない。俺は優しくないから。優しくされる意味がわからない。そんな価値のないのに。

「ほらほら寝た寝た」

玲華が強引に、俺にボディブローを仕掛けてきた。無様なうめき声を漏らして俺はまたソファに倒れた。

「あつ！玲華さまがとどめを刺した！」

慌てる秀和。

「あっぱれだな」

冷静な世羅。

そして俺はもうしばらくソファにうずくまっていけないといけなかった。殺す気か。

* * *

耐性とか、慣れ、というものは実際すごい。一週間も経つと俺は一時間フルに動いても、とりあえず倒れ込むほどバテることはなくなつた。

これは身体の機能だけの話じゃない。心でも言えることだ。その感じは昔から体感していることではあった。

例えば過換気症候群、過呼吸だつてそうだ。最初はパニックに陥つて、本当に死ぬんだと思った。けど今では予感がするときがある。あ、来るつて。そして対処法も知識としてある。いつまでも最初ではない。

ペース配分だつてわかるようになってくる。そんなんでセーブしてたら結局同じじゃないの！つて辛辣に玲華は言い放つてたけど。

（優勝、させればそれでいいんだろ？）

それぐらいには強気に思えるようになってきた。それがただの強がりなのが悔しい。

まだテニスがしんどいから。バレーは他に5人がカバーしてくれる。でもテニスは俺が全部走らないとボールを逃すんだ。

「その考えがすでに甘いのよー。バレーでも全部自分が決めてやるとか言えないの？」

「じゃあおまえもラクロスで独壇場みたいにファインプレーしてん

のかよ」

「否定はしないわね」

「それはスバラシイことで。他のやつらは玲華さまのオカゲでって感謝すんのか？それとも妬ましくて悔しいって泣くのかよ？」

「だからそういう気持ちが一番大事って言ってるのよ。そうしろとは言っていないでしょ」

「どう違うんだよ」

「あんたはまず団体競技がなんたるかを学ぶのが先ね」

「はあ？だったら卓球やらせろよ」

「まだ言ってるの？ホンッと意外としつこいわね」

玲華の言いたいことも多少はわかる。けど言い方がム力つく。そう指摘したら、凶星だからム力つくだけでしょ、って返されてしまつて、もうなにも言えなかった。いつだって男は女に口では勝てない。別に勝負している気はないのに、気づいたら玲華とはこんなことばかり言い合っていた。

それでも、嫌でも練習時間はやってくる。

違うな。嫌じゃない。

だんだんまんざらでもなくなってきたんだ。しんどいし余計なブレッシャー　そのほとんどが玲華によるものだ　はあるけど、体を動かす爽快感やら充足感も確かにあった。

「あれ？」

そんなある朝、学校に着くと俺の下駄箱に変化があった。ちなみにあれ？って先に反応したのは拓真だった。一瞬立ち尽くした俺の小さな異変に気づいて覗き込んできたのだ。拓真とはよく登校の間帯が一緒になる。

俺はどういう表情かおをしていいかわからず、片眉を上げて拓真を見た。

「なんか古典的だね」

他人事である拓真は気楽に笑っている。俺は視線を戻した。

そこには、上履き……は無くなってなかったし、画ビヨウとかも

別になかったけど、それとは逆の……つまり。

「ボク、ラブレターって初めて見た」

そう一通の真っ白い封筒が入っていたのだ。俺だって初めてだ。待てよ、まだソレと決まったわけじゃねえだろ」

言ってさっさとソレを取って靴を履き替える。そのまま教室に向かうと、置いてきぼりをくった拓真が慌てて着いてきた。

「開けないの？」

「おまえの前では開けない」

好奇心丸出しの拓真を睨んで俺はズボンのポケットにソレを押し込んだ。

「いけずうー」

某、マルチャンかおまえは。

* * *

今日の練習のあと、第二体育館のうらで待ってます。

あとからこっそり一人で確認すると、それだけ書いてあった。差出人不明。

ソレの正体は拓真の言う通りだったようだ。

* * *

この日の練習はテニスだった。

玲華が昨日からさまざまな練習風景を見てまわっている。最終決定をするためだ。それに合わせて空いてるやつらが一緒に連なってきた。部活もないから暇なんだろう。

だからといってギャラリーが多いことは問題だ。やりにくくてかなわない。

（集中するんだ）

余計なことを考えたら駄目だ。体よりも神経が疲れる。周りが見

えなくなるほど集中すればなにも問題ないはずだ。

クラスメートの新城^{しんぎ}が相手だった。新城は喜多川と同じように一種類しか選ばれてないことに不満を抱えている。

（イヤだなあ…）

すごく苦手な精神を持っている人種だ。体育会系の熱い根性とか努力とかいうやつ。新城は返してくるボールを左右上下に振って揺さぶりをかけてくる。ただのラリーで試合でもないのに、玲華に良いところを見せようと必死だった。

（…んのっ！ジャマくせえ！）

俺といえば返すだけで精一杯で、落とす場所を狙っている余裕がない。

とくにバックに来ると辛い。フォームの基礎がなってないから油断するとあらゆる方向に飛んでいくのだ。

「…っ！」

フォームを意識していると力が自然と抜けていて、ボールの重さでラケットが落ちた。右手首が痺れていた。

新城から得意げな表情が返ってくる。素人相手になんてやつだ、と思う。でもそんな感情もなんか悔しくて俺はラケットを持ち直した。

（なんでこんなにガンバってんだ、俺は…）

ふと我にかえる。

玲華が見てるなら、とくに。わざとできないところを見せて考え直させれば良い。それで楽になれる、はずだ。

（期待されると苦しい）

迫ってくる圧迫感。喉が締め付けられるようになる感覚。

（ヤバイ…）

こめかみから流れる汗は冷たく感じた。これ以上はダメだ。そう告げる気管。

それでもここに居続けるのはなぜだ。

脚が動かないから？期待に応えるため？

（期待に込めたい？）

それもあるかもしれない。そもそれを含めて前へ進むためだ。前へ行け。立ち止まるな。

俺はボールを持ち直した。次は俺のサーブだ。高々と上げたボールを、しっかり見て振り下ろす。

（え？）

振り下ろしたつもりだった。

だけどボールは重力に逆らわずなんの抵抗もないまま下に落ちた。腕が上がらなかったんだ。

周囲が少しだけざわついていた。

* * *

身体が言うことを聞かなくなつて、俺はそこで練習を切り上げた。新城とか他にも練習していたクラスメートが不満を漏らしていたけど、関係ないみたいにその場を後にした。

玲華はなにも言つてこなかった。珍しいな、とか思いながらシャワーを浴びた。スポーツクラブじゃないのにシャワーがあるなんて、と思う。

これで初めてこの学院の恩恵を受けた気がする。他にもトレーニングマシンとかあるのだ。普通の高校にはない。

制服を着直すと、ポケットから封筒が出ていた。朝から入れっぱなしにしていたことを思い出す。

正直行きたくない。気分が最悪で、いまは誰にも優しくできない。そう思うから。

だけど拓真とか秀和あたりの人種なら、自分に余裕がなくても優しいのではないかと思う。

（こんな考えがエゴだな）

とりあえず行ってみることにした。もしかするとただ、からかわれているだけかもしれない。なんにしても、はつきりしないとスツ

キリしない。

だけど体育館の裏には誰もいなかった。

からかわれていたの決定だな、と思って踵を返した。

どこに行こうか一瞬迷う。なんとなく玲華には会いたくない。

「あのっ」

そのとき前から女生徒が走ってきた。見たことある顔だと思った。クラスメートだ。話したこともないおとなしい生徒。名前が出てこない。

「ごめんなさい。予定より早く終わったんですね」

「ああ、そうか…」

彼女の言葉で自分が早く来すぎたことに気づいた。ということはコレは本物？

「コレ、あんたが？」

封筒をポケットから出して見せると彼女は顔を赤らめて俯いた。

「はい、ごめんなさい呼び出しなんて…」

消え入りそうな声だった。肩が微妙に震えてる。

「ずっと、気になってたんです……あの、神崎さまのこと。言葉は少し乱暴ですが、優しくして……最近、スポーツなさってるときも、すごく格好良くて……ずっと、目で追ってしまってます」

ものすごく驚いて、眼を睜^{みは}った。彼女のまえで優しくかったことなどないはずなのに。思い当たらない。

「優しくした覚えはないけど？」

「わた、わたし保健委員の資料をたくさん持っていたとき…落としちゃったのを拾ってくれて。他の人にもその優しさを見せて、それでやっぱり怖いだけの人じゃないんだなって……」

保健委員という単語で思い出した。彼女は櫻井^{さくらい}だ。櫻井あやな。でもそれはたまたまその場に俺しかいなかったからで、別に優しさじゃない。

途切れながらもすっかり櫻井は続けた。

「あ、あの……好き…です。付き合ってください」

こんなにはつきり他人に想いを伝えることのできる彼女は尊敬できた。すごく勇気がいったことだろう。だけど…。

「悪いけど……」

いまは目の前の壁にどう対処するかで頭が支配されている。決して優しくない、厳しく重い壁。

彼女に敬意を感じたから、少しでもちゃんと向き合いたくて、俺は真実を伝えた。

「気持ち嬉しいけど、いま付き合うとか、そんな余裕ないから」

「西龍院さまのことが好きなんですか？」

悲しげな表情を見せながらも言った櫻井の言葉に、俺は呆気にとられた。

いま、なんて言った？

「あ？」

「だ、だって、神崎さま仲良く話されていたし。最近よく一緒にいるし」

つい、すごんで聞き返したら櫻井はびくびくしながら答えた。玲華と皆のまえで話すことは確かに増えたけど、それは球技大会のことがほとんどだ。ただそれだけ。

「恐ろしい誤解」

「でも西龍院さまのまえではすごく伸び伸びされてて」

「んなわけないだろ！」

ダメだ、これ以上話すと玲華の本性をばらしてしまいそうになる。じゃあな、と断って俺はその場を立ち去ろうとした。

「ま、待ってください！ だったら、お試し期間でも良いから、あの…もう少しチャンスが欲しくてっ……！」

意外と櫻井は押しが強かった。でもその目は固くつぶられていて、いまにも泣き出しそうだった。

なんでもいいから傍に置いてほしい…そう言われた気がした。

「やめとけよ、そんなん……。空しくなるだけだろ」

やめろよ。俺なんかそんな必死に夢を見るな。俺は応えられない

い。だから、期待するな。

拒絶が伝わったのか、なにも言わずに櫻井は来た道を走って去って行った。残されたのは罪悪感。

俺は長いため息を吐いた。

そのときふと目の端で何かが動いた。見覚えのある背中が一瞬見えて、すぐ大木に隠れた。

嫌な予感を感じながらそちらに向かう。

「なんでいるんだよ？」

裏庭の脇にある大きな木の陰にそいつらはいた。

……そいつら？

俺は拓真だけの姿を想像してたのに、その先にはなんと玲華と世羅もいたのだ。

「ご、ごめん。でも君が隠すからいけないんだよ？」

「可愛い子ですね。泣いてらしたわよ、おかわいそうに」

「ばれたな」

三種三様の反応を見せながらそいつらは俺の前に現れた。

とりあえず俺の標的は拓真に絞る。拓真は今朝一緒に封筒を見ている。明らかに原因はこいつだ。

「てめえ拓真！だからって、なんでこいつらまでいるんだよ！」

「そこで一緒になったんだよ」

「いいじゃありませんか。滅多に見られるものではありませんわ」

「あのなあ！見せ物じゃねえんだよ！」

「断るとは意外だったな」

ポツリと世羅が呟く。するとつかの間静まりかえって、それを拓真が破った。

「お試し期間ぐらいなら付き合っただけなら良かったんじゃない？まだ櫻井さまの良さを知ってないでしょう？」

「おまえなら付き合うのかよ？アホらしい幻想に」

「そついう言い方ないんじゃない？」

なぜか俺の言葉に拓真はムツとしていた。怒る権利はこっちにあ

と思うんだけど？

「もういい。帰るわ、じゃーな」

疲れきってそう締めくくると、俺は鞆を取りに校舎に足に向けた。
また逃げてるよー、っていう目で玲華が見ていた。

第二章・・・ 2

心労の原因とか心配事とかって、なんでこんなに立て続けに起こるんだろう。

今日は一日中激しい雨が降っていて、グラウンドが使えない。体育館を予約していたところだけの練習だ。バレエはもともと無かったし、俺は久しぶりに暇を持て余していた。

暇だと困る。いろんな想いがよぎって困る。

だけど、体を休めることができるから、それはそれで良い。好都合だ。正直今日もテニスをする、完全に肩がやられる不安があった。

（やつぱりフォームが悪いんだろうなー）

そんなことも考えながら、相変わらず教室で時間を潰していた。iPodで音楽を聴く。

吹き飛ばせ！闘え！

立ち止まるな！叫べ！

パンク系でそんなシャウトがバックに聴こえる。主旋律では“辛くなったら逃げちまえ”とか歌っていた。

どっちだよ、と突っ込みたい。昨日興味本位で入れた曲だった。はやまったな。

そんなことを考えていると、ガラスと教室の扉が開かれた。玲華か？と思ったけど違った。世羅だった。

「神崎、ちよつといいか？」

意外な人物に少しだけ身構える。世羅とはあまり会話らしい会話をしていない。玲華とよく話しているのは聞いているが、俺と玲華が話しているときは、きまって黙っていたから。

初めて部室に行った日以来かもしれない。俺は嫌われているんだ

ろくな。

「珍しいな、世羅一人か？」

「おまえの無礼には慣れたと思ったがな……」

ため息と同時に世羅は声を吐き出した。俺はわずかに眉をしかめる。

（ああ……）

そしてワンテンポ遅れて世羅の言いたいことがわかった。

「呼び捨てム力つく？」

「玲華は気にしてないようだから、それに私がとやかく言うつもりはないが……私には馴れ馴れしく接せられる理由がない」

「っていうか……玲華の場合は名字が呼びにくいから。世羅……俺たちは名前の方がインパクトが強くて、つい」

「あんたと呼ぶ方が礼儀だと思っているのも、激しく勘違いだな」

世羅とは相性が合わない。口を開くと結局こんな言い合いだ。玲華とも喧嘩っぽくなってしまっけど、はっきり言ってくれるだけいい。分かりやすいのだ。

だが世羅は真意が読めなくて先に進まない。

「おまえ、って言うのはどうなんだよ？……つか、じゃなくて、何の用？」

イヤホンを外しながら訊くと、睨むように見据えてきた。

「事件のことだ。なにか思い出したか？」

そのことか、と俺はため息をつきそうになったけど呑み込んだ。

玲華が先に哀しみの表情をみせたけど、世羅はいつも淡々としていて、だから気にしてないと思っていた。そんなこと1ミリも思わべきではなかったのだ、と気づく。いつだって俺は気づくのが遅い。この話は変わらず目の前が暗くなる。当たり前だった。人がひとり死んでいるのだから。

「いや、まえ玲華に言った情報ぐらいで……思い出したことはなにも……」

「玲華に言った情報？」

聞いてないのか？と俺は愕然とした。真っ先に報告しているものだと思っていた。言わなかった理由でもあるのだろうか。……言えなかった？

「なんのことだ？」

「……玲華に聞けよ」

「言え。あの人は浅霧家の人だ」

「最初に見切りをつけたのはおまえだろ？俺は玲華に頼まれたんだよ！」

みつともなく俺はうろたえながら立ち上がった。ガツツと木の椅子が鳴った。

玲華の狙いがわからない内は言わない方がいいのだろう。

（違う。ただ俺が二度も言いたくなかっただけだ）

「わかった、玲華に聞こう。しかし大きな口を叩いても結局なんの役にもたつてないな。あれから何日が過ぎたと思う？球技大会が終われば1ヶ月だ」

「仕方ないだろう！実際見たことが少ないんだから！」

「それだけとは思えないな。おまえにとっては暗い記憶だ。すべて忘れて日常に戻りなくなる気持ちもわからんでもない。だが私にとつては……」

一旦世羅は言葉を切った。目に深い怒りがよぎっている。

「……私にとつては唯一無二の存在だったんだ」

憎悪と悲哀。それは時間が経つても薄れることはなく、それよりさらに深く刻まれているようだった。

あまりに深い負の感情に触れて俺は息を呑んだ。

「どうせ玲華に認められて、女にちやほやされて、さぞや愉たのしい毎日だったんだろうな」

「てめえ！」

俺は力ツとなった。我を忘れて世羅の腕を掴み、力づくで窓際に押しつける。

いくら許せないことがあったって、悲しかったとしても……そこま

で言われるいわれはないはずだ。心外だ。なにも知らないくせに！
「人の気も知らねえで、勝手なことばっか言ってるなよ！全部一氣にできねえってんのはわかってんだよ、だからひとつずつやってんだろ！」

怒りにまかせて叫んだけど、だから待つてくれとだけは言えなかった。警告が鳴ったから、そんなことは言つべきでない。

待てるはずないよな。一日だって一秒だって早く、犯人を取っ捕まえてやりたいんだろ。それはわかるから。

「は、離せ……」

俺のわずかに下の方から弱い声が聴こえた。世羅が震えていた。先ほどもまでの強気な彼女はそこにはいなかった。

（トラウマあるって……）

こんなときになってやっと俺は玲華の言葉を思い出した。はっとなって腕を離す。

「あ……悪い……」

綾小路がしたこととはまったく意味は違う。だけど男が力任せに女の動きを封じるということでは同じだった。

最低だ。勝ち気でも女だ。長身と言われていても俺より低い。

「悪い、俺……」

言葉を封じるように俺の頬をばしっと平手で殴った。睨む目に涙が滲む。

それを見るとなにも言えなくなった。どうせ謝罪の次に出てくる言葉は、言い訳とか戯れ言とかなんだ。言えなくていい。苦しい。息苦しさを感じる。

「やはり……おまえはキライだ」

ぼそりと言い残して世羅は教室から出ていった。しばらく頬の痛みは消えなかった。

忘れていたわけじゃない。事件のこと。今でもあの場所には行けない。

（もう、どうして良いかわからないんだ）

苦しい想いをしてあの場所に行つて、本当に思い出せるのかわからない。思い出せたとして、犯人検挙に繋がる事実があるかも不明だ。

（俺が狙われたら早いのに）

おとり、という言葉が浮かんだ。でも犯人は俺の存在に気づいてないと思う。そもそも探偵に護衛してもらふ必要なんてないのだ。

（探偵、か…）

久保田と話がしたいな。

そう思つて俺は教室を出た。

いまもどこかから見ているはずだ。気づいたらいつの間にか、感じていた視線が慣れたせいか感じなくなっている、けど…たぶん。スクール並みに振る大雨で、今日も気配がかき消されていて自信がないけど、きつという。

俺から連絡するすべがないことに、今更気づくのもどうかと思うけど。

俺は学校の外に出ると、人気のない場所を選んで声を張り上げた。「いるんだろ？出てこいよ！」

しばらく辺りを見回したがなんの変化もない。聴こえるのは雨の音のみ。いなかったらどうしよう。恥ずかしい。

「話があるんだけど！」

焦りながら雨に負けないように再び叫ぶ。しーん…。

どうしよう、もう一度叫ぶ勇気がない。心が折れる。

もしかしたら、あまりに何にもないから……もうやめてたりして。

（事件解決までって言つてたよな…確か）

期限のことを思い出す。無視されてるのか、本当にいないのか、確かめるにはどうしたらいいんだろう。

（俺の命が危なくなれば？）

どうしようもなくアホな考えをしてる、ってことはわかってる。だけど俺の頭には、もうそれしか残されていなかった。一度思いついた思考はなかなか離れてはくれない。

そのまま、ふらふらと大通りに出る。歩道側は赤信号。通行を許された車が横をなんの躊躇^{ちゅうちゆ}もなく走りすぎる。

やってはいけないことをする気持ちになる。すぐどこどきしている。鼓動がうるさい。

いない可能性もあるのになにをしてるんだ俺は。そう思いながらも足が動いていた。

「なにやってんだ！」

すごい焦ったような長いクラクションと、激しい怒声が耳に届いた。

それから支えていた足が宙に浮いて、後ろに体重が傾いた。次に右肩に感じた衝撃と冷たい雨のシャワー。

なんだいるじゃん。

後ろで俺の体を支えながら、一緒に倒れ込んだ男の顔も見ずに俺はそう思った。

やっぱりいるんじゃない。

「おまえアホか！なにを考えてんだ！」

体勢を整えながら後ろを見ると、つかの間雨に触れただけなのに、すでにびしょ濡れの久保田がいた。あ、眼鏡も飛んでる。

「なに笑ってんだよ」

呆れた口調で久保田がそう言っ、初めて自分の顔が緩んでいることに気づいた。先に横に落ちた傘を掴んで、眼鏡と傘を拾っている久保田の上に掲げた。

周囲がざわついてこちらを見ていたが、信号が青に変わると、もう意識はこちらを離れていて、散り散りに去っていった。

それでいい。それぞれ前を行けば良い。

「呼び掛けても来ねえんだもん」

すつくと立ち上がる久保田を待つて、俺は言った。

「だからといってこんなことするなよ」

「仕方ねえだろ？なんの連絡先も教えないから……なんで一回目で出てこないんだよ」

「教えようとしたけど逃げただろうが！最初に！」

あ、そうだった。今更思い出した。

久保田は、呼ばれてホイホイ出てきたら護衛にならねんだよ、
と言つて眼鏡をかけずにジーンズのポケットに押し込んだ。

「悪い、壊れた？」

「いや、いい。ただの変装用だから」

なんのための変装なのかわからない。けど確かに眼鏡を外した
久保田は印象が違つていた。五歳くらい若返つた。俺がまじまじと
久保田を見ていると、やつは苦笑しながら言つた。

「来いよ。話あんだろ？」

なんか印象とか喋り方とか一致しない男だけど、今が本当のこい
つなんじゃないかと漠然と思つた。

* * *

近くに車を停めてるつていうことで、俺をコンパクトカーに載せ
て久保田は移動した。

濡れた服で乗るのは一瞬ためらわれたけど、そんな俺を見て気に
するな、と久保田は言つた。確かに車内はお世辞にも綺麗とは言え
なかつたから、気にせず乗り込んだ。

それからどこに行くのか聞いたら、事務所だ、と答えた。

「濡れたまま帰せないだろ」

「女にもそう言つて口説くの？」

俺がそんなことを返したら、久保田はすごく嫌な顔をした。

「生意気なこと言つてんじゃない」

「照れてんの？」

「うるさい。少しモテてそっち方面が開花したのか？」

「なんで知つてんだよ」

不機嫌丸出しで答えてから、ふと新しい可能性に気づいた。

「まさか発信器だけじゃなく、盗聴器までつけてんのか？」

「どこにそんなん仕掛ける余裕があつたんだよ」

俺の突飛な考えがよほど可笑しかったのか、久保田は肩を揺らすほど笑いやがった。運転に集中しろよ。おい。

「で？初めて告白された感想は？」

「別に初めてじゃねえし」

「やっぱ生意氣ー」

「……って、こんなくだらない話をしたかつたんじゃなくて」

まずい、久保田のペースに巻き込まれてる。そう気づいて話を戻そうとすると、久保田はまっすぐ前を見たまま言った。

「それは事務所についてからな」

仕事バージョンに戻ったみたいにな、真剣な眼だった。

* * *

事務所は特に特徴もない小さなビルにあつた。

テレビや漫画みたいに、なんとか探偵事務所って窓に書いてあるのかと思つてた俺は、肩透かしをくらつた気分だった。

でもエレベーターで3階に上がると、扉には久保田探偵事務所と書いてあつた。楷書字体で堅苦しいイメージだ。知らないで来たら気後れしそう。

中に入ると応接間と事務机が2つ同じ空間にあつた。

「お帰りなさい先生。あら、大変！濡れネズミ」

事務机のひとつから女性が立ち上がり俺たちを見ると驚いていた。スーツを着こなし髪を後ろにまとめた二十五歳くらいの女性だった。美人というより可愛い系に分類されると思う。

「祥子君。オレはいいから、こいつにタオル出してやって」

そう言つと久保田は奥の扉に消えて行った。置いてきぼりかよ？

「大丈夫ですよ。先生も着替えたらずぐ戻ると思いますから」

よほど俺が情けない顔をしていたのか、祥子と呼ばれた女性は一言フォローを入れると、反対側の扉に入ってタオルを持ってすぐ出

てきた。

「でも、と言ってそれを受けとる。」

「あ、ソファに座っててください」

そう言っただけ彼女は、今度は温かいお茶を持ってきてくれた。濡れたままで座って良いのかな、とまた少し躊躇^{ためら}う。

「温まりますよ」

しかし彼女はなんの気にもしてなさそうにそう言って微笑んだ。ぎこちなく座りながら俺は訊いた。

「えーと…この人？」

「あ、申し遅れました。わたし先生……久保田修次の助手で坂上^{さかがみ}祥子と言います」

名乗りながら自分も座り、彼女は名刺を差し出した。シンプルな活字で確かに助手と書いてある。具体的に助手ってなにをするんだろっ？

「あなたが今回、護衛の対象の神崎悠汰くんですね」

「ああ、そう…」

そういえば俺も名乗ってなかった。っていうか、久保田が紹介し合うものじゃないのか？こういうとき。

「久保田…さんって何者？」

「先生ですか？探偵ですよ」

「それは知ってる。じゃなくて…えーと…」

なんと聞いていいか漠然としすぎて自分でもわからない。頭がまとまらないまま口が勝手に動いた。

「あの何歳？」

「二十八歳にこの間なれました」

「いつから探偵やってんの？」

「さあ…わたしが入ったときは三年前ですけど、それまではわかりません」

坂上祥子は人差し指を口元に当てて、斜め上の方を見ながら答えた。

違う。本当に聞きたいことは違う気がする。

「じゃなくてさー、なんか秘密とかありそうじゃん？そういうの知らない？」

やっぱり俺の質問は漠然としている。祥子さんも困ったように笑っていた。

「コラ、なんの陰謀を画策してやる？」

気づくと後ろに久保田が腕を組んで睨みながら立っていた。スーツに着替えていて、髪もいつもみたいにボサボサじゃなくて、きちんと束ねられていた。眼鏡もつけてしない方針らしい。

普段のだらしなさが無い。それどころか綺麗な造形で美形だ。違いすぎる。どこからどう見ても好青年だった。喋らなければ。

「詐欺すぎる……」

ついそう呟いたけど、詐欺だとふつー逆になるな、とちよつとどうでも良いことを考えた。

「うるせえな。なんとも言え、着替えがこれしかなかったんだ」
ずっと俺の前に移動すると、当たり前のように祥子さんが立ち上がり、変わりに久保田が一人掛けのそのソファに座った。

態度悪く脚を組んで、腕を背もたれの後ろにやっている。態度悪いのは俺も同じだから言わなかったけど。

「で？あんな無茶苦茶なことをしてまでしたい話ってなんだ？」

ああ、そうだった。

俺は教室での出来事を思い出した。やりきれない想いが蘇生する。

「その……捜査とかしないんだよな、今回の事件」

「ああ。前に言った通りだ」

前回：それどころじゃないと言ってた。それどころじゃないって何が？俺の護衛があるから？

「でもさ、事件解決しないといつまでも俺から離れられないんだろ？いいのかよ？それで」

久保田はなんかため息を吐いていた。呆れられたような態度だった。

「なにが言いたい？」

「だから普段捜査とかもするんだろ？ だったら早く解決してさー」
「ったく、わかってねえな」

言葉の裏にだからおまえはガキなんだ、という意味が含まれてる気がした。

今日のこいつはム力つく。

「時間給だからボディーガードしてる時間が長ければ長いほど、こっちにとっては良いんだ」

「カネの話かよ！」

うげって顔をしたら久保田は憮然とした。

「あたりまえだ。仕事だからな。ついでに捜査ってのは警察がやることで、オレがするとしたら調査だ」

「じゃあ調査したいとか、疼いたりするもんじゃねえの？」

「いいか、いくらおまえが金の話に嫌悪感を抱いても、オレは稼がなきゃならんし祥子君に給料も渡さないといけない。勝手なことをして、オレが例えば死んだとしたら、祥子君は路頭に迷うことになる」

すごく現実的な話をされた。そんなことわかってる、って返したかったけどなぜか言えなかった。

ビビってたんだと思う。死ぬとか簡単に言うし、大人の責任とかそんな話も俺には重い。だけど諦めるわけにはいかなかった。藁をもつかむ想いつてこういうことなんだ。

「だったら、俺が依頼したら調査してくれんだ？」

「おまえ…あの家の娘になにか言われたのか？」

見透かすように久保田が切り返してきた。 凶星だった。

「やっぱり盗聴器か？」

「バカだな。調べた資料とおまえの行動みたらイヤでも分かるんだよ」

車の中みたいにもう笑ったりしなかったけど、変わりに馬鹿にしたような表情をされた。

ム力つく気持ちを抑えて、どういうことだよ、と訊いた。調べて
ることもあるのか？

「護るための最低限の情報はつかんだよ。それと前回のおまえ
の行動な。十日以上もたつてわざわざ現場に行っただろう？あんな
想いをしてまで。浅霧世羅、それからその切つても切れない関係の
西龍院玲華と接触してたからな、なんかハツパかけられたと読んだ
んだ」

まったくもつてその通り！と示したいくらいの内容だった。

なんか悔しかった。推理力は確からしい………悔しいけど。発破
をかけられたかどうかはまた別だけど。

「今回はなにを言われたんだ？」

「別に：唯一無二の存在だったとは言われたけど、それで動いたわ
けじゃない。俺だつてすつきりしたいんだ」

「それでオレを利用して情報を聞き出そうとしたわけか」

勘も鋭い。

「浅墓だな。オレが喋るとでも思ったか？」

「思ったよ！まえのあんたは優しかったのに、なんで今日はム力つ
くことしか言わねえんだよ！」

相変わらず馬鹿にされてとうとう俺はぶちギレた。

たまらず立ち上がつてタオルを久保田に投げつける。でも柔らか
いタオルはたいした衝撃を与えてくれず、パラリと落ちた。

「ちくしょう！俺だつて、期待されれば応えたいって：人並みには
思っただ！悪いかよ……人並みには……」

離れていく。周りは幻滅して離れていくんだ。俺から。

「落ち着け。過呼吸になるぞ」

静かな声で久保田は言った。静かで穏やかだったけど、その顔は
眉が寄せられて険しかった。

そんなこともう遅いんだよ。胸が鷲掴みにされたように苦しい。
息苦しい。

でももう遅い。

呼吸を意識するより感情をぶつけることを優先してしまう。

「余裕、かましやがって！いいよな……大人は、余裕があつて。どうせ、俺はガキだよ。なんとかしたいって、思つても、結局っ他人を頼つて……。っ。自分を、おとりによつと、思つても……。やり方が分からなくてっ、情報足りないし」

「おい、もうしゃべんな！」

久保田も立ち上がつて俺の両腕を掴んだ。だけど止まらない。いまさら止められるかよ。

「母親なんかに、頼まれたおまえに、頼りたくないのに……。でも、結局おまえがっ最後の望みで……。そんなんも、俺はすげえイヤなのにつ……。なんでもする、から……。頼む……。よ」

ギリギリまで、叫べなくても声を出して、そして最後には懇願していた。

（けつきよく、こういうオチかよ）

みつともねえ。自分の身体も制御出来^{コントロール}ないで、なにをやつてるんだ俺は？

気づいたら、ソファに横になつていた。

そのまま倒れ込んだみたいだった。それを久保田が支えた感触があつた。衝撃がなかったからたぶんそうだ。

息が吸えない。

「先生これを……」

「でもこれは……」

「これで治まるならいいと思います」

朦朧とする意識の中で、2人の会話が聞こえた。内容まで考える余裕はなかった。気づいたら目の前に茶色い紙袋があつた。

「大丈夫だから、ゆっくり呼吸しろ」

久保田が背中をさすったり胸の辺りを圧迫していた。

そして声に出して呼吸を誘導する。その通りに出来てるのか出てないのかさえ分からない。なかなか息が続かなかった。

さっさと気を失えれば楽なのに。さっさとくたばっちまえれば……

……。

なんとか治まっても動けないでいた俺の背中を、久保田はしばらくさすり続けた。そしてポツリと言葉を落とした。

「馬鹿になんてしてないよ、おまえのことは。ちゃんと護衛しながら見てたから。頑張ってるの見てたから、そんなやつを馬鹿にはしない。……だから、おとりになるとか言うなよ。オレが護ってる意味がないだろ？」

それを聞きながら、背中に伝わる温かさを感じながら、ひとつだけわかったことがあった。

久保田は俺が過呼吸になったときは優しくなるんだ。

ちくしょう。足下見やがって。惨めな気分になる。

やっぱり俺は素直になれないガキなんだ。

* * *

俺が落ち着くのを待って久保田は車で送った。まるで当たり前みたいに。

車内では無言だった。久保田がなにを考えているかはわからなかったけど、俺は喋る気力がなかった。

行きのときの、バカみたいなんなんでもない会話も、前回の優しかった久保田に感謝した俺も、いまでは遠い昔のようだった。

「彼女が」

そのなかで一度だけ久保田が口を開いた。

「祥子が過呼吸になったんだ。オレの事務所には新卒で彼女は入ってきたんだけど、そのころオレは厳しくて他人を顧みないやり方をしていた」

少し意外な気がしたけど、黙って俺は聞くだけだった。なんのつもりで話しているのかわからない。

「初めて目の前で過呼吸になった人を見たから、かなり驚いた。驚いてみつともなく慌てた。……それからいろいろ症状のことを調

べて、精神的なものと知ったときは愕然としたよ。オレのせいだったんだ。彼女に対して優しくしなかったことを後悔した」

聞いているうちに、俺に言ってるんじゃないかって思った。懺悔をしたかったんじゃないか、と思うようになっていった。

「それ以来、一度きりで祥子はなっていないけど、今でも怖い。オレのせいでまた苦しませるようなことになったらどうしようって、そればかりだ。だから……」

赤信号につかまって、久保田がギアを引いて車が止まった。久保田と目が合う。

「余裕なんてないよ、オレも」

あ、ちゃんと俺に言ってたんだって目を見て気づいた。懺悔じゃなかった。

こんなにあっさり怖いって年上の男に言われることは、全然許容範囲になくて、やっぱり俺は何も言えなかった。

第二章・・・ 3

次の日も大雨まではいかなかったけど、天気が崩れていた。霧雨とか小雨くらい。

でもグラウンドはとてもじゃないが使用できる状態ではなかった。今朝になって、このままでいけば中止、最低でも延期になってくれるんじゃないかとやっと気づいて、期待を込めて天気予報を見た。しかし週間天気予報で、明日からは晴れるでしょう！もう晴天でしばらく心配することはありません！とまで気象予報士は宣言しやがった。

本番は明後日の金、土、日の三日間に迫っていた。振替休日が月曜と火曜にあつて、その辺の体育祭よりもタチが悪……力を入れている。

だから今日はテニスはなかったが、バレーの練習は昼休みにやった。食後の運動は健康面でどうかと思う。

また時間が空いてどうしようかと迷っていると、東の棟を1人で歩いている玲華を見かけた。ちょうど対角線上に。

正直今日は部室には行きたくなかった。世羅にどんな顔で会えば良いかわからない。

だけでもし玲華が1人だったら、ヤバいんじゃないかと思った。世羅がいなくても秀和がいる。その可能性の方が高い。でもいなかったら？ そんな時を狙つて、また綾小路が来るかもしれないのに気づいたときには、東の棟に向かっていた。そして躊躇ためらいながらも扉を開くと、やっぱり玲華は1人でいた。

「なに必死になってんの？」

「なにも言っていないのに、俺の顔を見るなり玲華はそう言った。

（必死……？）

「つい手で顔を触る。触りながらも別に、と答えた。

「秀和は？」

「バスケの練習」

来て良かったかも知れない。そしてドキドキしながら次を訊いた。
「世羅、は？」

「……………たぶん来ないんじゃない？」

なんでもなさそうに玲華は答えたけど、違和感を感じた。 たぶん？

「ケンカでもした？」

「してない」

相変わらずパソコンに向かって玲華は呟く。でも明らかに様子がおかしかった。らしくない、ってやつだ。

もしかしたら俺のせいか？とか考えていたら玲華が先に口を開いた。

「最近ヘンなのよ、あの子」

「最近？」

昨日からではないなら、俺のせいってこともないのか。しかし授業中の世羅はいつも通りに見えた。少なくとも俺には。

「なんかずつと上の空で、でもあたしにはなにも言ってこないし…」

こんなこと初めてよ」

わずかに玲華が涙ぐんだ。戸惑っているのがわかる。

「事件のこともなにも言ってくれないし」

事件という言葉にドクンと俺の鼓動が反応した。そして思い出されるのはあの憎悪に満ちた目。

あれほどまでの憎しみをつかみどころのない犯人にできるだろうか。もしかしたら、世羅は…。

「なにか…知ってるのかも…」

「どうということ？」

「なあ、俺が言った情報なんって言わなかったんだ？通り魔じゃない可能性の話」

玲華は一度こちらを見て、そして逸らした。言すべきかどうか迷いがあるみたいだった。

「まだ可能性の話だったし……」

「じゃあ昨日なにか聞かれた？」

「昨日もここに来なかったから。ねえ、それよりなんの話よ？」

玲華に不安な色が滲む。俺は戸惑いながらも昨日のことを包み隠さず話した。

軽蔑されるかもしれない、という恐怖はあったけど玲華には言うべきだと思った。

「だから今回の件が無差別な通り魔じゃなかったら、梶さんに狙いを定めていたってことになる。そして……こんなこと言いたくないけど……一番関わり合いのあった浅霧家の誰かが犯人かもしれない」

玲華はなにも口を挟まなかった。ただ悲しげに目を伏せている。

「だとしたら俺たちよりも世羅の方が事情を掴みやすい」
真犯人かどうかは別として、世羅の頭には特定の人物がいるのか
もしれない。なぜかそう思った。

「そうね」

玲華の頷き方は、まったく初めて聞いたそれではなく、どこか自分でも思いついていたみたいだった。いくつかの可能性のひとつ。
でも認めたくなかったような……。

だから言わなかったのだろうか。

「なんて言ってくれないのかな？そんなに頼りないかな、あたし」

「向こうも向こうで同じこと想ってそうだけど。心配させたくない
とか……」

しばし沈黙が流れて玲華が深いため息を吐き出した。

「だったら許せないわね」

「おい？」

意外な話の流れに俺の方が慌てる。玲華の目に輝きが生まれた。

「こうなったら、あたしたちもあたしたちで犯人見つけましょ。世
羅ばっかりわかってるなんてズルい」

そして立ち上がったかと思うと、両手をぎゅっと握りしめてきた。
あまりの変わり身の早さに、わずかに反応が遅れる。

「なんの真似だ？」

「いいじゃないの。これから同志として頑張りましょう」

「やめろ」

俺はその手を振り払った。

「どうやって探すんだよ？なんの手がかりもないのに」

俺をアテにされても困る。俺は探偵じゃないし、当の探偵には断られたし。

「そうねえ。なんとか世羅んちに行ければいいんだけど……あれから一家全体が頑^{かたく}なだしなあー」

ぶつぶつ玲華が呟きだした。やっぱりなんの考えもなかったようだ。まったく女つてのは行動が読めない。

「だろ？俺がおとりになることも考えたけど、やり方わかんねえし」
「おとり……」

玲華がまじまじと俺を見つめる。イヤな予感がした。

そして、考えとくわと頷いた。なにをだ？イヤな予感が増長する。

「とりあえず世羅んちね。いつ行こっか」

「当たり前のように俺に訊くな。ビデと行けよ」

「あんた行かないと意味ないじゃん」

「なんでだよ」

「犯人がもしいるならあんたを認識させるのよ。それでうまくいけばおとりになれんじゃん」

悪魔がいる。あつさりと殺伐と言い放つ玲華は容赦がなかった。
数歩後退^{あとずさり}する。

「なに逃げてんのよ」

ちらつと横目で玲華に見つめられて、俺は体裁を取り繕った。

逃げる、という言葉に敏感になりすぎてるのかもしれない。みつともなかったと思って少し後悔した。

「だいたい俺は世羅に嫌われてるみたいだし、行かない方がいいだろ？」

「ああ、世羅は男がキライなのよ。あんただけじゃないわ」

だから関係ないわ、と玲華が言った。なんだよそれ、と思った。
なんのフォローにもなつてねえじゃねえか。

「トラウマって…やっぱそういうこと？」

聞いていいものか憚れたが、この流れで触れないのもわざとな感じとか違和感があつて、俺は思いきつて訊いた。

「うん。そう…」

玲華のトーンが落ちた。でも彼女も、ここまできて言わないのは不自然とでも思ったのか、教えてくれた。

「世羅の両親ね、世羅が小さい頃に離婚したの。もともと浅霧つてのは母方の姓で、すぐにお母様が再婚したから、いまのお父様は義理の父親なんだけど……」

ふと言葉を一旦きつて、玲華は窓際に寄つた。外を見ているふうで、実際にはどこも見ていないようだった。過去を見ているんだ。

「その人がまたヒドイ人でね、まだ子供だった世羅に虐待したのよ！性的な暴行も混じつてたみたい。世羅も隠してたから、近くにいたはずのあたしも…知つたのはかなり後になってから。そのときはあたしは怒り狂ったわ！」

玲華の目に世羅に見たものと近いものが見えた気がした。いまだに、許してないのだとわかった。

「でも世羅が……。もうその頃には、あの男も虐待とかしなくなつてたから…おおごとにしたくないって…」

聞いてるうちに、俺は察していた。わかつてしまつて胸焼けがした。よく聞く、ありがちな話のはずなのに、実際に耳にするとただ嫌悪感があるだけだった。

家庭があるだけ問題もあるんだ。いつでも犠牲になるのは子供なのか？ 力のない、逃げる術すべさえもたない子供。

「それで…トラウマ、か……」

「あ、でも、あんまり大げさにとらえたらダメだからね。意識したら迷惑だから」

さらりと自分のことのように玲華は言った。すごくシビアだと思

った。

でもなんとなくわかる。俺だって同情されるのはまっぴらごめんだ。惨めになる。

「だから、もうイヤなの。全部終わってから知って、後悔したりやるせなくなったりするのは、もうイヤ」

「そうだな…」

こいつはやっぱ強い。強くて迷いが無い。

そう思うのと同時に、世羅が羨ましくもあった。ここまで想ってくれる人間が身近にいる人は、どれくらいいるんだろう。

「さて」

いきなり玲華が腕を腰にあて仁王立ちになった。声の調子が明らかにこれまでのと違う。百八十度変わった変化に俺はすぐについていけなくて、しばし呆然とする。

「しゃべったらノド渴いたわ。なんか飲もう」

そのまま、お茶の葉が置いてある棚に近づいて行った。

玲華なりに区切りをつけたかったのかもしれない。自分も同情とかしないように。これまでの玲華を見てみると、そんな気がした。サバサバして見えるのは、こういうところからきているのかもしれない。

「なんか飲もう？言っとくけど、断ったら二度とあたしが入れたお茶飲めないわよ」

呼び掛けるように声を張り上げて、玲華が棚から顔をひょっこり出した。

「なんで？」

「ビデがいるときはやらせてくれないんだよね。アイツ、なんか変な使命感持ってるさー」

「あー…」

俺は納得しながら棚の中を見た。相変わらず充実している。

「でも暑いしなー、いら…」

「な・に・の・む!？」

いらねえと、最後まで言わせてくれなかった。俺に汗が滲んだが、暑いだけが理由ではなさそうだ。

「んな強制的に飲ませるもんじゃないだろ？普通！」

「じゃーどうやって飲ませるのよ！ふつーは！」

「違うだろ？飲ませるつてのがおかしいだろ？もつとリラックスするためとかに飲むんだろ？お茶は」

「だったらリラックスしなさいよ！ほら早く！」

「……だから、リラックスも強制されるもんじゃなくて……」

なんだか疲れて、俺は片手を棚に預けて項垂れた。

「あんた氣い張りすぎなのよ、いつ見ても」

何気なく言われた言葉に顔を上げる。

「こつちが疲れるわ」

仕方ないわね、と言いたげに玲華は苦笑いをしていた。

俺は顔をしかめた。そんなふうに思われているとは、予想だにできなかった。何か返さないと、と思って口を開いたら全然別の言葉が出た。

「じゃあ水」

「なによ、あんたバカにしてんの？いーわよつ、杜仲茶煎いれてあげるわよ」

「なんだよその意地は……」

とりあえず何かお茶を作りたかったらしい。呆れる俺をしり目に玲華が手際よく粉末状の杜仲茶を入れていく。手際は確かに良いけれど。

「ばっ！おまつ、入れすぎだろ？」

「なによ！濃い方が美味しいに決まってるでしょ？」

「………ちなみに聞くけどさ、おまえ料理出来んの？」

「できるわよ！」

「………じゃあさ、料理したことあんの？」

「機会がないだけよ！やればできるわよ、あんなもん！たしなみとして……」

「……………」

たしなみとしてすることを、あんなもん呼ばわりかよ。なんか頭が痛くなってきた。

頭を抱える俺に、ポットのお湯が沸くのを待ちながら、何気なく玲華は言う。

「体にも良いのよ」

俺の場合は体に問題があるわけじゃないから、あまり意味がないように思える。

「ダイエツにも良いらしいしねー杜仲茶」

「俺がダイエツしてどうすんだよ」

「あー、あんたヒヨロヒヨロだもんね。肉つけた方がいいわよ、筋肉」

俺の上から下まで見て言われてムカついた。以前、久保田にも同じように言われたことを思い出す。

「だから運動部入って筋肉つければもっとよくなると思ったんだけどなー」

「……杉村に頼まれて勧誘してんのかと思ってた」

「なんでよ？」

……俺が全体の輪を乱しているから。

しかしそう言うには、なんとなくヒガミっぽくて言いたくない。

「まあね、先生からまったくそういう話がなかったわけではないけど、運動部に勧誘したのはあたしの判断」

「なんで？」

空気で察知したらしく玲華が続けると、逆に俺が聞き返していた。でもそれに答えるまえにポットが沸騰して、お湯を杜仲茶の粉がたくさん入ってる湯飲みに移す。

「ほら、出来たわよ！」

苦虫を噛み潰したような表情で、杜仲茶　　たぶん。味がどうなるかと、たぶん杜仲茶　　を二つトレイに乗せて、玲華がソファの間にあるテーブルに置いた。

入れ方の手順すら合ってるのか危ぶまれる。俺もお茶の入れ方なんて知らないけど。

（急須を使ってないけどいいのか？）

ソファに腰を落ち着かせて、意を決して湯飲みを取る。そしてちょうど口に含んだところで玲華が言った。

「そっぴや右肩ケガしたでしょ」

ぶはつと勢いよくお茶がすべて吐き出された。吐き出したわけではない、吐き出されたんだ。

虚をつかれた指摘のせいか、あまりに濃すぎてお茶が喉を通ることを拒んだせいか、真相は俺にもわからない。

（全部だ全部！）

玲華といえはさつとソファから身を翻し綺麗に避けたので、被害は全部ソファにかかった。

「やーだあ、ちよつと汚いー」

「不味い……」

「なにが不味いよ！飲んでないじゃない！吹き出したじゃない！全部！」

「口の中に残ってんだよ！ついてんの！舌に！入れすぎだろ、あきらかに！」

「たくさん入れた方がいっぱい効果があるに決まってるでしょ！」

なんつー単純思考だ。おかしい…あんなに頭が良くて、成績も良いのに……どうしたらこうなるんだ？

俺はまじまじと湯飲みの上から黒く濁ったお茶を覗いた。

「もう良いわよ！飲まなくて！」

怒鳴ったかと思ったら、玲華がガシツと湯飲みを掴んで一気に飲み干した。

「お、おい……」

止めようと右手を伸ばしたとき、ぶつと不吉な音がして、熱い液体が全部俺の顔にかかった。

「あつ……っ……！」

「なんか……殺気を覚える味ね……」

「おい！黄昏てねえでっ！ふく、拭くもんっ」

俺がぶんぶん頭を振って滴を飛ばしていると、玲華がハンカチを出して拭いてきた。

「ちょ……いい！自分で……」

「らあつきいー」

ハンカチだけを貸して貰えれば、とひったくろうとしたら、玲華が目を爛々とさせて不敵に笑った。我が耳を疑う。

（いま、ラッキーだったか？）

あきらかに俺がこんな状態になったのは、目の前にいるこいつのせいだ。それをラッキー？当の加害者がラッキーだと？

「火傷したら大変ね！上着脱ぎなさいよ」

わざとらしく慌てた素振りを見せて玲華がのし掛かってきた。

「はあ？」

突然のことに、まったく意味がわからない。驚きすぎて熱いのも忘れた。

「早く脱いで！それとも脱がされたい？」

「バカかつ！なに言ってる……おまつ、やめろ！」

「じつとしなさいよ！んもう、男のくせにナニ恥ずかしいがってんのよ」

「っーか、女のくせになにやってんだよ！」

「イヤダイヤダ、男尊女卑ね」

「おまえな……」

俺が玲華を押し退けようと、力を込めたときだった。

「マイハニーご機嫌いかが？僕は君に逢うと機嫌が100倍アップさー」

いつものごとく、綾小路が入ってきた。

戯言を言わないと扉を開けないのか、という感想を述べている場合ではなかった。

そのとき。

玲華は俺のシャツのボタンを外し終わり、襟元を両手で鷺掴みにしていた。まったく色気などない感じで。俺の手は玲華の腕に添えられている。

最悪のタイミング。綾小路の目が点になる。俺も玲華も一瞬フリーズした。そのままの状態で。

「な、なにをしているっ！」

綾小路が先にフリーズが溶けて俺たちを強引に剥がす。そして標的は俺に向けられた。綾小路の性格上、当然といえば当然と言えるが、納得いかない。

「貴様！玲華のまえでなんて真似を！」

胸ぐらを掴んでそのまま力任せに引きずり上げられた。いまにも殴りかかる勢いで。

「綾小路さま！」

それを思い留ませたのは、玲華の制止の声だった。

一瞬の隙について掴まれている手を振りほどいた。シャツが伸びるだろうが。しかし綾小路の怒りは収まらない。

「言うんだ！玲華になにをしようとした！」

「は？あんたどこに目つけてんだよ、逆だろ逆」

「なんだ！その口の聞き方は！」

「もとからだよ」

「はっ、猫をかぶっていたわけか。だから庶民は嫌なんだ」

猫かぶりのところで、つい玲華を見ると、とても冷ややかな眼差しをしていた。怒ってる。だれに対してとか、その真意は読めないが、めちやくちや怒っている。

「ハイハイ。先輩、練習はいいんデスカ？」

どうどうと、両手を広げて落ち着かせてみる。でもやっぱりいうか、綾小路は逆上した。あー面倒くさい。

「適当に返すんじゃない！練習は雨で中止だ！貴様もだろうが！」

「あ、そうデシタ」

綾小路は意外と冷静だ。

どうやって追い出そうかなーと考える。綾小路より先に俺がここを離れることはあり得ない。なぜか、あり得なかった。面倒くさいのに。

「おう！そうだ、貴様も結局テニスにしたそうだな」

「……………」

「覚えておくが良い。テニスで僕は誰にも負けない。つまり貴様はハッピーなはずの日曜日に、人生のドン底を味わうのさっ」

テニスでは誰にも負けないといいつつ、綾小路はテニス部ではない。弓道部だ。俺がそこを突っ込もうとしたとき、あーはっはっはと、悪人によくある高笑いをしながら、またも自己完結して綾小路は去って行った。

（あん？）

俺の眉が歪む。

「あいつ自分から帰って行ったよ……」

なんだ、考える必要なかったじゃん。

「結局、アイツもただの臆病モンなのよ」

腕を組んで容赦なく玲華が言い放つ。なんかだんだん綾小路が哀れに思えてきた。

「まあ良かったわ。邪魔者はいなくなっただし……」

玲華が改めて、というように俺に詰め寄る。

ちよっと待て、眼が怒ったままだ。俺は後退る。しまった、後ろはまだソファだった。

「逃げんじやないわよ……………いいから、右肩見せなさい」

「……………は？」

俺は綾小路が入ってきたときより固まった。なんだって？ 右肩？ 固まったのを良いことに、玲華が俺のシャツを右側だけ剥いだ。肩に赤紫色の大きめの痣。玲華が息を呑んだのがわかった。想像を超えていたのだらう。それはそうだ。これはテニスによるものではない。その後の久保田に庇われたとき、道路に打ち付けた痕だ。あと「なによコレ。ちよっとどうしたのよ？こんなんで練習してたの？」

「違う違う。これは昨日の帰りのハナシで、テニスとは関係ない」
俺は玲華の手からシャツを奪い取って、着直しながら言った。

「あーそう、……………って納得すると思うの？じゃ、今日のバレーはこれでやったってことじゃない！」

「すぐ治るだろ？打ち身ぐらい」

「もー、変なところ強がるんだから」

「大丈夫だって」

ほら、と右腕を上げて前後にグルグル回す。少し疼く程度。やってやれないことはない。

「な？」

玲華に頷いて見せると、彼女は無言でバシッと俺の肩を叩いた。

「いつ！」

「やっぱり痛いんじゃない」

「打ち身つったろ？なんか当たりや痛いんだよ！」

思わず涙目になって抗議する。

「じゃ、テニスのときは？いきなり帰ったからあのときかと思ったわよ」

「あれはただの電池切れスタミナ」

ソファに座ろうとして、お互いちゃんと拭いてなかったことを思い出した。布巾があつたよな、と棚に向かう。

もー、とぶつぶつ呟いて玲華もついてきた。一応責任の一端は感じているようだ。棚から新しい布巾を取り出すと、ふいに俺の目に先ほどの杜仲茶のパッケージが入ってきた。

「おい、これ食用って書いてあんじゃない」

「なによ！食用なら飲用でも問題ないじゃない」

「まあ…そうだけど……………あっ！ちゃんとティーパックであんじゃないか！こつちでやれよ」

俺はお徳用と書いてあるティーパック用の大袋を取り出した。覗き込んで玲華が言う。

「そんなの邪道よ」

玲華の言うことはよくわからない。

「いいから、入れ直すぞ」

ため息が思わず出た。はいはい、と言い玲華が戻ろうとしたときだった。

「あー！なにしてんですか！？」

いつの間に入ってきたのかヒデの声が聴こえる。俺は柵越しに扉を見る。秀和はソファの方を見ていた。

「シミっ染みになっちゃうじゃないですかっ！」

「あー悪い、いま拭こうと……」

「遅いですよ！こういうのは一分一秒が勝負なんですよ！」

なんの勝ち負けだ、一体…。

「あああっ！こんなに染み込んでっ」

「うるさいわよ！」

玲華の一喝で秀和は前面だつて嘆くことができなくなっていた。
はあ…。

第二章・・・4

単純な思考回路だって、玲華のことを思ったけど、俺も充分それだった。

球技大会の話ができれば、そのことが8割くらいを占める。そして今は事件のことといっぱいだった。

そして気づくと1日中世羅を目で追ってしまっていた。上の空だと玲華は言っていたが、やはりわからない。教師に当てられてもそんなり答えてるから、授業中もぼんやりしてるわけではないんだろ

う。

（俺はなににもなくても、当てられたら慌てるけどな！）

そんなわけでじっくり観察していたら、休み時間に世羅が教室から離れたのを見計らって、玲華が俺の席まで近寄ってきた。

「あんたなにしてんのよ」

周りに気取られないよう、囁きに近い小声で言ってるものの、その顔には迫力があつた。なぜか俺の方が焦った。

「おい…コトバコトバ…」

「誰も聞いてないわよ。てゆーか、マズイと思ってくれてるんなら、そのあからさまな視線なんとかして」

確かに周りを見渡すと次の授業のため移動しだしている。次は音楽だ。

「そんなにアカラサマだった？」

「まるで恋してるみたいだね」

「こ……………」

傲然と口の端を上げて言う玲華に、俺は一瞬言葉に詰まった。すぐに取り繕って頬杖をつく。

「女ってすぐそういうこと言うよなあ…」

「遠い目で見ない！とにかくやめてよ、世羅スルドイんだから」

仕返しとばかりに俺も笑いながら言っちゃった。

「嫉妬してんの？」

すると、すつと玲華の目が細められ、これ以上ないほどの低い声が発せられた。

「心配しているのですわ。神崎さまの失敗で、世羅がくだらなくも無意味な、あらぬ誤解をしてしまわないかと…」

「は？」

なんでいきなり言葉が変わる…、と疑問に思っていると第三者の声がした。

「神崎くんにか失敗したの？」

拓真が玲華の後ろから覗き込んでいた。まだ移動してなかったよ。うだ。しかも妙なところだけ切り取って聞こえたらしい。

（こいつ背中に眼えあんのか？）

俺の背中に僅かに冷や汗が流れた。

「ええ。わたくし心配ですわ。あまりに人のココロ…特にオンナゴコロがわかってなくて…」

「神崎くんは、言わなくてもわかるだろ！タイプなんですよ、玲華さま」

「人のことを断言して語るな！」

「そうですね。萩原さま。家庭を顧みないで仕事ばかりして、でもそれで甲斐性があると思ひ込むような旦那タイプになってしまわれるんですわ」

「おまえも勝手に俺の将来決めんな！」

最近この二人は俺を貶す^{けな}ことに一体感を覚えてやがる。俺もつい相手にして突っ込んでしまっから、調子に乗ってるんだと思う。

どつと疲れていると、いつの間にか二人は音楽の準備をし。

「置いていくよ」いきますわよ」

とまたタイミングを合わせて言ってきた。気づくと教室には俺らだけしか残ってなかったのだ。

ちよつと待て、ユニゾンにはまだ早えぞ、とまた俺は返していた。玲華の言いたいことも、全然わからない訳ではない。俺が世羅を

つい見てしまうことで、俺と玲華が結託：まではいなくても、少なくとも玲華が、自分の話を俺にバラしたということを察するだろう……ということだ。

（どっちが大ゲサに考えてるんだか…）

女心なんて一生解るかっ、というのが男側の正論だろう。

* * *

（ウゼーなー……フケるか）

と、毎回思っているのに、結局体操服に着替えてグラウンドに向かっていている。

これから久々のテニス練習があるのだ。これが最後の練習。そのあとは本番しか残ってない。それでもダラダラと着替えたから、すでに始まっていて、今頃廊下を歩いているのは俺ぐらいだった。

（あ、違った……）

階段のところで生徒が立っていた。珍しいな、と思いよく見ると四人いてその内のひとりは見知った顔だった。

そいつは手すりに背中を預けこちらを見ている。そしてそれを取り囲むように、初めて見る顔の生徒が三人、ニヤニヤ笑いながらやはり俺を見ていた。

（うわー、あきらかやな感じ）

無視するにも階段を下りないとグラウンドには行けない。それに、反対側に行くには意地が邪魔をして引き返せなかった。

「顔貸してもらおうか」

そいつ、綾小路は俺を待ち伏せしていたのだ、とこの言葉で確信した。

玲華がいる前では決して見せない冷たい表情だった。といってもいつもは鼻の下を伸ばした間抜けな顔だから、まともな顔もするんだ、とそっちに驚いた。

「練習あるんで」

さらりとかわして、階段を下りる。はずだったが一人に左肩を掴まれた。

「亨ちゃんへいちゃんが用事あるっていつてんだろ」

三人の内の一人だった。綾小路しか目に入ってなかった俺は、その他三人を改めてこのとき見た。

三人ともネクタイの色で二年生だとわかる。綾小路と同じ青だ。しかしそのネクタイは緩められシャツのボタンも上三つ四つ開いていて、きっちりしている綾小路とはどこか一線を画していた。

つまり、この学院にもいたんだ、と思わせるようなガラの悪い生徒だった。しかし時計とかゴツイ指輪とか、そういった装飾品が高価なもので、余計に嫌味ったらしさが引き立つ。

「その呼び方はやめたまえ」

綾小路の不快そうな顔で、とくに仲は良くないんだと気づいた。今だけの仲間か。

（必死だな…こいつも）

俺を脅すためにわざわざこんな引き連れて。どこから連れてきたんだ？と俺は思う。

「とにかくさあ顔貸せや」

俺の肩を掴んだままの金に近い茶色い髪と、顎からチョロつと生やした髭が特徴のやつが、更に強引に押してきた。ガタイが大きくガツチリしているそいつは、力も強くて危うく階段から落ちそうになった。思わず手すりを掴む。

下に行けと促す気なら最初から引き留めんなよ、と激しく思った。「がはは、コイツみつともねー」

落ちそうになった姿を見て、隣にいたやつが、何がそんなに可笑しいのか、体をくねらせて嘲笑あざわらっていた。青い髪に鼻ピアスをしており、ガリガリに痩せ細った体格だ。ロレックスの時計が光って見える。時計はともかく鼻ピアスは校則違反だから、普段は外しているのだろう。なんというか、実はタカられていそうなタイプだ。明らかにボスじゃない。

もうひとり少し後ろにいて、明るくない茶色い髪に中肉中背でこの中では一番普通だった。一見控えめに思える態度だったが、目を見てわかった。

（コイツがボスだ）

綾小路なんかよりも冷淡で、一番蔑^{さいげす}んでいる眼だった。

「練習なんて必要ないさ。どうせ貴様は負けるんだからな」

綾小路が言う。昨日と同じことを言われているのに、まったく意味合いが異なつて聞こえた。

「先輩たちが俺の選手生命を断つから、ですか？」

嫌なほど相手のしよつとしていることが分かつて、ヤケ気味に笑みを作る。

奥にいたボスが俺の言葉に薄く笑ったのが見えた。

「亨、噂通りの奴だな」

「生意気だろう？」

面白くもなさそうに綾小路が相槌^{あいち}を打つ。ああ、そうか、ここぞで気づいた。

この二人が仲間なのか。悪友つてやつだ。それも質の悪い。

「こんな人数にものを言わせたやり方して恥ずかしくないわけ？ テニスで人生のどん底、味あわせるんじゃないのかよ？」

こんな挑発めいた真似しても得なことはない。そう分かっているのに、あまりにムカついて、言わずにはおれなかった。

「その前に、目上に対する口の聞き方を教えてやらねばならないな」綾小路が眉に皺をつくつたまま顎をしゃくつた。

「とにかく下りろ！」

それを合図に、声を張り上げてガツチリしたやつがまた押した。手すりに支えていた手が強引に離される。ここで抵抗しても危ないと思い、しつかり自分の足で進んだ。

ぞろぞろと後ろから他の連中もついてくる。その間、誰もなにも言わなかった。今の時間、生徒だけでなく教師もグラウンドや体育館にいる。

騒いでも無駄だと悟った俺は覚悟を決めた。本当は逃げ出したいほど恐ろしかった。一対一タイムンならば、気力ぐらいは負けなでいられるかもしれないが、四対一なら分が悪い。悪すぎだ。

だからといってここで逃げてでも解決しない。それに、傍迷惑はたな綾小路に俺も言ってやりたいことがある。なんとか闘争心を燃やして恐怖を鎮めた。

どうやったら多数を相手に出来るか、アレコレと対策を練っていたら、連れてこられたのは東側の裏庭だった。こちら側は玲華の部屋含め、文化部の部屋が多い。現在いまコソコソするのには、絶好の場所というわけだ。

たどり着いた途端、ガツチリしたやつが突き飛ばすように俺の肩を離れた。すぐさま振り向き、なるべく背中を見せないようにする。そしてまず綾小路が口を開いた。

「貴様には二度と玲華に近づけないようにしてやる」

「無茶言うなよ。同じクラスだし……。だいたいてめえ、近づく男全員にこんなことしてんのかよ、暇人だな」

綾小路が俺の挑発にのせられて、勢いよく飛び出してきた。

「なんだとっ？ 貴様……」

「まてっ！」

ボスらしき男がそれを制する。

「まずは白木しらぎと東あづまにやらせよう」

その台詞にガリガリとガツチリが前に出てきた。相変わらずニヤニヤ笑ってる。

二人ずつ来てくれるなら、俺にとっては有難い。注意すべきはガツチリしたやつ、東と呼ばれた方だ、と見た目で判断してみる。

「ワリイな、恨みとかはとくにないんだけど美山みやまサンの頼みだからな」

東が一言断ってから、右腕を振りかざし地を蹴った。

そんな言い訳に納得するバ力はいない。

正面からくる東に目を逸らせずにいると、左側からすでにアップ

―をくらわせる体勢で、ニヤけた顔の白木が近くまできていた。速い。

ガリガリな体重が活かされているのか、白木はとても素早かった。といっても東が遅いわけではない。

俺は咄嗟に右側に避けた。すぐさま東が左腕を伸ばし俺を捕らえようとする。

捕まるわけにはいかない。動きを封じられたらアウトだ。

そう思った瞬間に、白木がアッパーの体勢のまま懐に入り込んでいた。素早くてもパワーは弱いだろと判断した瞬間、俺の目に飛び込んできたものがあつた。

（メリケンサック！）

いつの間にか、白木の指には指輪からメリケンサックに変わっていたのだ。

最悪。武器持ちかよ。

ヤバい、と思ったときには俺の拳が先に白木を殴っていた。避け方がわからず、それしか考えつかなかったのだ。というか、体が勝手に動いたというのが正しい。

ぐええつと唸って白木はよろけた。でもそんな様子を見ている余裕もなく、まわし蹴りで東を牽制する。東はそれを簡単に避けて、なおも俺に突っ込んできた。

（ヤベえ！）

避けきれない、と悟ったとき、脚の力が抜けて膝がガクンと折れた。連日の運動疲れが足にきていたようだ。こうなつて初めて気づく。

しかしそれが功を奏し、東の拳は標的を失つて空を切っていた。だが、そこで安心していている場合ではなかった。格好など気にせず、がむしゃらに東から離れる。

「んのっ！ちょこまかと！」

（あああ…キレてるよ…）

立って後退りながら冷や汗をかいてると、どんと背中が校舎の壁

に当たった。逃げ道を阻まれた。

じりじりと唇を舐めまわしながら東が近寄ってくる。肩で息をしながら白木を見ると、やつは寝たままだった。防御力は弱いらしい。(あとはこいつをなんとかすれば…)

ゴクリと生唾を呑み、グツと拳を握りしめる。白木を殴ったとき、頬の骨に当たり手がじんじんと痺れていた。

「うらあああ！」

すごい迫力のある雄叫びと共に、東は拳を振り上げ、一気に間合いを詰めてきた。

俺は背中に預けた壁に力を借り、腹部目掛けて右足を力一杯突き出す。俺の足は、東のちょうど真ん中、鳩尾みぞおちに綺麗に食い込んだ。

「な……拳……つく……て……卑……怯……」

確かに一瞬まえまで俺も殴るつもりで、そういう体勢でいた。

「しょうがねえだろ、腹がガラ空きだったんだから」

腹を押さえて、苦しみながら東は膝から落ちた。

ほっと一息ついたが、これで終わりではない。まだあと二人いる。

「なんて弱い奴等なんだ、美山」

「確かに。たった数分、それも一発でやられるとは……修行が足らん」

まったく情の欠片もない感じで、ボス美山は言った。この二人に勝てる自信は全然ない。明らかに最初の二人とはレベルも迫力も違う。

その二人はゆっくりと俺に近づいてきた。美山がうずくまっている東のところまで来たとき、重そうな体格を、いとも簡単に持ち上げひよいと捨てた。うう……と東が呻くうめ。あまりの情けの無さに、つい俺は訊いた。

「仲間じゃねえのかよ？」

「別に。近寄ってくるからそのままにしてただけだ」

なんか哀れだな。俺は少し呆れた。自分もそんなに情に熱いタイプでもないし、美山の言いたいことも分からんでもない。

（でもなんかムカつくんだ）

使い捨てみたいな、あんなこと俺ならやらない。自然と怒りが生まれた。

「亨、こいつなんか睨んじゃってるけど？」

「まったく…少し痛めつけて脅しになれば、と思ったが……もういい、徹底的にやってくれ、美山」

ため息をつきながらも冷酷なことを言う綾小路に、ついに俺はキレた。

「ちよつと待てよ！だいたいこんなこととして本当に玲華が手に入ると思ってるのかよ！普通に考えるよ！てめえ、自分がどんな汚えマネしてんのか分かってんのか！？」

綾小路はピクリと眉をあげ、手をポキポキ鳴らしながら、更に俺に近づいてくる。美山はうるさそうに顔をしかめただけで、動かなかった。

「分かってないのはどっちだ。玲華はすでに僕の婚約者なんだよ。それより…」

俺のまえで止まると、一旦口をつぐんだ。あ…。ヤバい。ざわつと足元から冷えてくる感じがして、身体に力を込める。

「玲華と呼ぶな！馴れ馴れしい！！」

バキッと鋭い音がして、おもいつきり左頬を殴られた。来る、っていう予感があったのに、逃げられなかった。

遅れて痛みがくる。頭までガンガン響いてるみたいだった。

綾小路も、それから櫻井もなんでそんなに幻想を追えるんだ？本質も見ないで、好きとか婚約者とか…。馬鹿みたいだ。

感情に任せて俺は叫ぶ。

「それが勘違いだって、さっさと気づけよ！本人に避けられてんじやねえか！あと、俺を怨むのはスジ違いっ……」

遮るように再び綾小路は殴ってきた。今度はこめかみに近くて、頭がぐらりとした。すぐに立っていられなくなった。

「口の聞き方がなっていないと言っただろう？馬鹿は一度で学習し

ないから嫌いなんだ」

「……ひとりで遊ぶなよ、亨」

「ああ、すまない。あとは好きにしてくれ」

「まったく、顔は外すんじゃないかったのか？」

二人の会話が頭上で聞こえる。

（逃げない……）

逃げないといけない、と思う頭の隅から、別の声がした。

じゃあ、もう逃げない？

まえに玲華に言われた言葉だ。なぜ今頃思い出すんだろう。

逃げんじゃないわよ、とも言われた。

……逃げてもいいだろ？こんなときは。頑張った方だろ？

もう逃げない。

俺が答えた台詞。本心であの時はそう決意した。

まだだ、と俺は思い直す。まだ闘える。こんなところで座り込んでる場合じゃない。

（こんなやつに……こんなアホにやられっぱなしでたまるか）

美山の手が俺の胸元に伸びてきた。胸ぐらを掴んでこようとしたのだ。それを右手で振り払う。自分で立つんだ。震える脚に力を込めて立ち上がり、美山と対峙する。

俺の目を見て美山は笑っていた。なかなかやるじゃないか、とその目が言っていた。でもすぐに真顔になり右手が俺の腹を殴る。

「ぐっ……」

無様な声が出た。それが悔しくて、俺は間髪入れずにタックルを食らわせた。美山の鳩尾を狙って頭突きをする。一瞬だけ美山の動きが止まった。

その隙をついて左側に移動する。背中に逃げ場がないのは不利だ。「てめっ」

美山はあまりダメージが効いてないようだった。確かに頭突きした頭の方が痛い。

素早い動きで近づき、また腹を殴られた。勢い余って後ろに倒る。

「かつ……はっ……」

胃液が喉まで上がる。たまらず俺は吐き出した。息をするたびに腹部が軋む。

なかなか立ち上がれないでいると、美山が足で俺の頭を踏んできた。ぐりぐりと地面に右頬が擦れて痛かった。

「ここまでかあ？ 勢いだけは良かったんだけどなあ」

「美山もういいんじゃないか。そろそろ写真を撮ろう」
写真？

俺は耳を疑った。そしてすぐに気づいた。無様な写真で言うことを聞かせようっていう魂胆らしい。

（はじめから、そのつもりで……？）

馬鹿にして。

ソツがないというか、用意周到というか。本当に呆れる。

美山が綾小路の方を振り向くために、僅かに足の力が抜けた。それを感じると、脚を持ち上げ両腕でしっかり抱える。バランスを失い美山が尻餅をつくように倒れた。

「どいつもこいつも！ 馬鹿にしゃがって！」

俺は力任せに美山に全体重かけて、エルボーを味あわせてやった。さすがに美山は呻き声を出した。それを聴く間を惜しんで綾小路に飛びかかる。

一番許せねえのはこいつだ。

もともとの元凶はこいつなんだ。

綾小路は、携帯を取り出そうとポケットを探っていた。それで一瞬反応が遅れた。捕らえた。俺はニヤリと笑う。

「てめええええ！」

「……」

だけど俺の拳は綾小路に届かなかった。変わりに、怒声と俺の脛すねに痛みが走る。

いつの間にか東が復活していて、スライディングを仕掛けていたのだ。

（脚……）

体が傾き倒れていくなかで、脚にケガをしたら球技大会に出れない……なんてことが頭をよぎった。

こんなときに球技大会かよ、と少し笑えた。あんなに出たくなかったのに。

俺は左肩から落ちた。右肩じゃなくて良かった、とまた思っつまう。

（これはホントに……）

いつの間にか玲華に飼い慣らされ、感化されていたのだろう。

「うわーコイツ、ナニ笑ってんだ？キモー」

白木の声だった。あいつも復活したのか。自分だって、笑っているくせに。慥然とした。

起きないと。

また起き上がらないといけない。すぐく体中が痛くて、ダルいけど起き上がろうと思った。

（あ……）

だけどそれは断念された。いきなりきた。

先ほど殴られたときとは違う種類の息苦しさが襲ってきたのだ。

（こんなときに……！）

同時に襲ってくる絶望感。目眩がした。手足と唇の痺れがやってくる。

俺の意識はすでに呼吸に向けられていた。それしか、出来なかった。

「オラオラ、どうしたんだよ！さっきの勢いは！」

東の声とともに、無数の足が俺に降りかかった。もうどいつがどこを蹴っているのかもわからない。

（守らないと……）

漠然と思う。喉とか肺とか、呼吸に関する器官を守らないと、と思っ

自然と丸まって体で内側を囲った。

「はっ…っ…はあっ…」

丸くなると余計に酸素が足りない気がする。背中とか脚にくる衝撃もあって、ゆっくり呼吸するための集中ができない。

痛みより息苦しさの方が辛かった。

(死ぬ…)

今度こそ死ぬかもしれない。

誰か…。助けて。誰でもいい。この悪夢から身体から解き放ってくれるなら…なんでもいい。

苦しくないところにいきたい。

イキタイ。

逝きたい。

「悠汰あ！おまえら離れろっ！！」

そのとき、ものすごく切羽詰まった声が聞こえた。ああ、そうか。こいつがいた。

そう思うのと同時に遅えよ、と思った。

俺は顔を上げられなかったけど、体中に降る衝撃は消えた。変わりに俺の背中をさする手と、呼吸を誘導する久保田の声。

「もう大丈夫だ。安心しろ」

合間にそう言って落ち着かせる。

少しだけ楽になって薄く目を開けると、茫然と立ち尽くす四人が見えた。

同情するなよ。

こんなときなのに、真っ先にそう思った。懇願に近かった。

そして徐々に周りに意識を向かわせることができて、気づいた。

いつの間にか、何十人かの生徒が少し離れてこちらを見ていたのだ。どこからか騒ぎが伝わったらしい。

そして…。

その人たちをかき分けるように玲華が現れたのが瞳に映った。

最強に最悪だ。

一番見せたくない人に、一番見られたくないような場面を見られ

た。

早く治まらないと。

いつものように、しないと。

しかし、その想いに反して、俺の呼吸がさらに荒くなる。

「余計なことは考えんな」

久保田がそれに気づいて叱る。すごく静かな声だったけど、叱責が混じっていた。

（でも……）

「綾小路ー！！あんなにやってんのよ！」

突然、それはきた。

玲華の罵声だった。

一瞬マジで息をすることを忘れる。

（ヤバいつて……。こんなみんなのまえで……）

思わず目を見開くと、玲華は髪を逆立てるように怒っていた。綾小路もきょとんとした顔をしている。他の三人は度肝を抜かれたような顔をしていたから、綾小路はまだそこまで至ってない感じだった。現実逃避にでも脳が働いてるのかもしれない。

その場の空気が凍ってるのも気にせず、玲華はズカズカと歩いてくる。綾小路の前まで行くとその顔を一発平手打ちした。

「バカだバカだと思ってたけど、あんたがここまでバカだとは思わなかったわっ！ちくしょう！」

変わらず綾小路はポカーンとしていた。

「いい？二度と悠汰にこんなことしないで！ついでに言っけど、あたしあんたのこと好きじゃないから！」

ついでの話が一番衝撃だったようで、みるみる内に綾小路の顔が真っ青になった。

あー、俺がああ顔をさせてやりたかったのに。

途切れる意識のなかでそう思った。

第二章・・・5

気づくとそこは保健室だった。

目の前に玲華と拓真と秀和がいた。そしてなぜか櫻井も離れたところ立っている。保健委員だったな、とぼんやり思い出している。と玲華に怒鳴られた。少し涙声で。

「バカ！あんたなんで言わなかったのよ！」

なにを？と一瞬思った俺は、まだ頭がちゃんとまわってなかった。過呼吸のことだ。そんなこと言えるか。こんな空気になるのがイヤだったんだよ。

気を失うくらい酷いのは二度目だった。一回目は小学生の初期の頃。まだ父親に責められていたときだ。

だから少しショックだった。ショックといえば、あんな大勢のまえでこんな失態をおかしたのもショックだけど。

「玲華さま。まだ怒鳴ったら駄目ですよ」

秀和が玲華を制していた。そういえば玲華も本性さらしていたな、と思い出す。拓真や櫻井は初めて拝む姿のはずだ。

「大丈夫？神崎くん。痛むとこない？」

とりあえず拓真はいつも通りだった。もう衝撃も超えたのかもしれない。

なにか言わないと、と思って口を開く。

なにか応えないと…。

だけど、まだ少しだけ胸が締め付けられるように苦しかった。

なにも言えない。なにか喋ったら泣きそうだった。

（胸が痛えよ）

「ボクたち、出てようか？」

なにも答えない俺に、拓真が気を利かせたようなことを言った。

「いい…。居て、いい」

なんとかそれだけ呟くと左腕で目を覆った。左肩もやられたよう

で、少し疼いた。

独りにされても泣きそうだ。

胸に渦巻いてるのは自己嫌悪。

でもそれがなんに対してなのか分からなかった。あいつらに痛めつけられて、結果勝てなかったことなのか、また久保田に迷惑かけたことなのか、いま目の前にいるこいつらに心配をかけたことなのか、大勢の前でこんな失態をやらかしたことなのか……。やっぱり全部なのだろう。

「あんた、また余計な気をまわしてない？」

ポツリと玲華が言う。もういつもの声だった。

「玲華さまっ」

「ヒデはちよつと黙ってて。そりゃーさーあたしも正直責任感じたわよ。悠汰の苦しむ姿見てさ。なんか気、張ってるのは気づいてたけど、その気のなかにあたしが入ってるってのもわかってたけど」

俺は腕を下ろして玲華を見た。なにを言ってる？

「それでも前向きになろうとしててすごいって思ったし…あーもう、だからそうじゃなくてアレよ！お互いさまなのよ、こういうことは生きてりゃ誰だって人に迷惑かけるし恥ずかしい目にも遇うわけなんだからさ…」

珍しい…。珍しく玲華がどもりながら語ってる。でも迷っているというより、なにを言いたいのか自分でも探しながら語っているみたいだった。

「だから、あたしももう責任は感じないから、あんたもいつまでもメソメソ泣くなっつつてんの！」

「泣いてねえ！」

せっかく不器用ながらも元気つけようとしてくれていたのに、まづ俺がしたことといえば訂正だった。口の端が切れてて喋ると痛かった。

そしたら拓真がため息をついた。

「素直じゃないなあ…」

「悪かったな！」

「もー信じらんない。あたしの話聞いてたー？」

「まあまあ、いつもの神崎さまが戻られたということだ」

秀和がほんわかした笑顔でそう言う。

「いつもの俺ってどんなんだよ？」

「そりゃあ、意地っ張りで乱暴だけど優しい……いててっ」

最後まで言わさないよう、俺は上半身を起こしその首を締めた。

秀和がぐるじいぐとバタつかせていると、クスクス笑う声が聞こえた。

櫻井だった。関わらないように、でもこちらを伺うような心配してるような、距離感を保とうとしているのがわかった。そのなかで思わず出た笑い。

俺だけじゃなく、皆の視線が一斉に櫻井に向いて、彼女は赤面して俯いていた。

そのとき保健室の扉が開いて、保健医である高たかしな科と杉村が一緒に入ってきた。

「気づいたか？動けるようなら校長室に来なさい」

杉村は険しい顔をしている。もしかしくなくても、お説教をされるんだろう。

仕方ない、と思って俺はベッドから降りた。体の節々が痛かったけど、歩けないほどではなかった。皆の心配そうな顔を後にして、杉村について廊下に出る。

「あまり……心証悪くないようにな」

杉村は一言だけそう言った。なんの話だ。あいつらが元々悪いのに……と内心思う。

でも杉村に八つ当たりしてもなにも始まらないから黙っていた。

* * *

校長室に行くと先に四人とその担任が中にいた。それとなぜか久

保田も生徒みたいにな、校長の前で並んで立たされていた。

そういえば、久保田がいたのだ。この学校はセキュリティもちやんとしているから、どこから入ってきたのかとか聞かれたのかもしれない。俺も知りたい。

「失礼します。神崎悠汰を連れてきました」

杉村が俺を促して校長の前に立たせる。変わりに他の者は一步下がった。久保田以外、誰とも目を合わせなかった。久保田は俺の様子を窺うように見ていた。

「今回の事の顛末を話さない」

どつしりとした恰幅のいい校長は威厳たつぷりに命じた。髭がもつそり鼻の下に蓄えられている。

俺は玲華の名前を出さないようにし、あとはすべてを話した。ジリジリと焼き付くような視線を後ろから感じたけど、一切無視した俺は被害者だ。結果自分も手を出したけど、きっかけはそうだ。臆する必要がどこにある？

「ふむ。では殴ったのは認めるんだね？」

なんでそこを強調して聞くんだよ、とイヤな感じを覚えたが、正直にハイと答える。

しばらく沈黙が続いて、校長は重々しく口を開いた。

「よろしい。美山君、東君、白木君には三日、神崎君には一週間の謹慎を命じます。今後このようなことのないように。以上！」

なんだと？

俺は目を瞠みはった。納得いかないなんてものじゃない。すべてが逆だろう。何よりなんで綾小路になにも無いんだ？

「校長先生っ！それは……」

さすがに杉村もおかしいと思ったのか、声を張り上げた。しかしすぐに校長が制す。

「以上！と言ったのが聞こえなかったのかね？暴力を奮った回数を考慮してある。さあ分かったら退出したまえ」

「なにが回数だ！結局家柄を見ているだけじゃないか！」

躊躇わず俺は怒鳴った。そういうことだろう？ 詳しくはないが、綾小路の家は西龍院家と取引するようなところだ。あとの三人は知らないが、明らかに綾小路に罰がないのはおかしい。

だいたい回数で言ったら俺の方がやられてるじゃないか。認めたくないけど。

心証なんて関係ない。

初めから俺がどう話そうと、処分は決まっていたんだ。

「キミねえ。そういう態度だから目をつけられたのではないかね？ キミは自分が被害者だと思ってるようだが、キミにも責任の一端は有るということだよ」

俺の主張にも動じず校長は言う。

アホらしい。心底そう思った。校長はイジメられる側にも非があるというタイプの人のようだった。

「神崎」

杉村は抑えるように俺の腕を掴んで、外に出そうとする。他の四人はすでにドアを開けて退出しているところだった。美山だけが俺を見て薄く笑った。嘲笑、していた。

（くそっ…！）

俺にできるのは、出る前に校長をもう一度睨むことだけだった。

「神崎。そういうことだから明日から一週間は…」

「わかってるよ」

杉村が俺の肩に手を置いて言うのを、振り払って遮る。なぜか杉村が申し訳なさそうな顔をしていた。

そんなふうに見られても困る。別に杉村が悪いんじゃないから。俺はそのまま鞆を取りに教室に向かった。そうだ、あと制服もあるから、更衣室にも寄らないといけない。面倒くさい。なんなら退学にしてくればもう戻らなくて良いのに。

やや自暴自棄に陥っていると、少し先で久保田が待っていた。

「帰り送るから。校門のところで待ってる」

それだけ言って立ち去ると、入れ替わるように玲華を先頭に秀和

と拓真が来るのが見えた。

なぜか後ろで二人がびくびくしている。秀和なんかは顔が真っ青だ。玲華はいつも通りで、姿勢正しく颯爽^{さっそう}と歩いてる。

「どうかした？」

「なにが？」

玲華は俺の質問にも無関心で聞き返してきたけど、秀和が青ざめた顔で詰め寄ってきた。

「いまそこで綾小路さまたちとすれ違ったんです。綾小路さまは立ち止まられて、じつと玲華さまを見つめられて…でもなにもおっしゃられないんです。あの綾小路さまがですよ！」

「そうそう。玲華さまはまるつきり無視でさっさに行っちゃうし」

「なんか気まずかったです。ぼくたちもその流れで見つめられちゃって」

「すれ違った後もずっと見てたよ。ボク視線が痛くて」

なるほど。要はその雰囲気^{きふき}に吞まれたらしい。

玲華は髪をかき上げながらつまらなそうに言った。

「大袈裟なのよ。もう本性出したし、近寄って来ないでしょ」

「悪い。俺のせいだ…」

責任の一端を感じて、声を絞りだすように謝った。家との繋がりがなんて、俺には分からない。でもこの玲華が、対面上だけでも繕^{つくろ}わないといけないと判断した男だ。やっぱりマズかったんじゃないかと思う。

「ちよつとナニよソレ、誰があんたのせいだったのよ。もとから、あのままエスカレートしてきたら出すつもりでいたのよ」

玲華はきっぱり言い放つ。あまりにもあっさり言われて俺の方が戸惑った。

「責任ならあたしだって感じてるって言ったでしょう？」

ふと玲華の顔が気まずそうなものになる。

「あいつがここまでやるとは思わなかったけど、敵意むき出しだったのは、完璧あたしのせいじゃない」

「でもそれは…」

「だからあ、こういうふうには責任の擦り合いの逆になるのがイヤで、前もって保健室で言ったのに…」

玲華は一度ため息をつく、照れたような苦笑いをした。そして真っ直ぐ俺の目を見た。

「だから、あたしもごめんなさい」

「……………」

俺はなんと返して良いか分からなくて黙る。玲華が謝る必要なんてないと思っていたのに。謝らせたのは俺だ、と気づいた。

「ほら、これで一回ずつ謝ったんだから、もうこの話はナシよ」

やっぱり玲華はさっぱりしている。まだごちゃごちゃ続けたら、終いには怒られるんだろう。だから俺はその通りにすることにした。それに、なぜか玲華が言うのと納得できた。

それから自分でもわからないうちに、口元に笑みがこぼれていた。「そうだ、ボクたち神崎くんの荷物持ってきたんだ」

話が途切れるのを待って、拓真が鞆と体操服の入っていた鞆を渡してくれた。体操鞆には制服が入っている。

「悪い」

「ふふ。こういうときはありがとうって言った方がよいよ」

悪戯っぽく笑って拓真が言う。この流れがなんか気まずくて、気恥ずかしくて俺はつい話を逸らすように拓真に訊いた。

「おまえ、玲華の本性知ってどう思った？」

「そりゃ驚いたけど、口が悪いのは神崎くんが慣れてたから、大丈夫。怖くないよ」

「ちよつとどういう意味よ！怖いって」

俺たちの会話を耳にして玲華が乗り込んでくる。

「違いますっ！怖くないって言ったんです」

「前提として、怖い、怖くないっていうハナシが出るのがムカつくわ」

「大丈夫です。玲華さまはお優しいですよ」

「いまそんなワザとらしいフォロー入れないで、ヒデ」

「そんなあ…」

思ったより俺の質問がその場を騒然とさせてしまつて、ヤバいと先に昇降口に向かった。

一人で逃げてんじゃないわよ、とまた玲華に言われた。

それでふと、言わなければいけないことを思い出して俺は振り向く。

「これは謝らないとな……悪い玲華。俺、球技大会出れねえ」

「え？」

唐突すぎたのか玲華の動きが一瞬止まる。俺は歩きながら、校長が下した処分とその内容について話した。ついてくる三人の表情に驚きの色が滲む。

「そんな！なんで神崎さまが一番重いんですか？明らかにおかしいですよ」

「ヒドイ。神崎くんは確かに口は悪いけど、校長先生にそんなこと言っちゃうとか、ボクには信じられないけど…でも目をつけられなきゃいけないほど迷惑なことなんてしてないのに」

「おい、それは庇つてんのか？ケナしてんのか？どっちだ拓真」

凄味をつけて睨むと、拓真は力なくハハハ…と笑った。

横から玲華が口を挟む。

「家柄かあ。確かにねー、あのコーチョー、例えばあたしが素っ裸で逆立ちして校内まわっても、あたしにはなにも罰を与えないんじゃない？」

「おい、それはヤメロよ。見たくねえ」

「例えばつつつたでしよ！やるわけないじゃない、バカ！」

「そんなっ玲華さまっ！」

「うるたえてんじゃないわよ！ヒデ！…きゃー！あんたはなに鼻血なんて出してんの？ヘンな想像すんな！」

よく見ると、拓真がひとり茹でタコのように赤面して、鼻血を片方からタラリと流していた。これは玲華が悪い。喩えが悪すぎる。

「えーと……。つまりそういうことだから、俺は帰る」

下駄箱に着いて、靴を履き替えながら俺はぼそりと呟いた。こいつらといるとすぐに騒がしくなる。

「あ、ねえ、あたしお父様に言ってみようか？相手が家柄気にするなら、こつちだつてそれを利用してもイイじゃない？」

なんてことない、ただひとつの提案として出されたそれに、俺は激しい嫌悪感を覚えた。

「やめろよ！これ以上惨めにさせんな！」

ぱんつと勢いよく下駄箱のフタを閉ざす。

わかつてる。八つ当たりだ、こんなもん。玲華はなににも悪くない。でもそんなやり方は嫌なんだ。

俺は逃げるようにその場を離れようとしたとき、背中から玲華の声が届いた。

「わかった。ああ、球技大会なんてどうでも良いから、ゆっくり休養するといいわ」

いま思いついたかのように、なにかのついでのように、玲華がさりと言う。

どうでも良い、なんて思っていないくせに……。きつと俺に負担をかけさせないように言ったのだろう。俺は振り返られなくて、そのままバイバイ、と手だけ振って帰った。

* * *

校門を出ると、久保田のコンパクトカーが停まっていた。慣れたように俺は助手席に乗り込む。

「ひつどい顔してんなー」

俺を見るなり久保田は悪態をついてきた。確かに殴られた痕とか酷かったけど、たぶん久保田はそこではなく表情のことを言っている、と気づく。

「うるせえよ」

「……遅れて悪かったな。なかなか入れなくて、手こずった」

「やっぱり盗聴器つけてんだ？」

入ろうと試みた時点でそういうことだろう？ただ、いつ着けたのか、どこに着いてるのが気になる。

「つけてねえよ。っーか企業秘密だ」

言いにくそうに顔が歪む。

なにが企業秘密だ。カッコつけやがって。

「じゃあ……なんで俺のピンチがわかったんだ？」

「それも企業秘密」

「便利な言葉だな、それ」

「良いだろ？使ってもいいぜ」

「どこで使っただよ！」

まったく適当すぎるやつだ。

「最初に言っただろ？オレは優秀な探偵なんだよ」

不満そうな顔でいたせいか、久保田はそう言ってつけ足した。やっぱり納得いかない。

「いいから休んでろよ。今日は疲れただろう？」

まだ聞き足りない俺に久保田はそう締めくくった。確かに身体中が悲鳴を上げていたけど、それよりも疲労感が半端ない。

俺は窓側に寄りかかって、ぼんやり外の景色を眺めた。

なにも考えたくない、いまは。

それから数十分経ってから家につくと、俺は全身の血の気が引くのを感じた。

(！)

いつもは空いてる車庫に、見慣れた真っ赤な車が停まっていたのだ。母親の車だ。

油断していたところに、ガツンと殴られたような衝撃だった。

よりによってなんで今日なんだ？いつもいなくせに。わざわざ今日みたいな最悪な日を選んで帰ってこなくてもいいじゃないか、と思う。

「なあ…今日は、あんたの事務所に泊めてくれない？」

気づいたときには口がそう動いていた。みつともなく、声が震えた。

「駄目だ。今日は帰るんだ」

まるですべて解っているかのように、久保田は力強い目で諭^{さと}すように言う。俺の顔が強ばるのが自分でもわかった。

「なんでだよ？いいだろ、わがままとか言わねえから！」

「オレがおまえの母親に連絡したんだ」
非道^{ひど}い。

なんだそれ、って思った。

だけど同時に、そうだった、こいつは母親に依頼されていま俺といるんだ、と気づく。

馬鹿だ。ちよっと考えれば予想できることだ。初めはそれにムカついて避けたはずだったのに。結局こいつも他の大人たちと同じなんだ。

「わかった。もういい」

吐き捨てるように言って車から降りると、俺は玄関ではなく左側に向かって歩きだした。

見せない、こんな顔。なにを言われるかわかったもんじゃない。いや、違う。分かりすぎるくらい分かる。分かっている解りたくない。

後ろから、ぱんつと車のドアが閉まる音がしたかと思ったら、久保田が走って近づいてきて俺の腕を掴んだ。

「帰るんだ」

「離せよ！関係ねえだろ、あんたに！」

「逃げるのか？」

逃げる。

俺の原動力にもなり、縛るものでもある言葉。逃げたいわけじゃない。でも、いまの俺には高すぎる壁をまえにしたみたいに感じる。「なんだよおまえ！どうしたいんだよ俺を！」

過呼吸になつたら優しくなるくせに、過呼吸の原因を作つた親に荷担する。俺にはワケがわからない。

「一番おまえが解決しないといけない問題はなんだ？」

掴んだままの腕をさらに力強く引いて、俺を正面に向かせた。

「他のことで頑張んのも悪くない。大事なことだと思う。でも根本的なところを解決しないと、なんにもならないだろ？それから逃げるな！」

久保田の言うことは正論だ。

だけど、ひとつずつ解決したかつたんだ俺は。一度すべて乗り越えるのは無理だから。そんなに器用じゃないから。

「ほつとけよ！てめえ母親になに言われたか知らねえけど、俺に構うな！護衛だけしてろよ！」

久保田がなにか口を開こうとしたとき、別の声が耳に飛び込んできた。

「なにも言つてないわよ、私は」

外の様子を察したのか、母親が玄関から出ていた。黒いミニスカ―トに胸元の開いたブラウスで、相変わらず露出の多い服装だった。化粧も濃くて女を前面に出してるのがわかって嫌悪感を覚える。

「久保田さんご苦労様。今日は連絡有り難う。もういいわ」

「はい。神崎さん、また後程ご報告の連絡をいれます」

久保田は俺の腕を離して、大人な対応をしていた。久保田がやはり母親側の人間だったと、まざまざと見せつけられた気分だ。嫌気がさす。

「来なさい悠汰」

母親に命じられた。俺はなにも考えられなくなって、声に反応する操り人形みたいに足を動かした。

どのタイミングで久保田が帰つたのか、俺にはわからなかった。

視界が暗い。閉塞される世界。

玄関のドアが閉められて、周りに他人がいない空間になると、いきなり母親は俺の頬を平手で殴った。今日殴られたなかで、一番痛

かった。

「わざわざあんな名門な学校行って、どうして喧嘩なんてするのよ。あんたには自制心がないの？」

リビングに行きながらそう言う。俺の話は元から聞くつもりもない。いつもそうだ。昔からそうだった。

先入観で物事を捉えて、自分の言いたいことだけ言うんだ。

「売られたケンカを買っただけだ。俺のせいじゃない」

だけど俺だって言われっぱなしで終わる子供じゃないだろう？もう違うだろう？

「喧嘩自体が野蛮だってわからないの！？一週間の謹慎なんて恥づかしい！それにその顔！ご近所の人になんて言い訳するのよ。顔が元に戻るまで外出禁止よ！」

一言返しただけで、母親は怒涛のごとく怒鳴った。ヒステリックな金切り声。

こんなときまで世間体かよ。だったらおまえはなんなんだ。今は暴力ではないのか。一体どれくらいぶりに帰ってきたんだ。

言い返したい言葉はたくさんあったけど、俺はなにも言えなかった。胸がつかえて苦しい。無理に叫んだら、また過呼吸に陥りそうだったんだ。

やっぱり言われっぱなしかよ、ちくしょう。

それから散々、母親の愚痴のような責める言葉が続いた。俺は立ち尽くして聞いているしかできなかった。言い返せばまた倍に返ってくるから。

どれくらい続いたのか、計ってなかったから解らない。永遠に続くんじゃないかと思われたその時間が終わり、解放されて部屋に戻るとそこに兄貴が立っていた。

ドアノブに手がかけられてる。トイレの帰りか、なにかはわからない。家でしかかけない眼鏡の奥底に、これでもかというほどの侮蔑^{べつ}の色が見えた。

「なにしてんだ？おまえは」

一言だけ言い残して、兄貴は部屋に入った。
たまらなくなつて、逃げるように俺は自分の部屋に入ると、早々とベッドに潜り込んだ。

第二章・・・6

引きこもりとか、ニートとかの気持ちが俺にはわからない。パソコンでゲームをしても半日で飽きたし、部屋にある本はすでに読み終わってるし…。

まだ謹慎一日目だというのに、すでに時間をもて余していた。部屋にいてもすることがないのだ。

いろんなところが痛むせいか、あまり眠れないし。

（今頃…なにやってんだろ？）

暇になるとどうしても……どうでも良いこととか、どうでも良くないこととか、さまざまなことが頭を巡る。

球技大会に対する想いは複雑だった。最初は億劫で面倒くさくて……たぶん玲華にあそこまで言われなければ、体育のときのように手を抜いて適当にやっただろう。

だけど逃げないと決めてから、いつの間にか目標にしていたんだ。壁を乗り越えるための手段のひとつ。勝敗はともかく、全力でやって過呼吸が出ずに満足いく内容だったら、ひとつ階段を登れるような、そんな気がしていた。

（やりたくなってたんだ。……出たかった…）

今さら、昨日遭ったことを後悔なんてしない。もう一度同じ場面がきたら、やっぱり俺は逃げずに喧嘩してたと思う。

ただ、出たかった。

それだけだ。誰かを怨むつもりはない。

それが叶わないものとわかったら、残っているものは……。

（事件解決だ）

俺は咲田さんが買い物に出掛ける時間帯　夕方四時くらいを待って、下から電話の子機を部屋に持ち込んだ。

咲田さんはいつもは午後くらいからきて、家事を一通りして帰っていく。だけど今日からは十時から来るように母親に言われていた。

俺を見張るためだと思う。

咲田さんといい、今回の久保田といい…母親は他人を介してまでも俺を見張ってる。なにがそんなに信用できないのかわからないが、嫌になる。

（じゃなくて！）

また暗くなっている頭を振って、俺は学生鞆から紙切れを取り出した。入れっぱなしになっていた。

この紙を貰ったときはかけるつもりはなかったし、一度は棄^すてようとした。だけど…。

（探偵がダメなら刑事しか残ってないだろ）

俺は書いてある数字を、間違えないように確かめながら、慎重に押していった。受話器を耳に押し当て、コールをなんとなく数えていた。

（…サン…シイ…ゴ………おい…）

何回鳴っても出ない…。もしかして出ないつもりか？

忙しいのかも、とやっと俺は思った。変な話だが、なぜだか俺は刑事が出ないことをまったく考えてなかったのだ。

（かけるつつつたのに！）

つい八つ当たりで、紙切れをぐしゃぐしゃにしてゴミ箱に投げつけると、コールはそのまま留守電に変わった。紙切れが、ゴミ箱の縁に当たり入らなかったのが見えた。次に聴こえた甲高い発信音が、とくに耳障りに感じる。

「携帯電話に出なくてなにが携帯だ！言っとくけど折り返すなよ！迷惑だ！」

自分で思うより苛ついた声が出て、少しばかり啞然とする。

折り返してほしくないのは本当だった。変なタイミングでかかってきたら堪^{たま}らない。例えば咲田さんが取^とったら、取り次いでもらえないか、もしくは取り次いでくれても確実に母親まで報告がいく。最悪、こっそり親機で内容を聞かれるかもしれない。

とりあえず子機を戻そうかと立ち上がったときだった。

電話がかかってきた。家中に鳴り響く呼び出し音にビクリと一度震えた。

なぜか慌てる。

普段あまり電話に出ないから、出慣れてないからかもしれない。慌てながら、先ほど捨てきれなかった紙切れを拾って伸ばした。子機に光っているディスプレイの番号と照合する。

間違いない、刑事からだった。

その確認だけして、やっぱり俺は慌てながらボタンを押した。

「折り返すなつつたろ！」

もしも何とか何も言わずにいきなり怒鳴る。

……違う。こんなことが言いたいんじゃないのに。本当はかかってきて良かったって思ったのに。

自分のガキすぎる対応に嫌気がさして、ベッドに座りながら頭を抱えた。

「どうした？ なにかあったのか？」

耳に聞き覚えのある刑事の……池田浩一郎の声がした。心配するような優しい声音だった。

最低だ。こんな甘え方。

そうだ俺は甘えてるんだ、と気づいた。妙に感傷的な気分陥ってしまふこの部屋で、なんとか外と繋がろうとしただけなんだ。消去法で池田になっただけで……。事件のことを聞きたいとか、確かにそれも紛れもない理由だけど。

「神崎君だろう？ 俺の携帯にあんなタンカ切れるのは君くらいだ」沈黙が不自然に続いてしまふと、受話器の向こうで軽く笑う声が出た。そういえば名乗ってない。

「そうだよ！ 忙しいならかけ直さなくて良かったのに」

また意地を張るようなことを言ってしまう。

「大丈夫だ。いま区切りがついた。……なにか思い出したのか？」

ああ、そうだ。池田は、思い出したことがあつたら電話しろと言ったんだ。

仕方なく、言うつもりもなかったことを答えた。本当はもつと前に思い出したことだった。

「ボタン……」

「ああ、あの日落ちてた……君のボタンか……」

「そう。あれが落ちた原因、思い出した」

最近ぶり返したように呼吸が苦しくなる。そのきっかけは、あの事件を目撃してからだったんだ。再び、あの場所に立っただけで過呼吸になるくらいだから、当日もやはり過呼吸になっていた。

あの、いまでも忘れられない、あの眼を見てからだ。あの眼がそうさせた。引き金となった。あまりの苦しさからシャツを握りしめて、そのときボタンが飛んだのだ。俺は池田にそのことを話す。これで思い出すべきことは何もない。もう掛けられない。

「眼？彼の眼を見たのか？彼はうつ伏せに倒れていたんだぞ。どうやって見たんだ？」

しかし池田はさらに突っ込んできた。

どうやって……？

考えもしなかった部分だった。確かに梶さんがうつ伏せに倒れていたのは俺も知ってる。見て知ってる。

（顔を覗き込んだ？）

いや、違う。

ふと浮かんだ可能性はどうしてもしっくりこなかった。

「次の課題だな」

また黙り込んだ俺に、やはり穏やかに池田は言った。あまり前のような聞き出す感じがしない。

なんか変だ、と思った。

その違いはおそらくすでに俺が疑われてないから。もしかしたら着々と捜査は続いていて公にしてない情報を掴んでいるのかもしれない。

「なあ、あれから犯人のメボシってついてんの？」

「答えられない」

短い拒絶。期待をもたせないように厳しい。

池田は事件、いやおそらく仕事のことになるかと厳しくなるんだ。厳しさを持たないと出来ない仕事なのかもしれない。だからといって、俺も譲る気はなかった。

「じゃあ答えられること教えて。なんでもいいから」

「ニュースでも見ろよ」

「見てる。つーか対した情報ないし…最近ニュースでもやんねえじやんかよ」

梶さんが通り魔ではないことも流れなければ、あれから新たな被害者も出てなかった。

「だったら諦めろ」

「俺には知る権利があるだろ！」

「なぜ？」

なぜ？

疑われたから…第一発見者だから……。

一瞬なんて答えようか迷った。どれも説得力がないように思える。簡単にかわされそうだ。

「まえは教えてくれただろ？」

「以前か…あれは流れで必要だったから話したんだ」

ため息混じりに言われて頭にきた。あれは失敗だった、というニュースが感じとれた。もう完全に俺は蚊帳の外なんだ。

疑いが晴れたのなら喜ばしいことのはずだ。おまえの見たことだけが頼りだと、期待をかけられることがなくなるなら、それは俺が望んだことのはずだった。

なのに…。

「タダとは言わない！俺はまだ警察に話していないことがある！」
気づいたらこんなハツタリをかましていた。

「あのな……見え見えなんだよ」
だけとすぐバレた。

呆れた声が耳に届いて、めちゃくちゃ恥ずかしくなる。うるせえ

と俺は唸った。

「なにをそんなに必死になっているんだ？最初は俺は関係ないという姿勢だっただろう」

「……………」

確かに必死だ。俺には必死に足掻くぐらいしか、やり方を知らない。上手い駆け引きの仕方なんて分からない。

「俺は…だから…」

迷いながら言葉を選んでいると、向こうの空気が変わる。

「すまない。また連絡する」

やっぱり忙しそうで、そのまま切れそうな雰囲気だった。俺はいまにも切れそうな通話をすぎるように叫ぶ。

「待て！一言分ちよつと待って！」

まだ途切れていなことを耳で感じながら、一番伝ええないといけないことを言う。

「本当に折り返しはやめてほしい。用があんなら別だけど……フオローとか、そんなつもりならいないから」

「……………わかった」

一瞬間が空いて、違うことを言おうとしたのを感じた。それがなにかは分からない。だけど本当に急いでいたようで、一言だけで切れた。

耳に残ったのは虚しいツーツという不通音。

遮断された。外と。そんな気分だった。

それから、子機を返さないと、とぼんやり思った。もとに戻さないで。

ベッドから立ち上がるだけなのに、いつもの何十倍何百倍の労力を要した。リビングにある親機のところへ戻る。無駄に広い家は、普段はなんとも気にしないのに、一人きりだと階段の軋みさえ大きく響いた。

リビングへ続く扉を開いて電話を直し、息を潜めるように踵を返す。

「お電話どちらに？」

目の前に居ないと思っていた咲田さんがいた。ギクツと体が条件反射で強張る。

(なんで?……いつのまに……!)

咲田さんは光のない冷めた眼でニコリともせず、じろじろと俺を見る。

「帰ってきてたんだ……」

なんとか誤魔化しながらも、平静さを装いつつ俺の頭はパニックに陥っていた。

いつから?もしかして聞かれた?どこから?

「ええ。お財布を忘れまして」

咲田さんはふいと目を逸らすと、再び家から出ていった。

嘘だ。

真っ先にそう思った。これから買い物に行くのだとしたなら、わざと俺を泳がせたんだ。だとしたら会話を全部聞かれた。しばらく俺はその場に茫然と立ち尽くしていた。

* * *

うあーんうあーんうあーん……。

泣いている子どもがいる。闇の中でひとり。

あれは俺だ。小学校三年生のころの俺。

泣くことで誤魔化していた。すべての感情を表していた。両親に振り向いてもらう手段がわからなくて、泣いたら駆け寄ってくれるかもしれないと思いながら。

五月蠅いわねえ……。なんとかならないかしら。あの子の声。

おまえが何とかしろよ、母親だろ。

冗談でしょ、赤ちゃんじゃないのよ。大体あなたが叱りつけるから泣いてるんじゃない。

俺は言うべきことを言ったただけだ。あいつがこんな点取っ

てくるから。

だけど2人は俺とは離れた場所で嫌悪感を示しただけだった。責任を押しつけ合いながら。

そのときの算数のテストの点が九十八点だった。たった一問の間違いも父親は許してくれなかった。常に完璧を求められていたんだ。絶望感なんて言葉も意味もわからないまま、更に俺は泣く。嫌な想いを打ち消すように。

そしたらやっと二人が立ち上がった。

気配を感じて嬉しくなつて振り向いたけれど、二人の顔を見た瞬間……怖くなった。

決して子供をあやそうという顔じゃなかったから。

予感は的中した。

あやす代わりに繰り出されたのは拳。ただ黙らせようとするためだけの、ただひとつの手段。

それから俺は泣いても無駄だということを悟った。

発散する術を失ったら、あとは溜め込むだけとなる。簡単な方式。やがて鬱積された感情は、呼吸困難という形になって表れる。そう時間はかからなかった。

ちよつとあなた医者でしょ。あれなんとかしてよ。

あれは心身症だ。弱い人間がなるものなんだ。別に死にはしないから放っておけばいい。

なんだ、そうなの？ まったく大袈裟ねえ。まあ静かだからいいわ。

まさに息が吸えないその瞬間ときに二人がしていた会話。今でも忘れられない。

惨めだった。苦しかったけどそれよりも、心細さの方が辛かった。いつも重くて、不安な心。吹きさらしで、庇ってくれるものも庇うやり方もわからない。知らなかった。

それから家にいない日が目立つようになっていき、二人がいなくてころではあまりそれに陥ることはなくなった。皮肉な話だ。

だから。

（それでも俺は）

帰らなくていいよ、もう。今さら俺は道を促されてもその通りには歩けない。 医師にはなれない。

（期待を…）

もう期待してないんだろ。諦めてるんだろ。せめて重荷にならないように、しようとは思った。

（途方のない……想い）

惣一。こつちへきなさい。それはいいから。

うん。

惣ちゃんは賢いから大丈夫よ。ああはならないわ。

兄貴…。

俺とは対照的に兄貴はいつも笑っていた。両親たちと三人でひとつの家族みたいに見えた。

だいじょうぶ？

苦しんでいる俺に声をかけるのは誰だろう。すべての音が聞こえなくなったときにひとつだけ届く声。

労りの言葉。

わかるのはそれが両親ではないこと。

ごめんね。もっとおおきくなったらきつとかいほづされるよ。

声が言う。

本当に？

あれから6年も経つのに何も変わってないんだ。むしろ再発みたいになって、いまも苦しめられてる。

だいじょうぶだよ

誰？ 顔を見せて。もっとよく話を聞かせて。

俺は、声の主を追い求めながら眼が覚めた。

夢、だった。

* * *

いまが何曜日で、あれから何日経ったのか把握出来ない。気が遠くなるほど、すごい長い間部屋に居る気がする。

あれ以来とくになにもせず、体がしんどくてほとんどベッドで過ごした。

気分がすぐれない。

痛みはもうほとんどなくなっていたけど、常に襲ってくるように吐き気がする。胸がつかえているような感じもあったから。

それなのにあまり眠れない。睡魔が襲ってもすぐうなされて起きる。その繰り返しだった。

でもさすがにベッドにばかりいると体中が痛くなった。ダルい体を引きずって、勉強机に座る。

そこまで移動するのにも体力を奪われた感じがあって、しばらくぼんやりとした。

いくら暇でも勉強する気になれない。兄貴ならこんなときでも勉強するんだろうな、という考えがふと浮かんで笑えた。比較されることを嫌いながら、自分が比較するなんて可笑しすぎる。

それから何気なくパソコンの電源を入れた。セキュリティは万全で、親に閲覧できるサイトを制限されたパソコン。ゲームも簡単なものしか出来ない。だからいまはメールか、楽曲をダウンロードする固定のサイトしか使ってない。

メールの九割は純平で、あとは迷惑メールだった。とはいえ、純平にだって別の世界があってそこには友達がいる。そんなに頻繁には連絡はとっていない。

パソコンが立ち上がると今日の日付と時間が分かった。

あれから三日が過ぎていた。今日は月曜日だった。

(終わってる)

学校では球技大会が終わって代休に入った一日目。いまの俺にはあんまり関係ない。

(メールきてた…)

だけど知らないアドレスで題名がない。純平じゃない。
迷惑メールかも、と思いながらもなんとなく開く。

「え!?!」

部屋で一人しかないのに、つい大声をあげていた。慌てて片手で口を押さえる。

やほー！玲華です。

元気に謹慎してる？

どうせ暇でしょ？てゆーことで、明日遊びに行くから！

絶対家にいなさいよ。もし、さけたら……………ふふふ。

後悔することになる、とだけ言っておくわ。

じゃーねん。

(……………)

なんというか…なんと言っているのか、どういふふうに思っているのか分からない。

(元気に謹慎って…)

変な日本語。

あんまり元気じゃない、とか内心思いながら、なんとなくメールから目が離せなかったら、とある重要なことに気づいた。

重要で重大といえば、玲華がウチなんかに来るのもそうだ。なんとか思い止まらせる、もしくは追い返さないと…。

それより。

(このメールって昨日発信されてるじゃないかあああ!)

よく見ると、昨日の夜十一時頃の受信だった。つまり、玲華の言う明日とは………… 今日だ。

血の気が引くのを感じた。

(今日のいつだよ!)

とても大事な時間が書かれていない。いまは午前十時だから……

……。

まだ、メールを返したらなんとかなるかもしれない。俺はそう思
ってクリックし、文章を悩んだ。電話番号聞いていたら早かったの
に……悔やまれる。

（つーかなんでアドレス知ってるんだよ？）

俺は教えた覚えはない。怖い。怖すぎる。

ハッキングして探ったのかも、とまで考えて、さすがにそれはあ
り得ないだろうと思った。妄想がすでに病んでる。冷静な判断がで
きなくなってる。

返信画面を開いたまま、しばらく物思いにふけっていたら、下の
階からチャイムの音が聴こえた。

まさか、もう？

焦って何日振りにカーテンを開けた。窓から下を覗く。そこに
は明らかに高級車とわかる真っ黒い車が停車していた。車の傍らに
は真っ黒いスーツを来た男。玄関先はここからでは見えない。

そのあとの俺は、いままでスローモードだったのが信じられない
くらい素早い動きだった。音が響くのも無視して階段を駆け降りる。
あまりに驚きすぎて、困っているのか、怒っているのか、それと
も突然の訪問者に喜んでいるのか……感じたり考えている余裕がな
かった。

ただ、急いだ。

もう頭は、訪問者は絶対玲華だと信じて疑わなかった。あんな高
級車持つてる知り合いは他にいない。

玄関先では咲田さんの毅然とした拒絶の声と、後ろ姿が見えた。
「私はただの家政婦ですので、いくらクラスメートさんとはいえ、
この家に他人様を上げるわけにはいかないんです」

「わたくし悠汰さまとお会いできればそれで良いのですが」

このバカ丁寧な口調は確かに、猫を被っているときの玲華のもの
だ。俺はさらに一歩踏み出した。

玄関のドアの向こうに、いつもはおろしている、ゆるく巻いた髪

を後ろでひとつに束ねている玲華が見切れた。赤いリボンと、白いワンピースのスカートの端が揺れていた。

「ですから、先ほども申したようにですねえ」

咲田さんは引かない。母親に命じられているからだ。他人を、とくに俺に関する人間を接触させないように。

「あ、悠汰さま」

玲華は奥にいた俺を見つけると、手を振ってきた。咲田さんも振り向き俺を確認すると、険しい顔のまま立ちはだかるように言った。

「悠汰さんは謹慎中ですよ」

「わたくし謹慎の邪魔はいたしません。でしたらわたくし悠汰さまのお部屋でお話しますわ」

まるで名案とでも言うように手を合わせ口元にもつてくると、玲華は形の良い唇を優雅に持ち上げた。目は力強く、支配する側の威厳があった。

あのときと同じだ、と思った。クラスの皆を束ねた時の。生まれもって身についた王者の風格。

咲田さんは一瞬たじろいだみたいだった。その隙について玲華が中に入る。訪問販売の営業すんのに向いてる…とか、また俺はくだらないことを考えた。

「構いませんわよね？悠汰さま」

今度はにっこりと無邪気に笑って俺に言う。

拒むつもりだった。こんな家を見られたくない。まるで牢獄のような戒めのなかにいる弱い自分を見られたくない。バレたくない。

そう思っていたのに、気づくと、勢いに押されて俺は頷いていたんだ。

第三章・・・1

初めて彼を見たのは入学式の時だった。

まだ教師でさえ全員は来ていない時間帯に、彼は隠れるように体育館の裏にあるベンチのところで寝ていた。朝陽に透けられ、際立った色素の薄い茶色い髪。閉じられた目には長い睫毛。すっと整った鼻に形のよい唇。

……あたしは一目見て思ったんだ。

（ナニコレ。新手の家ナキコ？）

とても朝早かったし、つい天気良くて寝てしまったぜ…という感じではなく、ヨダレまで垂らして爆睡だったから。

着ている制服が新品で新人生だとわかる。左腕にはクロノグラフの時計がキラキラと反射していた。

あたしは新入生代表の挨拶があつたし、理事であるお父様と一緒に来ていたから早く来なければいけなかったのだけど、他の生徒はまだ一時間以上は余裕があつたはずだった。

そのときはそのまま立ち去り、式が終わってから教室に入ったら同じクラスだと知った。

神崎悠汰。彼は面倒くさそうに自己紹介でそう名乗った。

というか、悠汰はなにをするにもつまらなそうにしている、気力がなく面倒くさそうだった。そして誰ともつるまない。なんかピリピリしてるところがあるから、周りの人も近寄り難いんだろうな、と思う。

いずれにせよ、あたしはどうこうする気はなかった。どこにでもいるじゃん。クラスに一人は、こういうウルフタイプ。

だけど放課後、教室に一人で音楽を聴いているところを見かけた。（やっぱ変なヤツね。そんなにメンドイならさっさと帰ればいいのに）

最初感じた訝しさが浮上する。

担任の杉村先生も気になっているみたいで、学級委員の仕事を頼まれたついでにぼやいていた。

「神崎の気迫に怖がつてる生徒がいるんだ。なんとかならないかな」
「大丈夫ですわ。こういうことは無理に動けば歪みが生じます。そのうち成るように成ります」

「そういうものかな…。先生はそのうち何か問題を起こしそうで用心してるんだが」

「そうでしょうか。わたくしには彼は迷える子羊に見えますわ」

なぜか絶句している先生に笑みを残して去った。無闇に関わるつもりはなかったから。こっちの方がメンドイわよーって気分。

先生も先生で、生徒に別の生徒のことを愚痴るのはどうかと思った。まだまだ若いのね。

気になりだしたのは、テニスするとき。初めて悠汰の本気を見た。絶対にあれはそうだ、と思う。

フォームもめちゃくちゃで動きに無駄も多かったけど……目が違った。なにより足が速い。どこにボールを落とされても追いついた。喜多川くんは気迫にのまれてミスが増えた。ただそれだけ。

技術で負かしたわけじゃなかった。でもそれはある意味テクニクよりも凄い才能。誰もが持てる能力じゃない。

なのに…周りの声援に悠汰が気づいた途端、彼は失速した。

どうして？ もったいない！勝てたのに！

そう思ったら止まらなかった。その日の放課後、教室に駆け込んだ。……駆け込む気持ちで、本当は優雅に教室に入ったんだけどね。

最初になんだ？コイツって目で見られて、内心驚いた。それから初めてちゃんと（起きてる悠汰と）対峙したんだわってことを思い出す。

「神崎さま」

思いつきり愛想よく声をかけてみた。すると悠汰はぶっきらぼうに「なんだよ」と一言だけ答えた。真っ直ぐ、睨んだと言っても過

言でないほどに見返された。

正直、猫をかぶったあたしにこんな目をするやつはいなかった。だから驚いた。

だいたいはトロンとした危ない目か、真っ赤になって逸らされるからだから。

その後の態度も悪くて、あたしのなかで、神崎悠汰はナニコレ？ からおもしろいヤツに変わったんだ。

神崎さまと呼ぶ度にイヤぁーな顔を見せるくせに、なにも否定してこない。（これは後から、いちいち否定すんのが疲れてたつってたけど）

教室で寝ているところを見かけて、iPodにイタズラしてやったのに気づかない。（二十日もよ？信じらんないわ！）

……っていう、打つても響かない加減もまた良かった。調子に乗ってるわけじゃないけど、本当に押しの強いヤツには嫌気がさしてたから。（某綾小路とかサイアクー）

それから、話しかければ話しかけるほど、悠汰が時折みせる寂しそうな顔が気になっていた。わざわざ馴染んでない学校に、遅くまで一人でいるのも不思議で…。

そして気づいた。悠汰はウルファイブじゃなくて、ただ他人に無頓着だつてことを。

だつて彼が周りに目を向け始めると、だんだん空気が丸くなったせいか、友達もできたみたいだし。

…だけどあたしの部屋に招待するきっかけが、梶さんの死だなんて皮肉すぎる。最近世羅は勝手に一人でなんかしてるし、悠汰は悠汰でまた一人で抱え込んでいるし。ちょっと寂しい。

「玲華さま見ていただけました？ ぼくの華麗なるスリーポイントシュート」

（あーヒデがいたわね）

でもなあヒデなあ…とか考えながらも、ビシッとあたしは言い放った。

「うるさいわね、今日から三日はあんたは敵よ！わざわざ関係ないクラスの試合なんて見てられないわ」

「そんなあ……」

そう、とうとう球技大会本番になった。悠汰がいないのはイタいけど勝つしかない。最初っからあたしのデータは完璧だったから、メンバー入れ替える気は毛頭なかった。まー、一応練習風景見てまわったけど、結局はこれでバッチリじゃん、っていう最終確認にたったただけだったし。

それなのに悠汰がいないから、ちょっとメンバーを調整するハメになってしまった。

「玲華、玲華」

総本部席にいる父親が声をかけてくる。あーもう、忙しいのに。

お父様は自分がやるわけでもないのに、某有名なメーカーのポロシャツにジャージという出で立ちだ。

「聞いたよ昨日のこと。綾小路君を全校生徒の前でひっぱたいたそうだね」

どこに全校生徒がいたのか説明してもらいたい。ちょっと脚色して伝わってるようだ。

「あら嫌ですわお父様。噂話する殿方は嫌われますわよ」

お父様がいるテントは他にもPTAの父兄がいるから、猫をかぶることに決めた。

生徒の前ではあれをきっかけに地で行くことにした。もう隠す必要はない。綾小路亨の件はこれからグチグチ言われるかもしれないが……。

（……んなことよりホントは、悠汰を落とすまでは本性隠していようと思ってたのになあー。あーあ）

でも悠汰は地のあたしを見ても態度が変わらなかった。他人では唯一の人だ。

やっぱしあたしの目は確かだわ。

「なんてこと言うんだい？玲華あー噂じゃなくて報告があっただ

よー」

「わたくし学級委員などで忙しいので失礼いたしますわ」

嘆く父を無視して離れる。構ってらんないわよー。冷蔵庫がかか
ってるんだから。

冷蔵庫をあ部屋に入れたら、もつと悠汰も来てくれるかもしれないし。

そのためには全種目の敵の動向をチェックだわ。

今のところなかなか好調な滑り出しだ。ただ、女子はともかく男子は三年生相手になると、少しビビっているフシがある。 気合い
入れにいかないと！

あたしはそんなわけで頭に叩き込んだスケジュールで綿密に校庭
と体育館を往復していた。

「玲華」

なのに、またあたしを呼ぶ声がする。他の生徒が誰もいない渡り
廊下だった。もー誰よっ！と声の主を睨むように振り向くと、なん
と綾小路が突っ立っていた。

ゲツと思い、文句を言おうとしたけど……やめた。綾小路があまり
にいつもと感じが違っていたから。

どこか申し訳なさそうに、眉尻を下げて俯いている。いつもの自
信たつぷりの彼はそこにはいなかった。

それはいいんだけど、名前を呼ばれてから次の言葉がなにも出て
こない。

最初はあたしもちゃんと聞かなきゃって気持ちで待ってたのに、
何秒いや、何分待っても出てこない。

「ちょっとあたし忙しいんだけどお」

さすがに苛立ちを覚えて急かす。すると弾かれたように綾小路は
顔を上げて……また俯いた。

もう逃げてやろうかしら、と考えたときに、やっと綾小路は口を
開いた。

「あ……僕は……そ、その……君のことが本当に好きで、そうすると周

りが見えなくなつて……」

モゴモゴしてる！あの綾小路亨がモゴモゴしてどもってる！

それはあたしには衝撃的なことだった。子供のころから綾小路を知っているけど、いつも鼻につく感じでナルシストだし……とにかくこんなになにを言ってるかわかんないような態度は初めてだったのだ。

「その……すまなかつたと思つてる……」

プライドの高い綾小路にとっては充分すぎる謝罪だと思つた。

だからあたしは言つてやつた。

「いーわよ、もう。あなたがあたしにしたことは許します。でも悠汰にしたことは悠汰に謝つてね」

「待つてくれ。僕が玲華に謝らなければならぬことつてなんだい？」

「は？」

一瞬あたしたちの間にすきま風が吹いた気がした。

見直したと思つたらこれかー！じゃあなんで謝つたのよ？と、あたしは眉を寄せながら叫んだ。

「したじゃない！部屋で！押し倒そうとしたじゃない！他にもイロイロ」

「だつて僕は大好きな君に精一杯の想いを伝えただけだ」

「ちよつと開き直る気？」

「だつて本当にそうなんだよ」

なにがだつてよ！あたしは相変わらず噛み合わない相手に頭を抱えた。先ほど思つた言葉をそのまま聴く。

「じゃあなんで謝つたのよ？」

「あれは……君が怒つていたから……僕もやり過ぎたと反省して」再び綾小路の肩が落ちる。

まったくそれはもういいわよ。いや、聴いたのあたしだけだよ。

「じゃあそれは悠汰に謝つてくださいね」

「玲華はあいつ……！神崎悠汰のことが好きなのかつ？」

焦りながら綾小路が詰めよってくる。ちょっとちよつと、とあたしは後退った。これじゃ何も変わってないじゃない。

「えーとつまり、綾小路…さま…は、まだあたしのこと好きなワケ？」

「僕は君が本当は口が乱暴でも！たとえば実は庶民の出でも、たとえ犯罪者でもたとえ男でも、好きっ…」

「ダメれ」

どんどん寄ってきたのと、聞き捨てならない台詞に、綾小路の足を蹴っ飛ばした。

「いつっ…！」

喉をつまらせて、涙目で綾小路は苦しんでいたけど、急所じゃないだけ感謝してほしいもんだわ。

あたしは腕を組んでため息をついた。

「まったく全然わかってないようだから言っけど、あたし、あなたのそういう見境みさかいないところキライよ」

「そんな…」

綾小路は秀和のように垂れた目をした。でも秀和より可愛くなかった。キャラにないのよ。

「では見境があればいいのかい？」

「あんたさ、じゃあたたとえばで訊くけど、あたしが悠汰のこと好きって言ったら諦めるの？」

「諦めない」

綾小路の目がマジになった。鼻の下を伸ばしたような腑抜けの顔でも、ふっとキメたナルシストの顔でもなく、真剣と書いてマジというような顔だった。

その表情と言葉の内容に、少し驚く。

「もう諦められないよ。僕には昔から玲華だけだったんだから」

なんだ、こんな顔もできんじゃない。でもそれはね、恋じゃなくてただの思い込みなのよ。あたしもあんたも何も分からない子供のときに、周りの大人に面白がられて囃はやし立てられただけ。あたしは

そんなので人を好きにはならないし、嫌いにもならない。他人に影響はされない。あたしの気持ちはあたしが決めていく。

だからあなたも早く気づいてね。自分の望みに、気持ちに。

……あたしはそう想っていた。最後の想いは、綾小路はもちろん、もうひとり　ここにはいない男にも、向けられたものだった。

* * *

球技大会はリーグ戦のものとトーナメント戦のものがある。あたしが二日目に一番応援を外せなかったバスケットボールはリーグ戦だった。男子は昨日終わってるから、今日は女子バスケット。

そう世羅が出場していた。いつもなら安心して見れるのに、今回はどこか心が騒ぐ。

いつもの世羅ならしないミスを、今日は多発させていたのだ。それはささやかな小さなミス。失点に繋がるようなものではないけど（やっぱり体が硬いわ。あ、いまのちよつとファールくさい）

審判からは死角になってたけど、世羅がボールを相手から奪うとき、軽く接触したようにあたしには見えた…。

* * *

「ハラハラしたわ」

なんとかあたしたちのクラスが勝利を収めたけれど、我慢ができなくなったあたしは、まずそのことを世羅に告げた。

「私はいつも通りにやったつもりだが？」

タオルで汗を拭き取りながら、世羅は答えた。シャワー室に向かっているところだ。表面上はいつも通りよね、確かに。

「全然集中してなかったじゃない」

「勝てたから問題ないだろう」

「そう？ ホントに？」

「らしくないな。なにが言いたい？」

どっちがらしくないのよ。やっぱりいつもと違う。いつもの世羅ならこんなところで苛立つたりしない。

あたしはいい加減うんざりしていた。

「気が散る気持ちも分かるけど、ほどほどにしてよね。迷惑だから」

「なんの迷惑がかかってるって？玲華に」

「とりあえずは精神的に。あたしが変な気の遣われ方するの、嫌いって知ってるでしょう！」

悠汰がまえに言ったことが本当なら、世羅はあたしに気を遣ってる。だからなにも言わないんだ。確かにそうだ。というか、それ以外考えられない。

「相変わらずたいした自信家だな。私が玲華を気遣ってるとどうしてそう思えるんだ？」

「……………何年の付き合いだと思ってるのよ」

「十年以上だな。……………だからこそ、玲華はもういいんじゃないか？」

一瞬、世羅の言いたいことがわからなくなつて、あたしは次の言葉を失った。もう、いい？

「もう、私にばかり気になんなくていい、ということだ。おまえは神崎悠汰とでも普通の高校生活を楽しめばいい」

「なんでそこに悠汰が出てくんよ！あたしと世羅の話をしてるんじゃない！」

頭に来た。

あまりに世羅がはぐらかすから。

（普通の高校生活って…！）

だったら世羅は普通の高校生活が送れてないとも言つたの？それであたしをそちら側に連れ込まないように、なにも話さないと言うの？そんなの酷^{ひど}すぎる。他人行儀だ。

「あんたっていつもそうね。そんなことされてあたしが感謝するとも思ってたんなら、勘違いも八十八ダしいわ！あたしを力ヤの外にするんなら絶対に許さないから！」

「仕方ないね」

あたしが啖呵^{たんか}を切つても世羅は態度を変えなかった。そのすらりと伸びた長身を背筋を伸ばしたまま、あたしから距離をとりシャワールームに入っていた。

（やっぱり、おかしい…）

悠汰が戸惑いながら話してくれた教室での一件。あのときも感じた。

いくらトラウマがあると言っても、常に冷静な世羅ならあの程度であんなにあからさまな態度にはでないことは知ってる。見たわけではないから、想像の域はでないけれど、今の世羅は明らかに心を乱されているんだ。ポーカーフェイスが出来なくなるほどに…。

あたしは感情をぶつけた側だったはずなのに、まったく胸のつかえがとれなかった。世羅の本気が伝わって、ただ哀しいだけだった。

* * *

「あ、いたいた。玲華さまあー」

校庭のベンチに座って目の前のクリケットを観戦していると、サッカーを終わらせたばかりの萩原拓真が走ってきた。

すごく真っ直ぐなやつで、あの悠汰でさえ気を許した男だ。今日も爽やかに手を振ってる。

吹奏楽部だし、あたしのデータではそんなに運動神経がいい方ではないけど、ムードメーカーになると思ってた団体競技を選んだ。順応性も高く、悠汰のだけじゃなく、あたしの本性にももう慣れたみたいだった。初めのころに感じた崇拜する念がない。

「お疲れ。なかなか良いプレーだったわよ」

「でもボクは一点も入れてないよ」

「ちゃんと見てたわ。いちばん良いパス出してたのは間違いなく萩原くんよ。他の人はダメね。自分が自分が、だもん」

「ふふ、手厳しいね。でもありがとう。玲華さまのラクロスは勝つ

たの？」

「当たり前でしょ。明日決勝に出るわ」

「さすが」

「それよりなにかあたしのこと、探してたみたいだったけど？」

「ああそうだ」

萩原くんがパンと手を打って、思い出したみたいだった。古典的な動作だ。

「玲華さまと話したいっていう人がいるんだ。あそこにいる人」

萩原くんの指差す方を見たら、ゆつくりとした足取りで歩いてくる男性がいた。長めの髪をひとつに束ねてだらしない格好をしている。でも端正な顔立ちで勿体無かった。キチンとしたら絶対イケメンだわ。

その人には見覚えがあった。

（あ、悠汰と一緒にいた）

苦しんでいた悠汰を献身的に支えていた人だ。

彼が気を失った悠汰を保健室まで運んだ。謹慎処分を受けると親を呼ぶことになってるけれど、自分が親代わりだと言い張って、連れて帰ったと後から校長に聞いた。

（そんな人があたしに用事？）

訝しく思いながら、その男が近づいてくるのをじっと見ていた。

「はじめまして。って言っても顔は合わせたよな。オレは久保田修次」

見つめられてるのにまったく動じず、男はそう名乗って名刺を出してきた。歳上にきっちり挨拶されたから、仕方なくあたしも立ち上がる。相手がこういう態度に出ることが予想つかなくて、対応が遅れたことをやや悔やんだ。本来ならば先手を打つべきだったのに、丁寧に両手で名刺を受けると、そこには久保田探偵事務所、所長という文字が刻まれていた。

探偵が悠汰の親代わり？なんだか納得がいかない。

一瞬迷ったあと、地でいくことに決めた。どうせ彼にもあるとき

聞かれてる。

「それで、その探偵さんがどういう用？くだらない用事なら、あたしいま構ってられないからあとにして」

「なるほど、なかなか活発なお嬢さんだ」

手を腰にあてて先制したら、久保田探偵は薄く笑ってかわした。

「いま君とオレが話をするとしたら、その内容はただひとつだと思
うが」

ただひとつ…。

そう、それは悠汰の話だ。あたしが言っただけでない用事という
のは、それ以外のことに該当する。

わかってる。わかってるけど言い方が癪しゃくに障さわった。どこか上か
ら目線だから。まあ確かに歳うへ上なんだけどさ。

「わかりました。じゃーまあ、とりあえず座りましょ」

あたしの隣のベンチを促す。

少し離れたベンチに、萩原くんがそわそわしながら座ったのが見
えた。離れすぎず邪魔にならない距離。察してるんだと思う。それ
から彼もやっぱり心配してるんだ。悠汰を。

久保田探偵はベンチに座るや否や態度悪く足を組んだ。悔しいけ
ど脚が長い。

「悠汰は元気？」

挨拶代わりにあたしはさらりと訊いた。一緒に帰ってたから、ホ
ントに何気なく訊いただけだったのに、久保田探偵は眉をひそめた。
「さあな。多分元気じゃないだろう」

「なにそれ。親代わりなんですよ」

「聞いたのか。あれは仕方なくああ言っただけだ。悠汰のたを思
ってな」

「どういうこと？」

「今日は簡単に入れんだな…一昨年もこれくらいスムーズに入れれ
ばこんなことには…」

あたしの質問を無視して、探偵はどこか遠くを見ながら物思いに

耽^{ふけ}っていた。 ちよつといい度胸じゃないの。

「普段は不審者が入らないように万全の体制でいるのよ、あなたみたいなの？」

「オレは不審者じゃない」

ちよつと明るめに切り返したつもりだったのに、久保田探偵は真面目に否定した。冗談だったのになーもう。

しかもなかなか本題出さないし。

仕方がないから、別のところからあたしは攻めてみた。

「それで？あなたはなにをそんなにへこんでいるの？」

なのに、オレのどこが？っていう顔をされた。自覚なしかー。無理に高みを目指して、越えられなかった人みたいに見えるんだけど。それもきつと一昨年のことです。

「へこんでるといえば悠汰だ。……彼は君や浅霧世羅に言われて二度、動いた」

いきなりきた。これが本題なんだって、久保田探偵の顔を見て分かった。本人は自然に話の流れに乗ったつもりみただけど、気まずそうな表情だったから。きつと言いにくいんだ。

「動いたって…事件のことね？」

「察がいいな」

「あたしと世羅のことで悠汰が絡むといえばそれしかないわ」

あたしがそう言うのと探偵は頷いた。そして、自分が悠汰のボディガードをしていることと、その二回のことを事細かに話してくれた。

話を聞いている間、あたしはずっとクリケットの方に目を向けていた。小さく綾小路が見える。相変わらず派手なプレーだ。だけどあたしの視覚まででそれは止まっていて、記憶までにはこない。記録はされない。

だって、久保田探偵の話が…あまりに……。

（あまりにもム力つくから）

「だから悠汰は、君たちが期待すると無理をしてしまうんだ。頼む

から悠汰を唆す^{そそのか}ようなことを言うのはやめてくれないか」

「ソソノカすってね……」

あたしは髪をかき上げながらため息を吐く。なんだって大人はこういうことしか言わないんだろう。いくら子供のことが心配だからって、なにも聞かずに個人同士のことに口出されるのは腹立たしい。大人にも大人の都合があるってのもわかるけど。

「悠汰本人から言われるならともかく、あなたに言われてハイ分かりました、って答えるわけにはいかないわね」

「君は悠汰がそのまま過換気症候群で苦しみ続けても構わないと言うんだな」

わざとそんな、責めるような言い方を選んで言わなくてもいいのに。

あたしの心はその術中にはまって揺れた。だけど、それは違うと本能が告げる。

「わかってるくせに……とてもキタナイ言い方をするのね」

「なんだ？」

「そういうのって過度な不安とかからなるんでしょう。過呼吸になったそもその問題を解決しないと、なにも終わらないわ。それにあなた肝心なことを話してくれてない。その大元の問題、悠汰の心の闇よ」

「それは……」

あたしの主張に、久保田探偵は組んでた脚をおろして前屈みになった。両腕を腿^{もも}におき、項垂れたように見えた。

「まー普段の悠汰を見てれば分かるわ。っていうか、いま分かった。家庭の問題ね、違う？」

入学式の早すぎる登校。いまから思えば、家で眠れず仕方なく早目にでたところ、つい爆睡したように考えられる。それから、馴染めてないときから、なかなか帰りがらなかった悠汰。学校だって実は一日も休んでない。どんなに辛くても。

今日だって……昨日だって本当は、謹慎になんてならなければ、

今ごろここにいるんだろう。リンチされた次の日も。

「だったらいま、悠汰が元気じゃないだろうっていうのもわかるしね」

「嫌な言い方してるのはどっちなんだか。……悠汰が逃げ切れない気持ちに少しわかった気がする。君は鋭い」

「大人が子供になに言ってるのよ。それくらいかわしなさいよ」

あまりにあつさり泣き言を言うもんだから、ついあたしは顔をしかめた。だんだん歳上に見えなくなってくる。てゆーか、コイツは愚痴を言いに来たのかしら？ だったら相手にしてられない。

「確かに……悠汰は両親のしがらみから抜け出せずにいる。オレは悠汰の母親に依頼されたから、悠汰の依頼は受けられないし、そっち方面では助けてもやれない」

悠汰の依頼。事件解決。

あたしたちのために。

（違う、あたしたちの期待に応えるため、か）

そして自分が乗り越えるため。

「オレは悠汰が一番嫌がることをした。暴行された日に母親に告げ口したんだ。あのあとから、悠汰はまったく家から出ていない。だからオレは今ここに來れたんだけど……」

聞いているとだんだん独り言を言ってるのかと思いだした。まったく男ってこういうところ情けない。

「ちよつと懺悔さんげなら他でやってよね。あたしはマリア様でなければシスターでもないわ」

「君がシスターか。向いてるかもな」

「こんな口の悪いシスターがどこにいるのよ……って、そういうことを言いたいんじゃないわ。話の腰を折らないで」

ピシッと人差し指を突きつけて、言ってるうちに、はたとあたしはひとつの疑問が生まれた。

「ところで、じゃああたしがあなたに依頼したらどうなるの？」

「なにを？」

「事件解決よ！もちろん悠汰のボディガードは最優先で良いけど、あたしだって本気だ。世羅の言う通りにはならない。あたしの行動だってあたしで決める。」

「なにを言ってるんだ。断るに決まってるだろう。オレは悠汰にこの件から手を引かせたいんだ。オレが関われば必然的にあいつも……」
「ふーん。なんだかんだ言って犯人みつける自信がないんでしょ」
「どうとでも。オレはそんなに単純じゃない」

（うーんダメか）

挑発には乗らないみたいだ。

「じゃあ悠汰を守る自信がないんだ」

これならどうだ、と言い換えたら、久保田探偵は虚をつかれたような顔になった。うーん、こっちだったか。

「とにかく、悠汰にはこの事件から手を引かす。警察ももう別のところに向いてるようだからな」

「だからそれはあたしが彼に聞きます。悠汰がそう言うなら初めからそうしてたし」

「駄目なんだよ。君に言われたら悠汰は断れない、きつと！」

久保田探偵は諦め悪く声を荒げ立てた。ついあたしもつられて周りの目を気にせず叫ぶ。

「それは悠汰が頑張りたいうって思ってるからでしょ！」

「壊れたらどうするんだ！責任なんてとれないだろう！」

どうやら探偵の心配は奥が深いようだった。多分守る自信がないのは、身体の方じゃなく心のことなんだ、ってわかった。

でもあたしだって逃げられないんだよね。

お互い責任を感じるのはやめようとあの日言った。あたしから言った。なんて浅墓だったんだろうっていまなら少し思える。頑張りすぎた結果なんだ、あれは。

（でもそんなんでは気を遣われるのはイヤだったんだ。あたしがイヤだから）

「あたしが壊させない」

気づいたら先に口が動いていた。全然構わない。本心だから。

「あなたに出来ないことがあたしには出来る。どうしても止めたいのなら、力づくでなんとかしなさいよ。そのときはあたしもあらゆる手を使って成し遂げるから」

探偵の顔が複雑に歪んだ。やや沈黙があいて長いため息を吐き出す。

「この学園は高貴な出のヤツらが多いと聞いたが……悠汰といい生意気なヤツばかりだな」

「そんなことないわ。あなたの後ろにいる彼なんてとっても素直よ。あなたも見習うべきね」

探偵が振り返って萩原くんを見た。萩原くんは心配そうな顔をしていたのが、突然話を振られて慌てていた。なんでもない、というふうにあたしは小さく手を振りながら言う。

「悠汰はいつまでも一人じゃないわよ」

あたしがそう付け足しても、探偵はすっきりしてない顔で懷から煙草を出した。中から一本だけつまんで取り出したけど、指で挟んだままでいる。

「いままでだって、別に悠汰に友達がいなかったわけじゃない。君が思ってるより、アイツの闇は深いんだ」

落ち着きなく煙草をもてあそぶ。その手元をなんとなく見ながらあたしは聞いていた。

「逃げるな、って言うっちゃったけど、そんなことじゃなかったんだ。逃げられないことで苦しんでるんだ。アイツは」

探偵が口元に煙草を持っていく。ライターを取り出し、ちょうど火をつけようとしたところであたしは言った。

「学園内はすべて禁煙よ」

久保田探偵が慌てて少しむせた。気まずそうに箱に戻すところを横目で見ながらあたしは立ち上がった。

「どうやら平行線のような。これ以上話しても時間のムダだわ。こんなところで愚痴る暇があったら、他の手を考えることね」

「ちょっと待て！」

離れようとするあたしの腕を久保田探偵が掴む。ものすごい力だ。それだけ必死ってことね。

（でもあたしだって引けない）

あたしはわざと振り払わずに、痛くなる腕を耐えて久保田探偵と対峙して睨みあげる。

相手の身長が高くて見下ろされるけど、不利には感じなかった。だって彼の目がすでに弱い。綺麗な造形の顔が歪んで、余裕もなく負けている。

「痛いわよ」

あたしが冷静にそう言うと、探偵はあっ、と呟いて力を緩めた。だけど離さない。

「なにを…するつもりなんだ？おまえ、悠汰になにをさせるつもりだ？どうせ素人が犯人探したって出来ることなんて限られてんだよ！中途半端に関わって、さらに状況が悪化したらどうする！悠汰だって、浅霧世羅のことだってそうだ」

饒舌になるにつれて、腕がキリキリと痛み出した。無意識に力がかもってるんだ。

だけどそれよりも、探偵が世羅の名前を出したことで、そんなことは気にならなくなった。

「世羅がなに？」

あたしの声は小さなもので風に乗って散った。自分で口について出たことも気づかないものだったから。

どうして探偵が世羅の名前を出すの？いまこのタイミングで！あたしが動くとき世羅になにか起こるとでもいうの？それも悪い方向に？

……探偵はなにか知っている。事件のことを。調査しないなんていつて、実は調べているのかもしれない。

「おまえ自身後悔することになるぞ！それでもいいのか？」

「やめてください！もう離して！」

悲鳴に近い萩原くんの声であたしと探偵は我に返った。いつの間

にか萩原くんはあたしたちのところまで近づいて来ていた。

（痛っ！）

今ごろ腕の痛みが襲ってきて、あたしはようやく気づく。探偵の爪が皮膚にまで食い込んでいて裂けていた。少し血が滲んでる。

探偵がすまないと謝って手を離れた。その手をあたしが掴む。

「聞き捨てならないわね。いまのどういうこと？」

「……………平行線なんだろう？話す義理はない」

探偵はあたしの手をいとも簡単に振り払って、もと来た方向へ歩いて行った。

「さんざん愚痴っついて最後がそれ？ずいぶん無責任ね！」

あたしの叫びは捨て台詞みたいにむなしく探偵の背中に響いた。

今日はこんなばっかりだわ！ちくしょう！

「玲華さま。消毒しないと……………」

あたしの怒りのオーラが伝わったのか、恐る恐る萩原くんが言うてくる。

「ちょっと」

それを無視して萩原くんに声をかける。

「な、なに？」

「どう思った？あの男の話」

「ボクたちが知らないなにかで恐れている……………と思う」

萩原くんは探偵が去った方向を見て言ったから、ちょうどあたしにはその顔が見えなかったけど、もうあたしに怯えた声じゃなかった。ただなんの混ざり気もない、素直な悲しげな声音だった。

「やっぱりそうよね。同感だわ」

それがなにか……あたしは知らなければならない。なんの疑問もなくあたしはそう思った。それは必ず悠汰に繋がる。そしてこの事件にも……………。

* * *

「えっ？」

素^すつ頓^{とん}狂^{きやう}な声^{こゑ}ってこういう声か、ってあとから思^{おも}つような声^{こゑ}があたしから出^でた。

なぜあとからかって言う^いと、やっぱりそんな声^{こゑ}を出^ですようなとき^{とき}って、他のことを考^{かん}える余^{あま}裕^ゆがないからで…。

「パーティするって？世羅^{せら}ん家が？」

あたしはその夜、執事^{しやくし}の葛城^{かつらぎ}さんから受け取^とった手紙^{てがみ}を、お父様からさらに受け取^とった。

「ああ。月曜日^{げつようじ}の夜だそう^やだ。今回はパパ行^いけないんだけど、玲華^{れいか}はもちろん行くよね？」

ニコニコ笑^{わら}ってお父様^{おとうさま}が内容^{りやうよう}を告^つげる。確^{たしか}かに招待状^{しょうたいじやう}と書^かかれたその白^{しろ}い手紙^{てがみ}の内容^{りやうよう}と相違^{さいち}ない。リビングのソファで、1日^{いちにち}の疲れ^{つかれ}を取^とろうとくつろいでいたのに、またドツと疲労感^{ひろうかん}が増^ました気がした。た。

「なに考^{かん}えてんのよ？あのおば様^{おばさま}は！」

「あの奥方^{おくはう}はパーティが大好きだからね。一応^{いっおう}慎^{しん}んでたみたいだけ^{だけ}ど、まあ血^ちの繋^{つな}がりのある身内^{みうち}じゃないから不謹^{ふこん}慎^{しん}とも言^いえないよ」

お父様^{おとうさま}は梶^{かじ}さんの話^わをしてい^いるのだと分^わかった。

そう、浅霧^{あさぎり}家はもととパーティをよく開^{ひら}く家^{いへ}だ。世羅^{せら}の母親^{はは}がパーティ好き^{すき}なのだ。だけ^{だけ}ど梶^{かじ}さんのことがあ^あつて、ず^ずっと自肅^{じきよく}してい^いた。

でもあたしが言^いったのはそういう意味^{いみ}だけじゃない。梶^{かじ}さんが亡^なくな^なつてから、あたしがいく^いくら訪問^{ほうもん}しても一切^{いっけつ}家^{いへ}に上^あげなかつた。誰^{たれ}にも会^あわせてもら^{もら}えず、ゴタゴタしてるとい^いう理由^{りゆう}で追^おい出^でされてきたのだ。あんなこと^{こと}は初^はめてだ^だった。いつ行^いつても親戚^{しんせき}のよう^{よう}に、いや、それ以上^{いじやう}に親^{おや}しみを持^もつて接^せしてくれてい^いたのに。

それほど閉^しざしてい^いたのに、ここへ来^きていき^いなりのパーティだから驚^{おどろ}いたのだ。

なにかの畏^{おそ}か、それともたんにおば様^{おばさま}が我慢^{まんまん}の限界^{げんがい}を感じ^{かん}じたのか…とぶ^ぶつぶ^ぶつ考^{かん}えてると、お父様^{おとうさま}が「あれ？行^いかないのかい？」と

言ってきた。

「もちろん行くわよ」

浅霧一家の様子を窺えるチャンスのみすみす逃す手はない。

「あ、ねえ。お友達も連れて行きたいんだけどいいわよね？」

いいかな？ではなく、いいに決まってるわよね、という含みを持たせて訊いた。

「オープンなパーティみたいだから良いだろうけど…誰だい玲華？まさか男じゃないだろうね？」

お父様の顔色からサーって血の気が引いていた。まー、予想通りの反応だ。

「男じゃいけないの？エスコートさせてやるのよ」

「エスコートなら綾小路君がいるじゃないか」

不気味な名前を聞いてあたしの方が、ざわりと全身を総毛立たせた。まだ固執してんのか。

「なによ！お父様は娘に幸せになってももらいたくないの？」

「もちろん玲華の幸せは願ってるよっ！だから綾小路君は完璧な男じゃないか」

「どこがよ！性格に難^ナ有りよ。じゃなきゃ今回暴力事件なんて起きてないわ」

「玲華…まさか……」

はたとお父様の動きが止まる。何かに感づいた顔をした。

「君が連れていきたい男って」

さすがにこの流れで気づいたか。あたしはあーあ…と思って髪をかき上げた。名前は出さないようにしてたのに。

「別に良いじゃない誰でも」

「良くないよ！神崎君っていう子だね。報告は受けてるけど問題ある子だそうじゃないか」

「報告って校長からでしょ！あのコーチョーがなにを見抜いてるっていうのよ！今回もバカな判決言い渡しやがって…」

「玲華！言葉づかいに気をつけなさい！とにかくパパは反対だから

ね」

お父様は激昂していた。普段穏和で甘い父だけに、久しぶりにみた怒りで、ちよつとたじろぐ。

「あら？いいじゃないの。ママも見てみたいわその子」

突然ソプラノの高い声が響き渡った。

お母様が愛猫のシルバー（^{メス}、アメリカンショートヘア）を胸に抱いてリビングに現れたのだ。いつもなら、面倒くさい展開になりそうだと敬遠するところだが、今日は違った。思わぬ味方が現れた、というところだ。

「ママ！玲華が危険な子と付き合っても良いというのかい？」

「玲華ちゃんはそのなおバカじゃないわ。ママは玲華ちゃんの選んだ人が見たいの」

この母親もあたしに甘い。しかも自分も良家出身のせいかどこか暢気^{のんき}でマイペースだった。この母親と情けない父親のもとで、しっかりしなきゃ！って物心ついた頃には思っていたのよね。

……ってゆーか、まだ友達としか言っていないんだけど。早とちりはお母様の特技だったりする。

「ママ！神崎君というのは一般家庭の子だよ。パーティなんてマナーも知らないよ」

慌てながら言ったお父様の言葉に、あたしとお母様がピクリと反応した。

「信じらんない！お父様は家で判断するようなオトコだったのね！」

「パパ！ひどいわっ！お義父様の事業を継がないで学校やりたいていう夢を語ったときは尊敬したのに！もうあの頃の気持ちとは変わってしまったんだわ」

「これじゃあ校長と変わんないじゃない！さいてー」

「玲華ちゃん！ママが許すわ。連れてきなさい神崎くん。吉野^{よしの}さんの見立てで立派な紳士にしてあげます」

「わあーい！ママ大好き！」

あたしたちの怒涛のごとく浴びせた責め言葉を、口を挟む暇なく

お父様は聞いていた。目が点になって、徐々に青い顔になっていく。ちなみに吉野さんとはお母様専属のスタイリストだ。こういうパティなどのときに駆り出されている。そしてあたしは普段お父様、お母様と呼んでいるのだが、おねだりするときだけパパとママになる。どうでもいいけど。

お母様と勝手に完結して二人でリビングを出ていくと、とうとうお父様は声を張り上げた。

「誤解だよ！パパは玲華のことを心配しただけなんだああああ！」
お父様の悲痛の叫びはあたしたちの心には届かず、葛城さんの慰める声を最後に耳にした。

* * *

それからお母様と吉野さんと打ち合わせして、夜は更けていった。自室にひとりになり、あたしはパソコンを開ける。寝る前にはいつもネットサーフィンなどをして楽しんでた。

でも今日は目的がある。あたしは昼間もらった名刺を取り出した。ある情報は久保田探偵の住所と電話番号とメールアドレス。

でもあたしの欲しい情報はこんなじゃない。久保田探偵の情報ではなく、彼が持っている情報だ。

（ホントは気がすすまないんだけど…）

* * *

球技大会三日目は円滑に終わっていった。

結果は：三年二組のクラスが優勝した。一年生全体では一番を取れたものの総合では三位。

「現実はこのまんよなー」

三年二組には文武両道の生徒会長がいる。表彰台の上にはその生徒会長が理事長、つまりお父様からトロフィーを受け取っていた。

「まあまあ、充分凄いや三位でも」

あたしの隣で朗らかに萩原くんが笑った。あーちくしょう。悔や
んでるあたしがバカみたいじゃなか。

「冷蔵庫……」

「え？なに？」

「なんでもないわよう」

まあいいわ。あたしは気持ちを切り替えることにした。綾小路の
クラスには勝てたし。

（いまは明日のことだけ考えよう）

悠汰のメールアドレスはひょんなところから手に入れることが出
来た。というか、久保田探偵の情報を盗んだのだけど。さすがに探
偵のデータは鉄壁で、本来欲しかった情報^{もの}は手に入らなかった。探
偵が怯えているもの。

（だけど……あれは……）

最優秀選手

「玲華さま。MVPに選ばれましたよ！」

あたしの思考をぶち壊すようなテンションの高さで、萩原くんが
あたしの腕を振って揺らした。

ん？って周りに視界を広げると、確かにあたしの周りにいたクラ
スメートも、はしゃいで拍手を送っていてくれたりしている。

まったく放送を聞いてなかったあたしは、つかの間呆然としてい
た。MVPが男子と女子、1人ずつ選ばれるのは知ってたけど、ふ
いをつかれたわ。

すぐに姿勢をただしてケンカしたままのお父様の前に行く。

「おめでとう玲華」

「ありがとうございます」

一応口ではお礼を言いながら目ではお父様に釘を刺していた。
（んな笑顔には騙されないわよ）

すぐに壇上から下りたから、お父様の顔は確認してないけど、多
分青ざめてんだろっとな、って思った。

壇上を下りるとき、綾小路が手を振ってるのが見えた。口元がお

めでとುತ್ತて言ってる。あたしは人前だというのに、ついため息をついた。

* * *

悠汰にメールしてみたけど、返信が返ってこない。筆不精なのか読んでないのかわからない。いや、メール不精か…。

お父様は最後まで反対していた。あたしとお母様がタッグを組んで勝てるはずなのに…。

「着きましたよ玲華さま」

運転手の眞鍋^{まなべ}さんとあたしは悠汰の家に来ていた。

眞鍋さんが先に降りてドアを開けてくれる。眞鍋さんは同じ職業ということもあってか、梶さんと仲が良かった。だけど決してあたしたちには悲しみを見せない。できた人だと思うけど、なんか寂しい。

「ありがとう。眞鍋さん」

きつと立場をわきまえて自由な行動が出来ないんだ。だからあたしが変わりに動くから。あたしは改めて決意を固めた。

（この事件はこのままにしておかない）

悠汰の家のチャイムを鳴らす。なぜか心が早鐘のように鳴った。そんなに会わなかったわけではないのに、すぐドキドキする。

「どちら様ですか？」

対応してくれた声は女性のもので無機質に聞こえた。

長年の勘が告げる。この相手には猫を被った方が良いと。

「わたくし悠汰さまのクラスメートで西龍院玲華と申します。悠汰さまいらっしゃいますか？」

その勘を頭で考えるよりはやく、あたしの口は動いていた。

「悠汰さんは誰ともお会いしません」

しかし問答無用というように、相手はガチャンとインターホンの通話を切った。

（なるー、やるじゃないの）

あたしだって負けてられない。構わず再度インターホンを押す。するとしばらく経って玄関が開いた。凄く嫌そうな顔をした四十代くらいのふくよかなエプロンをした女性が出てきた。

（この人、母親じゃないわね。お手伝いさんってどこか）

瞬時に品定めを終わらせて、あたしは閉められる前にその女性に詰め寄った。

「どうしても悠汰さまにお会いしてお話したいことがあるのですが」「言付けなら私が承ります。学校のことですか？」

なかなか引かない女性の態度に少し怪訝に思う。これでは最近までの浅霧家と同じじゃないの。

「直接お会いしてお話したいのです。とても大事なお話ですので」「悠汰さんは謹慎中です。誰とも会わせるなど、主人に言われてますので」

この言葉でやはりお手伝いさんだと確信した。そしてかなり忠実に家の主の言い付けを守るようだ。西龍院家の葛城さんだって眞鍋さんだってそれは変わらないけど、明らかになにかが違った。こんなに心を閉ざしてない。

「悠汰さまはいらっしゃいますのね。でしたら少しだけで構いません……どうかお願いいたしますわ」

「私はただの家政婦ですので、いくらクラスメートさんとはいえ、この家に他人様を上げるわけにはいかないんです」

「わたくし悠汰さまとお会いできればそれで良いのです」

いい加減苛々してきた。こんなこと繰り返し言うだけならロボットだって今時できるわよ。なにがなんでも会ってやる、と意気込んだときに、女性の後ろに現れた人物を見つけた。

「あ、悠汰さま」

やった！って思ったのと同時にあたしは目を睜^{みは}った。確かに現れたのは悠汰だったのだけど……。

（ダレ？これ……ホントに悠汰？）

彼の顔は生氣と呼ばれるものがすべて剥がれ落ちたみたいだった。無精髭が伸びてて、やつれている感が際立っている。憔悴してるってこういう顔を言うんだって初めて実感した。

君が思うより悠汰の心の闇は深い…。

今ごろになって、探偵の言葉が浮かぶ。

「悠汰さんは謹慎中ですよ」

怒りが混ざった声で女性が間に入ってきた。

その声にはつとなる。

そしてあたしはなんでか泣きそうになりながら、それを耐えて言っただ。なんとかしなくちゃ、という気持ちが增える。是が非でもあたしがなんとかしたい。

「わたくし謹慎の邪魔はいたしません。でしたらわたくし悠汰さまのお部屋でお話しますわ」

悠汰だつて一応、家の主の一員なんだから悠汰が了承すれば良いのよ。

そう思つてわざと悠汰に向かつて言う。

「構いませんわよね？悠汰さま」

かなりびつくりして固まっていたかと思うと、悠汰はその顔の状態のまま……頷いた。あたしはすっごい長い、ほっとした息を吐いてしまった。

あたしが気を抜いたところで、変わりに女性が慌てていた。

「いけません悠汰さん。奥様の言い付けが」

「俺には…外出禁止としか言われてないから……」

ここへきて初めて悠汰の声を聞いた。今にも消え入りそうな弱い声。

（なにがあつたの？）

悠汰から目を離せないでいると、その顔が女性からこちらに向いた。悠汰と目が合う。

ドキリだかギクリだか分からないけど、鼓動が鳴る。

あたしは自分がいま、どういう気持ちになっているのか、初めて

わからなくなった。

第三章・・・ 2

俺の部屋に玲華がいる。

それはとても不思議な感覚だった。閉ざされた空間に一輪の花。例えるならばそんなところか。

「ふーん。意外とキレイ好きなのね」

俺の部屋をしげしげ眺めて玲華が言う。

「咲田さんが：さっきの家政婦が掃除してる。俺じゃない」

俺には自由に模様替えする権限すらない。玲華はまた、ふーんと言った。

何しに来たのか全然分からない。無様な顔を見て笑いにきたのか、とぼんやり思った。思っ、違うと否定した。

そういうことを思うタイプじゃないのに：、やっぱり俺はどこかおかしい。しかも思考能力が低下してるみたいだ。頭がまわらない。「ちよつとちゃんと食べてんの？」

ひとしきり眺めて、終わったかと思ったらクッションの近くに座って俺を見上げた。そこで自分がまだ突っ立ったままだったことに気づく。俺はベッドに腰をおろした。そのまま寝転びたくなるのを必死に耐える。

「あんまり：食欲がないんだ：」

食欲がないのも事実だったけど、動くのが億劫だということも大きな要因だった。一階に降りたくない。とはいえここも居心地は良くないけど。

玲華は何も言わず、クッションを膝の上に抱えたままじっと俺の顔を見ていた。

なんか気まずくて俺から口を開く。

「そう言えば、球技大会ってどうなった？」

「あーダメダメ。やっぱり三年には敵わないわ。ってゆーか生徒会長の一入勝ちよ。実技でも頭脳面でもね」

話が続いてほっとしている自分に気づいた。早く、帰ってほしい。いや、行かないで……独りにしないでくれ……。複雑な感情が俺のなかを渦巻く。

「残念だったな、冷蔵庫」

「まあね。でも別の方法考えるからいいわ」

玲華は意外なほどあっさりしている。

「もっと……落ち込むのかと思ってた」

「どうして？」

何気なく言った言葉だったのに、玲華は真っ直ぐな目で俺を見つめた。意外な対応に変な汗をかく。

「燃えてただろ。最初から」

「……バカねえ」

「……」

彼女は馬鹿にするでもなく、ちよつと笑ってそう言ったから、まったく真意が分からない。

バカなのは否定できないし。とくにいまは。

「……そう言えば久保田探偵に会ったわよ。学校に来てたわ」

「……」

その名前はいまの俺には複雑だった。裏切られた気持ちと、初めてからわかってたことだろう？っていう諦めが行き交う。

「なにしに？」

「あんたの話しかないでしょ、この場合。くしゃみとかしなかった？あたし、いっぱい悠汰の噂話したんだけど」

くしゃみ……。それはただの迷信ではないのか、と思う。

いつもだったら、俺のいないところでっ！って憤りを感じそうなのに、今はただくしゃみが出ていたかどうかを、真剣に思い出そうとしていた。ホントにバカだ、俺は。馬鹿になってんだ。

「俺のなに？」

訊くつもりなかったのに勝手に言葉が出るし。

「んー。あんたのこと心配してたわよ」

ちよつと迷つたように玲華が言う。言わなかった…言えなかった部分を知りたくて、ずっと玲華を見ていたら彼女は更に付け加えた。「すごく心配してた」

心配？罪悪感の間違いじゃないのか。

頭のどこか遠くでそう思った。

（あー…違う…）

アイツは俺が弱まると心配してた、いままでも。

「今日はどうしたんだよ。なんでアドレス知ってたんだ…？」

この会話を終わらせたくて話を変える。ちよつとあからさまだつたかもしれない。

「やっぱり届いてたんだ。返信くれないからどうしようかと思ったわ」

「…………見たの、さつきで」

俺はダルくて視線を落としたまま答えていた。顔が上げれない。

あまり今の顔を見られたくない。

「そう、なら仕方ないわね。それよりさっ」

勝手に話を変えて、玲華が近寄ってきたのが気配でわかった。こいつはなんでも有りだから、あまりアドレスの入手先は気にしない方がいいだろう。結局訊いても教えてくれないような気がした。iPodのときと同じように。

「今日は誘いに来たのよ。世羅ん家がパーティすんだって。浅霧家の秘密を探るには千載一遇のチャンスだと思わない？」

俺の顔を覗き込むように身を乗り出して玲華は言う。謹慎の邪魔はしない、って言わなかったか？

「……俺が行ってどうするんだよ」

「気にならない？事件のこと」

気になる、ならないの問題ではすでになくなっている。刑事との会話を咲田さんに聴かれ、それが親に伝わっているかと思うと、やる気とか決心とか、そういう上向きな気持ちは剥ぎ取られた。また余計なこととして！そんな暇あったら勉強しろ、って責められそうだ。

立ち上がりかけた脚は一度転ぶと、再び立ち上がるのに、倍の労力を要する。なるべく怒りに触れないこと。それが俺のできる精一杯の防衛。

「パーティーなんて行ったことないし、イヤだ」

「そんな堅苦しいものじゃないわ。オープンなものだし、たくさんいろんな人が来るわよ」

聞いていたらますますイヤになる。人の多いところなんて冗談じゃない。しかも今はこんな顔だ。

「ごめん、たくさんつてのは言い過ぎたわ。招待状がないとさすがに来れないし。悠汰はあたしので行けるけど」

俺の読みを察したのか玲華がフォローする。でも…そういうことじゃないんだ。

「傷が治るまで外出禁止なんだ」

「もうそんなに目立たないわ。メイクすれば隠せる」

まじまじと俺の顔を見つめてくるから、なんだか照れくさくなつて俺は顔を背けた。

「やめろよ」

「もしかして鏡みてないの？」

「とにかくイヤなんだよ」

「あんたがそんなに引きこもりタイプとは思わなかった」

「こんなとこ一秒だつていたくねえよ！」

気づいたときには必死になっていた。怒鳴るつもりなんてなかったのに。

あまりの余裕のなさに自分自身愕然となる。片手で口元を押さえた。

「元気、あんじゃない。良かった」

「悪い夢ばかり見るんだ…ここにいます」

「だったら良いじゃない。一緒に逃げよう」

上目遣いで真剣な眼差しで玲華は言った。

逃げる。

俺の頭にその言葉は特別なものとして響いた。

だけど今回はいつもと違う。前は逃げるなっって言っていたのに。

玲華も久保田も池田も、そして両親も……。

（逃げる…）

本当に逃げて良いのだろうか。頭を霞^{かす}めるのは外出禁止を言い渡したときの母親の顔。

逃げてどうにかなるのか？いや、それよりも逃^にげ^られ^るのか？今だって咲田さんはきつと見張^{みはり}ってる。

「いつから食べてないの？ごはん」

同じ調子のままで、続きみたいに玲華が訊^きいてきた。

いつから？そんなの…。

「忘れた……」

「じゃあうちで食べようよ。食べたいものないの？」

そんな俺は腹へってるような、物欲^{ぶつよく}しそうな顔をしているのだろうか。一応、頭であらゆるメニューを描^えいてみる。

「きもちわるい……」

片手で口を覆い、慌ててイメージを払拭^{はつし}する。考えただけで吐き気がした。こんなんで実物を見たら…想像するだけで恐ろしい。

しばらくそのまま治まるのを待っていると、玲華が背中をさすってきた。膝で立っている状態でかなり近い。

（なんでこんな無防備に……）

いくら昼間とはいえ、仮にも男の部屋で。軽い女なのか？それとも同情？あまりに俺が情けないから。

「やめろって！なんで俺に構^{かま}うんだよ」

俺は玲華の手を弾いた。

「事件のことがあるんなら無駄なんだよ。俺は犯人の顔を見てないし相手も俺のことは見てない！だからもう放^{はな}つとけよ！」

少し怒鳴^{どなり}っただけなのに、すべての体力を使^{つか}ったみたいに肩で息をするくらい疲れた。

同情で優しくされるのは真^まっ平^{へい}だ。久保田みたいにあとから裏切

られたような気持ちにさせられるんなら、なおさらごめんだ。

だけど玲華はベッドの上に片膝を置いて、ふわりと包み込むように俺の横から両腕を回してきた。

「バカね…。ホントにわからないの？」

最初からずっと変わらない口調。だけどいまは、わずかに涙声だった。

「あたしがあんに構うのって、事件の前からじゃない。なんでわざわざ放課後の教室なんか顔を出したと思うのよ。球技大会だって…。冷蔵庫なんてただのひとつの理由でしかない。悠汰が塞いでるように見えたから、スポーツでもやれば、そういうのが解放されるんじゃないかな、って、思った…。浅墓だったよね、過呼吸のこ
と知らなくて。…でも…」

微かに消えゆく言葉の続きを俺は聞いた気がした。

でも謝らない。

そう決めたから。

また、振り払おうと腕を持ち上げたのに…出来なかった。

驚きすぎて体に力がいらなかったんだ。

（まさか…ウソだろ…？）

担任の杉村に言われたからじゃないのか？同情、じゃないのか？そんなにまえから、俺のことを見ていたのか？いつから？

「事件のことはあたしが助けてほしかったの、悠汰に。でももう…」

…」

ふっと体が軽くなる。玲華の重み分が消えたんだと気づくのに、時間を要した。

「迷惑なら仕方ないわ」

なんで…。

どうしてこんなときでも玲華は笑うんだろう。確かに強いことは知っていたはずだけど…。

本当に良いのか？このままで。玲華にここまで言わせて、引き下がるのか、俺は……。

恐怖心が邪魔をして、素直に領けない。
なんの恐怖だ？

思い当たることが多すぎてわからない。

「また、立てるのか？」

また頑張れるだろうか？何度も挫けて、そろそろうんざりしているのだけど。今度こそ起き上がれるんだろうか？

俺から離れて、帰りかけていた玲華は立ち止まって振り向いた。顎を上げていつものように傲然じうぜんと笑う。

「あたりまえでしょ。生きてる限りチャンスはあるわ」

玲華が言つと、そんな気がしてくる。

「逃げれるのか？ここから」

「悠汰が望めば、初めから可能なのよ。ここには繋ぎ止める鎖はないし、牢獄のような鉄格子も、ましてや鍵さえない」

俺が望めば？

だったら決まってる。一秒だってここにいたくないんだ。

だから、俺は重い脚を無理矢理伸ばして立ち上がった。

* * *

咲田さんがやつぱり聞き耳を立てていたみたいで、俺たちが廊下にでるとそこにいた。

「いけません。私が奥様に叱られます」

いきなり現れた俺たちに、かなり慌てたふうだったけど、まず止めに入つたのはさすがだと思う。

「言わなきゃバレない」

そうだ。そもそも告げ口なんてするからいけないんだ。どうせあの人は帰ってこないんだから。

「悠汰さまをお借りしますわ。ちゃんと送り届けますから大丈夫です」

いけしゃあしゃあと、玲華はまた猫を被る。玲華だって不自然な

咲田さんの登場に気づいているだろうに。

いくら咲田さんが喚^{わめ}こうが、二人の人間を止めることはできない。「悠汰さん！お母様の言い付けを破るんですか！」

その言葉にビクリと俺の体が強張った。一瞬、迷いが頭を霞める。だけどその背中を玲華が支えてきた。優しくて力強い手だった。何も言わずに窺うように俺を見る。

そんなに心配しなくても、いまさら立ち止まらねえよ。

「やぶる。いつかは破らなければいけないと思ってたんだ。だって今やぶる」

そして足を踏み出して歩くだけで外に出れた。当たり前なことなのに、意外で不思議な感じがする。なにを躊躇っていたのかわからなくなる。

久しぶりに見た太陽が眩しくて少し目が眩んだ。

「私は言いますよ！その悠汰さんの言葉も全部！」

まだあきらめきれない咲田さんがついてくる。俺は人差し指を口元にあてて言った。

「外で騒がない方が良いんじゃない？あの人が一番嫌がることだ」

母親は世間体を何よりも気にする。咲田さんもそれを知っているから、青い顔をして口をパクパクさせた。

それを最後に俺は玲華に促されながら高級車、BMWに乗り込んだ。

「早く行つて眞鍋さん」

玲華が運転手に向かつて言う。なにをそんなに焦ってるのだろうか？俺の気が変わらないうちに…かもしれない。

虚しく見送ってるだろう咲田さんの顔は見れなかった。やっぱり凄く罪悪感が残るから。

でも意外とすんなり出れたことに内心驚く。

「出れたんだ」

つい呟いたら隣で玲華が微笑む。

「悠汰は、お母様の言葉のしがらみに囚われてたのね。そしてその

鍵を持っていたのは悠汰自身だったんだ」

「まるで詩人だな」

俺は玲華の言い方が可笑しくてちよつと笑った。

笑える、まだ。 だったらまだ、大丈夫なんだろう。

「逃げちゃいけない場面もあるけどね、逃げるべきときもあるのよ」
背もたれに全体重を預けて、両手を前に組んで伸びをしながら玲華が言う。

「うちの一族ね、お祖父様がトップなんだけど、パパ合わせて子供が三人いるの」

玲華がなんでもないようにいきなり語り出した。何が言いたいのかわからなくて、でも玲華のことだから全然無関係だとも思えなくて注意深く聞いた。

「でもお祖父様には妾とか愛人だとかたくさんいたから、その人たちを合わせると両手で足りないくらい血縁の子供がいることになるの。この先の展開読める？」

「遺産相続…争い？」

テレビドラマや漫画で得た知識からいくとそうだろう。

「そうよ。まだお祖父様は元気なのに、誰に継がせんだー？とか、遺言書いてんのかーとか、あたしが物心つくころには、もう水面下であつたわ」

なんという世界だ。

現実に本当にあるなんて。俺は絶句した。

「一応パパ長男だったんだけどね、このままいくと相続争いに巻き込まれるって思って、すべて捨てていまの学院を作ったのよ。あたしが七歳のときだったわ」

ちらりとミラー越しに眞鍋さんが玲華を見たのがわかった。この人もそのことを知っているんだろう。

「周りの人はパパのことを逃げ出したんだ、とか弱虫だとか責めたけど、あたしは知ってる。パパはあたしやママがその争いに巻き込まれないように、自ら引いたんだって」

あ、って俺はこのときやつと気づいた。玲華がなにを言いたいのか。玲華が俺を見て続けた。

「あたしはそのときのお父様、尊敬してるの。誰がなんと言おうと、あのお父様のお父様の選択は間違いじゃない」

逃げるべきときもある。

つまりそういうことなんだ。玲華は俺にそれを教えたくて、身の上を語ったんだ。

逃げてはならないときと、逃げるべきとき。まだはっきりと判断できないけど…。

きつと玲華が言うには、いま家から逃げたのは逃げるべきときなんだ。

（本当に…？）

* * *

彼女の家はお城みたい…とまではいかないが充分バカでかくて、豪邸と呼ぶのにふさわしい家だった。これで本当に財閥の恩恵を受けてないと言えるのだろうか……疑問だ。

車は立派な門をくぐると、真っ直ぐ玄関まで走り停車した。

（レベルが違う）

そこにきて初めて自分が部屋着にしている、ジャージとTシャツで来てしまったことを後悔した。

……ダルそうにしていたせいか、玲華がそのまま良いって言っただんだ。

「いらっしやい、あななが神崎くんね。玲華ちゃんから聞いてるわ、お上がりになつて」

玲華が開く前にドアが開いて、中から玲華とよく似た顔の女性が勢いよく出てきた。聞かなくてもわかる。母親だろう。

しかし品があつて、どこかほんわかした雰囲気彼女は、間違ってもオバサンとは呼んではいけない感じだ。黒いワンピースに淡い

ピンクのシヨール。薄い化粧だったけど、実年齢が読めない。

「やだお母様、見たたのね。タイミング良すぎよ」

真っ赤になつて玲華が焦っている。学校では見せない表情だ。

「いいじゃない。ママ待ちくたびれちゃった」

「んもう！節操ないんだから」

「ひどい！ママに向かつてなんてこと言うの玲華ちゃん！」

「嘘泣きしないでよ！だってホントのことじゃない」

しばらく呆然と二人のやり取りを聞いていたけど、まだ挨拶してないことに気づいて慌てて取り繕う。

「あ、はじめまして。神崎です。スミマセンこんな格好で……」

ピタリと二人の動きが止まって視線を浴びた。なんか気まずい。

「やだ、なに気にしてんの悠汰」

「お父様の話しはウソね。礼儀正しい子じゃないの」

「まあ、猫かぶってるけどねー」

「そういうことはバラすものじゃないわよ、玲華ちゃん。ほほほ、服なんて気にせずお上がりくださいな」

なんか勝手に女同士で話が盛り上がったと思ったら、玲華の母親はにつこり笑って付け足した。

「ちゃんとお洋服は用意してあるわ。どこのパーティに出ても恥ずかしい完璧な装いよ」

二人の女性に不敵に笑われて俺の背中を一筋の冷や汗が流れた。嫌な予感がする。

「玲華、確認するけど、堅苦しくないパーティーなんだよな」

「まあね、立食形式だからね。でも正装はしてもらうわよ、ふふふ。あとちょっとした社交マナーも覚えてもらうわ」

……嫌な予感が増長する。

わずかに逃げ腰になると、二人の女性にがつつり腕を組まれた。と言っても、色気などは程遠くどちらかと言えば捕獲された気分。

そしていちいち豪華すぎる部屋をいくつも案内されながら、まず

始めに連れて来られたのがダイニングだった。西洋式の細長いテーブルに、それと合ったたくさんの椅子がある。何人掛けか数えるのもアホらしい。

「やっぱりなにか口にしたら？消化に良いものがいいわね」

端の方の椅子に強制的に座らせられる。確かに、動いたせいか腹が減ってきたかもしれない。

違うな、あの部屋を出たからだ。きっとそうだ。

「まさかおまえが作るのか？」

よせばいいのに、ついそう言ってしまい玲華に思い切り睨まれた。「どういう意味よ！」

「ほほほ、玲華ちゃんなんでも出来るのに料理だけはダメなのよねえ」

「なによ。あたしは作らないだけよ！お母様だって作れないじゃない」

「心配いらないわ神崎くん。うちにはシェフがいるから。さつき頼んだからもうすぐ来るわ」

玲華の怒りをさらりと無視出来るあたりは、さすが母親と言えるのか。俺は変なところで感心した。

まー、こんだけ金持ちだったらなんの問題もないんだろうな。

「お母様はもうあっち行ってよ！吉野さんが待ってるわよ」

「あらあら、ごめんなさいママ気づかなくて。邪魔だったわね」

玲華に追い出されて、そそくさと玲華の母親は去っていった。入れ変わるように、スーツを着た別の男性が入ってくる。白髪混じりで優しそうな笑みを浮かべた六十くらいのその男性が、ダイニングのドアを閉めるや否や綺麗なお辞儀をした。

「申し訳ございません。お出迎えもせずに。ようこそおいでになさいました神崎様」

その無駄のない動きに、この人も使用人だなと気づく。

「良いのよ葛城さん。そんなにかしこまらないで。悠汰、この人執事の葛城さん」

かなりフランクに玲華が紹介する。いくらフランクでも執事という存在にはこっちがかしこまった。

「はじめまして神崎です」

葛城さんに倣^{なら}って……って言っても、いきなりそんなに身につくわけじゃないけど 俺も立ち上がってお辞儀する。

「やだ、また猫かぶって…どうしたの？熱でもあんの？」

あまりにらしくない態度だったらしく、玲華が手のひらを俺の額に置いた。

「失礼なやつ…」

俺だって時と場合をわきまえた行動くらいできる。たぶん、出来る。

「お二方は仲がよろしいようで」

葛城さんがにこやかに笑うと、玲華がパツと手を離してそのまま横に振った。

「どこがよ！全然よ！ってゆーかもしかして葛城さんお父様になにが言われてない？」

「ほう、旦那様がなんと仰るんです？」

「見張れとかそういうことよ！」

「いやはや、ご心配なさらずに、お嬢様はいつものようになさればよろしいかと…」

すごい。まったく否定せずに流してる。やはり長年培ってきた成せる技なのだろうか。

「んもう！葛城さんはお父様の相手でもしてて」

「いえ、お客様に不自由をさせてはいけませんから」

おまけに、笑顔が崩れないのにまったく引き下がらない。

さらに玲華がかぶせようとしたときに、すごくいい匂いがした。どこか食欲のそそる匂い。

「お待たせいたしました」

シェフの格好をした…っていうかシェフが俺のまへのテーブルに料理を置いた。ステンレス製のフタ付きで、フランス料理を思わせ

た。

「きたきた。座って悠汰。好き嫌いは聞かないわよ」

切り替えの早い玲華は強引に俺を椅子に引き戻した。そんなことをしなくても、いまの俺には食欲が戻っている。素直に有り難い。

フタをとってもらったらそれはスープだった。よく煮込んだ野菜たっぷりのスープ。他にもあるからね、となぜか玲華が嬉しそうに言う。

ひとりで、しかも他人の家で飲食するのはなんだか違和感がある。って気恥ずかしかったけど、俺は欲求に逆らえず、いただきますと一言断ると、卑しくもがつついた。

そのせいで途中で何度もむせたけど、そのたびに玲華がお茶をくれて、やっぱり少し申し訳なく感じた。だけど玲華は、全然気にしてないって感じで向かいに座って笑っていたから、たぶん気にしないで良いのだろう。

そういえばそろそろ昼飯時じゃないかと思う。

「みんなは食わねえの？」

半分くらい食事を終わらせてから、やっと俺は気づいて聞いた。

「もう少ししてからね。悠汰は待てないんじゃないかと思って。ってゆーかあたしが一刻も早く食べた方が良いと思ったのよ」

こんなところでも俺は心配をかけてるらしい。自分の体調管理も出来ないなんて本当に情けない。

「そんなに……よだれ垂らしてた？」

「ううん。食べてないんだろ？ うなつてのが顔見てわかった。それだけよ」

それだけ……。それが顔でバレるあたりが、問題なんだけど。

俺は複雑な気分になったけど、とりあえず食事を続けた。そしてまたドアが開いて新たな人が入ってきた。この顔は知ってる。俺がそう思っで見ていると、チロリと流し目で睨まれた。

「いやだ、お父様なにしに来たの？」

玲華がガタツと音を鳴らして椅子から立ち上がる。そう、理事長

だった。

なんか不穏な空気…というか、招かれざる客な気分になって、俺も立ち上がり今までこの人達にしたのと同じように挨拶をした。そしたらなぜか理事長は少し戸惑った顔をして、玲華には怒られた。

「挨拶なんていいのよ悠汰。いまのところお父様は、敵なんだから」「は？」

まったく意味がわからない。聞こうかどうか一瞬迷っていたら、理事長が情けない声を出した。

「玲華ー。いい加減機嫌なおしてくれよー」

「知らないっ！まだ悠汰をパーティ連れて行くの反対なんですよ！」俺はこの剣呑な雰囲気に関わっていると知って、虚をつかれた。

なんでそれでこの親子がケンカしてんだ。……いや、ケンカじゃないか、玲華の一方的な攻撃か。少なくとも今は…。

「反対なんてしてないよ。ただなぜ神崎君を連れて行くのか聞いただけじゃないか」

「もう！いいからどっか行ってよ！悠汰が気にして食べれないじゃない」

「いや…俺は…」

頼むから巻き込まないで欲しい。そう思って口を挟もうとしたけど、玲華に遮られた。

「いいの、気にしないで。お父様はね、あたしが綾小路と付き合った方がいいって言ったのよ」

「それは……」

ちよつとヤバいかもしんない。口に出さずに俺は思った。

あんなんでも玲華が好きなら問題ないが、嫌ってる相手だからな…。

「そんなこと言ってないじゃないか！わざと屈曲して考えないでくれ！」

しかし理事長は学校で見るときより威厳がなかった。今日はいつものスーツじゃなく、ポロシャツとジーンズというラフな格好だからかもしれないが。それだけじゃないような気もする…。

玲華にかかると思ふ。玲華が負ける相手っているのだから…。

「神崎君！君は玲華のことどう思っているんだい？」

考えに集中していたら、理事長の両手が俺の肩を掴んで揺らしていた。その内容にちよつと戸惑う。

「きゃー！なんてこと言うのよ！お父様じゃなかったら殴ってるわ！」

「玲華！言葉使いを直しなさいと何度も…」

「TPOわきまえてるから良いでしょ！話し逸らさないでよ！ってゆーか出てって！」

すごい剣幕で玲華が理事長を俺から引き離れた。

だんだん話の内容がつかめてきた。つまり以前綾小路がした誤解と同じものか。相手が彼女の父親なら適当にはあしらえないな、と思つてしまった。

（どう思つてる、か……）

ちやんと考えたこと、ない気がする。なんとなく彼女が好意を寄せてくれているのは、さつきわかった…けど。

それも確認してないから、多分だけど。

恐ろしく淡い期待だ。

（期待？）

自分の何気ない考えに愕然とした。期待しているのか、俺は。

「ほら、何も言わない。そういうことだよ玲華」

ニマツと笑つて理事長が言う。あ、それはマズいんじゃないかな？

「もー！お父様のバカ！だいつきらい！！」

とうとう玲華がとどめを刺す。

あー、やっぱり…。

理事長はひきつった顔のまま固まっていた。はあ…。

* * *

玲華が理事長を追い出して、俺が食事を終わらせると次にリビングに通された。そしたら、これまたでかい濃いグレーのソファがＬ字型に置いてあって、そこにはすでに先客がいた。銀褐色の地肌に黒の縞の猫。

「シルちよつとどいてね」

さつと猫を抱いて長いソファから二人用のところにおろした。迷惑そうに猫がニャーと鳴く。

「しる？汁？」

「シルバーよ。あたしたちもさつさとご飯食べちゃうから、ここにくつろいでてくれる？」

そう言い残して去っていく。

……くつろげと言われても。しつこいようだけど、ここは初めてきた他人の家だし。

だけどそのソファは学校の部室にあるソファに、負けず劣らず座り心地がよかった。

「悪いな、場所とつちまって」

誰もいなくなったので、一応シルバーに声をかけてみる。シルバ―はチラリとこちらを一瞥し、そして大きなあくびをすると昼寝の続きをした。ちよつとソファの色と同化してる。

確かにここは陽の光がブラインドで薄く射していたから、寝心地が良さそうだった。俺も横になった。今は消えているがきらびやかなシャンデリアが目に入る。

育ってきた環境があまりにも違う。

それは一人一人違って当たり前なのだけれど。

両親だけでなく、使用人含めて愛されている玲華。それを今日見せつけられて、いたたまれなくなった。

こんな俺がこの家に居ていいんだろうか？玲華の近くにいて、い

いんだらうか？汚してしまわないだらうか？
ぼんやりとそんなことを考えているうちに、いつの間にか睡魔に襲われた。

* * *

次に目が開いたときには、シャンデリアの前に玲華の顔があった。
「……………」

しばらくボウとした頭で時間がすぎる。

「ゆ、め？」

「夢を見てたの？」

だけどその声はしっかりと耳に滑り込んできた。遅れて現実的なものとして目の前の状況を認識した。寝転んだまま目をこする。

「俺、寝てた？」

「すごく気持ち良さそうにね」

「そっか…どれくらい？」

「一時間半かな…」

時間の感覚がおかしい。俺には、一瞬だけ落ちたぐらいの時間しか経ってないのに…かなり深い眠りだったようだ。久しぶりに熟睡したんだらう。

俺は上半身を起こした。上質の眠りだったらしく、一時間半でも頭痛も吐き気もないしかなり体が軽くなっていた。

「悪い…勝手に寝て」

「良いわよ、くつろいでって言ったのあたしだし。その代わり…」

玲華が一旦言葉を切った。眼光が鋭くなり、ふふんと笑った。

「これからはあたしの言う通りにしてもらわよ」
わかった。

目の前の女は俺をたらふく肥ふとらせて食べる気だ。そう思わせる不敵な態度だった。

第三章・・・ 3

それから午後は、まず風呂に入れさせてもらってから、スタイリストをしてるといふ吉野さんという女性を紹介された。二人の女性の使用人も加わって、メイクを少しされたり、俺の寸法を計ったりアレコレ着せ替えをさせられた。言われるままにやってたら、なんか操り人形みたいな感覚になった。

まー飯も食わせてもらったし仕方がない。だけどタキシードなんて柄じゃねえ…。出来れば着たくない。

「やっぱり白かしらねえ。清潔に見えるわ」

「グレーも大人っぽいですよ小百合様」

「そうねえ。でもデザインでいくと、こっちなんかも…」

「細身で身長あるし、何でも似合いますね」

あまり聞きたくない話題が続いていた。聞きたくないというか、どう対応していいか困るというか…。

玲華は、というと先ほどから一人どこかへ出ていき、戻ってくるころには様々な種類のドレスを何着か持ってきた。

「あああつ。玲華様、わたくしがお持ちいたしますからっ」

「いーのいーの。ねえ悠汰、コレとコレどっちがいいー？」

「俺に聞くな！」

つい怒鳴ってしまったが、わかるかそんなもん。

どうして女って、ことファッションに関してはこう優柔不断になるのだろう。俺からしてみれば、露出狂扱いされず、それなりにダサくなく、その場で浮かなければそれで良いと思う。

とにかく早く終わってくれ、と内心願っていた。

「もーつままないわね。でも悠汰の服が決まってからでいいか…合わないやだしなあ」

「あらー玲華ちゃんはどう着たいの？それから悠汰くんのを合わせると手もあるわよ」

玲華の母親（小百合さん）が指を口元に当てて迷いながら言う。
なんで俺と玲華の服を合わせる必要があるのか、まったくわからない。俺は招待状を持った玲華の同伴者というカテゴリーになるからだ、と先ほど説明されたが、やっぱりわからない…。

「えー。じゃあ悠汰、色は？何色が好き？」

「……………」
いろ…。」

色に好きも嫌いもない。昔から必要なものは服から文房具まで、すべて買い与えられていたから、自分で選ぶことがなかったのだ。そんな概念、持ち合わせてなかった。

俺は困ってしまったて、とりあえず目についたロングドレスの色を口にした。

「じゃあそれ、その黄色とか？」

「やだあライムグリーンってゆってよ！ってゆーか趣味ワルーい」

「だから俺に聞くんじゃないやねえよ！最初っから！」

言うんじゃないかった。肩からガツクリと力が抜けるのを俺は感じた。

そのあと女性陣が色のことで盛り上がってしまったので、俺はこっそりその部屋から脱け出した。付き合ってもらえない。

そしたらこちらを窺っていたと思われる理事長に廊下で会った。壁越しに。

「なにしてるんすか？」

半ば呆れながら俺は訊く。おそらく中に入れて貰えないのが寂しいのだろう。

「いや…べつに…」

コホンと咳払いして理事長が姿勢をただした。
理事長は、多分俺の父親と同世代というのに、その中身はまるで違う。当たり前、と言われればそれまでだけど。

（こんなお父さんもいるんだ）

理事長からは、いまは娘に対する心配しか伝わってこない。こん

な出来損ないの、不完全な俺の存在を気にするほど。

（だから心配なのか…）

学校で問題児というレッテルを貼られた男が娘に近づいたら、どんな親でも心配するのだろう。でもうちには娘がいないから、父親がそれに該当するかわからない。姉か妹がいたら、少しはうちの家族も違っていたらどうか？想像もつかない。

「疲れただろう？ちょっと休憩しようか」

悶々と考えていると、なんと理事長からお誘いが掛かった。

「いや、でも服が、まだ着たままだし…」

自分から逃げ出したくせに、いまさら言い訳をしてしまう。確かに白いタキシードを上下きっちり着たままだった。汚したら大変だ。「君の寸法は測り終わったのだろう？なら大丈夫だよ。あとは彼女たちが選ぶさ。服のことも気にする必要はない」

俺のことを良く思っていないはずなのに、理事長は紳士だった。

さすがだ。同じお金持ちでも綾小路とはえらい違いだ。

（いや…こんな考えこそが失礼だな…）

俺は思い直して頷いた。

理事長は葛城さんに紅茶を持って来るように頼むと、俺を連れて一階に降りた。外に続くドアを開くとそこはガーデンだった。立派な庭に、白いテーブルと椅子が日陰になるように設置されてある。

真正面になるのはなんとなく気まずかったから、俺はちよつと斜め横向きに座った。向かいでは、理事長は悠然と背もたれに寄りかかっている。

「いやー悪いね、暑いところで。ここなら女性陣の邪魔が入らないから」

「いえ、大丈夫です」

なんの話をするつもりだろうか？やはり玲華のことか？なんて考えていると、だんだん恐縮してしまう。

「今回の件は災難だったね」

「え？」

「謹慎処分の件だよ」

あの日のことは、なんだかもう遠い昔のことのような気がしていた。けどまだ一週間経ってなかったんだ、と今さら気づいた。

「あ、やばい。俺、それ破ってますね」

よく考えると謹慎処分を無視して学園のトップに会っている今の状態は、かなりマズいんじゃないだろうか。

「構わないさ。玲華が言うには妥当性のない処分だったのだろう？」

「信じてるんですか？」

校長には何を言っても聞く耳をもってもらえなかったのに。

「親バカだと言われるだろうが、玲華のことはね。彼女はそういう……鼻屑目で物事を見て嘘を言う子じゃないから」

得意気に理事長が笑って胸を張る。

いいな……そういうの……。親に信用されるって、こういう気分になるんだろう？

「俺もそう思います」

気づいたらすんなり言葉が出ていた。

そのとき葛城さんがアイステイを二つと、ミルクと砂糖をトレイに置いて持ってきた。それらをテーブルに置くと、今回はすぐこの場を離れて家の中に戻る。

理事長に手振りで勧められて、いただきますと言ってから、ストレートの状態で一口飲んだ。ストローから冷たい液体が喉を通る。

「処分のことは、確かに最初は憤りを感じました。暴力奮ったのは確かだし、処分は仕方ないと思うけど、他の連中と比べてしまつて

……」

ただ黙って静かに理事長は話を聞いていた。

「比べるからこそ納得がいかないんだって今なら思えるけど……、あのときは余裕がなかった」

謹慎ということは、一日中家にいなければならぬ。すごく不安だった。だからなんで俺ばかりが、という気持ちにも陥ったんだろう。

その他のことなら耐えられる。耐えれたと思うんだ。いろんな意味で走っている途中だったのだから。せつかく前に進んでいるのに、これで転がり落ちるんだって自覚した。

「だからもういい。今ならもう終わったことだって思えます」

また俺は立ち上がったから。玲華のおかげで。

だけど理事長は厳しい表情をしていた。

「随分諦めが早いんだね」

「……………」

「そして君は自分の事ばかりだ。なんでそんなこと言われるのか分からないって顔だね。では今回の件、暴力を回避する術はなかっただろうか？そう考えはしなかったかい？」

「そんなのムリだ。最初からアイツらは暴力で俺を黙らせようとしていたし、俺も綾小路はム力ついていたから……」

「むかついたのなら暴力を奮つても構わないと？やられたらやり返せ、という精神は感心しないな」

「だったらどうすれば良かったんだ！ただやられてれば良かったのかよ！俺だって誰が好きでっ」

気づくと敬語なんか使っている余裕がなくなっていた。

確かに俺はキレてばかりだ。とくに大人に、こんなふう^さに諭されるときには。だけど納得がいかないんだ。仕方ないだろ！

「誰が好きでケンカなんかするかよ。そんな回避の仕方なんか誰も教えてくれないじゃないか！玲華だって遠慮して逆らわないのは許さないって……」

はっとなつて俺は途中で黙った。いまここで玲華の名前なんて出すつもりなかったのに。出すべきじゃないって知っていたのに。

これでは玲華のせいにしてるみたいじゃないか。

「どういうことだ？今回のことに玲華が関係してるのか？」

理事長の顔が険しいものになっていく。やっぱり知らなかったんだ。

あたりまえだ、一体誰が言う？

玲華は絶対言わないだろうし、綾小路だって男のプライドで言えないだろう。好きな女に近づいた男に嫉妬した腹いせだったなんて「なんでもありません。確かに俺はガキすぎると思います。もうしません」

すべての気持ちを封じて俺は頭を下げた。頼むからこれ以上突っ込まないでくれと祈りながら。

ガキすぎる、これは心の底から思うんだ。

もうしないっていうのはどうだろう？できるんだろうか？たとえば同じ場面になったときには？まだ解決方法が見いだせないけど。

「君は…危なっかしいね」

次にポツリと理事長が言ったのはそんな言葉だった。どういう意味なんだろう。コロコロ変わる俺の態度か、玲華のせいにしたか、ことが不明だ。

「すみません…」

深く考えないうちに謝罪が出た。なにやってんだ俺は。自己嫌悪が渦巻く。

「あー！こんなとこにいた！なにやってんのよ、二人してー」

玲華の声が気まずかった空気を打ち破った。あんまり良いタイミングとは言えないが、少しほっとした。

だけどその姿を見て度肝を抜かれる。

「玲華！ドレスはそれに決まったのかい？」

焦りながら理事長が話を振った。

そう玲華は真っ赤なロングドレスを着ていたのだ。髪も結い上げ、薄く化粧もしている。

「試着よ、ただの！それにしてもなに話してたのよ！余計なこと悠汰に吹き込んだらお父様でも殴るわよ！」

ああ、口を開かなければ可憐なのに。つい俺はそう思ってしまった。

「彼に暴力事件のことを聞いていたんだよ」

理事長は俺の内心を知ってか知らずかあつさりとバラす。

「いや、あの…俺が…」

なんとかしようと口を挟んだけど、どう言ったらいいかわからず、しどろもどろになった。

「今さらなによ！聞きたいならあたしに聞けばいいじゃない」

玲華も玲華であつさりそんなことを言う。理事長は青ざめていた。

「玲華もなにか関わっていたのかい？」

「関わったものにも、あたしにも責任あるっていう話よ。別にあたしが暴力奮ったわけじゃ……。あー…そっぴやーひっぱたいたわね、綾小路に」

いまの今まで忘れていたようで、思い出したように玲華は言った。まるでどうでも良いように。

責任があるって言った。もういいとか言いながら、やっぱりまだ玲華も責任を感じていたのだ。

「違うだろ、あれはうまく俺が立ち回れなかったから…」

「えー、やだ。んなこと思ってたの？なかなかお互い割りきれないみたいね、綾小路のせいで」

「ちよつと待った！パパにもわかるように話さない。つまり綾小路君が悪いのかい」

「だから最初からそう言ってるじゃない。もしかしてまだ校長寄りの見方してたの？」

「いつたいなにがあつたって言うんだい？パパは最初から聞いたじゃないか、綾小路君をひっぱたいた理由」

「えー？もう…」

玲華が腕を組んで迷っていた。俺は親子の会話に入れず、ただ聞いているしかなかった。なにが言えるっていうんだ？

「でもアイツ、反省して謝ってきたからなー。いまあたしが告げ口するわけにはいかないんだよね」

ぶつぶつ呟いている内容にちよつと意外に思った。謝ったりしたのか、あいつ。

「えー、パパだけ知らないのはちょっと…」

「しょうがないじゃない。お父様はお父様だけど、理事長でもあるんだから」

確かに玲華は鼻屑をしない。誰に対しても平等だ。好き嫌いははつきりしてるけど。

「悠汰、もう行こ。ここ暑いでしょ」

さらりと切り上げて玲華は俺の腕を掴んだ。

「え、でも…」

あまりに切り替えが早くて俺の方が焦った。理事長と玲華を見比べる。理事長は長年の経験からか、もう玲華が絶対言わないことをわかったみたいで、諦めたような顔をしていた。だったら良いんだろうか。

「まだマナー講習があるのよ」

だけど、玲華の言葉でやっぱり行きたくない！と強く思った。

とはいえ、いまさら本気で俺が拒めるはずもなく、玲華のあとに渋々着いて行く。

腕を引っ張られたまま行き着いた先はダイニングだった。空の皿やグラスが置かれている。いつの間に用意したんだろう？

玲華はこれらを使って簡単に教えていく。片手ですべてを持つやり方から、料理の取りすぎはダメだとか、温かい料理と冷たい料理を一瞬の皿に盛らないとかまで…。

「あとはそうね…。基本的にパーティはコミュニケーションを大事にする場所だから、雰囲気壊さないようにね」

「えー」

これが一番不満に思っ、つい口に出る。なんか面倒くさい。面倒だし、苦手だ。

「えーじゃない、話しかけられて無視しないこと！もちろん口論なんてご法度よ」

腰に手を当て玲華が注意する。

「それはおまえも大変なんじゃねえ？」

「あたしは大丈夫よ。猫力ブるから」

そうだ。玲華にはこういう芸当があった。

シルバーでも連れて行こうかな、とか面白くもないことを思ってしまう。

それからダイニングを出ながら玲華が続けた。

「次はダンスね」

そのキーワードに俺はすぐには足が出ず、着いていけなかった。なに？なんつった？

ドアを押さえて彼女が振り替える。

「言わなかった？ダンスパーティーだって」

「聞いてねえよ！」

「良いからついてきて」

「絶対イヤだ！あんなもんこっばずかしくて踊れるか！」

「あんなもん？知識としては知ってるようね。大丈夫だって、ステッパ全部覚えるなんて言わないからさあ」

俺はあまりの展開に、頭がぐわんぐわんと揺れるのを感じた。

（あ、悪夢だ…）

悪夢は続いていたらしい…。

立ち尽くして動けずにいる俺に、玲華はこれ以上ない言葉を浴びせた。片目を閉じて口元には笑みが浮かぶ。

「言っとくけど、ここは逃げちゃいけない場面だからね」

ああー！こんなこと言われて誰が逃げれると言っんだ！

仕方なく大股で玲華に近づき交渉した。

「じゃあそれが終わったら、次は踊らなくていいような振る舞い方教えるよ」

「んまつ、抜け目ない」

口元を押さえて玲華が意外な顔をした。イヤでも学習するだろ、ここまできたら。

そして次に玲華が連れて行ったのは、大きな広い空間だった。ホテルにあるような大広間のさらにもっと広くなったような。

…で、奥にはグランドピアノがひとつ置いてある。これは本当に一軒家の室内か？俺は茫然とした。

「ウチでパーティをするときはここを使うのよ」

そう言っただけ玲華が楽しそうにピアノの前に座る。世界の違いを、また見せつけられた感じだった。

優雅にメロディに乗せて玲華の手が動く。クラシックは詳しくないけど、俺でも知っている曲だ。

「なに？その曲」

「ショパンの幻想即興曲よ」

弾くのをやめずに彼女が答える。題名を聞いてもピンとこない。じゃあどこで聞いたんだろう？テレビかもしれない。ふーんとだけ俺は答えた。

「なにかリクエストない？」

「べつに…」

知ってる題名はいくつかあるが、別段聴きたい曲でもない。ピタリと玲華の手が止まった。

「あんたねえ、パーティではもし仮にこういう会話があったら嘘でもなにか言いなさいよ」

「んなこと言われても…」

「まーしょうがないか。そこが悠汰の良いところだもんね」

どういう意味だろう？嫌味には聞こえなかったから、そのままの意味なんだろうけど。

ソコってどこ？

疑問に思っているとまた玲華の手が動いた。新しい全然違う曲。

あ。知ってる。クラシックでもなく、身近に聴いていた曲。

（題名：なんだった？確か確認したはず…）

俺のiPodにあった歌だ。女性ボーカルの…玲華が一番初めにプレイリストに上げたやつだ。

「これ、come with tomorrowよ」

滑らかな発音で玲華は言った。そうだ。そうだった。

サビに入るところで玲華が歌詞を乗せた。

苦しくても明日はくるから

大丈夫だから 悲しまないで

顔をあげて 一緒にいこう

Will you go together in tomorrow?

永久とわに 隣りで笑うから

玲華が歌うと全然違う歌に聞こえる。あの歌手はハスキーだったけれど、玲華の声は艶やかで透き通っていた。

「これね、あたしが大好きな曲なの。悠汰のiPodにあって興奮してセツトしちゃった」

演奏が終わって玲華は悪戯っぽく笑う。俺はちよつと戸惑いながら言葉を選んだ。

「ここでいつって訊いたら、またしつこいって言う？」

「んー、もういつか。別に隠すつもりもなかったんだけど、ようは寝込みを襲ったのよ教室で。それでも身に覚えがないくらいしょっちゅう寝てたんなら諦めなさい」

寝込み……。

そう言われて考えてみても、確かにコレという日が出てこない。

諦めるしかないようだ。どこにでもすぐ寝る自分が悪い。

「しっかし、おまえなんでも出来るんだな」

「そんなことないわよ」

「謙遜はときに嫌味に聞こえる……」

「いやー、ホントにさ。あたし全部が中途半端なの。ピアノだって小さい頃から習ってるけど挫折しちゃったし」

「挫折っ！」

似合わない人から似合わない言葉を聞いて、俺は愕然とした。そういう経験もあるんだ。

「なによ、その反応。言つとくけど一応英才教育は受けてんのよ。もしその中で何かひとつでも突飛な才能があれば、今ごろあの学園にはいないわ」

確かにそうかもしれない。あの学園は運動に力を入れている

俺は最近知ったけど　ようだが、その他はちよつと他校より学費がかかる程度だ。勉強も俺が入れたほどだから、兄貴がいるようなハイレベルな進学校には劣る。威張れないけど。

「じゃあとりあえずダンスしましょっか」

切り替えの早い玲華は立ち上がって片腕を差し出してきた。手首を下に曲げている。

いきなりそんなことを言われても困る。また俺は動けずにいた。

「ちよつとーダルいんだけど」

玲華に睨まれても動けない。慣れてないことをするのは大変な勇気がある。というかこういう状態は…

（やべえ、照れる）

「やっぱり俺にはムリだ」

「いいからほら」

グイツと強引に玲華から手を取ってきた。いつもより露出の多いドレスという格好だから、なおさら困る。彼女のどこを支えて…というか触れていいかわからず、左手が行き場を失った。

ヤバイ。変な汗をかく。

「いい？まず左足からだからね。とりあえずあたしについてきて」

「ちよ…待て…」

「はい！いつち、にい…違うわ！どこ踏んでんのよ」

「んなこと言われてもなあ！」

「ほら左足前に出して、こう、こうよ」

やっぱり玲華はスパルタだった。いきなり実践するか？普通まず説明あるだろ。

そう言おうとしたら扉があいて続々と人が入ってきた。

「だめよ玲華ちゃん。そんな教え方じゃあ、彼が困ってるじゃない」

「君たち近づきすぎじゃないのかい？」

「やだパパ。野暮^{やぼ}なこと言っちゃダメよ」

「でもママ……」

なんかあつちでも揉めている。

そして玲華の両親だけでなく葛城さんも後ろに控えていた。

「音楽をご用意いたしましたでしょうか？」

「ちよつと勝手に話を進めないで。そりゃあたしだって時間あればイチから教えるけどさー、今夜なのよ本番は。ちんたらやってる暇ないのよ。とりあえず葛城さん、音楽はまだいいわ。まだムリだから。それからお父様はウルサイ」

容赦の欠片もなく玲華が言い捨てた。まあ、と小百合さんが言い、かしこまりましたと葛城さんが頷き、それから理事長はガンッとシヨックを受けていた。

なんだか頭が痛くなってきた。こんなことをしてまで行かなければいけないのだろうか？

「ほらーみんながミズさすから悠汰が疑問持ちはじめたじゃない」

ちらりと俺の様子を見て玲華が言った言葉に、俺はまたつい怒鳴ってしまった。

「俺の心を読むな！」

第三章・・・4

それから数時間みっちり指導を受けて、改めて俺たちは着替えをすませて西龍院家を出た。

玲華は悩みに悩んだあげく真っ白いドレスに決めていた。俺は黒いタキシード。男性は黒か紺と決まっていたらしい…。なんであんなにイロイロ着せたんだろう。

（首：苦しい）

着慣れない服はいつもの制服のネクタイより締め付けられる感じがした。

会場は世羅の家の本邸ではなく、同じ敷地内にある別館だった。パーティ専用建てられたものだと言った玲華に聞いた。

広間は二階にあつて、一階にはサロンとか気分がすぐれない人用の個室まであるのだそう。ここまでくると感動を通り越して呆れてくる。不景気はどこへ行った？

そして広間に集まった紳士淑女も、同類の世界のきらびやかなオーラをまとっている。なんと…というかやっぱりというか、綾小路も来ていた。他にも見た顔が数人いる。学校のやつらだ。

（俺浮いてる…）

居心地が悪い。いま玲華は会う人会う人挨拶とか軽い会話をしてる。

来て早々に、どうしても玲華に言われたので、主催者には挨拶に付き添ったが俺はすぐに邪魔にならないように隅に引込んだ。

主催者とはもちろん世羅の両親だ。母親はパーティ好きと言われていたが、それがにじみ出っていて、メイクもドレスも派手だった。そして父親は薄くなった頭髪に、でっぷりと脂肪の乗った肉体。先入観があるのせいかもしれない。なぜこの女性はこの男を選んだのだろっ、と考えてしまった。顔に出ていたらしく、そのとき玲華に肘で小突かれた。

そしてまだ世羅はちよつと遅れているとのことだった。

並んでいなくてもわかる。父親は血が繋がってないからもちろんだが、母親にも世羅は似ていない。おそらく彼女は実の父親似なんだろう。

そして隠れるように小学高学年くらいの男の子が母親の後ろにいた。可愛らしくも一丁前にタキシード姿だ。この子はこの二人の子供だとわかる。よく似ていた。

テーブルにはたくさんのご馳走があるけれど、居づらくてほとんど食べる気がしない。

綾小路は一度玲華に声を掛けていたが、それだけだった。玲華の拒絶が効いているのか、反省したのか俺には分からなかったけど、もう危うい目をしてないからアホな真似はしないだろう。

（はぁ…帰りたい…）

何度も思ったことだけれど、またついそう思ってしまう。だけどその都度、すぐに思い直すんだ。

どこに？

「どうしたの？また暗くなってるわよ」

いつの間に挨拶を終わらせたのか、玲華が近くにいた。

「いや、なんか俺浮いてない？」

「そんなことないわよ、この中で一番格好良いわ」

「社交辞令は腹イッパイ」

俺は玲華に片手を上げてウンザリ感をアピールした。ほとんどの人が一癖も二癖もありそうで、本音を別のところに持ちつつ誉め合っているのだ。話す会話といえば、ほぼ女性はドレスや装飾品で、男性は事業や趣味の自慢話。

「何が楽しいかわかんねえ…」

「まあまあ、みんなそれでストレス発散してんのよ。お互いわかって会話してんだからそれで良いの」

俺の言わんとしていることがわかったらしく、玲華がそう解説してくれた。うげっ、ますますわかんねえ。

「それよりほら、あの人。あそこで一際オーラを放ってる人いるでしょ。あの人が世羅のお母様のお父様。浅霧家の当主で浅霧功男様いさおよ」

玲華の指差す方を見ると、一人タキシードではなく和服を身にまとったご老体が、そこにいた。額にシワが濃く刻まれている。確かに威厳がありそうだ。ニコリともせず、厳しい顔のまま二人の男性と会話している。

「ちよつと顔を出しに來ただけみたい。さっき挨拶したらすぐ帰るって仰ってたわ。頑固な人でね、こういうパーティ嫌いな。西洋カブレだと批判なさってるのよ。でも娘、世羅のお母様には甘くて何も言わないの」

なるほどそれで和服か。

しかしあんな怖そうな人と対等に挨拶とかする玲華はやっぱり凄い。

「で、一緒にいる人がお母様のお兄様たち。世羅にとっては叔父ね。手前にいる頭が薄い方が長男の雅男様まひる。今では功男様の事業をほとんど受け継いでるわ。奥にいる太めな方が次男で功二様こうじ。一応ひとつ会社を分け与えてもらってるけど、あまり手腕はないわね」

様とか呼びつつ、玲華の紹介の内容が雑になってきたのに気づいた。あまり尊敬してないのだろうか。

「で、近くのテーブルにいるスラッとした青いドレスの方が雅男様の奥様で礼子様れいこ。とっても厳しくて怖い人よ。で、あっち、あそこにいる紅いドレスのふくよかな方が功二様の奥様で朋美様ともみ。スッゴいお金使いが荒いの」

わざわざ一言ずつ特徴を含んで紹介することで思い出した。俺がここにいる理由。

世羅の家の誰かが犯人かもしれない。この中の誰かが……。そう考えると見方が変わる。いけないことだと分かっているのに、あの日の犯人とダブらせて一人一人を当てはめてしまう。そんなことをしても判るわかはずなのに。

「あと、あそこの奥の扉の前でこっそり控えてる人いるでしょう？
あの人が執事の柳田さんやなぎたね。あまり梶さんと接してるところは見て
ないわ。それからメイドが…」
「もういい」

俺はまだまだ続きそうな紹介に低く唸って止めた。全員疑えとい
うのか？気分が悪くなる。

「まだ世羅の従兄弟とかーそれぞれの秘書とかもいるんだけどおー」
恐ろしいことを冷ややかな眼で玲華は言っし…。

「闇雲に言われてもわかるかつ。第一、覚えられねえ…」

「だめねえ。まあ全員いるわけじゃないから…あつ」

喋っている途中で玲華が手を口元に当てて、凄く驚いた顔をした。
なんだろう、と思って振り向いたら、真正面の出入口付近に世羅
が来ていた。

世羅はこんなときでも真っ黒いドレスを着ていた。黒がよく似合
うとはいえ、ドレスまで漆黒とは。でも髪をまとめていて、やつぱ
り学校とは雰囲気が違う。

「世羅が男性とパーティに出席するなんて…」

玲華のこぼれるような言葉に、ようやく俺は世羅の隣にいる人に
目を向けた。背中しか見えないが確かに男だ。しかもオジサンじゃ
ない、若い男。

なんとなく見ていたら、世羅が男に何かを話しかけ、それに答え
るように男が頭を動かした。顔がこちら側に向く。

「え？」

今度は俺が驚く番だった。驚くっていうより固まった。目の前の
状況を理解できない。

「なんで…」

「悠汰？」

その男を凝視する。

見間違いなんかじゃない。見間違えるはずがない。長年ずっと見
ていた顔だから。

いくら見慣れないタキシード姿だからって、いくら外用の、眼鏡なしの顔だからって…。

「なんで、兄貴がここにいるんだよ…」

そう。そこにいたのは、間違いなく実兄である神崎惣一だった。

「兄い？ウソ…イケメン兄弟…」

兄貴は部屋で勉強している。俺にはそのイメージしかなかった。学校に出る時間も帰る時間も合わないから。合わないようにしてたから、俺が。

その兄貴がこんなところにいて、俺を嫌っている世羅という。

「なんで…どこで…？」

どこで知り合ったんだ？世羅と。なんでいるんだ？ここに。

俺は知らず知らずのうちに、パニックに陥っていた。

「ちよつと悠汰？」

気づいたときには、駆け出していた。兄貴の姿がだんだん近くなる。近くなつて、大きくなつて、こちらに振り向いた。

「…っんで兄貴がここにいるんだよ！」

そして怒鳴っていた。会場の雰囲気とか、人の目とか無視で。思考能力皆無で。

だから空気を読んでる余裕なんてない。兄貴は驚きもせず、なんの感情もない眼で見返してきた。

「お前こそ、なにしてる？謹慎中だろう？」

静かな声。だけど呆れ返ってるのがわかる。

「答えるよ！なんで世羅と？」

「お前に言う必要はない」

それだけ言うのと背中を向けて遠ざかっていく。世羅を見ると鼻で嗤われた。嘲笑って、兄貴のあとについて行った。二人の背中だけが残像のように見える。

冷たくあしらわれた。それがわかって追えなかった。何度もあの眼を見る勇氣はなかったんだ。

「待って世羅。あたしにも挨拶しないつもり？」

気づくと前に玲華がいた。庇われているように感じてしまう。世羅だけが立ち止まり振り向いた。

「まさか君がこの男を連れてくるとは思わなかったな」

「悪い？あたしの同伴者よ。バカにしないで」

その会話にまた驚く。いつもの仲の良さじゃない。なにより玲華が…。

（玲華が怒ってる…）

「馬鹿になんてしてないさ。今日は楽しんでいくといい」

言葉とは裏腹に世羅は馬鹿にしていた。そのせいか玲華はもう何も言わなかった。

* * *

パーティーも中盤に差し掛かり、とうとうダンスタイムになった。

絶対踊らないといけないのかと思ったが、合間に休憩を入れる人がいた。踊らなくても浮かないのは助かる。

「いつの間にケンカしてたんだよ」

玲華も踊る気がないのか、俺と一緒にあの二人を見ていた。兄貴と世羅は遠くにいて、やはり踊らずに、何もなかったように談笑してる。

「ちよつとね」

玲華の口が重い。こんなことは初めてだった。ダンスミュージックがうるさいせいかもしれないけど、曲と曲の間も沈黙してたから、もしかしたら落ち込んでいるのかもしれない。

そんな感じで数曲流れたあと、俺たちのテーブルに近づいてくる人がいた。

「こん、ばんは。あの…礼儀知らずとは思ったのですが…神崎さまと……」

淡いピンクのドレスを着ていた櫻井だった。来ていたのか。

俺とも玲華ともどちらとも取れるように話しかけたあと、もじも

じしている。玲華は彼女の言いたいことが解明できたようで、安心させるような笑顔を浮かべて頷いた。

「とんでもない。このご時世、女性からダンスを誘うってのも有りだと思っわ。ということで悠汰踊ってあげなさい」

「げえっ」

すでに踊らなくて良いと安心してた俺は、不意打ちを食らって気持ちが悪態に出た。

「げっじゃないわよ。女の子に恥をかかす気？」

「あの……一曲だけでいいので……」

そう言われてしまうと、しぶしぶ俺は櫻井に向き直った。

「言っとくけど下手だからな」

すると櫻井の顔が赤くなって、それからはにかむような笑顔を見せた。

ここまで来たら仕方がない。俺は腹を決めて櫻井の手を引っ張りダンスフロアの端っこを陣取った。

生演奏で曲が流れ出す。様子を窺うように会場全体を見渡していると、下からクスクス笑う櫻井がいた。

「ワルツです」

読みを当てられて、今後は俺の顔が熱くなる。まだ曲を聞いただけでは、種類がわからない。それがバレたのだ。

ステップを頭で思い出しながら、曲に合わせてぎこちなく動いた。「もうお怪我は大丈夫ですか？」

気を遣って櫻井が声をかけてきた。だけど必死であまり深く考えられない。

「ああ……」

「良かった。心配してました」

「そう……」

「……………西龍院さまと、ご出席なんですね？」

「まあな」

「やっぱり……」

「え？」

不自然に櫻井が黙って、俺は自分より小柄な彼女を見下ろす。

櫻井は踊り慣れてるだろうに足元ばかりを見ていた。

「なんだよ。途中でやめんなよ、気になるだろ？」

怪訝に思っただけで、パツと櫻井の顔が上がった。ぎこちない表情。

「西龍院さま、素敵ですよ。わたしのような者にまで優しくして……。あの日もわたしが保健室のまえでウロウロしてたら入れてくれたんです」

「……………」

この場合のあの日は、俺がみっともなく意識を失った日だ。保健委員だからいたんだと思っただけ。

「他にもワラワラいた生徒をすべて散らしたんですよ。神崎さまが気にするだろうからって」

「なんで玲華の話なんかするんだ？そんなに気を遣わなくてもいいだろ」

「でもわたしの家はしがない一つの会社の社長で、今日も友人のツテで来てますし。財閥のお嬢様と話が出来ただけで……」

櫻井の声が徐々に小さくなる。そんなこと気にしてたのか、と思う。いや、おそらくそう思うのは彼女だけじゃないんだろう。クラスメートの心酔した目が浮かぶ。

「くだらねえな。そんなこと思われて、本人だって嬉しくないだろう」

「え？」

そのとき意識が散漫になっていて、別のペアと櫻井の背中が接触しそうになるのに気づいた。慌てて櫻井の手と背中を引き寄せる。

「あつぶね……」

いいこと？うまくすり抜けて踊るのよ。それでもしづつついたら謝るの。

玲華の教えが頭に響く。

（はいはい…）

心の中で返事をして、再び櫻井と周りを見渡した。

「あの…いまのお話…」

なぜか赤い顔に戻りながらも、櫻井は先を聞きたがった。

「ああ…だからさ、おまえはおまえで玲華は玲華ってことだよ。もう比べんな」

何回も同じステップを繰り返していたら、だんだん慣れてきた。

ホッと思を吐く。

「それと様と敬語はやめろよ。同い年だろ」

「でも」

「でもじゃねえ。ハナツから馴れ馴れしいヤツもム力つくけど、ずっと丁寧なのも変だろ。空しいだろ、そういうの」

端から馴れ馴れしいってところで、自分のことを棚にあげてるって、はなちよつと頭を霞めたけど無視することにした。

やっと櫻井に笑顔が戻る。

「やっぱり神崎さまは優しいです」

「あのな…」

聞いてたか？俺の話。

「西龍院さまが好きになるのがわかります」

「……………」

俺にはわからない。櫻井が言うその内容も、どういふつもりでそんなことを言ったのかも、わからなかった。

「空しいだけだって神崎さまがわたしに言ったとき……、神崎さまが空しくなるんだと思って……ああ、わたし失礼なことを言ったんだって思って、苦しくなっつてつい逃げたけど……。違うんですね。あのときの言葉は、お試しなんかで付き合つと、わたしが空しくなるってという意味だったんですね」

勘違いしてたんだ、って今ごろ気づく。確かに俺が言った意味は後者だ。

櫻井は俺の幻想を追ってると思っていたから、幻想が真実と違う

姿だったとき、本当の気持ちに気づいたとき、空しくなると思ったんだ。

「だからやっぱり神崎さまは優しくかった。それが再確認できただけで、わたし充分です。今日を想い出にできます。ごめんなさい困らせて。もうワガママ言いませんから」

少しだけ目に涙を溜めて、口元には笑みを浮かべて櫻井は言った。しっかりと俺の目を見て。

女ってみんなこんなに強いのだろうか。

そう思っているうちに曲が終わった。櫻井は自分から俺の手を離し、ありがとうと言ってお辞儀した。俺は元いた位置に戻るべくその場を離れた。

やっぱり残るのは罪悪感だけだ。応えられないから、なにも言えない。

（玲華がいない）

辺りを見渡しても元いた場所にいなかった。それどころか、兄貴と世羅も見えない。

（どこいった？）

焦って探して回る。嫌な想像が勝手に頭を巡る。会場内にはいないことを確認すると俺は身をひるがえした。

そのとき前に女が三人立ちはだかった。突然で一瞬固まる。

一番右にいるやつはクラスメートだ、と俺の中のデータから呼び出される。確か澄川^{すみかわ}なんとかだ。残念ながら下まで名前は出てこない。

澄川が真ん中の子を指差しながら言った。

「神崎さま。この方と踊っていただけかしら？」

真ん中の女は緊張しているのか俯いて険しい顔をしている。この状態を一気に理解できて、俺は顔をしかめた。面倒くさいことこの上ない。

「悪い。俺ちょっと…」

「櫻井さまとは踊ってらしたのに、不公平ですわよ！」

澄川が厳しく言い放ってきた。それに俺は苛立つ。

（んな暇ねえのに）

だいたい当の本人が何も言っていない。左のやつも澄川に任せているのか、ついてきてるだけだった。

「この子はね、あの澤登さまさわのぼりのご令嬢なのよ」

どの？、と突っ込みそうになつて俺はギリギリ黙った。雰囲気を大事にしると言い続けた玲華の言葉が、思い止まらせているのだ。苛々がつる。

「いや、俺はそういうのわかんないから」

「お待ちなさい。無礼は許しませんよ」

そのとき俺の中のかげ切れた。

「うるせえんだよ！ 櫻井はちゃんと自分で言ってきたんだ！ 家の話なんか関係あるか！」

ビクリつと体を強張らせて立ち尽くす澄川を無視して、そこを通り抜けた。ちよつと遅れて後ろから声が届く。

「まあ！ ヒドイ！ 澤登さま、あんな無礼な方相手にすることはないわ」

「そうですわね、サイテーですわ。ああ涙をお拭きになつて……」
すぐにフロアを出たから最後までは聞こえなかった。構つてられるか。

櫻井の勇氣には少なからず敬意を表していたんだ。そんな櫻井まで引き合いに出してきたから、許せなかった。

それより玲華だ。

気持ちを切り替える。一階の長々と続く同じような個室の扉側の廊下に出る。しかしまさか個室を開けてまわるわけにもいかなくて外から聞き耳を立てながら判断するだけで精一杯だった。

静まりかえっている部屋がほとんどだ。なかには怪しげな……というか、夜を満喫する楽しいげな男女の声が聞こえてしまつて慌てて離れる。そして一番奥の部屋からは数人の会話が聞こえてきた。

「こんなパーティを勝手に開いたかと思えば、そんなことを考えて

いたのか」

ちよつとしわがれた大人の男性の声。

「しょうがないでしょう？ 玲華ちゃんが怪しんでるのよ。何度もうちに来たわ」

こちちらは世羅の母親の声だった。玲華の名前が出て、つい俺は立ち去るタイミングを逃した。

「もう遅いんだよ。噂は水面下で広がりつつある。あの刑事達がそこそこきまわっているからな」

また、別の声が聴こえる。先ほどよりはちよつと高めの男性の声だ。おそらく浅霧家の誰か。

俺は玲華について挨拶にまわらなかったことを後悔した。

「このままじゃまずいぞ。おい、世羅はどうした？」

世羅の義父の声もした。かなり余裕のない声音だ。

「帰したわ。勝手な行動ばかりするんですもの」

「確かに、どこの馬の骨かもわからん男に唆されおって」

馬の骨：兄貴のことか。世羅の義父の台詞に、知らない間にムカムカしてきた。兄貴はそんなふうに言われなければならない人間じゃない。

「馬の骨、か。ここにもそういう出のやつがいたな」

「なんだと？ 義兄さん！ それはどういう意味ですか！？」

「やめてあなた。揉めてる場合じゃないのよ。とにかくお父様にバレル前になんとかしないと……」

バレる？ なんの話をしてるんだ？ 俺がさらに扉に耳をおしあてようとしたとき、カツカツという足音が聞こえた。

（誰かくる……）

本能で隠れないといけないと脳が命令するが、廊下には隠れられるような場所がない。焦って隣の部屋に飛び込んだ。静かな部屋だったそこは、やっぱり無人でホッと胸を撫で下ろす。

足音はこの部屋を通りすぎ、例の部屋で止まった。扉をノックする音が聞こえる。

「皆様そろそろお戻りになられた方がよろしいのではないかと」
「わかったわ柳田。そうね、主催側が揃っていないと不振に思われるわ」

誰も居なくなっただことを確認して俺も部屋を出た。

やっぱり浅霧一家はなにかを隠している…もしくはなにかを企んでいる？噂ってなんだろう？

俺にはその内容は解明できなかったが、いまの人たちがなにかに危惧していることはわかった。

それから少なくとも今の大人たちには、兄貴は招かざる客だということも。そして世羅は独断で動いている。

（あー、頭がクラクラしてきた…）

考えても解決しないから、俺はとりあえず玲華探しを再開することにした。

「うわっ！」

廊下からロビーに出る角で、突然目の前に男が現れて俺はみつともなく声を上げた。

その相手はあらかじめ俺の来ることを予想してたみたいで、出会い頭にぶつかりかけたことはまったく動じず、上着を両手で整えただけだった。けど顔には汗をダラダラかいてて、余裕がない。

「顔を貸せ…ではなく、話をさせる…でもなく……話がしたいんだが、良いかな？神、崎、君！」

がっしり俺の肩を掴み、その男、綾小路が瞳孔を開いた顔のままひきつりまくった笑みを見せた。怖すぎる…。

第三章・・・5

なんで俺はこいつ…綾小路亨とバーカウンターなんか隣同士で座ってるんだろう…。

この建物には3階にバーまで用意されていたのだ。小さいけれど完璧にバーだ。

先に来ている客が数人いる。

玲華のことは気になるが、あんな顔を向けられては断れない。それに、兄貴と世羅がいないなら大丈夫だろうと思うようになっていた。

「こんなとこ来ていいんだ？」

金持ちだろうが貧乏だろうが高校生は未成年で、法律は平等だ。

たぶん、たしか…。

「真面目なんだな」

そしたら綾小路はものすごく意外な顔をした。ほっとけ。

バーにいる制服を来た男性（たぶん浅霧家のお抱えなんだろう）も、心得ているのか何も言わずにアルコールを出してきた。

綾小路は来て早々にマティーニを注文したので、考えるのが面倒くさくて、俺も同じのを頼む。

「まさか飲んだことないとか言わないだろうな」

「べつに…」

俺だって中学時代に、純平たちと集まったとき正直アルコールを飲んだ。最初は缶ビールから飲み、苦いだけで美味くもなかったことを思い出す。…っていうか、綾小路だって充分意外じゃないか。

「あんたも意外と不良だよな」

女は押し倒すし、気に入らない相手にはボコるし。俺の真意を読み取ったらしく、隣の男はばつの悪い顔をした。

「だからここに呼んだんだ…その、やり過ぎたと思って…」

綾小路が玲華に謝ったと聞いたときには、信じられなかったが、本当だったんだと思った。

「というより、玲華が言っただ。自分より、神崎悠汰に謝れと……。だけどそれだけじゃない。僕にだけ処分が無かったのも、僕には辛かった。校長先生が間違ってるっていうのも分かっていたのに、僕にはなにも言えなかった。卑怯者だよ」

いきなり語りだした内容に少し驚く。あのとそんなふうに思っていたのか。目からウロコ。

「こんなとき玲華ならきつとはっきり言う。愛想を尽かされても仕方ないな。しかしそれでも僕は玲華が好きなんだから……。困るよ」

困ると言いながら心底嬉しそうに綾小路が笑う。そんな自分を誇らしく思っているみたいだ。コイツは心底スゴいやつだ。どこまで玲華に惚れているんだろう。

「だから君には負けない」

「なんでそこで俺が出るんだよ。俺を怨むのは筋違いって言っただけ？」

本当は言いかけて殴られたのだから、伝わってないかもしれないが。

「この期に及んで何を言う？見てればわかるよ。あんな玲華は初めて見た」

「猫被ってたから当然だろ」

「そのことじゃない。僕たちは世羅君も含め、子供の頃から親の都合で付き合いがあってよく知ってるんだ」

綾小路がどこか遠くを見ながら口にグラスをつけた。

「子供の頃は僕にもあの頃なりの地に対応していたんだよ。いつからかな、他にも同じように遊んでいた子もいたけど、大人になるにつれて距離が出来るようになった」

持っていたグラスを傾けて綾小路は俺を見た。

「世羅君とはずっと仲が良かったのに……二人は喧嘩でもしたのかい？」

先ほどの言い合いを綾小路は聞いていたんだろう。だけど俺に聞かれてもわからない。

「ちよつとね、って言ってたけど……」

「珍しいな。世羅君は玲華のことをとても大事に思っていたんだよ。男の子たちのイタズラから玲華を護る騎手^{ナイト}みたいだね。でもまあ、玲華もただ護られるようなお姫様ではなかったけどね」

当時のことを思い出しているのか、懐かしそうに笑う。

コイツならなにか知っているだろう。ふと僅かな希望がわいて俺は訊いてみた。

「浅霧さんの家っていま大変なの？」

「……………さあ、そういう話しは知らないが？」

なんだ今の間は…。

綾小路は顔色を変えたり、妙な動作はしなかったが、その間だけは気になった。

なにを躊躇った？ なにかを知ってるのか？

「噂、あるよな世羅んち」

さらに俺は突っ込んでみる。噂なんて俺も知らないが、先ほど世羅の母親たちが言っていたことを思い出して、カマをかけたのだ。

「知らないな。それより今日はこういう風のふきまわしだ？ なかなか似合っていたじゃないか、ソシアルダンス」

無理矢理、話を変えられたように感じた。綾小路はダンスの形を腕だけで作って、からかうように笑う。

「脅しにはのらねえぞ」

「なんの脅しだ？ ああ、君が恥ずかしがっているから、ばらされたくなければ言いなりになれ、とかいう類いか？」

綾小路は呆れて肩をすくめた。

「それは無理だな。この学校では珍しくない場面だ。騒ぎにすらならない」

やっぱりイヤだ、こんな世界。ぐったりと背もたれに体を預けながら、俺はため息を吐いた。確かに恥ずかしいなんて概念は、慣れ

てない、もしくはガラじゃない一部の人間しか持たないだろう。

「さて、そろそろ行くか」

綾小路が立ち上がる。いきなりの展開の早さにギョっとなった。俺の動きが鈍かったせいかな綾小路が続けて言う。

「謝りたかったのは本音だが、本当はまだ君は嫌いなんだ。あたりまえだろう？ 礼儀を知らないし、なにより恋敵なんだからな。そんな男とじっくり飲む趣味はないよ」

あまりに穏やかに嫌いと言われて、俺は対応に迷った。怒鳴られれば怒鳴り返せばいいし、殴られるなら殴り返す。しかしこれでは反論できない。

訝しく思いながらも綾小路についてバーから出た。代金は参加費に含まれてるらしい。そういえば俺の参加費も玲華んちが負担してるんだ、と今さら震えた。

バーのすぐ近くにちよつとした囲われた空間があつて、ソファでくつろげるようになっていた。

どこかの高級なホテルみたいだ。綾小路はそちらに足を伸ばした。俺は下に戻ろうと思い、じゃあなと挨拶しようとしたら左腕を掴まれた。

「なんだよ？」

批判する声も聞かずに、綾小路は強引に無言のまま俺を引き連れ、終いにはソファに座らせた。力強くて、先ほどの穏やかさがない。

暴力の続きか？と一瞬身構える。

「てめえ……」

「おまえはやっぱ馬鹿だな」

俺が叫ぶより早く、綾小路はタイをいじりながら吐息を吐いた。殴りかかるような素振りはなく、あの日にあったような身の危険も感じなかった。

なんなんだ？

不信に思っていると、内緒話をするように俺の耳元に近づき綾小

路は囁く。

「浅霧一家の噂なんて、あんなところで話すもんじゃない」

その内容に俺は眼を瞠る。

「おまえやっぱり…知って……」

「その話しはここではタブーだ。それをあんなところで。バーテンダーも、他の客だって目を光らせたのに気づかなかったのか？」

まったく気づかなかった…。それであんな妙な間が空いたのか。

「なあ、それって…」

「おまえがここにいる意味がわかったよ。まったく玲華もお姫様になりければ良いのに」

「ちよつと待てよ！勝手に話を進めんな！」

「うるさい、怒鳴るな。こういうところでは喧嘩も本来タブーだ」

冷静に綾小路が諭す。やっぱりムカついたが俺はそれに従ってトーンを落とした。

「その噂教えるよ。やっぱり事件のことなんだな？」

「ああ、玲華も知らないことだ。だけど彼女なら気づいているかもしれない」

「だからなに？」

俺の心がはやる。綾小路は少し迷ったような顔をした。それから辺りを見渡してさらに小さい声で言う。

「玲華には言わないでくれ。梶さんの件で警察が浅霧一家を疑っている。そして殺害時間にアリバイがないのが…」

一旦綾小路が言葉を切った。俺に嫌な予感が湧き上がる。なぜ、綾小路がわざわざ玲華に言うのと釘を差す必要があるのか。それを考えると、次に発せられる内容は容易に想像できた。

「この中でアリバイがないのは、世羅君だけだったんだ。警察は世羅君を犯人と絞り込んで捜査しているという噂がある」

やっぱり……。展開の悪さにイヤになる。

だけど世羅は違うだろう？あんなに、誰よりも犯人を憎んでいた。唯一無二の存在だと俺に言ったんだ。あれが彼女の真実ではないの

か？

でも噂があることは本当で、だとしたら警察が疑っているのも頷ける。もしかすると、だから池田は俺になにも教えてくれなかったんじゃないだろうか。

考え込んでいると綾小路が静かな声をだした。

「大丈夫か？」

意外な声に俺は顔を上げた。なにを想像したのか心配そうな表情。なにをって…。

わかつてる。俺の精神状態だろう。

勘違いでもなんでも、あの日の過呼吸になった姿を見て、恐れるんだ。そのことを知る人からは、よく浴びせられる視線だ。本当に見ている者まで苦しませる姿らしい。昔、小学生の頃同級生にそう言われた。

だけどそれは家族を除いて…だが。

「大丈夫だ」

いつまで…こんなことを気にしないといけないんだろう。そう思いながらも、俺は気づけば綾小路にそう答えていた。

* * *

綾小路と別れて、俺は再びフロアに戻った。

だけど玲華の姿はまだない。探せるところはすべて探した。俺を置いて帰るはずはないなんて思う。まだパーティーは続いているし。

三階に行ってるあいだにまた移動したのだろうか？そう考えて降りようか、と一瞬迷った。

（まだあそこがある…）

会場の奥にはバルコニーがあった。きらびやかなカーテンが揺らいでいるのが目に入る。

俺は人の隙間をすり抜けてバルコニーに出た。一陣の風が頬を撫でる。

少し広めのその場所に玲華が一人でいた。手すりに手を置き空を見ている。

「ここにいたのか」

余計なところをぐるぐる回ってしまった。

「どうしたんだよ？」

「ちよつとね」

先ほどと同じことを同じように言う。

なんでもない、とか言われただけマシかもしれない。そう言われたらそこで終わってしまうから。

「俺に言えないこと？」

俺も玲華の隣を確保し手すりに背中を預けた。玲華がやつとこちらを見る。

「悠汰には言えるわ。ちくしょー、やっぱそーかー。…そうなのよ。世羅が解らなくなってきたやつて…。ちよつと寂しいだけ」

なんか勝手に納得してから、本音を語る。

寂しい、か。確かにそれは感じていたけど、こう素直に言われるとどう返していいか迷う。

「この間も世羅に話してもらおうと挑発したんだ。でも結果あたしが先にキレちゃって。優しく促してもダメ挑発もダメで、今後どうしたものかと…」

玲華は迷っているようだった。世羅に本音を語ってほしいんだ。

「仲悪いの？お兄様と」

突然そこに話を振るか？って一瞬戸惑う。

本人が駄目なら周りからということだ。そしていきなり現れた兄貴はきつと何かを知っている。なにかに関係してる。

「昔は、普通だった。普通に一緒に遊んだり、おもちゃの取り合いなんかで喧嘩したり…。普通の兄弟だったよ」

他人の家と比べたわけではないが、少なくとも今みたいな距離感ではなかった。

いつからだろうか。親が介入し続け、なんとなくギクシャクして

「ずっと比べられてたんだ。兄貴とは。兄貴は優秀で、俺は…。いつのまにか会話がなくなつて、兄貴も俺のことを……」

その先は言えなかった。親同様、兄貴も俺をお荷物みたいに扱うようになつた。なんて、どうして言える。

まだ認められない何かがあるんだ。認めたくない、軽蔑されてるなんて。

まだそれで終わりにしたくないんだ。それを認めてしまえば完璧に俺はお荷物になる気がした。

「ふうん。でも悠汰は良いところ、いっぱいあるけどね」

悠汰は男だけどね、みたいに当たり前なことを言うように玲華が言った。

社交辞令はお腹いっぱいだったのに。やっぱり玲華は社交界の人間なんだ。

「あー信じてないよー。まったく誉められ慣れしてない人つてこれだから……。素直に受け止めなさいよ」

「んなこと言われても……。じゃあどこが？つて聞いてやるよ」

「裏表がないとこよ」

「ああ……」

なんだそんなことか、と思う。そう言えば聞こえは良いだろうが、要は単細胞つてことだろう。

上手く立ち回れなくて、感情で生きるバカ。まともに交渉が出来ないし、かわされてばかりで……。

「誉めてるのになに落ち込んでんの？」

「うるせえ。……じゃなくて、おまえも物好きだなと思ってな」

欠点ばかりの俺に気を遣うなんて、少なくとも俺にはできない。

「ホントにねー。ホレた弱味つてやつよね」

深く考えもせず、玲華が言った。あまりにサラリと言うもんだから、一瞬流しそうになった。そして、はたと固まる。

におわす場面はいくつかあったが、言葉にして言われたのは初めてだった。それも櫻井や他の女子みたいにコクるって感じではなく

て…。

（本当だったんだ…）

ヤバい、全然実感がわかない。そして無意識に同じ質問をしていった。

「どこが？」

「どこって？」

「えっと、……どこに？」

「あー…、あたしを崇め^{あが}ないところかな？」

「なんだよソレ」

「猫力ブったあたしに特別扱いしなかったからよ。稀少価値だわ」「いくらでもいるだろ、そんなやつ」

あの学校にいるから会えないだけで、身分とか気にしないやつもお嬢様の価値が分からないやつもザラにいる。

「そんなのきつかけの一つでしょ。理由なんてあつてないものよ」自信満々に玲華は言う。どこか他人事に聞こえてしまうのはなぜだろう。

そんなんだから、適当にふうん、と答えてしまった。

「イヤだなあ、告白され慣れてるやつって。まったく有り難み感じてないんだもん」

「って…言つわりには櫻井と踊らすし、俺とは踊らないでさっさとこんなところに一人で脱出してるし」

「あら、途中までは見てたわよ。やっぱりあたしの教え方は完璧だったと思いがらね」

しれっと玲華が胸を張る。

「教え方ってあのスパルタか？」

正直教えられる方にとってはたまらない。完璧なんかじゃない。穴だらけだ。

「イヤな顔しないの！それでどうだった？初実践は？」

「向いてない」

俺は体を反転させ、手すりの向こう側に腕を力無くダランと下ろ

した。

「二度と踊りたくない。ガラじゃねえし。っていつかこういう雰囲気全体が」

「あっそ、残念。あたしは似合ってると思ったけどね」

「櫻井と…踊ったら、知らない女がこの子とも踊れって言ったんだ」
言うつもりなかったのに、俺はなんとなく語りだしていた。玲華が注意深く聞いている。

「雰囲気を大事にパーティを楽しむ、っていう精神は素晴らしいことかもしれないけど、そこでム力つく気持ちを抑えてまで笑って合わせて、本当にそれで相手には良いのかって話だし」

考え方は人それぞれだって、そんなことはわかってるけど。

「それって俺は嫌なんだ。誤魔化されたくないし、嘘もつかれたくない。だから俺も正直がいい」

「つまり、断ったわけね」

大人しく聞いているかと思ったら、声が途切れたところで玲華がため息まじりに呟く。

「それって美緒ちゃんじゃないの？ 澤登美緒ちゃん」

「名乗らなかつたから……ただ澄川がそう呼んでた気もするけど」
再び無然としてため息をついた。

「あやなちゃんに美緒ちゃんか…。あんたって女の敵だったんだ」
「どつという意味だよ」

「そこで怒らない。はあー。まあ正直なのも良いことだと思うわよ。実際そうだし。素直じゃないときもあるけどねえ。でもねー。はあー」

これ見よがしにため息ばかり玲華はつく。なんだよ一体。

俺は憤りを感じずにはいられなかった。女の敵？ だったら男の味方か？ 違うだろ。

オトコの…ってところで、ふと俺はあることを思い出した。今まで忘れていたのもどうかと思うが、話を変えるのにちょうど良くて利用してしまった。

「そう言えば綾小路に会った。つーか話した。謝れって言ったんだって？」

「ああ、そうよ。相変わらず話の通じないところあるけど、マシになつてたでしょ」

辛辣に容赦なく玲華が言う。きつと当人が聞いたら泣くな。

「まあな…。 “やり過ぎたと思う”とか“謝ろうと思って”とかは言つてたけど肝心の謝罪の言葉は無かつたけど」

「まあ、プライドの高い男だからね。それでかなりの進歩よ」

だから許してやつて… っていう意味が含まれていた。あんなに嫌つていたのに、こういうところはやっぱり幼なじみというものなのだろう。

なんか面白くない。

そう言いそうになつて驚いた。面白くないってなにが？

「で、他にはなにか話した？」

急に真面目になつて玲華が訊く。

どうしよう。綾小路は言うなと言つた。玲華は気づいているかもしれない、とも言つた。気づいてなかったら、傷つくだろうか。それとも言わない方が…？

ダメだ。判らない。

「まだ、玲華が好きだつて」

違う。そんなことどうでもいいのに。

「はあー。あんたやつぱり嘘つけないねー」

「いや、嘘ではないけど…」

「世羅のこと話したんじゃない？ 違う？」

「なんで…」

しまった。こんな返事では否定をしていることになる。鋭い玲華には危険だ。

だからといって狼狽うろたえてしまつて、次の言葉が出ない。

「この状況であんたがそんな顔すんのはそれしかないわ」

つい自分の顔を撫でてみる。どんな顔をしてんだろう。きつと情

けない顔だ。

「正直者でいたいんでしょ、言つてよ」

「ひつきよー……」

卑怯な返し方。自分で言つたことだけど。

「大丈夫よ。だつてあたし信じてるから」

確かに俺だつて、世羅がなにかしたと思つてゐるわけではない。

俺に向けたあの眼の方が現実味リアリティーがあるから。でも俺は世羅のことをよく知らない。本当に信じられるかは正直判らなかつた。

（でも……玲華なら）

玲華のことなら大丈夫だと思えてしまふ。それが過剰な期待になつてしまふのが怖い。自分みたいに負けるんじゃないかと、恐怖感到に囚われる。

「信じてるなら、訊くなよ」

「あんたもあたしをノケモノにすんの？」

玲華の目がウラギリモノと責める。

間違えた？ 違うのに。除け者なんてするつもりはない。それは

“言うな”と言つた綾小路の言葉も例外ではなくて。

心配？ そうか、これが心配するってことなのか。

まるで初めて触れたみたいと思う。感じたことがなかつたわけではないのに。

「だから、そんなことは一ミリも思つてなくて……」

気づくと想いが声に出ていた。

「玲華が寂しいとか言うから。つて、もちろんそれを責めてるわけでもなくて。寂しいときにさらに、追い討ちかける話しもどうかと思うし。かといって、俺がなんとかしてやるって言えたらそれが一番良いんだけど……。兄貴に立ち向かう勇氣だとか全然追いついてないのに、んな無責任なことも言えねえ……。結果、玲華がひとりで頑張らなきゃいけないかもしれない……。心配なんだ」

正直に誤解のないように言おうとするだけなのに、やけにまわりくどくなる。

「玲華のことが心配なんだ。世羅がなにかしてるのは確かだ。玲華が信じんのは自由だし、わかる。でも俺はまだよくわからない。俺がいま玲華に言えないってことは結局そういうことなんだ。俺が世羅を信じきれないんだ、まだ」

玲華の視線が痛いけど、俺は外に目を向けていた。交わらないようにした。

「ばか」

隣で玲華の頭が低くなった。手すりにもたれ掛かっている。

しばらくどちらもなにも言わなかった。玲華がなにかを考え込んでいたのは、空気でもわかったけど、俺はこれ以上話すと言ってしまいそうに黙っていた。

そしてずっと外の景色を見ていると、ふと動くものが目に入った。動物、かとも一瞬思ったが違った。人だ。

浅霧家の敷地の外で、電信柱に隠れるように、一人潜んでいる者がいる。

「あれ、刑事だ」

確かにそうだ。池田じゃない。あの日池田と共に俺に事情を聴いた刑事のなかのひとり。名前なんて当然忘れた。

「え？どこ？」

「あそこ。電柱んそこ」

刑事は尾行や張り込みのプロだ。そんな専門家に俺が気づけたのは、対象が俺や玲華、少なくともいまこの建物にいる者ではないからだ。だって久保田のことは見つけれないから。

俺は刑事の向いてる方を目で追った。高い塀が邪魔をしてよく見えない。

でもなんとなく想像はつく。刑事が追っている者で、この建物にはいない者。

「世羅を尾行してるんだ…」

「なんですって？」

しまった。また声に出たらしい。

俺が玲華の方を向くのと、玲華が駆け出したのが同時になった。慌てて腕を伸ばす。自分でも驚くようなスピードで玲華の腕を掴んだ。

「おい待て！行つてどうするんだよ！」

「刑事から話を聞くわっ」

「教えてくれるわけないだろ？俺だつて池田にかわされたんだ！」

池田が誰かを教える余裕もなく俺は怒鳴った。

「それでもあたしは：逃げられない。逃げたくない。世羅があたしから逃げるなら、追いかけてくちやいけないの！」

ゆつくりと俺から力が抜けていた。

その隙に、するりと玲華の腕が滑り落ちる。そのまま玲華の後ろ姿が見えなくなった。

逃げたくないって言った。

そんな台詞を聞いてどうして引き留められる？今さら自分のバカさ加減に呆れた。初めから、俺と玲華は違うんだ。元の核となる部分で違う。強さが。

先ほどの葛藤が嘘みたいに、俺も走っていた。

玲華のあとを追うようにフロアを走り抜けた。人と人の隙間に走るべき場所が見える。ぶつかることなく順調に走つたのに玲華に追いつけなかった。

ヒール履いてたよな？なんであんなに速く走れるんだろう。それだけ必死つてことか。

周りの人の迷惑とか考えてる暇もなく、一階に降りて、そのまま外に続く扉を開く。

バルコニーの下にあたる道路に向かって右に曲がった。先にたどり着いた玲華の立ち尽くす姿が見える。

世羅も刑事の姿もすでになかった。

誰もいない。移動したんだ。

左側に道がある。刑事が見ていた方から推察するに、こちらに行つたんだと思つた。俺たちは会つてないから。

だけど玲華は諦めきれないのかさらにまっすぐ先に行く。

「れい……」

違う、と叫ぼうとしたときだった。浅霧家の高い塀が途切れるところ、その右の角から新たな影が現れた。

玲華の前。

影だと思っただのは、黒ずくめで闇に染まっていたからだ。一瞬見えなかったくらい。

だけど街灯に照らされ、手元あたりでキラリと光るものがあった。背景が影だからよく目立つ。

全身の感覚が警鐘を鳴らす。

見たことある。出会ったことがある危機感。

「玲華！」

俺は追いかける脚に力を込めた。まるで自分が追われてるみたい
に本気で走る。似たものがあつたから。

「きゃっ！」

玲華の腕を掴むと、影との距離を引き離し、玲華の全身を覆うように抱き寄せながら自分の背中盾にした。

逃げる余裕までではなくて、硬く目を閉じ覚悟をする。

「うつ……」

だけど後ろから男の低いうめき声と、何発かの殴る音が聞こえてきた。

「久保田……探偵」

俺の腕越しに奥を見ていたみたいで、玲華が呟いた。それだけで後ろの状況がつかめる。

久保田もプロだな。ちゃんと仕事をこなしたんだ。こんな突然の非常事態でも間に合うんだから。

玲華もようやく状況を理解したみたいで、俺の中で少し震えた。それが伝わったのか俺も震える。いや、本当は俺からだったのか
もしれない。

「悠汰、もう大丈夫よ」

玲華がそう言つて俺の腕を軽く叩いても、俺は動けなかった。怖くて動けなかったんだ。

玲華を失うかと思つた。自分が死ぬかもしれない、と思うより怖かつた。

震えが止まらない。

「おい、大丈夫か」

久保田に呼び掛けられて、ようやく玲華を離した。

久保田を見ると、ひとつも怪我はなさそうだ。ネクタイはしてないが、今日もスーツを着ている。

そしてその先に視線を移すと、影のように全身真っ黒な服を着た男が伸びていた。

「犯、人？」

この流れで玲華を襲うなんてそれしか考えられない。

だけど、なんで俺じゃなくて玲華なのかわからない。俺のはずだった。

おとりになると言つたとき、自分が危険な目に遇う覚悟をしたはずだったのに。

玲華に危険が向くことは不思議と考えなかった。だから怖かつたんだ。

「犯人かと聞かれれば、否定も肯定も出来てしまふな……」

「どうということだよ」

「こいつは通り魔事件の犯人だ。ナイフの特徴が一致している」

久保田は犯人から取り上げたナイフを、顔の高さまで上げてちらつかせた。用意周到にハンカチでその大きめのナイフを握っている。タガーナイフだ。その情報はニュースで報道していたから、俺でも知っているけど、そんなものだけで断言できるのか？

玲華は俺たちをすり抜けて犯人に近づいて行く。俺より早く久保田が反応した。

「おい、危ないぞ」

「……つまり、梶さんを殺めた人とは違つてことね」

気を失つてるとはいえ、勇敢にも犯人の顔をじろじろ見ている。

「そうだ。それより早くここから離れるぞ。警察には祥子君から連絡してもらおう。あとは適当に知り合いを呼んでおくから」

「どういう意味だ？」

「またあの長い事情聴取をうけたいか？オレは御免だ。警察は好きじゃない。大丈夫だ、信用できるやつに第一発見者になってもらう」
淡々と語りながら久保田は携帯を内ポケットから取り出した。あまりに当たり前みたい言うから、しばらく呆然とその動作を見ていた。

「あたしはイヤよ。そんな真似できないわ」

「コイツは無差別犯だから、君が狙われたのはたまたまだ。恐らく自分の犯行にみたてた殺人が起こったから、この家を見張っていたんだろう。大丈夫だ、女も用意して完璧な理由を考えてるからバレない」

「そういうこと言ってんじやないわよ！あんたってバレなきゃ犯罪を犯しても構わないタイプ！？」

「最近のガキはタイプとかナニナニ系とか、すぐ一括りにまとめたがる」

厳しいことを言う玲華に、反論した久保田の声は弱々しかった。二人が球技大会のときに話をした、というのは聞いたが、恐らくこんなときでも玲華は玲華だったんだろう。

「俺も逃げない」

これで逃げたら男がすたる。疑われても噂されても、自分に後ろめたいところがなければ大丈夫だ。

それが逆なら？……考えるだけで嫌気がさす。

「いいのか？また母親が嘆くぞ」

「汚え言い方すんな！」

こいつは優しくしたり、突き落とすような言い方したり真意が読めない。

（だからイライラするんだ）

掌で転がされてるみたいに感情がむき出しになる。抑えられない。
「てめえは好きにしろよ！でも俺は言うからな！てめえの名前とこのスバらしい功績を」

「そうね。あたしたちが警察に行くんなら、あなたもいずれは行かないといけなくなるわね、大変ね」

玲華も同様に被せてきた。違ったのは、やっぱり玲華は傲然と笑っていたところか。強さがまるきり違う。

久保田が降参して白旗を挙げたのは、だからやっぱり玲華がいたからなんだろう。

俺だけだっただけ言いくるめられていたかもしれない。
それはそれでちよつと落ち込んだ。

第三章・・・6

「また君か」

報告を受けた池田が、他の刑事たちと現場に到着して、まず初めに発した言葉はこれだった。

もちろん俺を見て。

今回は殺人事件があったわけではなく、犯人検挙に結果繋がったということ、前回より早く解放された。

世羅を見張ってた刑事もいた。池田に何やら耳打ちしていて、遠目だったけど確かにコイツだと確信した。ここにいるってことは、尾行は終わったのか。もしくは巻かれたか、だな。

一番逃げたがっていた久保田は、顔見知りの刑事がいたみたいで、その人　いかにも威厳がありそうな感じで、池田より偉い人のようだった。　から、なんか……叱られていた。また首突っ込んで！って……。良いことしたはずなのに、ちょっと悲惨。

警察署から出る頃には夜も更けていた。

今回は久保田が送るってこともあったのか、親とかは呼ばれなかった。玲華は家に電話を入れてたけど。

「帰りたくないな……」

またしてもそう思う。決心したはずなのに、いざ家へって考えると帰りたくない要素がふんだんにあった。まず出方からして強引で最悪だったし、まだ謹慎中なはずだから、また閉じ籠らないといけない。それに兄貴には会いたくないし……。

玲華の運転手、眞鍋さんを一緒に待ってる間、俺はチラリと久保田を見た。

ウンザリしたようにヤツは切り返す。

「またそれか？」

「前は今日は帰れって言ったから、他の日だったらいいんじゃないの？」

「イヤなこと覚えてるな。そんな意味じゃない。揚げ足とるな。今日も帰れ」

「だったらウチ来るー？」

樂觀的に玲華が間に入ってきた。

「いや…さすがにそれはちよつと……」

これ以上迷惑かけられない気持ちがあつて、さすがにそれには断る。

「ふーんだ、つまんない」

「つていうか君は女の子だろう。気軽に男を家に呼ぶな」

「やだー久保田さんつて、意外とオツサンくさい」

「おっ……」

やっぱり玲華には誰も敵わないのか。久保田は一瞬だけ怯んだ。「だいたい、オレは君に言つたと思うが？事件に関わるなど。その結果がこれだ」

「そんな話してたのか？」

聞き捨てならなくて俺は顔をしかめる。

「いいじゃない。一個解決してるじゃない。そうよ、そんなハナシに來たのよ、この人」

「オレがいなかったらどうなつてたと思つてるんだ！」

久保田が本気で怒鳴ると、さすがに玲華も黙つた。変わりに俺が言う。

「でもいたから、おまえ。ちゃんと護つてくれた。助かつた、マジで。ありがとう」

素直な気持ちだった。久保田がいなかったら、確かに今ごろどうなつていたか分からない。

玲華が傷ついてたかもしれない。それを避けただけで、感謝したかつたんだ。久保田に。

「いや…仕事だから……」

なぜか久保田が動揺したような声を出した。そんなに意外性があったのだろうか。素直な俺……。

「まったく、聞いてられないわね。それより今晚のことだけど、ウチがダメならビデんちならどう？頼んでみるけど」

「行きたい！」

ナイスアイデアだ。俺は即答した。希望の光が射し込んだ気がした。秀和なら気兼ねなく一瞬にいれそうだ。あいつの方が気を遣いすぎるキライがあるけど。

「駄目だろう。家族に心配かけるのか？」

「おまえはいつもそう言うよな！あんな家族じゃねえよ！」

「まあまあ、落ち着いて悠汰。久保田さんにも大人の事情があんのよ。子どもは子ども同士、勝手にしましょ」

「そんな話を横でされて見逃せるか！」

「しょうがないじゃない。あたしはあんな家にもう一度悠汰を帰すなんて真似はできないわ」

「あんな家でもコイツの家だ。いつまでも逃げれるもんじゃねえ」

「あのさ、本人無視してウチのことで口論するってどうかと思うんだけど……」

かなり複雑な気分に陥る。まー……、他人にあんな家呼ばわりされても仕方がない家だけど。

（あれっ？）

「っていうかおまえ母親の手先だろ？あんな家とか言っていていいんだ？」

「手先って……。依頼者だ。間違えるな」

心底カンベンって頭を抱えていた。また、あれ？って思った。

ちよっと俺が想像してたのと違う。確かに依頼者なのは聞いていたけど、それ以上の動きをしてたじゃないか。告げ口とか。

「母親の依頼って俺を護るってことだけ？」

それならチクる必要ないだろ。

すると一瞬久保田の視線が泳いだ。それから、ホントは守秘義務があるんだけど、と前置きして言った。

「護るうえで、見たこと聞いたことは全部報告することになってん

だよ」

「やっぱり手先じゃない」

俺より早く、玲華が冷たく言い放つ。

だけど俺は分かっていたことで、いまさらながら呆れた。呆れすぎて悲しかった。

「あの女……いつもそうなんだ。咲田さんとか周りの人間を使っていつも俺を見張ってる。中学の時は教師の一人を買収していた。それでいつも、なにかあったときだけ家に帰るんだ」

事件を目撃した日は外せない用事があったのか、珍しく帰らなかったけど変わりに久保田を雇うし。

「もう、なに考えてんのかさっぱりわかんねえ」

「なんでって訊いてみなかったの？訴えたことはなかったの？やめろって……」

「最初は、あった。でも“あんたの為よ”って一蹴されて終わり」

「そこで終わりにしないでよ」

玲華が抑えた声で、でもとても厳しいことを言った。玲華なら、俺の親とでも渡り合えそうだ。見たくないけど。

出来ていたら苦労してない。

「とにかく、問題はそこだな。悠汰が言い返せば一番良いんだ」
久保田がこれまた簡単に結論を言う。

「とりあえず明日は休みだしさ、タキシードのまま帰るわけに行かないんじゃない？服はあげるつもりだったけど」

そうなのだ。そのまま警察に来たから、まだこんな格好のままだった。玲華もドレスだ。

肩が寒そうだったから、今は俺が着てた上着を羽織っている。掛けてやった、というより奪い取られたんだけど。

「え？いらねえよ」

「一着ぐらい持っても損はしないわよ」

「っていうか……なんかいろいろ貰いすぎてるっていうか……」

飯も食わせて貰ったし、参加費だって払って貰ったし……。貰いす

ぎて返せてない。特に玲華には。形のないものも合わせて…。

そんな俺を見て、久保田がニヤニヤ笑いながら言った。

「遠慮すんなよ。未来のダンナになるなら、こういうパーティーにもっと出ないといけなくなるぜ」

「ちよつとあんた！なに下品なこと言ってるの？信じらんない！」

真っ赤な顔をして、立ち上がった玲華が叫んだ。先に玲華に叫ばれて、俺は少し出鼻をくじかれた。

「君たち…うるさい！ここは家のリビングじゃなくて警察署！」

突然池田の声が後ろからした。通りかかったついでに叱ったようだ。

事情聴取が終わったあと、受付のある一階のソファがあるところで待たせてもらっていたのだ。

そのまま池田はまたどこかへ行こうとする。俺は声をかけたくなかったが躊躇われた。

「悪い」

二人に断ってから池田を追った。

玲華には聞かれたくない話だったから、二人からは見えない位置で池田を呼び止めた。

「ちよつと待てよ」

「どうした？」

「あんたの相棒か部下か知らないけど、アイツなんで世羅を見張ってたんだ？」

単刀直入に訊くと、池田は少し困った顔をした。

「あいつ、まだまだだな。こんな少年に見つかるとは」

「疑ってるだろ、世羅のこと」

「君は訊いてばかりだな。教えられないと前にも言っただろう」

「世羅だけアリバイがないって本当？」

「探偵の真似事か？だったら他を当たれ」

やはりダメか。あつさり門前払いを食らった気分だ。

「じゃあ、兄貴はいつから世羅と会ってたんだ？それならいいだろ？」

「まったく…」

池田はまいった顔をしながら頭を掻いた。それから仕方がないというように息を吐く。

「二週間くらい前から確認している。見かけたのは今日で二度目だった」

二週間前…。短いのか長いのか微妙で、複雑な感情になる。

「気づかなかったのか？」

「ああ…。兄貴とはあまり家でも会わないから」

「では普段との変化も分らないか？」

「変化って…？」

「いつもより苛立ってるとか、なにかソワソワしてたとか。なんでもいい、小さな変化だ」

「そんなの…」

気づくと俺が質問されていた。タダでは転ばない感じが不愉快になる。

（でも結局、俺はわからないとしか言えないんだ…）

（俺にわかることってなんだ、なにがある？）

「もっと注意深く周りを見るようにすべきだな。確かに見ないことは楽だ。なにも知らなければ傷つなくて済む。だけどそのうち大切なことも見落とすぞ」

穏やかな声で、かなり本気で叱責された。

わかってるよ、そんなこと。そう返したかったけど、また頭だけで実感できてなかったら嫌だから、言わなかった。

大切なことってなんだ、って思った時点で解ってないってことだ。

「神崎君にはもっといろんな人と話し合いをすることを勧めるよ。最初はム力つくかもしれない。感情にまかせて怒鳴るかもしれない。だけど根気よく、相手の意見がわかるまで話し合っただ」

なぜいま、そんなことを言うのか分からない。だけど大事なことを話してるのは分かったから、ただ黙って聞いていた。

「特に今は兄と話してみるといい。今の君に一番近い存在だと思う」

が？」

ふっと笑ってそう助言する。

説教くさいとか、大きなお世話だと以前の俺は思っただろう。でもこのときは、すつと素直に耳に入ってきた。

というよりただ、兄貴が近い存在ってどういうことを考えていたんだ。兄弟だからだろうか。

「悠汰、迎えが来たわよ」

玲華が俺を探して呼びに来た。もう世羅の話は終わっていたのに、ギクリとなった。なんの後ろめたさか不明だ。

「じゃあな、頑張れよ神崎君」

忙しかったのかもしれない。池田は俺の返事も待たずに足早に去って行った。髪もボサボサでスーツもよれよれだから、もしかしたらあまり寝てないのかもしれない。

忙しいのに、俺のために時間を少しくれたんだ。やっぱりそういうことを、今頃になって気づく。

「仲いいのね、刑事さんと。前に学園に来たあの人？」

玲華が池田の後ろ姿を見送りながら言う。そう…、とだけ俺は答えた。

「あ、そうそう。結論でたわよ。今日は探偵事務所に泊まらせてもらうことになったわ」

「は？なんで？」

久保田が許すはずないだろ。

「それからあたしもね」

「だからなんで!？」

ますます分らない。

怪訝に思ってる俺に、玲華は悪巧みをするような笑みを浮かべた。あまり良い予感のする笑顔じゃない。

「だって、これからの作戦会議するんだもん。必要でしょ？対策」

「だもん…って、おい」

「あーでも、祥子さん？って人の家が近いらしいから、あたしはそ

「うちに泊まらせてもらうことになったけど。残念ね悠汰くん」

「ばっ！だれがっ！」

「だからね、とりあえず悠汰は久保田さんと帰って。あたしは一旦帰って着替えて行くから。悠汰の服も持って行くわ」

「なんか楽しそう。楽しそうに玲華は話を先に進めていた。

俺の青くなったり赤くなったりする反応はすべて無視の方向で！「ちよつと待てつて。そんなこと理事長が許すのか？」

突然の娘の外泊なんて、とてもじゃないがあの親バカ加減では耐えられないんじゃないか。俺の頭に、玲華を相手にしている情けないときの理事長の顔が浮かんた。

「あれ？言つてなかった？今日お父様はお母様と一緒に実家なのよ。あ、お父様の実家ね」

だからパーティ欠席だったんだけど、言わなかったかしら？と、もう一度玲華は付け足した。

聞いてない。つていうか不思議とそんな話の流れにはならなかったのだ。

「まー、いたとしても女性の家に泊まるのよ、なにか問題ある？世羅んち泊まるのと変わらないわ」

堂々とした迫力で玲華は言い放つ。まー、そうなんだろうけど。

「でもよくアイツが許したな。俺がいくら頼んでもダメだったのに」泊まることもそうだが、作戦会議だつてそうだ。事件のことに關しては関係ないつてスタンスだったのに。

「悠汰は正攻法で頼むから断られたのよ。あたしもまえ、それでいったらダメだったわ」

一旦言葉を切つて、玲華が不敵に笑つた。至極楽しそうに、まるで史上最強の武器を手に入れたみたいに。

「いい？悠汰、真っ直ぐなのも良いけど覚えておくといいわ。この世には“奥の手”つてものがあるのよ」

一応知つていたけど。そんな言い方するもんだから、覚えたくねえよ！と強く反論したくなつた。

代わりに久保田に少し憐れみを覚えた。それはさすがに口にはできない。

* * *

玲華の言う通り、久保田はまた事務所に連れていつてくれた。その間、なんで引き受けたのか、いくら質問しても答えてはくれなかった。

「どうでもいいだろう？ お望み通り帰らなくていいんだから」と、仏頂面で言われたのだ。拗ねているようだ。

事務所に着くと祥子さんがいた。久保田が遅くなるときは、キリの良い時間で先に帰るらしい。今日は一度帰って、再び呼ばれたようだ。

「お腹空いてませんか？ お弁当買ってきましょうか？」

祥子さんは俺たちを見るや否やそう言った。玲華も祥子さんも、女性が気にするのはまず食のこのようなようだ。言われるまで、腹がへつてることなんてすっかり忘れていた。パーティではそんなに食べれなかったし。

「そついやオレも食ってない。じゃあ適当にコレで」

「適当が一番困るんですけどね」

久保田が財布を渡すと、受け取りながら祥子さんが苦笑した。そしたら久保田が矛先を俺に向けてくる。

「おまえなに食いたい？」

「なんでもいい…」

「なんでもイイが一番困るんだよ」

「自分が言われたからって俺に当たるなよ！」

オトナの汚い部分を見た気がした。

「じゃあ適当に買ってきますけど、文句言わないでくださいね」
そう釘を刺して祥子さんは出て行く。

そしたらしばらく妙な空気が流れた。なんか気まずい。

車の中では気にならなかったのに。室内が静かすぎるからかもしれない。

向こうもそう思ったみたいで、ひとつ咳払いをしてから口を開いた。

「悪かったな。手荒な真似して」

「なに？いきなり…」

「悠汰が母親と家人中入っていくとき、そう思ったんだよ」

実は、久保田も辛かったんだ。思いもよらないことだった。

でもそれを信じたら、俺の為にしたんだってことがわかった。母親の依頼のためじゃなく、俺のため。

「もういい。ホントのことだしな」

根本的なことを解決しないとなんにもならない。

久保田が言ったことが頭を巡る。

今日は解決法も教えてもらった気がした。久保田に玲華に、それから池田に。言い返せと、話し合えと。

あとは俺自身の問題だ。

「立ち向かえるのか？いつか…」

勇気が持てるのだろうか。母親と兄貴と父親の三人。

特に父親には、姿を目にしただけで息が詰まりそうになるのに。

「立ち向かえるさ。いまのおまえを見てたら、とくにそう思うよ。成長期だろう？」

あんまりこういう場合、成長期の言葉は意味が違うような気がするんだけど。

ま、いつか。今はこれで。

「嬉しかったら素直に笑えよ。いますっげえ変な力オしてんぞ」
「うっせえ！」

やっぱりこんなヤツに感謝すんじゃないかった！

しばらくしてから事務所の扉が開いた。

目線に移すと、祥子さんが某有名なお弁当屋の袋を持って帰ってきた。後ろには玲華もいる。

「下で一緒になったんです」

「お邪魔しまーす。へえ意外とマトモな事務所じゃない」

やはり女性が加わると一気に華やかになる。玲華はジーンズにTシャツというラフな格好で、イメージが百八十度変わった。こういう格好もするんだ。

それから、まずは腹ごしらえだという話になり、祥子さんが買ってきたお弁当を広げた。

そんなことだと思った！って言って、玲華も自宅からタッパーにサラダやらお惣菜を持ってきていた。

なんか庶民的。たぶん中身はあのお抱えシェフが作ったものだろうけど。

長椅子に俺と久保田が座り、向かいに玲華と祥子さんが一人掛け用のソファに座った。

「もう食えねえ…」

いち早く根を上げ、つい食べすぎて俺はソファに寄りかかる。動けなくなるほど食べたのは久しぶりだった。いつもは途中で飽きてしまう。食べるのが億劫になるのだ。

（なんで今日は…）

たぶん楽しいから。人と食事をして楽しかったからだ。

「情けないな。全然食ってないじゃないか。あつ信じらんねえ、コイツ唐揚げ一個残してる。メインは食えよ」

「そうよ、お昼も残してたし。育ち盛りなんだからちゃんと食べないと。とくに野菜をいっぱいね」

「胃が小さいんですね。大丈夫、毎回お腹いっぱい食べてたら大きくなるですよ、胃って」

三人に一齐に責められて俺はゲンナリした。

ちゃんと食えなんて、親にも言われたことない。それどころか、もう何年も一緒に食べてないけど。

いつもは咲田さんが作ったのを、一人で温めて食うだけだ。残しても誰もなにも言わない。

「うつせえ。食べねえもんは食べねえよ」

ボソボソ抵抗してみたが、もう三人は食事を続けていた。楽しそうに、軽口を叩くような会話をしながら。

俺はそれをぼんやり眺めていた。

慣れていない光景。こんな大勢で食事をすることが、現実味が無い。遠い位置にある。

（なんか…ヘンな感じ……）

パーティのときの食事とか、学食の空間まで行くと、逆に極端すぎてこんな気持ちにはならない。

こういうのが普通の家庭の食事？こいつらは家族じゃないけど。うんと小さい頃、家族揃って食事をするときが少ないけれど確かにあった。でもこんなに笑い声とか雑談みたいな会話は、なかったように記憶してる。

「あ、ねえ悠汰。プリン食べない？」

いきなり話を振られてすごくびっくりした。ぼうつとしすぎたらしい。反応が遅れた。

「いらない。……いや…やっぱ食う…」

「どっちよ。いま油断してたでしょ」

軽く笑いながら玲華が俺の前にプリンを置いた。三個で一パックのやつじゃなくて、デパートの地下とかじゃないと買えなさそうなやつ。玲華が持ってきたらしい。

「ありがとう…」

「うわっ悠汰が素直っ」

「どうした？食いすぎで熱出たか？」

「先生、あり得ませんソレ」

ぼんやりしたまま礼を言ったら、すごく失礼な扱いをされた。ちくしょー。

ムカつきながらプリンを口に入れると、意外と旨かった。それはそれでなんか悔しい。

「じゃなくて、作戦会議はどうしたんだよ」

どん！とテーブルを叩いて話を無理やり変えた。

自分の気持ちを切り替えるため、と話が逸れすぎだと思ったから。早く先を定めたい気持ちもあったと思う。

「そういえばそんな話だったな」

「おい…」

「いまさら降りたなんて言わせないわよ」

今度は玲華が俺側について久保田に先制攻撃を食らわす。

「わかってるよ。考えればいいんだろ」

「もうあんじゃないの、作戦」

「マジで？なんだよソレ」

「やっぱり調べてみたいよ、この人」

「ひでえ…。あんだけ俺に説教じみたこと言つといて」

「おまえらな…勝手に話を進めんな」

久保田はテーブルに肘をついて頭を抱えていた。横目で同情の余地なしというふう玲華がチラリと見る。

だけど祥子さんがお弁当の殻とか片付けだして、焦りながらあたしもやりますって言っていた。

「大丈夫大丈夫。玲華さんはお話ししててください」

につこり祥子さんに微笑みかけられて、玲華はすみませんと言って座り直す。

なんというか、同性には殊勝な態度だ。

なぜ祥子さんより歳上の久保田には容赦がないんだろう？俺にはともかく…。

「まず久保田さんが知っている情報、全部教えてもらえる？」

「……………君はどこまで知ってるんだ？」

「ダメよ。あなたが先。伝える内容コントロールされたらたまらないもの」

俺が池田と話しているとき、二人はどんなやり取りを交わしたんだろう。とりあえず玲華が優位に立っているのだけは分かった。

「警察が握ってる情報はだいたいな。それから、浅霧世羅と神崎惣

「のことについて調査中だった」

兄貴の名前のところで俺を見る。驚いたけど、ショックな感じはなかった。

あーやっぱりって感じ。だから久保田も気にしなくていい、と思う。

そんなことより嫌な会話の流れに警戒する。

「それで？怪しい人はいないの？」

「まだ分らない、と言ったところか。動機、とまではいかないが、浅霧邦春くちはるがとりあえず一番仲が悪かったらしい……」

「邦春様は世羅の義父ね」

玲華が俺に向かってフォローを入れる。そういえば挨拶はしたけど、名前まで聞いてなかった。

そんなことより、この流れは……。

「一見アリバイがない浅霧世羅が怪しいが……」

「あのさあ！」

それは待て、と思つて口を挟む。

なに？つていう感じで二人に見られた。だけど無計画に突っ込んだもんだから、次の言葉が出ない。

「えーと……」

「案がないなら黙つてろ」

途中で止められて不愉快そうに久保田が言った。

「世羅以外の人にはどんなアリバイがあるの？あんな時間にみんなアリバイあるなんて逆に怪しいわよ」

あつさり、あまりにあつさり玲華が言うもんだから、また俺はソファにもたれかかった。

全身の力が抜けるのを感じる。

信じられない……やっぱり知ってたんだ。

（俺の葛藤はいったい……）

「どうしたの？マヌケな顔して」

「なんでもねえ」

なるべく心情を読まれないように低く答える。

「あー、もしかしてバルコニーで言えなかったの、ソレ？」

（あっさり読むな！）

バカみたい。自分があまりにアホみたいで、情けない。

「それであたしのこと心配してくれたんだよね？ありがと」

俺はなにも言っていないのに、玲華はなぜか断定して微笑んだ。

「あー……まあ……」

「……続けていいか？……」

反応に迷っていると、また不愉快そうに俺を見て久保田が言う。

いつの間にか片付けを終えた祥子さんが、それを見守るような優しい笑みでちょこんと久保田の前に座った。

「確かに、家族の証言だけだとアリバイとしては弱い。だがそれぞれ、使用人が姿を確認している」

久保田は言いながら立ち上がり、事務机からプリンター用のA4サイズの紙と、ペンを持ってきた。

テーブルに紙を広げ、一人一人の名前を書き出す。わかりやすく浅霧の一族の家系図を書いていた。世羅の母親は美希子^{みきこ}。邦春と美希子との間の男の子は陽希^{はるき}という名前らしい。

「あの日浅霧家は家族会議を開いていたと証言してる。だから皆、功男氏の邸宅に集まっていたんだ。それは使用人全員が見てる。お酒も軽く酌み交わし、終わったのは深夜一時すぎ頃」

功男氏というところで、功男の名前を大きく丸で囲み、それから家系図より右上に、『梶剛志殺害時刻AM2:48』と追記した。そつえばそんな時間だった。

「それから誰も出た形跡がない」

「世羅は？」

「彼女は一人離れに住んでいる。会議は大人のみだったから当然いない」

「離れ？」

「功男様の邸宅に世羅たち親子も住んでるんだけど、世羅用の離れ

が同じ敷地内にあるの。離れて言ってもキッチンあるし電気コンロもあって、ほとんど世羅はそこにいて毎日家族と顔を会わせることはないみたい」

説明しながら玲華の顔が曇った。

なんか本当に世羅だけが追いやられてるみたいに感じる。この家系図だって、世羅の入る余地がない。

「他の従兄弟たちは皆成人しているからその場にいたし、陽希君を覗けば世羅嬢にだけアリバイがないことになる。そして梶氏はその家族会議が始まるより前に、浅霧邸を後にしている。運転手だから仕事は早く終わったようだ」

「それより前？あのととき、帰りだったんじゃないのか？」

ふと疑問に感じて声に出す。そして池田が何と言っていたか思い出した。

あの辺りに梶さんの自宅があつた………ということしか聞いてない。

（固定概念で帰りだと思っていたんだ）

「違う。午後十時頃に功男氏を家まで送り届けて、そのまま帰ったらしい。それからの足取りはわかっていないが、人と会っていた可能性がある」

何の心の変化なのか、あんなに拒んでいたのに、一度話始めると久保田は止まらなかった。こうなったら洗いざらい喋ってやる、とも思っているのかもしれない。

「警察が押収した梶氏の手帳から、ここ数ヶ月で頻繁に逢うようになった人物がいることが判明している」

「その人が怪しいわね」

じっくり用紙を凝視しながら、玲華がやっと口を挟んだ。

「とりあえずその人が誰かを突き止めれば、先が見えてくるわ」

「さすがだな。オレも調べるならそこからだと思っていた」

久保田が感嘆の声を上げた。

自分だけが置いてきぼりを食らった気分がして、焦燥感を感じる。

「なんでだよ。たまたま知り合って会ってただけかもしれないねえじゃん」

「功男様の運転手をしていれば、とてもじゃないけど、時間をつくって誰かに会う余裕ってなかなかないの」

「朝迎えに行く時間はある程度決まっていたが、終わる時間はまちまちだったようだね。しかもイレギュラーでいきなり呼ばれることも多かったらしい」

「梶さんは真面目で柔和な人だったわ。確かにあたしたちの知らない一面があったかどうか、聞かれれば否定は出来ない。でもあの仕事には誇りをもたれていた。予定を立てても、功男様が来いと言ったら駆けつけるでしょうね」

二人がかりで説明される。

「なるほどな、そうまでして会わなきゃいけない人物か……」

「怪しいだろう？彼は妻子もちで身が固いことは周囲の人が認めている。ただの逢い引きってわけでもなさそうだし」

「手帳には書いてなかったわけ？名前とかヒントは」

「名前あったら苦労はしないわよー。でも会ってた人が同一って証明ならあるわ」

玲華が腕を組ながら難しい顔をした。その向かい側で久保田も同じように頷いてる。

一体感を持つているようだ。

「スケジュール帳には時間と、その下に大文字のRという文字アルが書いてあったそうよ。場所までは記してなかったから、なかなか相手が割れないのね」

「Rねえ……。アルアル……、ラ……リ、ル、レ………玲華！」

ブツブツ呟いてみるとポンッと閃いて、つい本人に向かって指差してしまった。そしたら玲華に思いつきり睨まれた。

「ちよつと！ぶん殴るわよ！」

「わ、わりい……つい……」

そこらの輩より怖いかもしれない……。なまじ美人だから迫力が加

わってさらに恐ろしい。

「まったくもうー、バカなんだから」

「他にアールのつく人いねえの？」

話を変える方が利口だ、と思って久保田に話を振る。

「さあな。まだイニシャルだと決まったわけでもないからな」

「このRが殺された日にも載ってたってわけ？」

「そうだ。なかなか賢いじゃないか悠汰」

「バカにすんな！」

久保田にニヤニヤ笑われて、俺は条件反射みたいにキレた。こいつのこういうところは嫌いだ。

「でも、だったらなんで警察はそこ調べないで世羅を追ってるんだろっ？」

「調べてると思うわよ。同時進行してるんだと思う」

「唯一のヒントだからな」

俺の疑問に二人がまた答える。

「あのさー、ずっと不思議だったんだけど、二人ともなんでそんなに詳しいんだ？」

まるで近くで聞いていたみたいに、警察の情報をいとも簡単にスラスラ喋っている。

一瞬その二人は顔を見合わせた。それから気まずいように逸らす。なんだよ、と続けて畳み掛けようとしたところで、先に久保田が片手をヒラヒラ振って言った。

「ちよつと失礼しますって覗いて見ただけだ。チラ見チラ見」

「はあ？」

「あれよ」

玲華が視線だけで促す。その先には俺の部屋にあるのより最新のパソコンがあった。

要は回路に侵入して情報を盗み見したということだ。なにがチラ見だよ。

（コイツら…そんなところで共通点もってたのか…）

「大丈夫かよ？んなことして」

「見るだけならな。オレはともかく玲華嬢はヤバイ」

ふと久保田が玲華に真面目な顔を向けた。真面目…というか、眼光が鋭くなつたというか…。

「なんといつても、このオレの中にまで入ってくるんだもんない」

「妙な言い方しないでよ！」

全身の毛を逆立たせて玲華が非難した。

つまり、玲華は久保田の端末にハッキングしたということか。

「なにやっつてんだよ、おまえら…」

「馬鹿野郎、今どきチマチマ張り込みとか聴き込みなんて地味で大変なことは、警察にやらせとけばいいんだよ！オレには時間もなかつたしな」

「そうよ、あたしたちはイロイロ日常が忙しくて、そんな暇でうだつの上がないこと出来ないわ！でもあの人たちにはそれが日常で仕事なのよ！」

「同感だが、君のは卑怯だぞ！人の弱味につけこんで！あまつ脅すなんてな！クラッカーじゃないか」

「なにいつてんのよ！久保田さんが意味深なこと言つて、逃げるからいけないんじゃない！おまけにガードが硬くて肝心なところが見えやしない」

二人は揃つて、堂々と俺に言い訳をしていたが、気がつくといつの間にかそれは言い合いに変わつていた。玲華の言葉に、久保田がやられたつて顔をして横で頭を抱えている。

「全部見たような口振りだったじゃないか…それでオレは…」

「いまさら後悔しても遅いわ。だいたい読めてきたしね」

「なんの話か教えろよ」

いい加減、間に入るのもウンザリしてくるが、こんな久保田は滅多に見れないから気になつた。

「いい、おまえは気にすんな」

「そうね、とりあえず今後のことを決めましょう」

だけど二人とも、また協定を結んで話を逸らす。

なんなんだよ、まったく。俺が除け者にされてる気分だ。

一人で不満そうにしていたら、斜め向かい側から祥子さんが天使のような無垢な微笑みを俺に向けた。

「大丈夫ですよ。わたしも意味がまったくわかりません」

そういう慰めはなんか違う気がする。祥子さんは天然なんだ、と思った。

第三章・・・7

得られる警察の情報は、捜査会議で集まった内容をデータとしてインプットしているものに限られる。

だけど池田はじめ刑事たちの手帳の中身。あそこには、もつとりアルで最新のデータが記入されていることだろう。

世羅が隠していることを、一秒でも速く、一欠片のヒントでもいいから知りたかった。そう玲華が話した。だからドレスのまま館を飛び出したのだと…。

玲華と世羅の間には歴史がある。それは簡単に俺が踏み込むことができないようなものに感じた。

絆。

俺が持つてないもの。最初に感じたときは、羨ましいと思った。だけど今、それが壊れかけている。

踏み込めないから、自分は傍観者になるしかない。為す術がないんだ。事件解決したら元に戻るんだろうか。それなら頑張るだけだ。(でも、なにか取り返しのつかないことになったら…?)

「聞いているか？悠汰」

ふと久保田の声が感覚を貫いて俺の思考を停止させた。

(あー…そっか)

作戦会議中だった。俺は聞いている、とうそぶいた。

「警察は世羅を追っているから、オレたちが動くとしたらコイツを調べるべきだと思う。同じもん追っても効率悪いからな」

そう言いながら久保田は、自分が書いた家系図の浅霧邦春のところに指差した。

世羅の義理の父親…。虐待してたという…。

「邦春様は頭は良くないけど、がめつくて強^{したた}かよ。簡単に尻尾は出さないと思うわ」

「なら諦めるか？」

「冗談！その意見には賛成よ。ただやり方を間違えないようにしないと、って言ってるの」

「確かに。君ならどう出る？」

「なんでもいい。邦春様の弱味を握って喋ってもらうように脅すのよ。拷問するより効果があるわ」

「ごっ……！」

「なんだか、玲華がイキイキとしてきたように見えるんだが……気のせいであってほしい。」

「それで？邦春氏の弱味とは？」

隣で青くなってる俺を無視して久保田が続きを促す。

ダメだ……。コイツら同類だ。

（席替えしてえ……）

とりあえず横と前で交差して話されているから、居心地が悪い。

祥子さんと世間話していた方がマシかも……って本気で考えた。だけれど祥子さんは、ただニコニコ笑いながら黙って聞く側に徹している。ここは俺と同類ではないようだ。

「いちばん邦春様が恐れているのは、美希子様に捨てられることよ。捨てられて浅霧から追い出されないように必死なの」

「そうだろうな。彼は元々金に困るような人生を歩んでる」

「そついえば再婚するとき周りは大反対だったわね。遺産目当てだろう、とか言われてたし、子どもながらにあの対立は凄まじいものを感じたわ」

（それで馬の骨か……）

盗み聞きしてしまった内容を思い出す。未だに兄弟たちにそのシコリが残っているようだ。

「バレる前に……って」

「なんと言っていた？世羅の母親は。」

「そうだ。」

「お父様にバレる前になんとかしないって、言ったんだ」
「なにが？」

「いきなりどうした？」

考えが口に出てしまつて、不信そうな目で皆に見られた。そういえばこの事はまだ話してなかった。俺はなるべく思い出して脚色を加えずに、聞いたままを伝えた。

「確かにその噂って世羅のことね。でもそれなら功男様もご存知のはずだわ」

腕組みをして眉間にシワを寄せながら玲華が呟く。

「なんでもっと前から聞いておかないんだ！ なにか重要なことを話してたかもしれないのに」

「んなこと言われたって知るか！俺は玲華を探していただけだ！」

久保田に責めるようなことを言われて、焦って弁解してしまつた。まったくコイツの変わり身の早さにはついていけない。事件には関わるなつて言つたくせに。

「だったら、あの兄弟たちは重要なことを知つてんだよな。そういったも脅して吐かせれば」

投げやりに、この二人に合わせて俺は言い放つた。

ホントに、深く考えずに言っただけなのに、久保田も玲華もすごく深刻な感じで頷いた。

「それもいいわね。だからやつぱり、邦春様を仕留めれば万事解決するのよ」

「そうだな。調べたら一番簡単にボロが出そうなのは彼だ」

ああ、ダメだ。俺の入る余地がない。というか入りたくない。

「じゃあそういうことで、久保田さんよろしく」

「オレは忙しいんだ！近い位置にいる君が適任だろう」

「近すぎて警戒されてるのよ。忙しさを理由にする人って好かれないわよ」

「あのなあ、オレは悠汰から離れられないの！わかつてんだろ」
「なんか不毛だ。」

俺は、何の気なしに頭に浮かんだことを言ってみた。

「ってかさあ、そういうことはコンピューターで探れないワケ？」

そしたら、二人ともこちらを見て。

「いや…それはどうだろう…」

「まーそういう手もあることはあるんだけどね…」

とかなんとか言いながら、部屋の隅に置いてある、パソコン机まで揃って向かって行った。

意外と盲点だったらしい。

二人がソファから抜けて、すぐ解放感を感じたのはなぜだろう…。俺はそのままソファに横になる。

祥子さんと目が合った。

「神崎くんは行かなくていいんですか？」

「あんなん見てもさっぱりわかんねえから」

「そうですね、わたしも同じです。…………でも良かった」

祥子さんがふと声の調子を上げた。

「先生、久しぶりに楽しそうです」

「そうかあ？」

俺には全然そんなふうには見えない。むしろ玲華に怒鳴ったりして不愉快そうだ。

「ええ。最近ふさいでましたから。今回の依頼、先生にとってもわたしにとっても、とても意味のあるものになってるんです」

今回の依頼というところで、無関係ではないことを知って祥子さんを見た。

目を伏せ軽く俯きながら、それでも口元は笑んでいた。

「先生がわたしに負い目を感じてるってことは気づいていたんです」

（あ…このまえの…）

車の中で聞いた話だ。

「だから神崎くんにわたしを重ね合わせたんじゃないかな？先生は神崎くんを助けたいと想っていると思います」

「実際に助けてもらったけど」

「そういうこともあるんですけど、それだけではなくて、精神面のことです」

俺はふと久保田を見た。玲華とあーでもないこーでもないと言いながら、パソコンに向かってる。

こちらの会話には気づいてないようだ。

「あなたを護るうちに情が湧いたんでしょね。こんなことはわたしが知る限り初めてなんですよ」

「でもそんなん…同情だろ…」

「同情でもなんでも情は情じゃないですか」

哲学めいたことを言う。

俺にはよくわからないくて、眉をひそめた。

「愛情の方が良かったですか？」

「ありえねえ！」

これには即答できた。スッキリした気持ちが生まれる。

祥子さんは声に出して軽く笑った。

「でも、無責任なただの同情ではないことは確かだと思いますよ。

余計なお世話だと、神崎くんは思われるかも知れませんが、先生は真剣です」

「なんでそんなこと言うんだ？」

わざわざ。

まるでだから許してあげてくれ、とでも言いたいかなのような。庇っているようなものを感じた。

（許すってなにを？）

「先生が楽しそうにしてるのは、本当は最初からあなたに協力したかったんだと思います。強引な方法だったけど、玲華さんに協力する理由をもらえて、少しだけ気持ちが楽になったんじゃないかな？」

祥子さんから久保田に対する想いが伝わってきた。
労るような、安心したような想い。

好き、なのかな。

少し勿体ない気がした。

* * *

「悠汰、起きて」

また俺は知らない内に眠っていたらしい。玲華に激しく揺さぶられて起こされた。

祥子さんの話が一段落ついたところの記憶はあるから、会話の途中で寝るっていう失礼なこととはしてないはずだ。というか、これって酔いつぶれた人の考えることじゃないか…。

「悠汰！早く起きないとイタズラするわよ」

ぼんやりしていたら、玲華がまた良からぬことを企んでる顔で言ってきた。

「起きてるよ。目え合ってたんだろ」

イタズラってどんな？とは、口が裂けても訊けない。聞いたら後悔する。間違いなく！

慌てて体を起こしたら、久保田も祥子さんもいなかった。

「二人は？」

「給湯室の方。祥子さんは洗い物してる。久保田さんは換気扇の下でタバコ」

親指で玲華が後ろを示す。

あいつ煙草なんか吸ってたのか。見たことが無かった。

我慢してたんだろうか？ふとそう思ったけど、俺はべつに気管が悪いわけじゃないから違うな、と思い直す。

「で？……なんだっけ？」

「んもー寝ぼけすぎ。ゆするネタでしょ」

「脅しからゆすりに変わってんぞ、おい」

どちらがマシかは知らないが…。

どちらにしても悪いことだ。堂々としている玲華の心情が理解できない。

「なんかあった？」

「有ったか無かったかと聞かれれば…有ったかな」
険しい顔ではつきりしない言い方をする。

「……あつたんなら良かった…んだよね？」

「頑張るわ」

不安になったから確認するように聴いたら、よくわからない答えが返ってきた。

なんか気合いが入った眼で上の方を見ている。ますます不安だ。

「その内容は？」

「浅霧雅男氏が取締役をしてる株式会社シュウリスという企業がある」

一服が終わったらしい久保田が、変わりに答えながらこちらに来了。

株式会社シュウリス、俺でも聞いたことがある大企業だ。輸入家具などを扱っていて、テレビのCMでも良く見る。

「どうやらお金の流れで怪しいところがあるな。裏帳簿が存在するみたいだ」

「それが功男様に隠してるかどうかは分からないけど…。でもそういうことになったら、皆が仲間ってことになっちゃうわ」

想像したより、大きな不正が見つかったようだ。だからこんなに空気が重いんだ。

俺としてはデカすぎて、高い位置にありすぎて実感がわかない。

「頑張るっていうことは、それを脅しに？」

「まだよ。情報だけなら簡単に言い逃れできてしまうわ。現物をつきつけないとね」

「ここからはオレがする。おまえらは連絡待ちだ」

仕事前の、それもあり厳しい顔つきで久保田が低い声を出した。それがさらにヤバイことなんだって実感させた。

俺は正直ビビって言葉が出なかったけど、だけど、玲華は黙ってなかった。

「冗談でしょ？ここまできて、ただ待つてるなんてイヤだわ」

「向こうが本気になればオレらなんてすぐ潰される。探っていることを、いかにバレずに目的のものを掴むかが重要なんだ」

「危険なことぐらいわかってるわ。でも言い出したのはあたしなのよ！」

「最悪の場合、相手は人殺しすら出来てしまうヤツってことになる。君は殺されたいのか？」

「んなわけないでしょう！それも含めてわかってるつつてんの！覚悟はしてるわ」

「駄目だ！オレは悠汰は護るが君は護れない！二人同時に危険が襲えば、迷わず悠汰を護る」

「護ってくれなんて誰も頼んでないでしょっ！なによ！いきなりやる気出さないでよ」

どちらも一歩も引かなかった。さっきは押し付けあったのに……。対等に渡り合えている玲華はスゴイ、と何度も思っただけ……。だけど俺は見てしまった。玲華の拳が震えているのを。

玲華だって恐いんだ。それを押し殺して、いろんな想いで引き下らない。

強いって思ってたのに、やっぱり玲華も普通の高校生なんだ。俺と同じ。

「玲華は俺が護る」

そんな力も無いくせに、なに言ってるんだと言われればそれでoshiまいだけど、俺は本気でそう思った。

「悠汰」

「おまえ……」

「だけど玲華、証拠を掴むのは久保田さんに任せよう。そっからの脅しとか、調査には参加させてもらうからな」

なにか言いたそうな二人を無視して、俺は勝手に仕切った。このままでは終わらないと思ったから。

「ってことでもう寝ようぜ。いくら明日休みって言ってももうこんな時間だし」

俺は掛け時計を指差した。

時刻は午前四時すぎを示している。早くから仕事が始まる人にと

つては、すでに朝だ。

「昼夜逆転しまくってるおまえが言うな！」

「あんたお昼もさつきもすでに寝てたじゃない！」

二人にすつごく非難されたけど、不思議とその前についての提案は却下されなかった。

誰も何も言わなかったから、多分納得したんだろう。

* * *

玲華は欠伸を何度もしながら祥子さんと祥子さん家に帰って行った。

俺はそのままソファで寝てしまったけど、久保田も家には帰らず事務所で寝たみたいだった。…みたい、つてのは俺が起きたときにはもういなかったから。

それがだいたい朝の九時頃。

ソファで寝たせいか体が軋んでちよつと痛い。

好きなだけここにいろ

夜までには帰る

テーブルの上を見ると、たった二行の置き手紙があった。

ぼーとしていたら昼前くらいに玲華たちが来て、ご飯を祥子さんが用意してくれた。

手紙を見て玲華が。

「なんか愛人相手に書いたみたいな内容ね」

と言っていた。よくわからない評価。

その場合、俺が女になるんだろうか。…余計な心情が増えた。

「悠汰、午後からどうすんの？」

祥子さんが作ってくれた朝食兼昼食のオムライスを食べながら玲華が言う。

「アイツの帰り待って…、家に帰る」

「ええっ？」

モゴモゴと俺もオムライスを口に含みながら答えたら、すごくびっくりされた。失礼なやつだ。

「ずっとここにいろわけにもいかなえし…フロ入りたい」

「だからウチでいいのにつて言っただのに…てゆーか、お風呂入っていないんだ…。そういえばそーか」

そっかそっか、と繰り返しながら、ちょっと玲華が離れた感じがした。やっぱり失礼なやつ。

「じゃあウチで入っていこうよ」

「いい…」

「遠慮しないで、ってゆーか入って」

強引に言われたもんだから、本当にお風呂だけもらいに行ってしまった。

確かにやることもないし。

眞鍋さんの運転で事務所と玲華の家を往復した。

その間両親に会うことはなかった。まるで鬼の居ぬ間にナントカみたいで、いいのかなあつてちょっと思ったけど、どうせ葛城さんが報告するんだから知られるんだろう。

玲華も何故かまた事務所までついてきた。

暇なのつて言っていたけど、多分玲華も心配なんだ。

昨日の今日で…：時間的には今日の今日か…：なにか危険な目に遭つてるとは思えないけど、気にはなってる。

だけど…：わたしにも連絡がないなんて、初めてのことで、と祥子さんが言った。

それから三人で久保田の帰りを待っていたけど、結局久保田は帰って来なかった。午後八時くらいに、「帰ってきたら連絡します」と祥子さんが強く言うので、俺たちは帰ることにした。

それからまた、眞鍋さんが俺の家まで送ってくれてる。

確かに運転手の仕事って大変だ。楽な仕事なんてないってのはよ

く聞くけど。

「明日学校か…」

窓の外を眺めながらボンヤリ玲華が呟いた。

「連休明けのサラリーマンみたいだな」

玲華も行きたくないとか、そんなことを思ったりすることに驚く。

「悠汰は行きたくないっていう日はないの？」

「俺の場合、家の方が居心地悪いから」

ただ一つの真実として言った。自虐的な発言に聞こえたみたいで、玲華が辛そうな顔をする。

そんな顔をさせるために言ったんじゃないのに。少し後悔した。

「あー、でも中学のときに純平と…純平って友達なんだけど、ソイツと大喧嘩したことがあって、さすがにその次の日は行きたくなかったな」

その喧嘩のおかげで、その後もっと仲良くなれたんだけど。そう話したら玲華に笑みが戻った。

「男の子って、そういうところはつきりしてて良いわよね」

「玲華だってハッキリ物言うだろ？」

「まーね。でも女同士だと気をつけてるわ。世羅以外には」

女って面倒なことをいろいろ考えてるなって、そんな気がした。

そんなことを話しているうちに、高級車は不似合いな住宅街に入って、俺の家に到着した。

やっぱり母親の車がある。最近みた光景が、再び目に写った。

あの時より、少しは変わってるだろうか。少しは、強くなれただろうか。

「悠汰、あたしも行く」

眞鍋さんが先に降りて玲華側の　つまり家の方　ドアを開けた。

展開についていけず一瞬間が空いたけど、慌ててそのまま降りようとする玲華の腕を掴んだ。

「や、やめろよ。俺なら大丈夫だから！」

「違うわ。確かに悠汰のことは心配だけど、そうじゃなくて、一応あたしが連れ出したから……挨拶よ」

ふんわり笑って俺の手をすり抜ける。 いや、そうじゃなくて。

（俺が見たくないんだ！）

ヒステリックな母親と、サッパリしてる玲華。絶対合わない気がする。

俺の心の叫びを無視して、なんの躊躇いもなく呼び鈴を押した。

（ウソだろ……）

応答も何もなく、母親が玄関の扉を開けた。すでに怒り狂った気持ち、押し込めてるみたいな顔をしている。

多分カメラを覗いて、この状況を理解してから出たんだ。

母親は視線をそこにいる全員に一巡させ、そして玲華を見た。

「あなたが悠汰を連れ出した西龍院さんね」

「ええ。はじめまして、悠汰くんのお友達の西龍院玲華と申します」
玲華も負けずに笑みを浮かべて挨拶した。やはり咲田さんはすべてを言っていたんだ。

「どういふつもりかしら、謹慎中のこの子を二日にも渡って連れまわすなんて。今日も帰らなかったら、警察に通報するところだったわ」

「申し訳ございません。ご連絡を怠ったことは謝罪いたします」

「ちよっ……、違う！俺から出たんだ、コイツは関係ない！」

玲華が頭を下げたのを見て、やっと今更ながら俺は声が出せた。

そんなことさせたくなかったのに、勇気がなくて迷っている内に

……どんどん進むから。

「あんたは黙ってなさい。ここではご近所迷惑だわ。不本意ながら入れてあげるから、中で話しましょう」

玲華は受けてたつわ、とあからさまに言ってる感じに頷いて、眞鍋さんに待っててと指示した。

「その車も目立つから離れたところに居てちょうだい」

「眞鍋さん、その通りに」

声もなく一礼して眞鍋さんは車に乗り込んだ。そのままエンジンをかけて走って行く。それを見送る間もなく母親に言われた。

「悠汰も早く入りなさい」

「……っ！」

なにか言い返したいのに、何を言えばいいのか分からない。

俺は母親と玲華に続いて家に入った。

扉を閉めると、いつものように間髪入れずに母親の右手が伸びた。左頬に衝撃と痛みが走る。

母親の気にする“他人の目”の中には、未成年は含まれていないようだ。玲華を飛び越えてまで制裁をくだすとは思わなかった。

さすがの玲華も、突然の出来事に息を呑んだのが分かった。

（ちくしょう！玲華のまえで！）

情けなさすぎる。こんな惨めな姿を見られたくないのに。

「二人とも来なさい」

先に立って母親はリビングに促した。また閉塞感のなか、俺はついていく。

「いきなり暴力ってどうかと思いますわ」

耐えられないというふうには、でも丁寧な口調で玲華が切り出した。それに俺が戸惑う。やめろ、余計なこととは言うな。そう止めたいのに、声が出ない。

くつろぐ空間であるはずのリビングが、その役目を果たさずに暗くて嫌な空気に包まれる。

母親が聞こえるように舌打ちをした。

誰も座ろうともせず、母親も丁寧におもてなしするつもりはないみたいだ。玲華も玲華でそんなものを望んでいないのがわかる。

「他人は口出ししないでくれる？わかってるの？あなたは人の息子を連れ出したのよ！誘拐犯と言われても否定できないの」

「わたくしはただお友達を誘いに来ただけです」

「そんなことで通用するほど、この世のなかには甘くないのよ。私が

訴えればどうなると思う？」

「おば様こそご存知ですか？男の子が一泊開けたぐらいで警察は動きません、通報したって笑われるのがオチです」

「生意気言っんじゃないよ！」

母親の中のなにかが切れた。一喝して手を上げる。

ブツ気だ。

そうわかってから、俺は今まで動けなかったのが嘘みたいに咄嗟に間に入った。二発目はなぜかそんなに痛くなかった。ナリフリ構ってられない母親の、感情に任せての平手打ちだったのに。

「悠汰！」

「なにしてんのよ！あんたは！」

俺が玲華を庇ったのが面白くなかったみたいで、更に三発立て続けに殴られた。

殴られるのは、慣れてる。

言葉では勝てないけど、殴られて母親の怒りが収まるなら、それでいい。玲華が殴られるより、ずっといい。

「やめてください！どれだけご自分が理不尽なことしてるか、おわかりですか！」

「うるさいんだよ！小娘が！どこのお嬢様が知らないけど人の家庭に口出しすんじゃないよ！」

「あー。悠汰くんが口が悪いのはお母様に似られたんですね」

「なんですって！いい加減黙りなさい！」

また、母親が手を上げる。

やっぱりだ。だから見たくなかったんだ。

感情的に暴力をふるう母親と、公平で正義感溢れる玲華。どれだけ母親が叫んでも玲華は逃げない。それは殴られることも恐れず、立ち向かうことさえ厭^{いと}わないほどに。

「もうやめろよ！」

見たくないんだ。余裕のない母親も、俺のせいで傷つく玲華も。
「もう帰ってきたんだからそれでいいだろ！俺が悪いんだ！」

母親の手が止まったのが確認できた。少しだけ力が抜ける。

「俺が悪かったから…もう、やめて。……誘拐なんて、されてるわけがない。俺が…逃げ出したんだ」

心から望んで出て行っただけ。解放感さえあった。だから後悔なんてしていない。

「言いつけを破ったら、どうなるかわかってんでしょね」
(破ったら?)

……わからない。

今まで母親の機嫌を損ねたことは多々あったけれど、こんなふうに罰から逃げたことはなかったから。

これ以上なにかあるっていうんだ。

自然と心が沈む。世界が暗く、狭くなる。

「ダメよ、そんなこと」

玲華の声が自分の世界を切り裂くように俺の中に刺さった。心臓の真ん中。世界全体が戻された感覚があった。

「良くないわ。なんにもわかってもらってないじゃない。そもそも謹慎処分が不当だって言った?おば様も、彼から事情をお聞きになりました?」

親子の間を取り持つように言う玲華に、母親は僅かに声を落とす。視線を横に向けた。

「子どもなんてね、平気で嘘をついたり言い訳して逃げたりすんですよ。だから聞いても無駄よ!信じないことにしてんの」

「そんなこと思ってたんだ…」

初めて聞いた母親の本音。

気づかなかったと言えは嘘になる。だけど気づきたくなかった。思い知りたくなかった。ひと欠片も信用されてないことなんて。

「いつ、俺が嘘をついたって?」

笑えてくる。全然可笑しくないのに、不思議と笑みが止まらない。とうとう俺は狂ったのかもしれない。

「なんなの?」

気味悪そうに母親が顔を歪めた。

玲華は……。分らない。玲華を認識する余裕がない。

「言ってみるよ、いつだよ。…わかるはずないよな。一度だってまともに聞いてくれてないんだから……」

最初から、子供のときから一度だって最後まで俺の言葉を聞いたことないくせに、勝手に決めるな。

「決めつけないで。俺のことコントロールしないで」

「決めてあげないと何も出来ないからじゃない！すべての入試に失敗して！高校だって友達と一緒にいいなんて、あんな三流高校行こうとするし、バカじゃないの！」

母親は棚に飾ってあったものを掴むや否や俺に向かって投げつけた。

右腕の二の腕に衝撃があった。

勢いが止まらず壁にも当たり重い音がしてそれが落ちた。置き時計だった。ガラス部分が欠けて、電池が転がってる。

「ほっといたらロクなことしないじゃない！変な事件には巻き込まれるし、ぶっさいくな顔して帰るし！今度はなに？外泊？呆れてモノも言えないわっ！ウチも神崎にも、そんな落ちこぼれ今までいなかったのよ！誰に似たのよあんたは」

ほら。結局こうなるじゃないか。少しでも言い返したら何倍にもなって帰ってくるんだ。

「話を聞いてないって？あんたなんかすぐ黙り込んで何も言わないくせに！なにか言い返したいならねえ、結果を見せてからにしてちようだい！」

言っても無駄なんだ。

この人には何も届かない。俺の言葉も想いも、なにも。

「いい加減にしてください。悠汰はあなたの道具じゃないわ」

まただ。また暗闇に光が射したみたいな感覚を覚えた。

いつもと違うのは玲華がいたことだ。玲華の声が濁ったこの家を浄化して、解放する。

「決めて“あげてる”ですって？冗談じゃないわ。自分のことは自分で決めるものなのよ！それは親だろうと口を挟む権利なんかない」「あんたにはもつと口挟む権利ないわよ。ぬくぬくと育ててきた箱入り娘は箱から出てくんなよ！」

「やっぱりね。あなたは人を見る目がないわ。自分の教育が下手つくそだったのを悠汰のせいにするなって言ってるの！」

「なんですってえ！子育ての苦労も知らないガキのくせに！」

なんでこうなるんだろう。母親の怒りの矛先をいくらこちらに向けても、何度も玲華は突っ込んでくる。

玲華はただ護られてるお姫さまじゃなかった。

今ごろ綾小路の言葉なんかが出てくる。

（確かにな…）

納得できる。

「もういいよ玲華」

もういいんだ。変わりに怒ってくれた。それだけで嬉しいから。

「もう帰っていいよ、ありがとう」

玲華の腕を引っ張ると、彼女は戸惑った。

「あ…でも……」

「待ちなさい！まだ話は終わってないわ！」

「話？」

よく言う。人の話なんか聞かないくせに。話し合いなんて無理だ。八つ当たりの間違いなんじゃないの？」

他人の子ども相手にまで、こんなふうに感情的になるとはさすがに思わなかった。幻滅させられた。

だから有無を言わずに玲華を玄関まで送った。

これ以上ここにいたら、どんどん彼女に嫌な想いをさせる。そんなのはイヤだから。

「悠汰……」

心配そうに俺を見て、なかなかサンダルを履こうとしない。

「大丈夫だから」

なるべくそう見えるように笑みを作る。

でも本当に心が軽かった。どこかでまだ痛むけれど、重さがないだけマシに感じるんだ。

「悠汰！勝手なことを！」

外に出るまえに母親が鋭い声で呼び止めていたけれど、追いかけてまでは来なかった。

「眞鍋さん、呼ばなきゃ」

珍しく動揺しているのか、玲華の動作が遅い。あんな母親のまえでは対等でやり合っていたのに。

変なヤツだな、と思う。

でもそうさせたのはたぶん俺だ。いきなり強引に帰すような感じになったから。

「ごめんな。嫌な思いさせて」

玄関のまえの段になっているところに座りながら、思ったことを口にした。

玲華は携帯電話を取り出すと、呼び出し音が掛かったのを確認するだけで、出もしないですぐ切った。

そのまま汚れるのも気にせず俺の隣にくる。

「うん、驚いた」

「……………普通、タテマエでもそんなことないよ、って言わねえ？」

素直に頷くもんだから、ちよつと可笑しい。

「嫌な想いしたのは本当だから。っていうか……………悠汰がそういう気持ちにさせられてるのが、嫌だった」

真面目に玲華が答える。

「それにそういう社交辞令的なクライでしょ」

それから苦笑いした。

確かに俺はそう言った。玲華にはちゃんと伝わってる。

この世のなか、全員が親のような人間じゃない。それが分かるたび救われたような気持ちになるんだ。

* * *

玲華を見送って家に帰ると、母親はダイニングの椅子に座って頭を抱えていた。俺が入ってもそのまま口を開いた。

「なんなのよ。みんな勝手なことばかり！人の気も知らないで」

みんな？

複数に向けた怒りなのか。

「兄貴は？」

気になって聞いたら、母親が弾かれたように立ち上がりテーブルを力任せに叩いた。

「帰ってないわ！最近塾にも行っていない日があるのよ！ねえ、あなたのせいなの？あんたが勝手なことばかりするから惣一にまで伝染したの？」

そんな病原菌みたいなこと言われても困る。兄貴だって、俺を見下してる内の一人なのに。

（俺にとっては、親と同類で）

だけど、それでわかった。いつもより激しかった理由が。

「伝染^{うつ}るわけじゃないよ…。彼女でもできたんじゃない？」

「あんたと一緒にすんじゃない！女にうつつ抜かすなんて十年早いだよ！」

そうかな。高三なら充分じゃないかな…。相手が世羅^{せら}つてのはあり得ないと思うけど、本当にいる可能性だって充分ある。

だけどもた座り込んで、ため息をついている母親は、とても小さく見えた。昔は、父親の次に恐ろしかったのに…。

いつのまにか、俺の方が背も高い。

（力も、きつと……）

「お父さんに報告するからね！」

そうか。こういう奥の手があっただんだ。
軽くなった心が、また沈んでいった。

第四章・・・1

「やっちゃったなあ…」

どんよりとした天気。いまにも雨が降りそうだ。

そんな空は見えない位置に部屋の中のソファは置いてある。

悠汰のお気に入りの場所で、あたしは半分横になって、クッションを抱きしめながら何度目かのため息をついた。

空と同じどんよりした気持ちで。

「またですかあ？もう元気出してくださいよ。大丈夫です…って！」
ヒデが絨毯をコロコロしながら相槌を打った。

一度は染み付いたこのソファも、どうやったのか、すでにヒデの手で完璧に綺麗になっている。

（ヒデは良い奥さんになるわ。はあー）

「だってさあ…フツー自分の母親と喧嘩するような女なんて引くでしょう？」

そう、あたしは自己嫌悪にうちひしがれていた。やり過ぎたかなあ…って。

「珍しいですね、そんなに悩むなんて…。らしくないですよ玲華さま」

「えー、そーお？あたしだってウジウジすることくらい…」

「そんなに好きなんですか？神崎さまのこ。あつ、無くなった」

ちようどコロコロの粘着テープ部分が終わったみたいで、サクサクと喋りながらヒデは替えを取りに棚に行った。

（好き……なんだよねえ）

一度気づいたら、止まらない自分がいて驚いた。驚きの連続だ。いつもなら他人^{ひと}ん家のもめ事には手を出さない。手は出さないベキだと思っていた。そういうのは、あくまで当人たちの問題で、当人たちじゃないと解決しないものだと思うから。

「でもあまりにいつもと違うんだもん」

悠汰が。

なにも言わなくなる。

顔つきからして違った。戦意喪失したみたいだ。

悠汰が護るって言うてくれたときは、心臓が止まるかと思った。

それぐらい嬉しかったのに、あの失態だ。これじゃあ、どっちが護ってるんだか分からない。

（まー、護られるのなんてガラじゃないけどね）

「なにしてんのかなあ……いま……」

ちゃんと食べてるかな、とか、ちゃんと寝てるかな、とか凄く気になる。

「そんなに気になるなら連絡とればいいじゃないですか」

替えテープをセッティングすると、またコロコロしだしてヒデが言う。

「PCメールなら送ったけどねー、昨日。……あーあ、携帯プレゼントしようかなー」

「やり過ぎちゃダメですよ。ウザがられたら元も子ありません」

「……意外とマトモなこと言うじゃない」

ちつ。ヒデのくせに。

でも確かにその通りだ。タキシードあげてもそんなに喜んでなかったし。

一緒にいた二日のなかで、一番喜んでくれたのは食事中だったかな……って思う。

（ちつ、料理か……）

「ねえヒデ。あたしにも料理ぐらい出来るわよね？」

「……………」

なんとなく訊いただけなのに、ヒデはコロコロする手だけ動かして、あとはフリーズしやがった。

「ちよっと！無視とはいいい度胸ね！」

「……………玲華さま、そんなに好きなら言っちゃったらどうですか？」

「もう言ったわよ！コクったわよ！一昨日」

「えええっ!!」

なぜかヒデが真っ赤になって慌てた。話を逸らしたくて言っただけみたいだった。ふんっ!

「で、神崎さまはなんて?」

「聞いてない! てゆーか、それどころじゃないみたい」

本人も認めてるみたいだけど余裕がないんだ。あたしだってそれはそうだけど。

久保田さんは結局帰ってきてないみたいだ。なにかあれば祥子さんからあたしの携帯に連絡が入る。そしてあたしから悠汰に連絡する約束になってるんだけど…。

なにやってんだろうか、あの人は。無茶なことをしなければいいのに。

(なんかあつて悠汰が悲しんだらタダじゃおかない!)

「なんですか? それ。なにがあつたつて、恋愛は別でしょう」

「えー、どっちがらしくないのよ。じゃあヒデは好きな子いんの?」

「ぼくだっていますよ」

あたしの顔も見ないでコロコロしたままで、ヒデがあっさり白状した。初耳だ。

「誰? あたしの知ってる子?」

「ぼくのことはいいいんです。いまはここで玲華さまのお手伝いさせていただいてる方が楽しいですから」

「あんたもねえ、いつまでもこんなことしてなくていいのよ。ヒデは使用人の息子だつて悠汰に言つてたけど、ヒデが使用人なわけじゃないし、あたしが立場が上とかでもないんだからね」

なんつーか…それってどうなんだろうって思って改めて秀和に言つた。

彼が好きでやってくれてるつてことはわかっている。

だけど、縛りだと感じるまえに、好きなときにやめて良いつて、ちゃんと伝わればいいと思った。無用な負い目なんて感じずに。

「はい。わかってます。ぼくは父の仕事も尊敬してますし、玲華さ

まのことも……」

途中でヒデの言葉が止まる。それは扉がノックされたからだだった。
「はい」

ヒデがコロコロをやつと手放して客人を出迎えた。
もうちよつと突っ込んで聞きたかったけど、解ってるみたいだからいつか、と諦める。

ヒデが開けた扉から現れたのは、なんと綾小路だった。ノックして訪ねるなんて初めてのことだ。いっつもアホなこと言っつて勝手に入つて来てたのに。

……間が悪いところは変わつてないけど。

「やあ玲華。……邪魔だったかな？」

「とんでもないです！どうぞお入りください」

ぼかんとしてたら、勝手にヒデが招き入れていた。まーいいけどさ。

「ずいぶん、くつろいでるんだね」

クッションを離さないままのあたしを見て、綾小路が戸惑っていた。

しょうがない、起きるか。

上体を起こし、座り直して制服も整える。

「あなたはずいぶん節操が出てきたのね」

「もうそれは言わないでくれ」

ちよつと気恥ずかしそうに言つて向かいに座った。確かにネチネチ言い過ぎたかなあ、と反省する。

「聞いたよ。犯人に襲いかかつて逮捕したそうじゃないか」

「襲いかかれたのよ！誰よ！間違つた噂ながしてんの！」

どこから漏れたのか、学校に来てみたらちよつと脚色された噂で持ちきりだった。

（あたしが襲いかかるって現実的に無理よ！）

相手が来てくれてやつと特定の人物がわかつたっていうのに。

あの会場には校内の生徒もいたし、バレるのは仕方ないけど、こ

んな噂になったのはあたしが本性を出したからだろうな。自分ではそんなにギャップがあるとは思えないんだけどね。

「噂だからね、すぐ消えるさ」

「そんなくだらない話をしにきたの？」

「違うよ」

続けて言う前にヒデが間に入った。

「なにかお飲みになりますか？」

あたしのまえにある、九割り飲み終わったアイスコーヒーのグラスを見つめながら綾小路が言う。

「ここには冷たいドリンクもあるのかい？」

「ヒデが保健の高科先生から氷もらってきたの」

おまけになんと保健室の冷蔵庫の一部を使わせてもらってるようだ。

今日知ってあたしも驚いた。

球技大会のバスケットで突き指して保健室に行ったらしい。それをきっかけにいろいろと話が咲いたようで、高科先生と仲良くなったとのことだ。そしてさっき、氷をアイスボックスに詰めて頂いてきていた。

ヒデはあたしが知るなかで一番年上キラーじゃないかと思う。

確かに母性本能くすぐるタイプではある。…のかな？あたしにはよくわからないけど。同じ年だから。

「アイスコーヒーならすぐお持ちできますけど」

「じゃあ頼む」

まるでウェイターみたいな受け答えをして、ヒデは楽しそうに作りに行った。

「ちょっと気になってね。……君は世羅君とケンカでもしたのかい？」

話したかったのはそれが。あたしはため息を噛み殺した。

「そっか、聞いてたんだ。でもケンカじゃないわ」

「そうかい？神崎兄弟がややこしくしてるみたいだったけど」

ちつ。しつかり聞いてやがる。世羅と一緒にいたのが悠汰の兄
というところまでちゃんと。

あんだけ大きな声で喋ってたから、仕方ないといえばそれまでだ
けど。

「それは誤解よ。って…まさか悠汰にそういう話してないわよね」

「してないよ。というより出来なかった。なにやら事情がありそう
だったからね」

さすがは綾小路家の嫡男というところか。

すべての情報を逃すことなく収集し、ちゃんと自分なりに噛み砕
いて判断している。

「ならいいけどさ。世羅のことならなんでもないわ」

「ここにいないみたいだけど？」

綾小路は痛いところ突いてくる。

「だから心配いらないって…」

「僕にも手伝わせてくれないかな」

あたしの言い終わらないうちに、綾小路は両目を細めて笑って言
った。

またなにを言い出してんだろう、この人は。あたしは頭が痛くな
った。

「あのねえ…」

「犯人探しをしてるんだろう？」

ああ、やだやだ。頭がいいやつってこれだから。適当に誤魔化せ
ない。

仕方ない。まずは相手の力量を判断しよう。

そう思ったときにヒデがアイスコーヒーを持ってきた。律儀にあ
たしのお代わりまである。遠慮せずにお礼だけ言って、新しい方を
一口頂いてから話の続きを切り出した。

「なんか知ってることでもあるの？」

「ああ。少なくとも神崎よりは、な」

「……なによ、その言い方は。いっとくけどアリバイのことなら知

ってるわよ」

「あいつ…口止めたのに」

独り言のように綾小路が呟く。

「まったく、コイツが原因か。すべての現況とまではいかないかもしれない。でも確実に綾小路の一言で悠汰は迷ったはずだ。」

「言ってないわよ、悠汰は。知ってたの、あたしが！余計なナミ立てないでよ」

僅かに綾小路は意表をつかれたみたいな顔をした。

「やっぱり悠汰は損するタイプだ。あの正直すぎる態度のせいで誤解が多い。」

それでも最近は徐々に雰囲気が柔らかくなっている。まだ不安定なときはあるけれど、怒鳴る回数が明らかに減っていた。

でも、それでライバル増えんのは困るんだけどな…。複雑だ。

「それは悪かった。誰も君には伝ええないと思っただよ」

「まー、確かに誰も言ってはいないけどね。なんとなく耳に入るものなのよ」

「適当にあたしは流した。まさか警察の情報を探りましたなんて、冗談でも言えない。いまの綾小路にはまだ。」

「で？目撃者の悠汰より知ってることってなに？」

「…そうだな、じゃあ犯人のことを推理してみないかい？」

「推理？」

「例えば、通り魔の犯人が別に捕まったことで分かることがある。梶さんを殺害した犯人は通り魔に見立てた殺り方をしてるけれど、そうするにはどうしても必要な技術がいる」

「それは…心臓の位置ね」

「そう。どれも背後から正確に心臓を狙ったひと突きのみで即死させている。知識のないものには到底無理だ。実際に今回捕まった犯人は外科医だったそうだよ」

満足そうに綾小路は頷く。

気づかなかったわけではないが、それならばどうしても腑に落ち

ないことがある。

「浅霧家のなかにそういうことに長けて^たいる人はいないわ」

医師はもちろん、それに近い職種の人もいない。

「どうして、浅霧にこだわる必要がある？」

「それじゃ…誰が？」

「まずはプロファイリングを聞いてくれるかい？先程言ったような殺害方法では、梶さんのような大人の男性を殺害することは女性には無理だ。力が無いし、敵うものでもない。これで世羅君は外される」

「そうね」

間違いない。世羅は違うんだから。

素直に頷いてから、ふと疑問点を感じた。ならばなぜ刑事は世羅を見張っていたのだろう。一介の高校生が気づくことだ、警察だつて簡単に思い付くことのはずだ。

「男性で医学の知識があるものが犯人だと思う。そしてその中でも梶さんより体力のあるもの」

なぜか焦らすように綾小路は一旦言葉を切つて、アイスコーヒーを飲んだ。

その術中にはまり、すでにあたしは綾小路の話から逃れられない。

「そういえば、神崎惣一さんって、医学部志望なんだってね」

綾小路の言わんとしてることがわかつて、あたしはイヤな顔をした。

「悠汰のお兄様が犯人だと言いたいのか？」

「怒らないでくれ。あくまでも、ただの推理だ。可能性の話をしてるんだよ。彼なら心臓の位置も把握できてるだろうし、力だってあるだろう」

「いえ…無理だわ。まだ高校生つて聞いているわ。いくら志望してるからって…。それに動機がないもの」

やっぱり腑に落ちなくて、あたしはかぶりを振る。

可能性の話でもこんな話はしたくなかった。いくら鼻屑目で見て

いると言われようと、悠汰の兄というのは考えたくない。

「動機なんかは後から見つかるものさ。だいたいそういうのは本人しかわからないからね。……では神崎の父親が絡んでは思えないかな？ れっきとした内科医だそうだよ」

「いい加減にしてくれる？ いくらなんでも神崎一家を絡めすぎよ」
あたしはなるべく冷静に否定をした。ここでキレるのは得策じゃない。

「だけど玲華。不思議には思わないか？ あの日あのタイミングで……しかも世羅君とともに現れた神崎惣一に。彼は一体何しに来たんだろうね？」

なにを……か。あたしだって知りたくて仕方なかった部分だ。けど悠汰には聞けそうにない。

答えられない変わりに、あたしは一番ありえない疑問を提示した。

「そもそも、世羅が梶さんを殺した犯人と一緒にいると思う？」

「……………騙されてるんだとしたら？」

「世羅が？」

迷いながらも言った綾小路に、間髪入れずに切り返す。警戒心の強い世羅が、とくに男性に騙されるなんて考えられない。

「意外と、騙されやすい人っていうのは、彼女みたいな人だったりするよ」

足を組み換え頼杖について、なんか首を傾けて諭すように綾小路は言った。

なんて意地悪な……。

これでは逃げ場がない。四方八方塞がれて、あたしは返す言葉を失った。

「警察もすべてを読んでいて、世羅君を張っている振りをして神崎惣一を調べていたのかもしれない。いや、それともはじめから尾行をしていたのは、神崎惣一だったのかもしれないな」

「どうして尾行のこと知ってるのよ？」

いくらなんでも情報を持ちすぎてる。あたしでも、あのパーティ

の夜に目撃していなければ掴めなかった。

いや、正直なところあたしは目撃してない。悠汰に言われて見たけれど、遠すぎて分からなかったんだ。

悠汰の目の良さに脱帽した。そして動体視力も良い。前にあやなちゃん^{あやな}が告白した場面^{あやな}のときも、萩原^{あやな}くんのちよつとした動きに気づかれたのだ。それはスポーツでも活かされてる。

「睨^{にら}んでる顔も素敵^{あやな}だけどね、怒らせるつもりで話してるんじゃないんだよ」

「逸^{あやな}らさないで」

端的に答えを促す。目線だけで捕らえて逃がさない。

考えたくないが、久保田^{あやな}さんになにかあつたら、今のあたしたちには助ける術がない。少しでも早く、確かな情報が欲しかった。

綾小路^{あやな}は信用に足る人物か、迅速に判断しなければならぬ。

「まったく…。変わらないな、君も。ちよつと二人と会話したときに気づいたんだよ。刑事の目線に」

「いつ？」

どのタイミングで。

「あの夜、ちよつとダンスに疲れて僕は夜風を当たりにガーデンへ出たんだ」

なぜか語り口調で綾小路は言う。

一応綾小路はモテる。年齢層幅広く、毎回こころ相手を変えて踊っているのをよく見ていた。

あたしには解らない！そういう女性の心境がっ。

「ああ、念のために神崎のダンスだけは一通り見ておいたけどね。ぶっ」

聞いてもないのに、わざわざ言うかつ！そういうこと！しかもこのあたしのまえで！

（それも笑い付きで！）

「あんたねえ！」

「どうして玲華は踊らなかつたんだい？」

この野郎っと思って勢いづいたら、変わらない態度で綾小路は訊いた。

収まりつかなくなつて妙な間が空く。

「っ、なんでもいいでしょ！」

正直あんなときはそれどころじゃなかったし。ちくしょー、やつぱり踊っておけばよかったか。

きつと悠汰ならあたしが踊つてと頼んだら、踊ってくれたと思う。嫌そうな顔をしながらも、ぎこちなく、でも丁寧に扱ってくれただろう。

もう、あんなチャンスはこないかもしれないな、って思つたらちよつと寂しかった。

「それよりなに話したの？その二人と」

「奥の草むらから会話が聴こえるから、見てみたら先に二人がいてね。僕を見てすぐく気まずそうな顔してたなあ」

「二人はどんな話をしてたの？」

「さあ…数秒だったからね。僕もそのあと挨拶をしたくらいさ」

「うそでしょう？言わないのなら…」

「本当だよ。あの場で無粋な真似は僕には出来ないからね」

綾小路は肩をすくめた。

ダメじゃん。せつかく絶えて聞いていたのに、肩透かしを食らつた気分だった。

ため息について横を見ると、結局あたしたちの会話中、ずっと秀和はコロコロしっぱなしだったようだ。絨毯剥かれるんじゃないかしら！

* * *

どんよりした空は耐えることなく、夕方にはそのまま雨となつてすべてをはきだした。

遠慮することなく大地に降り注ぐ。

あたしは家のリビングから雨の音を聴いていた。

結局、綾小路の申し出には丁重にお断りした。別に信用できなかったとかそういうことではない。

あの話、悠汰にはできそうにない、と思っていた。本当は言うべきかもしれない。ひとつの可能性としてそれがあるのなら。ちゃんと話して、調べて、否定できる材料を探すべきなのかもしれない。

確かに綾小路の推理は、むちゃくちゃだけど一応筋が通ってる。

これで、なんらかの動機が見つければ…。

手帳にあったRの文字。インシヤルだった場合該当しないけれど、悠汰のお父様の名前はなんだろうか。

綾小路は断ったあとも、「なにか詰まったら言ってきてくれ。いつでも力になるよ」なんてキザに笑っていた。

気持ち嬉しいけど、素直に喜べない。綾小路の気持ちがわかってる以上、それに応えられないのならば、借りはつくるべきではないのだ。

彼の心配の内容はわかる。あたしと世羅のことだ。確かにこんなふうに口を聞かない喧嘩は初めてだった。

（まずは世羅の気持ちを知らない…）

考えないといけない。

振り出しに戻って1からちゃんと、考えないといけない。世羅からはなにも教えてもらえないだろう。

彼女の態度があからさまに違ってきたことは、梶さんが殺されたことが原因だとは思えない。

どこかにヒントがあったはずだ。知らず知らずのうちに、あたしは見逃していたはずのなにかが。

彼女はいきなり感情を表す人間じゃないから。それは長い付き合いでわかってる。

もういいんじゃないか。

そう世羅は言った。長い付き合いだからこそもいいと。それから…。

（悠汰の名前を出したんだ）

なんの脈絡もなく。

…… 本当に？

世羅が意味もなく悠汰の名前を出すだろうか……。世羅の気持ちのなかに悠汰が関わっている？

（まさか…）

あまりに想像し難い、ひとつの可能性があたしの胸に渦巻いた。悠汰と話したい。すごく…。

まだ、一日しか離れていないのに、すごく悠汰と話したい気持ちでいっぱいになった。

第四章・・・ 2

考えないといけない。取り返しのつかなくなるまえに。

切羽詰まって今ごろ本気でそう思う。思って焦る。

いままではまだ全然真剣に考えてなかったんだって気づく。全然足りなかった。

玲華からきたメールには、まだ久保田が帰ってきてないことを教えていた。玲華のアドレスはすでに登録済みで、間になんのメールも受信してなかったから立て続けに三件ならんでる。

直近のメールはついさっき。いずれもメールの中身は久保田の久の字も無くて、他愛ない学校のことだったりする。でも無かったからこそそうなんだってどこかで知っていた。

あんな会話の後で、あんな出掛け方をしたら、嫌でも頭は悪い方向へ思考が行ってしまうじゃないか。

（なにかへましたのか…？）

きつと浅霧家を探りに行った。それからの足取りが掴めないんだ。（こんなとき…どうすればいいんだろう）

俺はカッターシャツの予備用のボタンをいじりながら、勉強机に座って考えていた。

母親は珍しく今夜もまだいる。自分の家だからこんな言い方は適切じゃないはずだけど、本当に珍しかった。いつもやることやったらまたどこかへ繰り出すのに。

お父さんと呼ぶからね。

そう言ったのに父親は相変わらず帰ってきてない。それがさらに母親の苛々を募らせてるみたいだった。

別れればいいのに。両親の間には、とっくに愛なんて存在してない。

子供にバレてるってどうなんだよ、と思っていた時期すら超えてしまった。それでも別れないのは。

（世間体、か）

そんなにたいして近所付き合いもしてないのに、なにを気にしてるんだろ。理解に苦しむ。

でももう母親に脅威的なものは感じなかった。一度存在の小ささに気づいたらそれまでだった。

兄貴も、まだ帰ってきてない。どこにいるんだろ…。

まさか世羅と？ 警察に見張られたなかで、それはあり得ないかなってちよっと思っただ。

（俺は、俺にできることをしないと）

机に突っ伏して、ボタンに集中する。

池田がまえに行っていた課題だ。

どうしてうつ伏せに倒れ

ていた梶さんの眼を見たのか。

きつと梶さんに意識があっただ。それで現れた俺を見てきた。

それしか考えられない。他の可能性はどれもいまいちピンとこなかった。

（そこからどうなった？）

モヤがかかったように、あの眼以外が霞んでる。

記憶のなかの視界を広げる。すべての感覚に聞く。

触覚：あのと触れた、ボタンを触る。

臭覚は血と雨の臭い。

俺は少しでもあの瞬間に近づけたくて、窓のドアを少し開けている。今夜も雨が降っているから。

そして目をふさぐ。感覚を研ぎ澄ませて思い出そうとする。

視覚：あの目に釘付けだった。

そしてあれから頻発に息苦しさに陥ったからそれを思い出すのは容易い。間違ってもいま過呼吸にならないように気をつけながら、すべての感覚を過去に返す。

それから…聴覚は？

「惣一！何やってたのよ今まで！」

聴覚を意識した直後に、ヒステリックな母親の声が耳に突き刺し

た。あまりに凄いタイミングでビクリと全身が震えた。

兄貴が帰ってきたんだってしばらくして気づく。

（あつ…）

それはいきなりきた。必要なフラグが全部揃ったみたいに、突然思い出した。

梶さんは、意識が失くなるまえに俺を見て言ったんだ。途切れ途切れの消え入りそうな声で。

『あ…兄に、惣一に……気をつける………』

最後の力を使って右腕を俺に向かって伸ばしながら、そう言い残して息絶えた。

（なんで今まで忘れていたんだ…）

すべての言葉が声になってなかったけど確かに梶さんはそう言った。

兄貴のことを知っていただけでなく俺がその弟だと認識していた。

（気をつけるって…どういう意味だ？）

思い出したはずなのにまったくスッキリなくて、むしろ絶望的な気持ちになる。まったく関係ないと思った殺人事件に兄貴が、俺が関わっている。

（まさか…）

兄貴が犯人だとも言うのか？ならばなぜ世羅は一緒にいたんだろ。いったい兄貴と梶さんはどういう関係なんだ。

いてもたってもいられなくなって俺は部屋を飛び出した。まだ下で話し声がしている。

母親と顔を合わせないといけないのに、そのときの俺は構ってられなかった。

「勉強してたつて、一泊も空けて？」

「そうだよ。東大医学部に行った先輩がいるから泊まり込みで勉強を教わってたんだ」

リビングから事情を話す兄貴の声は冷静で、みっともなく狼狽えた俺とは正反対の対応をしていた。

母親もすでに落ち着いていて信頼を取り戻しているみたいだった。相手が東大医学部っていうところがポイントになったみたいで母親は誇らしげに笑った。

「そう。それは素晴らしいわ」

「ごめん、連絡しなくて。先輩も忙しい最中時間作ってまで教えてくれるって言うてくれたから塾より優先してたんだ」

「いいのよ。母さんも家にあまりいれなくてごめんね。心配だったの。あなたが彼女とか作って遊んでるんじゃないかと思って」

そのときふと、兄貴が方向を変えて階段の下三段くらいを残して立ち尽くしてる俺を見た。

ふん、とせせら笑う。

「まさか。こいつと一緒にしないでくれ」

比較されるのを俺が嫌がっていることを知ったうえでの発言だとわかった。

心の底から冷えてくる。凍りつくみたいに。

俺の存在に気づいて母親から笑みが消えた。それなのに俺を無視して兄貴に話しかける。

「ほんとにねえ。この子だけはもう、どうしようもないわね」

「おまえも余計なことはせずに勉強だけしている」

兄貴は吐き捨てるように言っ、俺の横を通りすぎ階段を上がっていった。

よく、言う。嘘をついて、母親を誤魔化して、なにかも隠して素知らぬ顔でよく言う！

「兄貴！」

「悠汰！惣一の邪魔したら駄目よ！」

怒りのボルテージが高まって振り向く。でも水を差すように母親が怒鳴って遮った。

母親がいるうちは事件のことは話せない。そう悟った。

* * *

結局兄貴とは話す機会もなく謹慎期間が終わった。

昼は兄貴が学校でいないうえに夜は母親が俺を見張っていた。そして金曜日である今朝、それに合わせてまたどこかへ出かけて行ったようだ。

久保田が帰ってきた連絡もない。

「神崎くん！久しぶり！」

思いっきりテンションが高いことがわかる声で後ろから走ってくる音がした。もう振り向かなくても誰だかわかる。

「おう、拓真」

一週間だけなのになにすごく長い間会ってなかった気分になる。拓真はしげしげと俺を眺めた。

「傷はあんまり残ってないねえ。でもちよつと痩せた？」

「気のせいだろ？」

「そうかな…でも元気そうで良かった！」

「拓真のサワヤカさが懐かしい」

「ははっ。なにそれ？」

思ったことをそのまま言ったら笑われた。でも拓真らしい悪くない笑いだった。

そのまま他愛ない話をしながらいつも通り一緒に教室まで向かう。戻ってきたんだという実感がある。いつの間にか、ただの逃げ場所だった学校が悪くないものに見えてきていた。

「悠汰！」

教室に入るとすかさず玲華が寄ってきた。まわりの生徒が一旦静まり返ったときに呼ばれたからよく響いた。

それから教室内ではヒソヒソと密談が聞こえる。こういうところ含め変わってない。ちよつと呆れた。

でも玲華が、拓真がいつも通りだから俺も周囲の反応なんか気にしないでいられる。

よお、と玲華に返そうとしたら玲華の顔つきが変化した。下から

睨み付けられる。えーと…。

「ちよつとあんた、なんでメール返さないのよ！」

なるほどな、それか。怒りの正体がわかって苦笑いした。

「ああ…悪い」

「もー今度返さなかったら電話するわよ」

「それはヤメロ」

「えー、二人メル友なの？ボクにも教えてよアドレス」

拓真がズルいと言ってきた。いや、俺はそんなになつた覚えはない。

記憶が確かなら全部一方的に送られてきたもので、そのあと続々と続いていただけだ。

「あたしが教えるわ。でも気をつけて、メールの返信は三回に一回がいいとこよ」

「勝手に教えんな。つーか充分だろそれで。送りすぎなんだよおまえは」

「ええつ、意味わかんない。対話式コミュニケーションだよ」

「そーよそーよ。もっと言つてやって萩原くん」

玲華が本性を出したことで、またこの二人は気が合い出したようだ。

「はいはい。送るようにすればいいんだろ」

敵わないと判断してさっさと席につく。

「よっしゃあ！今の言葉忘れないでね。あ、萩原くんのも教えてくれる？」

なんか楽しそうに二人は後ろの方でアドレスの交換をしていた。いつのまにか教室内は普段通りに談笑に満ちている。その隙間に陰口を言ってるやつらもいるのかもしれないが、もう嫌な空気ではなかった。このクラスは基本明るいやつが多いのかもしれない。

ずっと見渡していると、前の方で櫻井と澄川が話しているのが目に入った。櫻井は自分の席に座ってるから顔は見えなかったけど、澄川の表情は決して友好的なものではなかった。

しばらく見てたら何事もなく離れたからちよつとホツとする。考えすぎなのかもしれない。けどあのパーティーの日のことを考えると、俺が関わっている内容だったらどうしようと思ったのだ。

そのとき世羅が教室に入ってきた。

いつものように感情の読めない顔で廊下側の一場端の自分の席にっていた。

兄貴とのが気になってつい目で追ってしまふ。

「ゆーたあ……」

また分かりやすい態度だったみたいで、玲華が目の据わった顔で釘を刺しにきた。

交換は無事に終了したようで拓真はすでに他の友人達と喋っている。

「わかってるよ……。あ？でももう結託してんのはバレてるし、なんにも問題ないんじゃない？」

「……………そういうことじゃないわよ」

なぜか玲華の勢いがなくなった。辛そうに世羅の方を見つめている。様子がおかしい。

またなにかひとつ、重いものでも抱えたようなそんな顔だった。

俺がいなかった間なにかあったんだろうか。

そういうことをメールで教えてくれればいいのに。もどかしい気持ちになる。

「じゃあ……どういうことだ？」

聞くのにすごく体力がいった。だけど流れでもあったし、気になったから恐る恐る訊く。

そしたら玲華はその表情のまま口元に笑みを作っただけだった。

誤魔化すような、とりつくろうような、そういう笑い方は玲華にはしてほしくなかった。

* * *

昼休み。

することもなくてぶらぶら廊下を歩いていたら杉村に呼び止められた。

「神崎、ちょっと」

ちやうど近くにあった人気のない実験室に手招きされる。

「なんですか？」

適当な位置に座った杉村から少し離れて俺も丸椅子に座った。なんとなく話の内容はわかっていた。この日このタイミングで考えられることはひとつだ。

「いやな、噂を聞いてな。謹慎中に外出してまた警察に行ったっていう……」

やはりか。

事件を目撃したときに噂が流れたときや、それまでの異端ぶりは腫れ物に触るかのようににも言ってこなかったのに……。問題が続いて放っておけなくなっただんたろう。

「どんな噂か知りませんが、謹慎中に外出したのも警察署に行ったのも事実です」

「神崎、あまり自由な行動ばかりすると謹慎だけでは済まなくなるぞ」

素っ気なく答えた俺に杉村がグツと眼に力を入れた。

つい疎ましく思う。なんの事情も知らないでいきなりの説教は納得いかない。

「校長先生の判断がすべて正しいとは思わないけどな。だからこそ、人に誤解を与えるような真似を自ら起こすことはどうかと思うんだ」

「先生はそうやって権力に屈してきたんですね。だけど俺はごめんです」

「神崎！」

「長いものに巻かれないやつはそうすればいい。俺はダメだ。駄目なんです、今のままじゃ」

怒鳴りたい気持ちを堪えて言葉を続けた。かつて池田に言われた

ように、まずは杉村から話してみようと思った。

「それを否定してるんじゃないんです。そういうのは、自分をしっかり持つてるやつが出来ることだと思うから……今の俺はただ足掻くことしかできないん、です」

「なにか悩みでもあるのか？」

「先生にだって悩みぐらいあるでしょう」

「先生のことはいい。神崎の言うことも一理あるが協調性も必要だぞ。悩みがあるならいつでも聞くし、とにかく問題を起こすな」

「先生は……ケンカしたことどう思ってます？やっぱり校長先生みたいに、俺に問題があつたと思いますか」

「納得いかないのも解るがいつまでも引きずっていたら前には進めない。その処分はもう終わったことだ」

違う気がする。

話し合いつてこういうことじゃない気がする。話が噛み合わなくてすれ違う。

でも当たり前だった。杉村はただ俺に警告をしたいんであって、話し合いと思っているのは俺だけだったから。

「なんで俺の質問には答えないんだよ」

「神崎……」

「もう終わったことぐらいわかってるよ。いまさら時間は戻せない。戻りたくない。もう一度この一週間を体感なんてしたくない」

「神崎？」

「じゃなくて、先生がどう思っているか聞きたいのに、なんでかわすの？逸らすの？」

心配そうな顔で杉村が覗き込んできた。

そんな顔すんな。ぶつかってくる覚悟もないくせに、わかったようなと言つな。

「なあ、先生だったらどうした？いきなり先輩に絡まれたらさあ、おとなしくやられた？協調性ってそういうときどうすんの？」

違う。八つ当たりしたいわけじゃない。なのに苛々して止まらな

い。

教科書に載ってるみたいなことしか言わないから、入ってこない俺には。

杉村は困ったようなため息を吐いた。それからちよつと前屈みになつて、低いトーンで言葉を発する。

「ここだけの話だぞ。先生なら恐くて逃げた」

「は？」

「神崎みたいに勇気ないからな」

突然態度を変えてイタズラっぽく笑うから、俺はポカンと口を開けた。

勇気あるって、だれが？

「校長先生はどうかと思つたよ。殴つた回数なんか聞いてなかったし、よく空々しく言うなあつてな。内緒だからな」

念を押して杉村が言う。

「ああいう場合どうすればいいか、一番正しい方法なんて先生も模索中だけど、逃げるやり方ならたくさんあつたと言うことだ」

「なんか無責任」

答えに納得いかない。じゃあこれから絡まれたらたとえみつともなくても逃げ出せ、ということか？

「そう言うな。とにかくやるなら上手くやれつてことだ。なんでもかんでもキバ向いていたらいくつ命があつても足りんだろ？」

そう言つて杉村は立ち上がり、俺の頭にポンと一回手を置いた。突飛な行動についていけなくて一瞬あとに勢いよく頭を横に振る。

「やめろよ！」

「いやあ誤解してたかもしれんな、神崎のこと。あ、今後はくれぐれも頼むぞ、あまり危険なことはいしないようにな」

軽快に笑つて杉村は出ていった。

なんなんだ一体。誤解を解いたようなことを言つた記憶がないし、そもそもなに誤解してたかもわからない。

相手の意見がわかるまで話し合えという、池田の助言には失敗し

たということか。

（なんかシンドイ…）

自分の気持ちを言葉にするのも、相手の言葉の真意を読むのも俺にはすごくレベルの高いことに感じた。

長い息をひとつ吐き出しこの場から離れようとしたときだった。

隣の準備室に誰かが入ってきた気配がした。話し声も聴こえてくる。小さくてあまり内容まで聞こえないけど、俺には関係ないし構わず出ようとした。

「……………やめてください……………」

だけど聴こえてきた弱々しい声には聞き覚えがあった。櫻井の声だ。

朝に目撃した澄川との姿が思い出される。嫌な空気を読み取ってそつと隣に続くドアに近づいた。

「いい気にならないことですね。あなたみたいな地味で目立たない子神崎さまには相応しくありません」

やはり相手は澄川だ。あの女、なにを勘違いして関係ない方向に突っ走ってんだ。

俺は音を立てないよう引き戸タイプのドアを数センチ開ける。あときの三人組が揃っていて櫻井を囲んでいるみたいだ。棚が邪魔をしているが、その隙間から手前の二人の背中だけが見えた。

「今日こそ約束してもらいます。もうあの方に近づかないでもらえるかしら？」

「だいたいどうやってお近づきになりましたの？」

「西龍院さまを先に手なずけたんですわ。鶴田^{つるた}さま」

澄川の言葉には嫌な笑い方が含まれている。鶴田と呼ばれた女生徒が、まあ、姑息なと呟いた。

止めないと、と思ってドアに力を込めたとき櫻井が言い返していた。

「違います！変な言いがかりつけないでください！」

「あらあ、口答えなさるの？どこまでも調子にお乗りなのね」

初めて聞いた声。消去法でコイツが澤登か。あのときの緊張してなにも言えなかった印象はまったく皆無だ。女の裏側を見た気がした。

「西龍院さまにはなにも言えないくせに弱いわたしにだけ当たらないでくださいって言ってるんです」

櫻井も負けてなかった。おどおどしながらもしっかり自分の意見を言ってる。

（俺、どうしよう…）

どう出るのが一番ベストなのか、判断を間違えたらさらにややこしいことになる。生半可に関わるとさらにこじれる。

「なんですって！あなた誰に口聞いているかお分かり？澤登といえね、あの代々続く代議士のご令嬢なのよ」

やっぱり澄川の方が誇らしそうに澤登を自慢してる。代議士ねえ…。どうりで何度も主張するわけだ。俺にはどれだけ権威があるのか知らないけど。

「そうよ。わたくしのパパにお願いすれば、あなたの家の会社なんてどうにでもなるわ」

「なんて卑怯なことを！そう言って神崎さまにも脅したの？」

「するわけないじゃないの。庶民は貧相な考えをお持ちね」

なんか醜い。相手を陥れるボキャブラリーを豊富に持つてるあたりは、呆れを通り越して尊敬する。

（じゃなくて…）

あんまり本人のいないところで、こういう話題にのぼるのは気持ちの悪いものじゃない。

「神崎さまはそういうこと気にされません。…西龍院さまやわたしがいなくても、そんなあなたには振り向いてもらえませんか！」

「いい加減になさい！」

マズい。櫻井が完全にキレて三人も怒りが頂点にきたみたいだ。ガチャンとかバタンとか聴こえてきて、俺は思いつきり音を立てるようにドアを引いた。ピタリと音が止む。

ゆっくりと棚に近づいてもたれかかり、俺はなるべく冷ややかな目をして言った。

「なにしてんの？」

全員一斉にこちらを見た。三人のその手にはモップやホウキが持たれている。そして床にはひとつの割れたビーカー。

その近くで櫻井が座り込んだ状態で目を瞠っていた。

「か、神崎さまっ」

澤登が真っ赤な顔してモップをその場に落とし、素早く出ていった。二人もやや遅れて同じような反応で逃げ出す。

カタセよ、モップ。

呆れながら櫻井に近づき手を差しのべる。

「大丈夫か？」

「はい。え？……あの……いつから？」

櫻井も徐々に赤面しながらヨロヨロと手を引かれ立ち上がった。大丈夫そうなのを確認したら、転がってる三本の掃除用具のなかからホウキだけ拾った。

「最初から」

ホウキでビーカーの破片を集めて、用具入れからちり取りを取った。

するとやっぱり櫻井はゆでダコのように真っ赤な顔をしていた。言い合いの内容を聞かれたのが恥ずかしいようだ。

「ちゃんと戦ってたからどうしようかと思ったけど、手が出てたから」

「ごめんなさい」

「なんでおまえが謝るんだよ？」

「……………」

櫻井は俯いてしまった。それからみつともない、と呟いた。

「見られなくなかったです。こんなはしたない姿……」

「どこが？言われて言い返すのは当たり前だと思っけど？」

「それは…神崎さまはそうでしょうけど」

「言っじゃねえか」

櫻井もただ大人しいだけではないようだ。少し安心する。自分のパーティーでの態度が悪かったから責任の三割ぐらいは感じていた。櫻井はわたしがやりますと言って、俺からホウキとちり取りを取り上げた。

「今回が初めてじゃねえだろ？」

櫻井の手が止まる。その間にモップを二本拾い用具入れにぶち込んだ。

「……まだ、二回目です」

「まだってな……。これからもエスカレートするようなら俺から言おうか？」

「大丈夫です……あまり優しくしないでください。期待、してしまうじゃないですか」

期待？

俺は俺の責任部分を果たそうとしただけなのに。そんなのは優しくさじゃないのに。

櫻井の言いたいことがわからなかった。

「そもそもあんなのただの逆恨みだろ？どこかで手を打たないと」

「いえ、ホントに大丈夫ですから。ありがとうございました」

大きなお辞儀をして櫻井は用具入れにホウキなどを直すとそそくさと出て行った。

俺はこのとき遠慮してるのか、ぐらいにしか思わなかった。

第四章・・・3

最後のホームルームが終わり、一人また一人と教室から出ていく。いつもみたいに俺はそれを自分の席でぼんやり眺めていた。玲華はなにやら杉村に呼ばれてすでにいない。

世羅はまだいた。

どうしよう…。話しかけるなら今だ。数人、まだいるけれど呼び出して別の場所に行ければ…。

でも聞いたところで答えてくれるとは思えない。その点で迷いが生まれる。どう聞いたら答えてくれるんだろう。

迷ってるうちに世羅は出て行ってしまった。

「あ…」

でも学生鞄は置いたままだ。帰ってくる。

(そのときがチャンスだ！)

俺は動悸が高鳴っていた。

正攻法じゃダメだ、と玲華は俺に言った。奥の手を使えと。いままでの聞き方じゃダメなんだ。

(考えるんだ)

有効な方法を。

この数日で学んだことは、話し合うことと、弱味を握って脅すこと…。

(違う…世羅を脅してどうする)

なんかもう、テンパってくる。だいたい世羅の弱味だってわからない。いや、弱点なら知ってる。

(オトコ、か…)

けどそんなもの持ち出したくない。世羅がどうということより、俺がイヤだった。

他には？

(梶さん…玲華…兄貴…義父親、母親)

世羅に関する人物がぐるぐる頭を廻る。ダメだ。俺は断念した。いくつか頭には浮かぶが、どれも却下したくなる内容だったのだ。気づくと教室には誰もいなくなっていた。あとは世羅を待つだけだ。

聞きたいことを頭で整理していたら、ガラツとドアが開いた。

世羅だ。想定内の狙ったことだったのに、いざ目の前にすると動けないくらい緊張している。

世羅はこちらに見向きもせず、自分の学生鞆に持っていた本を入れた。図書室に行つてたんだと分かる。そのまま鞆を掴んで教室を出……。

「な、なあ！」

出たらダメじゃんか。

慌てて俺は立ち上がり呼び止めた。慌てすぎて声が裏返る。…みつともない。

世羅は仕方なさそうに、でも振り向いた。これ見よがしにため息を吐く。

「なんだ」

とりあえず第一段階はクリアだ。ホツとしながら世羅に近づく。

「あのさあ…ちよつと話があるんだけど」

いろいろ考えすぎて何から尋ねていいかわからない。だけど世羅は一度持った鞆を机に置いて、堂々とした出で立ちで俺と対峙した。「私になにを聞きたい？兄のことか？事件のことか？それとも、玲華のことか？」

全部、読まれていた。なにもかもお見通しだったようだ。俺は回り道をするのを諦めた。

「全部だけど…。とりあえず兄貴のこと。兄貴とはどういう関係？」

「ふん！相変わらず直球だな。ただのオトモダチだ」

世羅は腕を組み、馬鹿にしたようにクイツと顎を上げた。

「なわけないだろ？だいたいどこで知り合っただよ？」

「おまえに関係ない」

「じゃあ…兄貴と梶さんはどういう関係？」

「それこそおまえには関係ないことだな」

「関係ないわけないだろ！梶さんは兄貴を知っていたんだ！」

感情に任せてまた怒鳴ってしまっただけ、反省してる暇はなかった。世羅が明らかに目を見張って動揺していたから。こんな感情を表すのを見たのは初めてだった。

「そうか。おまえなにか思い出したんだな。なんだ？なにを思い出した？」

「訊いてるのは俺だ。答えろよ」

低く俺は唸った。意外なところに奥の手があったようだ。

世羅はそっぽを向いて吐き捨てるように言った。

「私は知らない」

「知らない？訊いてないのか、兄貴から」

「おまえが直接訊けばいいだろう。兄弟なのだから」

「身内だからって、なんでも話せるわけないっておまえなら分かるだろ！」

叫んでしまっただけ、しまったと悔やんだ。先ほどとは違う種類の後悔。

こういう話を世羅にするつもりはなかったのに！

世羅の顔から悲しみが満ちていくのを目の前で見せつけられた。

それから笑った。口元が歪ゆがんで自嘲気味じちやうきな笑みだった。

「玲華からなにを聞いたか知らないが、私のことを馬鹿にしてるのか？」

「違う…いまのは…」

「兄弟と言っても全然違うんだな。惣一さんはもっと紳士だったよ」

「！」

なにもこんなかたちで比較しなくてもいいのに。

世羅も聞いてるんだ、兄貴から。俺の、弱味……。

「なんだよ…。なんなんだよおまえら。なに企んでんだよ」

「企む？勘違いしてないか。言っただろうただのオトモダチだと。」

頭の良さも違うな」

「やめろ……なに……」

「惣一さんは大人で優しい人だな。うらやましいよ、おまえが」
優しいだと？

家族以外の他人に、どういつふうに接するか俺は知らない。知らないけど、少なくとも俺には…。

「だけどおまえは自分勝手に閉じこもり、周りを見ようとしない。惣一さんは子どもすぎる弟を持って苦労してるんだよ。邪魔なんだ、おまえが」

「好き…なの、か？」

兄貴のこと。

「好き？」

カツと目を開き、世羅が体を揺らして笑いだした。

ちよつと泣いてるみたいにも見える笑い方。本音がわからない。

「おまえの頭は単純でいいね。…ああ、好きだよ。少なくともおまえよりはね」

まだ世羅はクスクス笑ってる。

「その笑い方、やめろよ」

気づいたときには完全に世羅が上位にいた。支配者みたいに上にいて、俺は弱く機嫌を窺うような主張しかできない。

世羅が俺を嫌ってることはわかっていたけど、こんなふうにはつきり態度で示されると悲しくなる。哀しくて寂しい。

人に拒絶されることは何度経験しても慣れてはくれない。

目を細めたまま世羅はにじり寄ってきた。

「やめさせたいなら……私から何かを聞きたいのなら、力ずくで押さえつければいいじゃないか。この前みたいに」

「世羅…」

罪悪感と自己嫌悪が蘇る。

違う、あんなのは本意じゃないのに。だけどしてしまったことは変えられない事実で、今さらなにも言えない。

世羅はなにを想ったのか俺の頬に右手で触れてきた。
情けないけどびっくりして俺の方が逃げ腰になる。

「ねえ、おまえは玲華から聞いてるんだろう？本当に読みやすい奴だ。だけど私は男嫌いでも男性恐怖症でもないよ」

「え？」

いきなりなにを言い出すんだ、と思った。あの日あんなに震えていたのに。まるで先回りしないと自分自身がもたないとも思ってるみたいだった。

ばかやろう。

世羅はバカだ。知能指数とかそういう話じゃなくて、こういうときに自分の気持ちに嘘つくから、不器用で意地っ張りだった。

（指が、震えてる）

俺にだってバレル強がり。

だけどなぜこんなことをするのか、しなくてはならないのかが解らなくてどう対処していいか迷う。

「玲華だって誤解してるんだよ。私が未だに過去の恥辱を引きずっている」と。私のこと聞いておまえはどう想ったんだ？自分が嫌がっている割りには、無意識に他人には同情してるな、おまえ」

「違う……」

「ほんとうに？私の目を見て誓えるか？」

世羅の左手も俺の体に触れてくる。俺は頭が真っ白になった。
為すべきことを見失って、ただ口だけが小さく動いた。

「離せよ」

「振り払えばいいだろう？おまえの方が力があるんだ」

「なんだよ、なに考えて……」

そのとき、だった。

誰も来ないと思った教室（ここ）に向かって歩いてくる足音が聴こえてきた。

（あっ）

恐らく世羅も同じように気づいた。その軽快な足音の主に。

こんな時間に教室に来るような可能性がある人はひとりで…。でも気づくのが遅かった。

その足音が止まるや否や、勢いよく廊下と教室を隔てる前の方のドアが引かれた。

「悠汰！。ちよつとこれ…」

玲華の姿を確認するより一瞬速く、世羅は左手で俺のネクタイを引っ張った。

なんの力も入れてなかったから、グンッと抵抗なく世羅に近づく。（だめだ！）

状況をつかめたときには、すでに逃げる術がなかった。

世羅の右手が顔から首の後ろ側にまわされて 軽く、触れるか触れないかのスレスレだったけど…確かに、キスされた。

一瞬で感触も残らないほどだったけど関係なかった。

この位置からは玲華には世羅の背中しか見えない。

バサバサッと、たぶん玲華が持ってた紙の束が落ちる音がした。

玲華に見せつけたかったんだ、世羅は。わざと。

玲華の気持ちはきつと世羅も知っていてわざとやったんだ。こんな傷つけ方もあるんだ。

「どういっつもりだ！」

やっと俺は振り払う。だけどなにもかも遅い。時間は戻せない。

世羅は愉快そうに笑いながら俺から離れて自分の鞆を取った。

「怒るなよ、減るものじゃない。すでにしてることなんだろう？玲華と」

そのまま玲華のことを見もせず、颯爽と身をひるがえし後ろの出口に向かった。

侮辱された気分だ。俺だけじゃない。玲華も含めて侮辱したんだ。許せない、こんなやり方。

「てめえ！」

「待って悠汰！」

世羅を追おうとしたとき、玲華が全身を使って俺を止めてくる。

「ごめん！待って…ごめんなさい」

なんで玲華が謝るのがわからない。だけど腰辺りにまわされた腕が震えていて、それを退けることはできなかった。

世羅は振り返りもせず出ていきドアの閉まる音が空しく響く。

それでも、どちらも動けなかった。

玲華は下を向いてままで、肩が小刻みに揺れていて泣いてるのかと思った。

「わかった、世羅の気持ち…」

独り言のように呟いた声は、だけと思いの外しっかりしていた。

それから玲華は僅かに顔を上げる。

違った、泣いてなかった。ただ泣きそうだったけれど。

俺はむしろ世羅のことがわからなくなっていた。敵意むき出しでも想うところは違うことをした。それぐらいしか…。

やっぱりそうだったんだ、と最後に玲華は呟いた。

* * *

「どうしたんですか？なんですか、この暗いオーラは！どこかで怨念背負ってきたみたいですよ、おふたりとも」

並んでソファに座っている俺たちに向かって、秀和がホチキスを振り回しながら慌てていた。……危ない。

あれから玲華があまりにも動こうとしなくて、なんとか部屋にまでは連れてきたけど、まだ見て分かるほど引きずっていた。今はぼんやりと斜め下辺りを見つめている。

落としたプリントを俺が変わりに持ってきた。今はテーブルにある。

内容まで確認する気力も興味もなかったけど、ホチキス止めをする作業を杉村から頼まれたようだ。学級委員なんてただの雑用かよ、と思ってしまう。

そしておそらく、あの現れ方は俺に手伝わせようと思って来たん

だろう。

いまは目の前でガチャンガチャンとなぜか秀和がやっていた。怨念背負ってきたって、ある意味正しいかもしれない。

世羅についてはなにも聞けてない。落ち込みようが半端なくて聞けずにいた。

こんな玲華は初めてだ。対応に困ってしまう。

「そつえばさー、杉村先生に危ないことするなって言われちゃった」

おもむろに、わざと関係ない話を振ってくるし。

「あー俺も言われた。やるなら上手くやれって」

「えっ？あの真面目しか取り柄がなさそうな先生が？」

「あのなー。でもそうだな、本心を話してくれって頼んだら言うてくれたんだった」

「はあ…。悠汰はどんどん周りを引き込んでいくね」

「どういう意味だ」

「一応誉めてるんだけど？」

「ふうん……」

「うん……」

会話が続くかと思ったのにまた止まった。さっきからこうなる。どちらからともなく話だし、どちらからともなく切れるんだ。

本当はしなければならぬ話があるところを避けているせいかもしれない。

その都度、秀和がキャンキャンわめきながら、フォローになつてない賑やかしみみたいなフォローを入れている。

「ああ、またっ！落ちてますよ！ダメです、陰は陰を呼ぶんです。会話、続けてください！」

「ヒデが喋ればいいじゃねえか」

「ええと、そうですね」

気のせいだろうか。無意味にプレッシャーを感じたようで、秀和は大量の汗をかきだした。

「ぼくこの前自販機のまえお掃除してたら五百円玉を拾ったんですよー」

陽気にホチキスを鳴らしながら、秀和が語りだした。だけどそれから続く気配がない。バチンバチンバチン、と音だけが響き出す。

「……で？」

「えっと、お釣が出てくるところじゃなくて、下のスキマにホウキを……ってあのTの形したホウキをですね、こう突っ込みまして出したんです。そうしたらついてきたんですよ！キラキラ光る五百円玉が！」

「……だから？」

「ええっつ！五百円玉ですよ？五円や十円じゃないんですよ！もちろんそれらも大切ですけど、ぼくはこんなことあるんだなあって感激をっ……」

「もういいわ、ヒデ」

ずっと黙って聞いていた玲華が容赦なく止めた。はあ……。ガーンと効果音がつきそうな青い顔をして、秀和はショックを受けていた。

「ぼ、ぼくは元気を出して頂きたくてっ、それで、最近あったイチバン嬉しかったおはなしをっ」

「そうだな、ヒデ。で、その五百円でなにを買ったんだ？」

「やめてください！届けましたよ、職員室に」

「……………」

なんか秀和はどこまでいっても秀和だった。これがコイツの良いところなんだろうけど。はあ…。

俺の顔を見て、秀和はほえ？ってよくわからない音を発した。

「おまえがなんとかしたいって思ってくれたのはわかったから」

「うっ…神崎さま…」

俺たちの　　秀和が言うには　　陰の空気が秀和までもを侵食していったようだ。

悪いことをした。

律儀に秀和が手作業だけは止めなかったから、しばらくホチキスの音だけが鳴っていた。

その沈黙を破ったのは玲華だった。前に偏っていた体重を背もたれに預けると左腕で顔を覆う。

「あたし…どうしたらいいかわからない」

本当に参ってるんだ。

いままでは世羅の気持ちかわからなくて、わからないからこそ不安でも突っ走って行くことができたんだ。俺にはわからないままだけど、玲華には解って、そしてそれが立ち止まらせるものだったんだ。

なんかそれって辛い。

これまで真っ直ぐ進む彼女しか見てなかったから、余計に…。いつまでこんなことしてるんだろう。

ふと、なんと呼べば良いかわからない、新しい感情が高まっていく。それが止まらなくて、座っていらなくなる。

「玲華は迷ってるよ」

「神崎さま？」

向かいにいる秀和の方が先にギョツとした表情で反応した。だから、また言い方を間違えたんだって気づいた。

「いや、玲華はずっと走ってきたんだからたまには迷っていいんだ。今はたぶん迷う時なんだ」

だけど俺は…。

いつまでも負けっぱなしじゃダメだろ。

贅沢は言わない。ひとつくらいでいいから誇れるものがほしい。

これから生きていくために。

「俺はずっと迷っていたからもういいんだ。もう迷わない。……久保田が帰らないなら迎えに行く」

「どう、するの？」

掠れた声で玲華が訊いてきた。

「兄貴にあたる。絶対に兄貴はなにかを知ってるから」

まだ不安そうな玲華に俺は言う。前に進むために。
「兄貴が犯人だって言うんなら見逃せない。見逃さない。弟だから、俺が真実を暴くんだ」

* * *

その日から俺は兄貴を見張ることに決めた。

まず、いつもはわざとズラしていた生活時間を合わせることから始めようと思った。たいてい時間を潰していても俺が先に帰ってる。普通に考えればその間兄貴は塾に行ってるんだろう。

いまはまだ兄貴の塾も知らない。

いつでも兄貴に合わせられるように真っ直ぐ家に帰った。咲田さんが入れ違いで帰って行く。

それからただひたすら部屋で兄貴の帰りを待っていた。もともと今夜は話を聞きたいと思っていたものの、見張るとなるとまた違った感情になる。

初めから敵わないと分かっている者への挑戦はかなりの無謀を感じた。

(だけどこのままにしておけないから…)

なんとかしたい。

震えながらあんなことをした世羅も、落ち込んで先が見えなくなっている玲華も、もう見たくないから。

ただ兄貴の帰りだけを待つ時間はすごく長く感じる。

いつもは音楽を聴いていて、聞かないようにしている音を聴き逃さないようにただひたすら待つ。

それからガチャッと玄関の扉の音がしたときに、何気なく時間を確認したら22:48と数字が並んでいた。

帰ってきたんだ。

だけど兄貴はすぐには部屋に戻らない。音がしないから。ということはそのままキッチンに向かったんだろう。

俺はそう予測を立てるとやっと部屋から出た。

下に降りると、その通りで兄貴がレンジで温めた夕食を食べていた。隣にはウチでは兄貴しか読まなくなった新聞が広げられている。

……俺が現れても、なにも言わない。

冷蔵庫から自分の分を温めてコップにお茶を注ぎ兄貴の向かいに置いて、完璧に俺を無視していた。

自分で発生させた状態だ。気まずいと言っている場合じゃない。

そう思っけて口を開きかけたときレンジが終了した合図を鳴らした。

(……………！タイミング！)

ひとまず咲田さんが作ったおかずとご飯を並べる。今日は酢豚がメインだった。

「いただきます」

とりあえず座って挨拶してみる。思ったより小さくて低い声が出た。俺って小心者……。

ちらりと兄貴を伺うと、時々新聞に目をやりながらもやっぱり無視。オッサンくさいな、もう。

「ウマイよな」

なるべく明るく言ってみる。相手からはなにも返ってこない。とことん無視する姿勢のつものようだ。

「この前さ、友達とメシを食ってるときに思ったんだけど。やっぱメシは一人で食うより誰かと食った方が楽しいんだって発見したんだ」

とりあえずベラベラと思いつくことを喋った。

なかばヤケになりながら。なんでもいいから食いついてくれと願う。

「あー、兄貴はそう思ったことない？俺らって一家団欒だんらんとかないし」

「……………」

「たとえば友達とか、彼女とかとさ」

「……………」

「兄貴はやっぱり東大行くんだ？先輩がいるって言ってたけど」

「……………」

(……………)

ダメだ。完璧なシカトだ。

話すネタにも限りがある。兄貴のことで知ってることが少ないし、共通の話題がまずない。

いや、本当はひとつあるが……無視されたら困る。世羅のことはだからまず、こちらに興味を向けさせたい。

「ええと……友達にすげえ犬に似てるやつがいてさ……。なんか反応がそんで……そいつと話していると犬が欲しくなるんだ。ウチでも飼えないかなーとか思ってた……」

兄貴は俺が喋ってる間にもモグモグ食べ進めて終いには……終わっていた。

バフっという音をさせて新聞をたたむ。

「あ、あのさ……」

なんとか繋ぎ止めたくて慌てる。

兄貴は気にもならないみたいで自分の食器を洗浄機に入れに行っ

た。

(なんかもう……限界かも)
聞いてない相手に話しかけるのはこんなに心が折れるとは。こうなったら一か八か体当たりしてやろうか。

追い込まれてちよつと不穏なことを考えてると兄貴が振り向いた。対面式のキッチンダイニングだから上半身しか見えない。

「そんな井戸端会議的なことをしたくてわざわざ夕食を待っていたのか？」

相変わらず冷たい、蔑あはんだ声だった。でも俺は反応があったことだけで、それが気にならなくなっていた。

箸を置いて立ち上がる。少しでも同じ目線で話したいから。

「えと、そうじゃなくて……なんであの会場にいたのか、聞きたい」「おまえが行ってるものに俺が行っていたらおかしいか？」

兄貴は腕を組み流しにもたれかかっていた。

なんでそんな言い方しかしてくれないんだろう。突き放すような、揚げ足を取るような。

「おかしいとか、そういう話じゃなくて……。……世羅とどこで知り合ったんだ？どうやって世羅と……」

「俺の交遊関係にまで口だすな。言わないといけない義理はない」

「事件に関わってんだよな。だったら言ってくれよ！疑いたくないんだ兄貴を」

「直球で質問しても無駄だと彼女に習わなかったか？」
会ってたんだ。

この言葉で今日も会ってたんだって気づかされた。そして俺との話を聞いたんだ、世羅から。

「彼女が駄目なら俺か。たとえばおまえが想像する通りなにか企んでいたとして、それでなぜ俺が教えると思える？」

兄貴と世羅は似ている。話していても届かない感じの喋り方とか、俺を拒絶するあたりが同じだった。

だけど決定的に違うものがある。

「だったら梶さんとのことも話してくれないんだ？」

「くだいな」

世羅から聞いているためか梶さんの名前を出しても兄貴の反応が変わらない。

決定的な違い。

それは兄貴には余裕があることだ。世羅みたいに取り乱したりしない。

「梶さんは俺のことも知ってたみたいだったんだよ、兄貴」

「……………」

「兄貴に気をつけろって言って力尽きた。なあ、これってどういう意味だよ？」

みつともなく狼狽える俺をただ兄貴はじつと見つめていた。
だから！わからないんだって、そんな反応じゃあつ！

「浅霧家となにがあるんだよ！なんで梶さんつ…………」

「疑いたいのなら疑えばいい。俺が殺した。そう言えば満足か？」

（俺が、殺した？）

だれが？俺ってだれ？

問い詰めていたのは俺なのに、実際に口に出されて耳に入ってきたらざわりと胸が騒いだ。

条件反射で、近くにあったコップを掴んで投げつけた。感情の赴くままに。

聞きたくない言葉を聞いた。なんかそれでもう駄目だった。

兄貴はスレスレのところにてかわした。ガチャンという激しい音がしてコップが壁に衝突してから流しに落ちる。

兄貴は眉ひとつ動かさないで冷めた眼でいた。それがさらに悔しさを増長させる。

「疑いたくないって言うてんだろ！犯人だと思いたくないから聞いてんだよ！」

「………… おまえは、そういうところお袋に似ているな」

ため息をつきながら、ちょっと後ろを向いて割れた状態を確認すると兄貴はまた俺を見た。

似てる…？あんな女に？

否定したかったけど確かにそうだった。ちゃんと考えたらわかった。

物にあたるところとか、感情的なところ。

言われて初めて気づいた。ショックだった。母親のそういうところが嫌いだったのに、まさか自分も同類だったなんて…。

泣きたい気持ちになるくらいの衝撃。

イヤだ！イヤだ！イヤだ！

^{DNA}血筋なんて言葉で簡単に片付けたくない。片付けられない。

それじゃあまるで、一生治らないみたいじゃないか。

俺は投げつけてしまった右手の掌を見つめた。わずかに震えてる。「やはりおまえは駄目だな」

そう言いながらも、新聞を掴むと兄貴は冷蔵庫の横のラック戻し

た。読み終わった新聞を置く定位置になってる。

冷静な態度。最後通告をされたみたいな。

だけどなにが駄目なのかまでは教えてくれない。自分で考えろということだ。

そのままダイニングを出ていこうとする。聞くかどうか迷っていたことが、つい口に出た。

「世羅は元気だった？」

声にしてみると間抜けな質問。なにについてか言っていない。

あんなことをしたことまで、兄貴に伝えているかどうかすら……
わからないのに。

「ああ。心配ない」

だけど、意外なほどさりと兄貴は答えた。

第四章・・・4

その夜は玲華からメールがこなかった。

それがまだ立ち直れてないんだ、と思えて逆に気になってしょうがない。

変わりに拓真から「メールしちゃった」っていう題名のものが届く。内容も含め女の子が書くような文章だった。

それには適当に返しつつ、玲華に送ろうかどうしようか数十分迷う。結論は送らなかった。ゆつくり1人で考えたいだろう、なんて言い聞かせてみたけど、要は送るべき言葉が浮かばなかったのだ。

玲華はこんな状態だし、久保田はいないし、そう考えると俺しか残ってない気分になる。

事件のことは俺がなんとかしないと。

俺は次の日もくじけることなく兄貴を追う。問いただしてもかわされるなら自分で確かめるしかない。

つまり尾行だ。朝から自分の部屋で聞き耳を立てながら様子を窺っていた。

すると昼前ぐらいに出て行く音が聴こえた。

尾行開始する。

思ったより尾行って難しかった。テレビドラマみたいに都合の良い隠れ場所がない。あと人が邪魔。

それでもなんとか追いかけていると、兄貴はまず図書館に入った。

(ここは……………)

わざわざ休日に、こういうところに行こうという概念が俺にはない。

どうしようか。入るべきか外で待つべきか迷う。

とりあえず外は暑いという理由だけで入ることに決めた。中は冷房が効いていた。効きすぎてちよつと寒い。

適当に本を選び、兄貴の後ろ姿が見える位置に座った。

あー：ダメだ。活字を見ると眠くなる。

手にとった本が、哲学の本だったりしたもんだからなおさらだ。

（見るからいけないんだ）

兄貴を見ていればそれでいい。そつと本は閉じておいた。

それから腕時計で確認しながら眠気と戦っていると、結局約三時間兄貴は勉強していた。二冊借りてから出て行っただけ、俺からはどんな本かまでは見えなかった。

* * *

そのあと、兄貴は図書館に行っただけで家に帰ってしまった。

ちよつと家の前で茫然とする。

いきなり収穫なんかがない、っていうことは当たり前でわかっていたはずなのに、やっぱりどこかで俺のいままでの時間を返せっていう気持ちに陥った。

地道でうだつの上がないこと……って言ったのは、玲華だっけ、それとも久保田？

ちよつと思ひ出せないけど、まさにその通りだつてことを早々と体感することになってしまった。

せつかく出たのに帰る気になれない。

どうしようかまた迷ったあと、久保田の事務所に行くことにした。だけど毎回車で連れていってくれていたからたどり着く自信があまりない。

最寄り駅はわかっていたから、とりあえず俺は電車に乗った。車だつたら二十分くらいで行けるところが倍近くかった。

住所とビル名をヒントに通りがかりの人に聞いたりして、あとは勘でなんとかたどり着く。

連絡もなにもなしで来たからこれでもし事務所が閉まってたらシヤレにならない。ちよつと嫌な可能性を考えつつ、戦々恐々しながら向かったら普通に開いていた。

扉を開けたら祥子さんがすごく期待を込めた顔でこちらを見た。それでまだ久保田が帰ってきてないことがわかる。

同時に申し訳ないって思う。期待を裏切らせたから。来たのが俺でごめん、って。

だけど祥子さんはそんな表情を見せたりはしなかった。祥子さんのオトナの笑顔がちょっと切ない。

俺や母親とは違う人種。感情剥き出しでは動かない側のヒト。

「あ、ごめんなさい。まだ先生帰ってないの」

挨拶よりもまえに、むしろ挨拶の変わりのように言われた第一声がこれだった。

謝らなくていいのに。謝ることじゃないのに。

「連絡もないんだ？」

「そうなの。でもその内ひょっこり帰ってきますから大丈夫ですよ」
ほんとうか？そう思っているなら、なんであまり寝てないみたいな顔してるんだ？扇形に細められた目が赤い。

「あ、いまお茶を……」

「いいよ、今日はちよつと様子見に來ただけだから」

俺は事務所内を見渡した。この間となにも変わらない状態。でも責任者がいない。^{トミツ}

なにしてんだ、アイツは。祥子さんを放つというて。

仕方ない。俺は電車の中でまだ久保田が帰っていなかったら、してやろうと思っていたことがあった。一応祥子さんに声をかける。

「あのさ、ちよつとあのパソコン見ていい？」

「え？いえ、それはちよつと……わたしも許されてないので」

そう、最後に久保田が見たのがパソコンだったから見ておきたいと思ったのだ。玲華だって見ていたんだからなにかあれば玲華の方が見抜いてる。だけど自分で確認したかった。

祥子さんは戸惑いながら丁寧に断りを入れてきたけど、ズカズカとパソコンに近づいた。

「なんかヒントあるかしんねえじゃん」

「ですが、勝手に見ると怒られますので……あ、あの？神崎くん？」

「そんなこと様子さんに言ってたんだ、アイツ。えっらそー……」

「いえ、ですからね。あの……」

構わずパソコンのまえの椅子に座りながら言う俺に、なんか祥子さんがオタオタしていた。

よほど厳しく言われてるのだろうか。偉そうに。

「大丈夫、大丈夫。俺が勝手に見たことだから」

自分に言われてないもんだから俺は強気だった。ホントに少しでもヒントになるものがあればって、そう思ったから。必死にもなる。パソコンがたちあがると壁紙はメタリックなデザインだった。あまりショートカットは利用してないようだ。俺は適当にクリックして片っ端から確認していく。

「神崎くん……あの、あのー……」

どこか遙か高いところから遠慮がちな制止の声が聞こえる。だけど俺はすでにパソコン画面にのめり込んでいた。

そしたら……。

変なものを見つけた。

自然と画面に近づく。そうしてもそれは幻みたいに消えなかった。むしろ、はつきりした。

（なんだよ、これ……）

数字でナンバーがふつてあるフォルダがいくつもあって、その一番下にあった「No.1035」をクリックしたら、中には「神崎惣一」と「神崎悠汰」というファイルがあった。

俺だけならまだいい。まだ仕事の資料だと思う。なんで兄貴の分まであるんだろう。

開いてみると、内容はここ数カ月の行動パターンが整理されていた。それは兄貴のも俺のも、遡ると四月からあった。

「あの事件があった前から？」

「そんな、なんで……」

俺の護衛が依頼内容って言っていたのに。その前から俺のことを

知っていたっていうこと？

（それも兄貴まで…）

考えられることは、ひとつだけだった。

「あの女、兄貴まで見張らせていたのかよ？」

信用されてなかったんだ、兄貴も。両親に。

知らなかった。確実に俺のときと態度が違うから兄貴は別だと思
っていた。

ということは護衛のおまけの見張りではなく、本来の依頼は見張
りが先にきてたんだ。

「あ、あの…、先生は最初断ったんですよ。そんな非道徳なこと
できないって」

俺は一瞬祥子さんの存在を忘れていた。

すごく申し訳なさそうに言われてやつと画面から目を離して祥子
さんを見る。

そうだよな。助手なんだから、知ってただよな、全部。だからパ
ソコンを見られることを拒みなかったんだ。

「別にいいよ、言い訳しなくて」

「ごめんなさい…」

「そうじゃなくて、責めてるんじゃないって…。六月が四月になった
だけで別にそれはどうでもいいんだ、もう…」

もう、俺のことはいいんだ。いまさら、だろう？

「だけど兄貴は違うから。こんな扱い受けるような人じゃないから
…驚いた」

「神崎くん…」

驚いた。本当に。だって兄貴にまで発信器つけてたんだ。

別のソフトを起動すると、この街の地図にひとつ光る点滅。ちょ
うどこの事務所を示していた。これは俺のだとわかる。

それからもうひとつ。俺の家にも点滅の光り。……兄貴のだろう。
「でもどこで？いつ？」

発信器を着けているだろうとは思っていた。あいつにも言ったし。

だけど…。詳しくは教えてくれなかった。

たとえば俺は？ 自分がいま持つてるものの中にあるはずだ。いま持つてるもの。財布とiPodをポケットにそのまま入れている。鞆は休日には持たないから。 いったいどこに？

「あの、たぶん腕時計です」

腕時計？

確かに今日もしているけど、でもなんで？これは母親を介さずに父親から直接もらったのに。

「神崎くんのお母さんがいらしたとき、すでに着けさせているから利用してくださいって…」

「ふうん。共犯か」

いまさら驚かない。

だけど気分は悪い。知ったうえで着けていられるほど図太くはなかった。外してとりあえずポケットにしまっ。

だったら携帯をくれてGPSで見張ればいいのに。親の考えてることは理解不能だ。

いずれにせよ、俺の持ち物なんて両親ならいくらでも操ることができる。それはきつと兄貴もそうなんだ、っていまなら思えた。

よく読むといろいろ判ってきた。

母親から聞いたのだろう。整理された俺のデータの中にはメールアドレスがあった。

「なるほどな。玲華はここに入り込んだわけだ」

あながちハッキングして手に入れたっていうのは、単なる妄想ではなかったということだ。

それから事件があったことで、母親から“より近づいて俺が余計なことをするようなら止める”という依頼内容が追加されていたことが記してあった。

そもそも護衛という名目はどこにも無かったようだ。

（そりゃあ…そうだよな）

おかしいと思っっていたんだ。でもこれなら納得がいく。

盗聴器の類いは見つけれなかった。発信器が示す場所に移動して、会話を盗み聞きしているだけみたいだった。

なんだ、そんなことか。蓋を開けば大したことない、単純な話だ。だから現れたんだ。あいつは。

だから断っていたんだ。調査することを。だけど玲華に脅されて仕方なく？

「もしかして玲華は本来の依頼内容を……もしくは、兄貴のことも張っていたってこと、バラされたくなければ協力しろとも言ったのか？……それとも発信器のこと？」

そんなことで？

二人が俺になにかを隠そうとしたことがあった。それがこれ？

「バカだな……」

こんなことまでする両親も、そんなんで揺さぶられる久保田もバカで、呆れる。

「あのっ、わたしが言えることじゃないですけど、どうか先生を許してあげてください」

ずっと遠いところで祥子さんの声を聞いていたけど、このとき急に近くなった。というよりちゃんと正しい距離にきた。

いつもの穏やかでニコニコしてる祥子さんと違ったから、ちゃんと聞こうと思った。

すごい焦っていて必死な声に、いまにも泣き出しそうな神妙な面持ちになってる。

「わたしがまえに言ったこと間違いじゃありません。先生はちゃんとやってないけど、本当に神崎くんのこと心配してるんです」

「だから責めてないって」

どこか冷めている。彼女に正しく気持ちを伝えないと思って思いながらも、頭のどこかで俺は冷静だった。

「久保田さんがいなくなってるこの状態はマジなんだよな？」

涙ぐみながら彼女は頷く。

「だったら仕方ない。これが嘘でしたって言われたらムカつくどこ

るの騒ぎじゃなくなるけど」

本当に仕留めるかも。

「祥子さんが責任を感じなくてもいいよ。俺は決めたから。やることは決まってるんだ。それが変わることはない」

決めたから。兄貴の隠してることは全部暴く。暴いて、それが悪いことなら……後ろめたいと感じるようなことなら止めなくちゃいけない。

それから久保田も見つけないと。見つけて直接言ってやりたいことがある。祥子さんに謝らせるんじゃない、ちゃんと久保田本人から聞きたい。

俺はまた画面に意識を戻す。

神崎惣一 of フォルダの中に無題のフォルダがあった。一目見てから気になったところ。

クリックしたらパスワードを聞かれた。他のは全部簡単に入れたのに。これが玲華も入れなかったところなのだろうか。

「パスワード知ってる？」

「いえ、本当にわたしは見えてなくて……」

「じゃあ久保田さんの……誕生日は？」

「十月二十八日です」

様々なパターンで入力してみたが全てはじかれた。んな単純じゃねえか。

「あいつの趣味は？」

「えっと……なにかな？機械いじり、かな……」

「入れにくいな。……たぶん違う。他には？好きな食べ物でもなんでも、思い入れのあるやつ」

「えっ？ええ？」

祥子さんが混乱し出したみたいだ。あいつ……、祥子さんくらいにはヒント言っとけよ！

激しくそう思ってたなら……。

ふと降りてきた。

ホントにアーティストとかがよく言う、神のお導き的なことみたい。

「それだ！」

俺がつい祥子さんを見ながら叫んだもんだから、祥子さんはビクリとビビってしまった。ただごめんとか言ってる余裕もなくて手を動かすのを優先する。

「ちっ。違うか……。だったら……。あ、ひらいた……」

「え？なんだったんですか？」

興味津々という感じで祥子さんが覗きにきた。

俺が打ったキーワード。“SYO-KO”

（あの野郎…クサイことを）

こっちが恥ずかしくなる。ちなみに“SYOUKO”では駄目だった。このちよつとした遠回し加減がなんだか腹立たいい。

「神崎くんっ、なんだったんですかつ」

もう一度、祥子さんが聞いてきた。なんかさっきとは全然別の焦りが見える。

（えーと…）

どうしようかな、と躊躇う。迷った結果、まえに池田に教わったかわしかたをしてみた。別に教えてやると言われたわけでもないけど、つまり。

「……内緒」

ええっ…って、たぶんそのとき俺がしたような不満そうな表情を、祥子さんもしていた。

あんまり使えるかわし方じゃないなって思う。

開いたら先ほどと同じ行動内容をまとめたものだった。

でもその中身が全然違った。俺の知らない、想像もつかない兄貴の行動範囲。

毎日塾に行ってると思っていただけ、塾の日は週三回でそれも九時頃には終わり、友達などと居酒屋とかバーに行ってるみたいだ。中には一度帰宅してから外出し夜遊びしてる日も少なくない。あの

兄貴が、って感じた。悪く言うならばガリ勉とまで思っていたのに。
(え?)

そのなかで。信じられない文を見つけた。兄貴のフォルダを見たときより驚いている。

5月10日23時10分、カフェRiver
50代前後の男と逢う。会話内容不明。

.....。

5月19日01時32分、カフェRiver
10日に会った男と対面。
近くの席に陣取ること成功。会話内容、別紙。
男の名前は梶剛志であることが判明。

梶剛志であることが判明.....。

梶剛志。

であることが...

(兄貴が対面していたのは、梶剛志...)

知り合いかもしれない、っていうことは思っていたのに。
実際に、こうやって、目にすると...。かなりショックだった。
思考が止まるくらい。

久保田メモによると、それから二人はコンスタントに会っていた。そして.....極めつけ。
最後に。

6月9日00時45分、カフェRiver
梶剛志と7度目の再会。会話内容、別紙。
最後の密談となる。

（六月九日って…）

梶剛志が命を奪われた日。

会ってた、最期に、兄貴が。

ガツンと打ちのめされた気分だった。

「兄貴が…」

うまく口がまわらない。声を出したら思ったより衝撃を受けてた。
「アールって店の頭文字だったんですね」

隣で祥子さんが同じように驚いていた。驚きながら言ったその言葉に、俺はギクリとなった。

そうか。そういうことになるのか。

（兄貴、だったんだ）

あのときさんざん怪しいと言っていた、手帳にあった頻発に逢うようになった人物。

久保田は知っていたのに、話を合わせていた。

なんかそれももう…わけがわからない。頭が、混乱する。

祥子さんも知らなかったみたいで言葉を失くしていた。

（あいつは…ほんつとに！）

ムカムカと怒りが込み上げてくる。いろんな要因が重なって胸くそが悪い。一発殴らないと収まりがつかない。

「祥子さん。絶対アイツ見つけるから。で、ぶん殴るから」

俺がそう言ったら。祥子さんはキリつとした顔で、でも頬をわずかに緩めながらハイ！と言った。

* * *

しばらくパソコンの前から離れられないでいたんだ。虚無感が後を引く。

だけど事態はまるで追い打ちをかけるみたいに、動いていた。というか、動いていたのは兄貴だった。

「ヤバイ！出掛けたみたいだ」

自宅にあった光りが点滅を繰り返しながら移動していく。どこに行くんだろう。また図書館のような、いわばハズレである可能性もある。

ただなぜ今世羅と会っているのか理由が知りたい。もしかするとこれから逢うかもしれない。

そう思うと立ち止まってるわけにはいかなかった。

「点滅止まんの待ってたら遅いよな……」

「わたし見えます！それから神崎くんに連絡いれます。神崎くんはわたしの携帯持っていてください」

俺の独り言に答えるように、祥子さんが携帯電話を差しだしながら言った。

祥子さんは罪悪感を感じてるみたいだ。なんかそれを利用してみたいで申し訳ないけど、いまは有り難く申し入れを受けることにした。

そういうわけでいまは電車の中にいる。祥子さんの携帯を握りしめて。メールで来る指示に従いながら。

兄貴の目的がわからない。犯人かどうかもわからなくなっていた。会話内容の別紙っていうのは、いくら探しても見つからなかった。

（考えたくない）

梶さんの次に世羅と接触した理由。

もし梶さんを殺したのが兄貴だとしたら、次は世羅？

阿呆らしい、とこれまでなら思っていたけど実際に梶さんと接点があるなら……

（信じられない）

久保田はなにやってんだろう。兄貴のこと知ってたんなら、別に浅霧邦春の弱味なんていらなのではないだろうか。

（いま、なに、やってんだ？）

兄貴のことを言えなかったってんなら、いなくなる必要もないはず。

玲華に報告しないといけない。

そもそも玲華はどこまで知ってるんだろう。なんだか自分だけが取り残されてる。

兄貴と浅霧家の間になにがあるんだろう。……………それとも、神崎家と浅霧家？

空想だけが止まることなく突き進んで行く。目眩を起こしそうになる。

叱りつけるかのように、手の中で携帯が震えた。バイブだ。

はっと我にかえる。ダメだ。こんなんじゃダメだ。想像で胸が苦しくなるなんてバカすぎる。

（ちゃんと、置いていかれないように）

現実を見るんだ。たとえそれがどんなに過酷なものとしても、メールを確認すると、サッとポケットにおさめた。

内容にいまさら驚いたりしない。やっぱりそうかっていう想いだった。

神崎くん。次の駅で降りてください。

お兄さんはその近くで止まりました。

R i v e rです。

第四章・・・5

カフェRiver。

レンガ造りで小綺麗なカフェだった。入り口付近には花が咲いた鉢植えが並んでる。

俺は一車線の道路を挟んで反対側の歩道から窓側に座っている兄貴を見ていた。

これ以上近づけない、理由があった。あのとき尾行していた刑事が今日もいたのだ。店側の歩道にある街路樹にその身を潜ませている。俺からはもう見えただけ。

俺はなんとなく自分も兄貴をつけ回していることを、刑事に知られたくなかった。見つければ事情を聞かれるだろう。

相手はやっぱり世羅だった。

いまは死角があり兄貴の右側しか見えないが、それはここに来て最初に確認済みだ。

（あんな顔して笑うんだ）

どんな会話をしてるかなんてわからない。だけど兄貴の顔からは、追われている人がするような切羽詰まった表情なんて微塵みじんもなく、穏やかで時折笑みを見せていた。

俺には決して見せない顔。

外面が良いのか、それとも俺だから見せないのか…、それすら判然しない。

世羅の反応も見なかったが、ここから少しでも世羅の対角線上、つまり入り口側へ移動すると刑事の視界に入ってしまう。気づかれる可能性はなるべくゼロにしないといけない。

こうやって見張って十五分が経過した。

兄貴が立ち上がった。トイレか、会計が注目する。しかし数分経っても戻ってくる気配がない。

刑事の様子を伺うと、わずかに身を乗り出したがそのままだった。

ポケットからまたバイブが震えた。馴れない感触にビクリとなる。

事情があつたらごめんなさい。

でもお知らせした方がいいと思って。

お兄さん、お店から離れましたよ。

まだ祥子さんは事務所で確認していてくれたようで、俺が動かないので知らせてくれたみたいだ。

このカフェには裏口があつたんだ。狭いように感じたが、奥行きはあるんだろう。

（ナイスだ、祥子さん）

俺は走り出した。刑事の後ろ側の、信号も横断歩道もないところを車が来ないことを確認して走り抜けた。

一本向こうの通りに行くために遠回りをする。ここで見失つては意味がない。

細い路地を抜けるまえに兄貴が目の前の道を横切つて行つた。慌てて大きな薄汚れたゴミ箱に身を隠す。

ひとりだった。店を出て別れたんだ、世羅と。

そう思いながらすぐ後を追おうとした。路地から、その道に出たらすぐ兄貴の背中があつた。

だけど出られない。

兄貴の向かいから、兄貴に近づく男が一人現れたから。池田だった。

ちゃんと裏口も張つていたんだと気づく。

「神崎惣一君だね。俺はこういう者だが………ちょっと話を聞かせてもらえるかな」

池田は兄貴に近づくと声を掛けた。ちらりと警察手帳を出したように見える。

「お断りします。こちらには話すことなんてありませんので」

「人が1人死んでいるんだ。捜査に協力しろ」

「何度も言わせないでください。話を聞きたかったら令状でも持ってきてもらえますか」

兄貴の顔は見えないけど声が冷たいから想像はつく。

池田も、兄貴の身体で見え隠れして表情まではわからないが厳しい声だった。

だけど、失礼と断って兄貴が通りすぎても、池田はその背中を見つめるだけでもう食いさがらなかった。

変わりに……。

「出てこい、隠れてるのはわかってるんだ」
バレた。

視線は一度も合わなかったはずなのに。視界に入ってしまったんだろう。

（兄貴が行ってしまう…）

早くしないと、見失う。しかし追うには、どうしても池田は避けて通れない。

俺は舌打ちをして池田のまえに出た。

「こんなところでなにしてる？」

池田が仕事絡みのせいでちょっと怖い。怒ってるんだろうな。あー、やだやだ。

「いやー偶然って恐ろしいなー」

「いつからつけてた？」

「いやーだからさ、偶然って…」

「はぐらかすな、探偵ごっここの続きか？」

なんとか誤魔化そうと明るく言ってるのに、池田は真剣^{マジ}だった。ちくしょう…やっぱムリかー。

「しょうがねえだろ、あんたは教えてくれないし。話し合っても兄貴にはシカトされるし…」

なんか言ってるで自分でへこんだ。なにやってんだろ、俺。
話し合い、したのか？」

池田にちよつと面食らった顔をされた。なんか不本意だ。

だけどそのおかげかなんなのか、池田の雰囲気が和らいだみたいだ。

「悪いか。話し合えつつったの誰だよ」

「悪くない。よく頑張ったな」

池田はぼんって軽く俺の頭に右手を置いた。ムカツときてそれを振り払う。

「やめろよ！ガキ扱いすんな！」

かなり本気でキレたのに池田は怯まない。

「それで？なにを聞いたんだ？」

「失敗に終わったって言っただろ？聞けてねえよ、なにも」

「何か分かったからつけていたんだろ？」

「……………」

気づけばもう、池田は仕事の顔に戻っていた。

もしかするとあまり余裕がないのかもしれない。なぜかはわからないけど…………。

「もう一度訊く。なぜつけていた？」

「それは…こっちが訊きたいんだよ。なんでいま世羅じゃなくて、兄貴に声を掛けた？」

「訊いているのはこっちだ。質問に質問を被せるな」

「言わねえよ。あんただって教えてくれないだろ」

ここにいたくない。

俺は隙について池田の脇を抜けた。だけどすぐ腕を掴まれて阻まれる。

「これは遊びじゃない！流れによっではおまえにも不利になる可能性だってある！喋りたくないなら、大怪我するまえに大人しくしろ」

池田の言いたいことはすごくよくわかった。ちゃんとわかるように話してくれている。

でも。

そんなこと言われたってもう遅い。今さら引けないんだ。

「悪いけど……だからつていまさらやめらんねえんだよ」

「なんだ、自分も関係者のつもりか？自分が動かないと事件が解決しないとも思っているのか？そんなのはただの傲りだ。中途半端な好奇心で事件をかきまわすな」

好奇心つて……。ひどい言われ方だ。

だけど、言えないから。いまの状況で、なんで俺が兄貴をつけ回さないといけないかなんて。言えないなら突っぱねることもできない。

俺の思い違いかもしれないし、そんなんで警察に言ったら冤罪になりかねない。

（馬鹿な考えだ）

思い違いでもなんでも、梶さんの言い残された言葉は戻らない。聞き間違えなんかじゃない。

関係は、あった。

「どうした？今日はもう言い返さないのか？」

まだ腕を掴んだまま、池田がなんとも言えない顔になっていた。

* * *

池田と別れたあと俺はまた祥子さんに助けられて兄貴の居場所がわかった。

兄貴はもう自宅に戻っていた。世羅と逢うためだけに外出したんだ。刑事に尾行されるといふ、ある意味危険なことを冒してまでなんでわざわざ……。

もしかして気づいてなかったのだろうか。兄貴が？

……あり得ない。

（なにを企んでる……？）

何度目になるかわからない猜疑さいぎと不安が渦巻く。

なんであからさまにするんだろう？バレてるのに。怪しくないように隠せばいいのに。令状持ってこないと話さない。なんて、なん

でそれと言ってんだろ。言えるんだろ。

（考えてもなにも出てこない…）

あのとき玲華と久保田は、アールの対面相手が分かればその先が見えてくると言った。だけど現状、なにも犯人に繋がっていつてない。怪しいで止まってる。

俺はもう少しなにかがしたくて、自宅に帰る気もやっぱり起きなくて、それで。

（単純な思考回路）

最低だ。こんなうまく説明できない、変な感情に陥ったままで世羅の家に来るなんて。

世羅が駄目なら俺か？って兄貴に言われたばかりなのに、俺はいままた同じようなことを繰り返してる。

（ここに来たって入れるわけでもないのに）

しかも世羅が帰ってるかどうかすらわからないのに。だけど、もしかしたら久保田ってここにいる可能性もあるんだよな。

頭の整理がつかないまま大きすぎる家の周りを歩いていた。

門から直接入ってみようかとも思ったけど、入れてくれるわけがないって頭の端で気づいていたのだ。それに訪問の理由も思いつかないし…。

ずっと塀にそって歩いてるとあの日パーティで使われた建物の前に着いた。いまは閉まってるようでひっそりと佇んでる。あの日はあんなにきらびやかだったのに。

ひと通り視て帰ろうって思ったときだった。

ちょうど模様で穴があいていて、外から中を見ることができー帯があつた。それは逆に言うとかからも外側が見えるということで、その中から声をかけられた。

「不躰^{ぶじつけ}に失礼、束の間ワシに時間をくれんかの？少年」

そう言つてシワシワの顔にさらにシワを作つて笑つて言ったのが…。

（ええええええ！！）

丸首のシャツにステテコで麦わら帽子に軍手まで着用していて、誰の目にも庭いじりをしてますっていう姿の…浅霧功男だった。無論その格好に裏切らず、花壇の隣にある鉢植えのまえて座り込んでいる。

和服のイメージが払拭した。あのときの近寄りがたい威厳は皆無だ。その辺にいますお爺さんと化している。

なんでこんな……ひとりで庭いじりしてるんだ？っていうかなんで俺に用事が…？

「驚いとるようだよ、少年。おまえさんには会いに行かねばならんと思っていたところだったんだよ」

「なんで……」

こんな偉い人　　たぶん、いまは全くそう見えないけど、きつと偉い人　　がなんで俺のことを知ってる？

「梶の最期を聞きたくてな。……おまえさんが最期に会った人間なんだろう？あの日宴会にも来とったようだが、話せなんだな」

「あつ……」

そうだよな。この人に情報がいつてないわけがないんだ。

パーティのときも気づいていたとは驚きだ。挨拶すればよかった。「すまんの。本来ならワシから出向かねばならんところを。あやつらが五月蠅いもんでな」

ヨイシヨ、と声に出して浅霧功男氏　　久保田の呼び方がうつてる…　　が腰をあげた。

「いま門を開けさせてやるからな。柳田に言つて…。いや、いかな、それはいかん」

独り言かどうかわからないことをぶつぶつ呟きながら、功男氏は塀にそって門のある方まで歩き出した。

えーと…。まだ時間をあげるとは言っていないんだけど…。

とはいえ、そんなこと言える雰囲気ではない。

（なにか聞けるかもしれないし、まーいっか）

どうせ暇な身だ。

「だったら俺、この塀乗り越えます。ここからなら行けるから」

手がなんとか届く高さだった。懸垂して、この模様の穴に足を入れることが出来ればあとは簡単。

「やってみるかの？センサーが反応して警備員とドールベルマンが大勢出迎えてくれるぞい」

実に愉^{たの}しそうに功男氏が教えてくれた。……………やらなくて良かった。そうやって忍び込もうという考えが、実は頭にあつたから余計にビビった。

結局功男氏が門をあけてくれた。使用人を呼ぶのがなんでもいかなのかはわからないけど、庭いじりの格好してるせいか恐縮感とかが生まれない。

功男氏はそのまま庭に連れていき、そこにある白いベンチに座った。俺にも座れと促す。こんなに簡単に、経済界のトップクラスの人（恐らく）の近くに居ていいのだろうか？

「せっかく入れてもらってなんなんですけど、俺は梶さんのことはなにも…」

今頃この人が言ったことを思い出して、申し訳なくなってる。先になにも知らないって言うべきだった。

「構わんよ。見たことそのまま伝えてくれるだけで良い」

「そのまま…」

知ってるだろうに…。この人ぐらいになればこれぐらいの情報なら簡単に手に入るだろう。

俺の考えてることがわかったのか、功男氏は遠くを見ながら続けた。

「ただの情報ではなく生の声が聞きたい。おまえさんはいわば生き証人。人の最期を看取った者は、遺された者に伝えていかなければならん。どんな僅かな事柄でもな」

大切に想ってたんだ。梶さんのこと。ただの使用人とどうでもいい扱いをするんじゃないくて、ちゃんとひとりの人間として。

本当にあんまり言えることは少なかつたけど俺は梶さんのことを

話した。

最後に、あの言葉を伝えるべきか迷う。

「何を迷っておる？」

「……………」

俺、そんなに分かりやすいんだろうか。最近とくにすぐ見抜かれる気がする。

「思うところがあるんだろうが心配無用だ。ワシは警察ではないから。」

「誰が犯人か気にならないんですか？」

「懸念ならある。下の者がなにやら不穏な動きをしておるようだ。」

この流れは…。チャンスかもしれない。この人の持つてる情報がほしい。

「世羅はどうしてますか？」

功男氏は帽子を取って膝に置き、首にかけているタオルでちよつと額の汗を拭った。よく見るとタオルは有名なブランドものだ。この辺がそこらにいるお爺さんと違う。

「世羅か、あの子は不憫な子だ。あえて自ら内紛に身を投じておる少し寂しそうな目で功男氏は空を睨み付けた。

その言い方はつまり、世羅はその当事者ではないということか。

「梶さんを慕ってたんですね。だからあえて？」

「そうだな。世羅は梶のことを父親のように敬慕けいぼしていたよ。それも憐あわれでならん。唯一の理解者を失ってしまったからの。」

唯一の。

唯一無二の存在だったって世羅は言った。そういうことだったんだ。

（親代わり）

憐れって簡単に言ってくれる。

（そう思っなら、なぜあなたが味方にならないんですか）

（なんで世羅だけ一人離れに住むような、そんなこと許してるんですか）

出かけた言葉を吞み込む。そんなこと言っただってどうにもならない。それこそ好奇心で中途半端に首を突っ込むってことになりかねない。

池田に言われなくなっただけ。俺にはどうすることもできない。世羅のことについては。

「世羅が憐れかどうかは、世羅が決めることだ」

「確かにその通りかもしれない。ワシが言えた義理ではなかった。

ワシは傍観者に成り下がっていたんだよ。同罪だ」

同罪？なんの？

「知ってたんですか？世羅が……」

虐待を受けていたこと。知っていて、見て見ぬふりをしていた？

「今はもうワシはほぼ引退しているに等しいが、当時は……いや、自己弁護だな」

功男氏は途中で話を打ち切った。

肩が落ちていて、なんか見えていて痛々しい。計り知れない思いがあるんだろう。

きつと普段とは違う。この人。

引退してなのか、梶さんの話を聞いて感傷的になっているのかはわからないけど。あの日見たような威厳がある感じが本来の姿で、いまはきつと弱気になってるんだと思った。

「内紛ってなんですか？なにがあるんですか？この家に」

「この家だけの話ではないよ。どこの家でも起こりうることだ。権力争いなんてことはな」

確か…、玲華も言っていた。相続争いとかそういう話。

「前からあったが、いよいよワシが引退するとなって激化したようだ。梶はそれに巻き込まれたと言っても過言ではない」

「え？」

まさか犯人のことも知っているのだろうか。

「巻き込まれたって、じゃあ兄貴…神崎惣一という人物を知ってますか？」

だってそれじゃあ、兄貴はなんに関わってるんだ？金目当て？

いや、あまりにかけ離れてる。それなら一介の運転手ではなく、もつと適切な人がいるはずだ。

「さあな。ワシはただ一理あると言っただけだ。全ての因果がそこにあるとは言っておらん」

俺の考えを先回りして功男氏は言う。原因はいくつもあつたということか？

「おまえさんは犯人を探しておるんだな？それでこの家の周りを彷徨^{ろう}いていたわけだ」

ヤバい。いまさらそこ指摘するか？

確かに否定できないけど。誉められた行為じゃないことは知ってるけど！

すみませんと言おうとしたけど、しどろもどろになっているうちに功男氏は続けた。

「たとえどのような結果が待ち受けても受け止める覚悟があるようだな。そういう目をしておる」

あつこの人責めてない。べつに咎^{とが}めようと思って言っただんじやないんだ、って気づいた。

そんな大げさな目をしてるかどうかは不明だけど。

「そういう意味では…神崎惣一君は宴会で挨拶したが二人はよう似とるな」

しまった。兄貴はちゃんと挨拶したのか。

「顔かたちの話ではない、彼にも同じ目を見た。……しかし彼はいかん。似とるがあれは別だ。何やら腹に一物抱えとる」

え？

ハラニイチモツって、それってどういう意味だろう。いや、言葉の意味は解るけど…なんとなくだが。

「おまえさんが抑止力にならねばならんよ。よう意識して彼を注視していなさい。それが良い」

うんうん、と1人で納得して、それからもう功男氏はそれにつ

いてなにも言わなかった。

俺なんか抑止力になれるんだろうか。兄貴の企みがなにかもまだ分かってないのに。
だけど。

止めなくてはいけないことがあるなら俺が止める。そう決めたから。はい、と俺は答えた。

第四章・・・6

功男氏と別れて、祥子さんに携帯を返しに行ってから帰宅したら、もうすっかり夜だった。

とても長い一日だった気がする。

玄関からノロノロと歩いて行ったら、ちょうどダイニングで兄貴が夕食を食べていた。

条件反射でギクリとする。咄嗟にうんざりしてしまう。あまりに不甲斐なくて。

功男氏はああ言ってくれたけど。覚悟が足りない。まだ。

俺が近寄って行っても、やっぱり兄貴は知らん顔で黙々と食べていた。顔を上げない。兄貴、って呼び掛けても見向きもしない。

（またか）

またここからのスタートか。嫌気がさす。いい加減ウザい。でも投げ出すわけにはいかないんだ。

今日はカレーライスみたいだ。玄関を開けた時点で香っていたから、予測を立てたら当たった。まったく難易度の低い問題。

俺は冷蔵庫を開けて半分くらい入ってる牛乳を取ると、棚からガラス制のコップを反対側の手で持ちテーブルについた。カレーには牛乳つてのが俺の暗黙のルールだ。まだカレーを食べる気はしないけど…。

とぶとぶとコップの八割りくらいを白く染める。それをグイッと一気に飲み干して、よし、と気合いを入れた。

「さつき、さ。世羅のお祖父さんと話をしてたんだ」

兄貴はカレーをすくうスプーンをピタリと止めた。

イキナリ反応アリ。

「兄貴のこと腹に一物抱えてるって。……バレてんぞ」

自分の言葉が届かないからって、他人を引き合いに出すなんて本当に卑怯だ。けどもう後がない。そんな気がしていた。

「浅霧家に行ったのか。なぜ行った？」

「兄貴は秘密で、俺だけ言うのって不公平だよな」

「対等のつもりか」

はっと息を吐き出しながら兄貴が笑った。

「対等っていうか一応心配してるんだけど」

「なるほど。下に見られてるわけか」

なんでこの人はそういう言い方しかできないんだろう。

「兄貴って友達いんの？」

「おまえ以外にはこんなこと言わない」

あっそう。

そういえば久保田メモによると、よく友達と高校生が行っちゃいけないような店に出入りしてるんだった。頬杖について、俺はふてくされてみた。

「とにかくさあ、なに企んでるか知らないけど、刑事が見張ってるのに世羅と会うのは自殺行為じゃねえの？」

「なに？」

本気でギロツと睨まれた。ちょっと怖じ気づく。だけど止められなかった。

いい加減終わらせたいんだ、俺は。

なるべく兄貴の目は見ないようにして続ける。

「梶さんと会ってた店で世羅と会ってたら誰でも不信に思うよな」
ガチャンってスプーンが皿に落ちる音と、ガタって兄貴の椅子が鳴ったのが同時だった。

えっ、て俺が顔を向ける前に回り込まれて。

肩だか胸ぐらだかを掴まれて、そのまま床に投げ出された。咄嗟に受け身をとって頭を打つことはなんとか免れたけど、上に乗られ動きを封じられた。

兄貴の顔に余裕がない。初めてこんな切羽詰まった兄貴を見た。怖い顔。

「おまえ、どこまで知ってる？」

低く唸るような声。

「や、やめろよ。どけよ」

なんとか身を起こそうとしたら、がっちり首を締め付けるみたい
に右手で捕まれた。

左手は、俺の右腕をギリって握り潰されるんじゃないかと思うく
らい、強く押している。嫌な汗が背中を伝った。

「言っんだ。おまえは…刑事はいつから見張ってた？」

「つけられてるの、気づかなかったのかよ…」

なんとか絞り出した声は驚愕に震えた。

信じられない。兄貴ならとつくに見抜いていて、わかったうえで
世羅と会ってるんだと思ってた。

「つけていただと。おまえもか？」

「俺は……」

尾行していたことはしていたが、実際には一度離れて、親が取り
付けていた発信器でまた来ました。なんて言えない雰囲気だ。

「俺は…ずっと気になっていて…」

「だからつけたのか最低だな」

「兄貴がなにも言わないから……そのくせ、俺が殺したとか言うし
！真実が知りたいんだよ、俺は！」

身体に力を込めて、叫びながらなんとか体勢を整えようとしたけ
ど。さらに兄貴も力を込め、両手で首を締めてきた。

ヤバい。息が、できない。

「この期に及んで俺のせいか？……おまえ、知り合いの刑事がいる
んだってな。言え、警察はどこまで気づいてる？」

本気だ。

兄貴の目は脅しとかポーズではなかった。本気で絞めていた。

息を吸い込もうとしたができなかった。

戦慄を覚える。

自由に動くはずの手はなんとか喉にくい込んでいる兄貴の手に触
れたものの、引き剥がすことはできない。下腹部に乗られているか

ら、脚はばたつくだけで兄貴には届かない。

「言わないならここで死ぬか？」

「ぐっ……」

怖い……。殺される……。

これ以上絞め続けられたら……マジで死ぬ。

息苦しさから思考が止まる。

だけど血がせき止められているのは感じた。うつ血する。視界が赤みを帯びてなにも見えない。耳鳴りがしてなにも聞こえない。

いつもの苦しさとちよつと違った。いつもより苦しい。僅かな酸素さえない。

明らかに敵意を持った人間に、それもたつたひとりの兄貴におとしめられている状況は、苦しくて悲しかった。

なにがそこまで追い詰めたんだよ。

言えよ。そんなことになるまえに、吐き出せよ！バカ！

気力だけで左手を動かしたけど、兄貴の力に勝てるはずなかった。むなしく空を切って、パタリと床に落ちた。

それがきつかけになった。

諦めの念が俺に渦巻く。

ああ、死ぬのか……俺は。くだらない人生だったけど、何度も過呼吸に陥るたび命の危機を感じたけど、それもとうとう終わるんだ。

苦しみから解放されるんなら、それもいいのかもしれない。死んでしまえば、馬鹿にされることも、殴られることも……、何かに気を病むことが、ないんだ。

（もう、だめだ　　）

意識が限界にきて、完全に途切れそうになったとき。突然。

兄貴の手が、離れた。

大量の空気が一気になだれ込んできて、喉が耐えられないとでもいうように俺は激しく咳込んだ。肺が、全身が酸素を欲している。いつの間にか兄貴の重みもなくなっていて、身を横に向けてもし

ばらく咳が止まらなかった。

それでも兄貴が気がかりで顔をあげる。兄貴はこちらに背を向けて、あぐらをかいて座り込んでいた。頭が項垂れている。

「あ……」

喉がつぶれて咄嗟に声がでない。兄貴、って呼び掛けたいのに。真意を確認したいのに、出るのは咳ばかりだ。

「違うんだ」

体は動かさず、ぼつりと兄貴が言った。抑揚のない声で。

「俺が殺したいのはおまえじゃない」

殺したい。って言ったか、いま。

俺じゃなくてもなんでも、殺したい人間がいるってことか……？それが腹に抱える一物なのか？

「俺もお袋の血を引いていたというわけか」

自分の拳を見詰めながら兄貴は笑った。笑ったように聞こえた。

（馬鹿野郎！）

そんな兄貴は見たくないんだよ。

いまなら……いまならなんとか、思い止まらせることができるんじゃないか？そう思っ腹に力を入れて上半身を起こした。

「兄貴……池田さんは、刑事はパーティより前から張ってたって」
声を出すことには成功したけど、まだ掠^{かす}れていた。

「もともと世羅がアリバイなかったから注目されたみたいだけど、その中で兄貴が世羅と接触したから……。刑事がどこまでつかんできるかなんて、俺も知らない」

「……………」

「それにこの事件のこと調べてんの警察だけじゃねえよ。……兄貴、気づいてた？両親^{おや}が俺たちのこと探偵に見張らせていたの……」

「なに？」

兄貴の体がややこちらに向いた。

「気づかないよな。俺だって今日知って驚いた。俺と違って兄貴はデキが良いし好かれてる」

だから。

「その探偵もこの事件調べてるんだ」

だから、思いとどめてほしい。そういうことが伝わればいいと思
った。

「いつから？」

「わからない。少なくとも探偵は四月からだけど、俺の場合は中学
のときに気づいた」

「どういう、意味だ？」

完全に兄貴は俺を見ていた。俺も見据える。

俺は中学のときの教師の話をした。やるせない想いがよぎる。

「そうだったのか、やけに事情通だと思ったら……」

「だからさ、もうやめろよ！何やったって結局全部バレるんだよ」
まだ立ち上がれないでいると、少し蛍光灯の光が遮られて一瞬暗
くなった。兄貴が近づいてきていて、俺と同じ目線になってたんだ。
怖い顔のままで。馬鹿にしたり蔑んだりっていうのはもうなかつ
たけど、目がつり上がっていた。

逸らさないで、無視しないでまっすぐ俺を見る。

「もう遅いんだよ。おまえは止めたいのかもしれないが、話してい
てわかった。おまえに俺は止められない。……俺は明日決行する」
決行って……なにを？わかったってなにが？

考えないといけないのに、頭がうまく回らない。

「いいか、絶対についてくるなよ。大人しく家にいる。次に邪魔す
るときには、本当におまえを殺す」

なんだよそれ。殺す殺すって簡単に言ってんじゃねえよ。

……って言いたかったけど、言えなかった。きつと簡単には言っ
てない。

（本気だ）

これも。本気の言葉だった。

兄貴は食べ残したカレーを片付けて、そのまま部屋に戻った。

その間、俺はやっぱりなにも言えなくて、みっともないけど座り

込んだままだったんだ。

* * *

あんなこと言われたからって引き下がれるはずなかった。
違う。あんなふうに言われたからこそ、なんとかしないといけな
いんだ。

出掛けさせないようにリビングにその夜はいた。廊下にくぐド
アをすべて全開にして、いつ出掛けても気づくようにした。

……だけど、やらかした。

いつの間にか眠っていたみたいで、起きたときには兄貴はいなか
った。

（まだ六時…）

きつとつけられないようにするためだ。深夜のうちに出了たのか早
朝なのかはわからない。

三時ころまでは記憶があるが、やっぱり疲れが溜まっていたみた
いだ。

でも奥の手がある。

（たぶん…）

何につけられてるか知らないが、発信器のことはまだ言っていない。
（たんに言い忘れてただけなんだけど）

俺は一呼吸おいてから、急いで身支度をした。

それから祥子さんに、というか探偵事務所に家から電話してみた
けど、日曜日の早朝のせいかわもとる人はいなかった。探偵に日曜
とか祝日の概念はないと思うが…、やっぱり朝が早いせいかもしれ
ない。

俺はじつとしてられなくて家を飛び出した。

睡眠不足と、クーラーをつけたままだったせいか体がダルい。そ
んな体に初夏の朝の陽射しは疲労感を加速させた。

駅に行こうと方向を決めたときだった。どこから現れたのか見て

なかったけど、目の前に池田がいて走り寄ってきた。昨日より厳しい顔をしている。

「神崎惣一はどこに行った？」

「は？尾行はどうしたんだよ？」

「警察は尾行のプロだろ？俺と違って。」

「撒かれた。昨日までと彼の動きが違う。明らかに尾行に気づいていた」

「俺のせいだ。俺が言ったから……」

「なぜ言った」

「それはこつちの話だけど。悪い、そこまで深く考えてなかった」
「警察のことまで頭がまわらなかった。ただ、思い止まってくれたらって、それしか……」

「いい加減にしろ。君がしてることは捜査攪乱だぞ」
（かくらん）

「いやだなあ。また叱られてる。」

「キレられたり、責められたり、怒られたりするのはガキの頃からあったけど、本気で叱られるってのは最近になってから、よくある。違いが判りはじめてきている。少なくとも親のは違ったんだって。」

（つらい）

「叱られるのも、怒られるのも。」

（痛い）

「どうした？」

「黙ってしまったせいで、池田が近づいてきていた。顔をあげる。」

「あ、違う。」

池田と視線が合わなかった。目線が俺の顔より下にある。池田の手が俺の首元付近にきた。

「どうした？この痣」
（あざ）

「昨日の息苦しさが蘇る。」

「いまにも触られそうな池田の手にゾクリとする。直射日光で暑いはずなのに、全身が急に冷えた。」

「なんでもねえ。悪い。用事、あるから」

なんとか言えたのがそれだけで。俺は池田とは反対側に走り出していた。

池田はちゃんと相手をしてくれてる、俺に。ひとりの人間として。ガキだとぞんざいに扱わないで、誠意をみせてくれる。それはわかる。だけど、兄貴のことは言えない。

いい加減にしろ。

しない。まだいい加減にできないから。もう少し足掻かせてくれ。（お願いだから…）

スニーカーの靴底がアスファルトを蹴り続けている。自分の意志とはかけはなれてるかのように、慣性の法則みたいに、脚はただ走り続けていた。

遠回りをして駅につく。親がくれた磁気タイプの乗車カードを通して電車に乗っても、しばらく頭がまわらなくてぼうつとしていた。電車内は朝早いのに割りと混んでいた。座りたかったけど出入口付近を確保して外を眺める。

iPodを取り出すことさえ忘れてる。三駅ほど過ぎて気づいたけど、そのままにしていた。

（お願いだから、間に合ってくれ）

兄貴が誰を殺そうとしているのかは分からないけど、相手が誰かなんて関係ない。

やめさせないと。抑止力にならないといけない。

俺は目的の駅を降りて、また走り出した。止まっていられない。気持ちだけが焦る。

だけど、やっぱり探偵事務所には誰もいなくて、ドアもかたく閉ざされていた。何かの役に立つかもしれないと思って、つけずに持ってきた腕時計で時間を確認する。それでもまだ八時。

何時から祥子さんは来るんだろう。そもそも来るかどうかもわからない。家か連絡先を聞いておけばよかった。昨日あんなに携帯電話持ってたのに、番号を確認するのも忘れた。なんて失態。

この失敗が命運を別けることになったらどうしよう。

（玲華…）

そうだ、玲華がいる。玲華なら祥子さん家も連絡先も知ってる。でもどうしよう。玲華に言えば必ず聞いてくるし、必ずついてくる。危険だから来るななんて言葉は届かない。

（余計に来る）

まだ落ち込んでるんだろうか。

（いま、なにしてんだろう）

メールはあれから、まだきてない。

「っ…」

不安が息苦しさを呼び起こした。

胸が張り裂けそうになる。息が吸えない。

そしてそのまま崩れ落ちて、飛んで来てくれるやつは誰もいなかった。

* * *

どれくらい、そうしていただろうか。

扉のまえで、いままで走っていたのが嘘みたいに俺はうずくまっていた。動くと呼吸が乱れるとでもいうかのように、微動だにしなかった。

脚を折り曲げ膝を抱えて、いわゆる体育座りの格好で顔を埋めていると上から声がかけられる。

「神崎くん？いつからそこにいたんですか」

わずかに驚いた声の主はやっぱり祥子さんで、バッグを腕にかけて立っていた。

あー、良かった。日曜日だから今日は来ないっていう最悪なパターンじゃなくて。

「頼む、はやく開けて…」

「あ、はい。そうでしたね。すみません、もしかしたらって思って

たのに：もつと早く来るべきでした」

言いながらバッグからごそごそ取り出して鍵を開ける。

「それってつまり、予想してた？」

「今日もお兄さんを尾行するのももって。そしたら必要ですよ、パソコン」

「ごめん、本当は休みだった？今日」

ノロノロと立ち上がって中に入れてもらいながら俺は聞いた。本当は休みなのに、わざわざそれで来てくれてんなら申し訳ない。

祥子さんは自分の机にバッグを置くと、さっそくパソコンを立ち上げてくれた。

「いいえ。それがなくても来るつもりにしました。いつ先生が帰ってくるかわかりませんから」

「あ、そっか」

あいつがまだ帰ってないことはわかってた。待つてる間に気づかされた。呼吸を正してくれるいつもの声がない。

「神崎くん。その首どうされました？」

パソコンの前の椅子に座ると、祥子さんが目ざとく見つけた。

ヤバイ。もしかすると電車の中でも見られたかもしれない。

「そんなに目立つ？」

「まあ、前から見れば…。とくにいまはＴシャツですからね…。制服なら大丈夫だと思いますけど」

しどろもどろになりながらぎこちなく気遣ってくれた。つまりいまは目立つんだらう。兄貴の爪が食い込んだ部分とかは、とくに。

「それよりそのアトってもしかして…」

「大丈夫だから。気にしなくていい」

あまり触れてほしくなくて即座に俺は打ちきった。祥子さんは空気を呼んだくれたみたいで、もう突っ込んで聞いてこない。

悪い、って思う。自分のことしか考えてなくてごめん。祥子さんは優しいのに、恩を仇で返してるみたいな気分になる。

いつになったら優しくなれるんだらう。自分のことを後回しにし

て気遣える人が、実際にいるのに俺はできない。

「お兄さんかなり早く移動されてますね。車、でしょうか」

パソコンを覗きながら祥子さんが言う。

はたつと我に返った。

（集中しろ）

いまはただ、兄貴を追うことだけを考えるんだ。

パソコンを見直すと、兄貴のものと思われる光りの点滅がすごい速さで移動していた。

「どこ行くんだろう？」

「高速に乗られてるようですね。まずいですよ、このままだと発信器が受信できるエリアを超えます」

なんてことだ。これさえあればとりあえず行き先だけはわかると思っていたのに。点滅が止まるのを待っている余裕はないみたいだ。

「推理をしてみましょう」

「推理？」

「神崎くんのお兄さんがどこに行くのかではなく、誰に会いに行ってるか、もしくは何をしに行ってるか考えるんです」

何をしに…。

（殺しに）

人を殺しに行ってる。誰になんて、俺が聞きたい。兄貴には兄貴の世界があつて、そのほとんどを俺は知らないから。

でももしかしたら。ここまでできたら。

「浅霧家の人の誰か？」

「わたしもそう思います。昨日世羅さんと会われてたんですよね？今日のことの打ち合わせとは考えられないでしょうか」

昨日のことは、携帯電話を返しに行ったときに話してあった。でも兄貴が誰かを殺そうとしているかは祥子さんに言っていない。

だけどそんなことを言うもんだからギクリとした。それだと、兄貴が人殺しをすることを世羅も知っているということになる。

（世羅も共犯…）

バカバカしい考えだと思いながらも完全に否定してない自分がいた。

もしかして…梶さんを殺した犯人は兄貴ではなくて、別にいるんじゃないか。兄貴と世羅の共通の人物といえば梶さんだ。

（兄貴が殺したいのは、梶さんを殺した犯人？）

それなら納得がいく。梶さんの最後の言葉の意味が、それだとまた雲にのまれてみえなくなるけど。

「あ、消えてしまいました」

「え？」

祥子さんの眩きに慌てて画面を見る。確かに、光りはどこにもない。

「くそっ…！まだなんにもわかってねえのに」

無念さからテーブルを叩く。安定して置かれてなかったキーボードがガタツと鳴った。

すると、祥子さんが自分のバッグからなにかの鍵を取り出して、満面の笑みで言った。

「とりあえずわたしの車で近くまで行きましょうか。その間に推測を続けましょう」

「続けましょーって…」

「ここでじつとしているよりはいいと思いませんか？」

確かにそうだけど。有り難いけど。

「なんでそんなに良くしてくれるんですか？久保田さんは？」

不思議で仕方がない。ここにいなくて久保田はいいのだろうか。

「んー…。そうですね。この件に関わっていればいずれ先生には会えると思ってます。………あとは、神崎くんと先生って似てるからほっとけないのかも」

「はあ？誰と誰が似てるってえ？」

心外すぎる。

思いも寄らない内容に俺が思いつきり嫌な顔をしたら、祥子さんはほくそ笑んでた。あぁっ？

* * *

真っ白い、丸みのある小柄な車体で、祥子さんはイメージ通り丁寧な運転をしていた。

たまにうひゃっ、とかあらっ、とか独り言が多いのが気になるけど…。

俺としては、車内でいくら考えたところで“会つのは浅霧家の誰かで、梶さんを殺した犯人”っていうところから突き進んだりしなかった。

当たり前だ。要はスタートラインに戻ったってことだから。犯人がわかっていれば、最初から苦労してない。

「もうすぐで光りが消えた位置になります」

「とりあえず近く走ってみて」

はい、って祥子さんが言ったけど…これからどうしよう。だいたい会う相手がわかったところで行く場所が特定できるとは限らない。

「このあたりは倉庫街ですね」

「ああ…。じゃあ、この辺は違うか…」

「そうとも限りませんよ」

「どういうこと？」

「このなかに浅霧家所有の倉庫がいくつかあるはずですよ」

「マジ？」

ええ、マジですと大真面目に祥子さんは答えた。

それなら可能性があるのかもしれない。だいたい倉庫街なんていかに怪しいじゃないか。勝手なイメージだけど。

車は速度を落として倉庫街を徐行した。数分走っていると一台の車が不自然に止まっているのを見つけた。

なにが不自然って……停まり方は普通に、いや少し建物に隠れるように停まっていたが、つまりこういう場所に不似合いな高級車だったのだ。怪しい…。

「ちょっと離れたところで止めて」

祥子さんに頼む。その通りに、別の倉庫に用事があるみたいにそこに寄せて祥子さんは停めてくれた。

「ここで待っててください。ちょっと様子見てきます」

「あ、でしたらわたしも……」

「ダメ。危ないから」

「危ないのは神崎くんも同じではないですか？」

「そうだけど！祥子さんになにかあったら俺が久保田さんに怒られるから！」

まだ不本意そうな顔をしていたけど、なんとか納得してもらって俺はひとりで怪しい倉庫へ向かった。

あんなこと言っただけど、嘘じゃないけど、理由は他にもあった。だからちよつと胸が痛んだ。

いまの兄貴を誰にもみせたくないんだ。見せられない。

兄貴の間違いはちゃんと俺が止めるから。そしたら無かったことになる。形だけでも。間違いは起こらなかったってことになる。そうする。

（まだ間に合うよな？）

ここまで決意して、すでに幕が引かれていたらシャレにならない。祈るような気持ちで近寄った。

そこは倉庫と呼ぶには、綺麗な建物だった。出来てまだ新しいことがわかる。コンクリート剥き出しの色で高さは三階建てくらい。

屋根は角度が浅い。いかにも倉庫という感じが、ひとつひとつが新しかった。

一番近くの窓に近づき中を覗いてみる。小ささまざまな大きさの木箱が置かれていた。その隙間から、棚がありそこにも小さめの木箱が並んでるのが見える。人影はない。

なんとか入れないか？と思ったが窓は鍵がかかっている。

（やっぱりな……）

開いてたらバカだろ。あーくそつ。

俺は頭を掻きむしった。焦燥感が増す。なかばヤケになって全部の窓を確認して行った。

もうダメかと諦めかけながら、最後の窓に手をかける。

「あ、開いちまった！」

ここのセキユリテイ、だめじゃん。

俺には有り難いけど。ここがアウトなら、真正面から行かなければならなかった。っていうか右回りで試せば良かった。

とりあえずその窓から中に入った。新しいと思っていたが、わりと充分ホコリっぽい。倉庫独特の臭いがする。

建物の中は、二階まで突き抜けで高さが確保してあった。確かに一階分では収まらないほど高い何かがある。布で覆ってあって中身はわからないけど、布にロープがグルグルに巻いてあって開けることは不可能だ。

それを見上げながら、棚と棚の間をすり抜けてどんどん奥に入っていく。途中で開きそうな小さい箱があって、手にとって開けてみたら鏡だった。隣のそれより大きい箱の中身は掛け時計。

（輸入家具、か）

株式会社シユウリスの品物だと、ピンときた。これはもしかすると……アタリかもしれない。

知らず知らずのうちに頬が緩むのを感じる。でもすぐに引き締め、足早にだけど静かに歩いた。視線は注意深く辺りを見渡す。

このフロアには一番肝心な、人影がどこにもないようだ。それでも進んで行くと、奥に鉄色をした階段があった。地下に続いている。迷わず俺は足を踏み入れた。二、三段降りたところで、ガンガンと甲高い音が響いたから、ヤバいと立ち止まる。それから、恐る恐る爪先立ちで降りた。

降りきって少し進んだところに深緑色の鉄の扉があって、重々しく行く手を阻んでいた。

それでも近づいていくと、何かが何かに激しくぶつかる大きな音がした。

人がいる？

「恩を忘れて勝手なことしやがって！」

それから激しい怒号。この声には聞き覚えがある。

浅霧邦春のものだ。

それからなるべく聞きたくないと思うバキツという重い音。これも馴染みのある音だ。人が人を殴る音。しかも平手ではなく拳で。開けたくない想いが浮上する。

イヤだ。怖い。

入って行ったら自分も殴られるような、そんな気迫さが扉を通してもわかった。

「なにが脅迫だ！自分がどという立場かわかってんのか！てめえは！」

またガンガン聞こえる。恐らくこれは近くにあるなにかを、蹴っ飛ばしているんだろう。

物に当たる人はこんなにも周りの者を不快にさせていくんだ。

（相手は誰だ？）

脅迫って言っていた。兄貴か？

俺はハンドルレバーに手をかけた。だけどまだ引けない自分がいる。

「おれが一言いえば、てめえなんかウチにいらなくなるんだよ！」

この一言ですべてを悟った。さっきまでの躊躇^{ちゅうしゆ}が嘘のように勢いづいて扉を開く。

中を見ると蹴飛ばされて無惨にへしゃげている箱たちがまず目に付く。そしていきなり現れた招かれざる客、つまり俺の方を振り向く浅霧邦春。

その先には地べたに倒れている　　世羅が、いた。

第五章・・・ 1

地下室は石膏ボードの壁で吹き抜けになっていた。

一階にあつた高い家具よりも高い何かがある。それも梱包されているが家具のひとつだろう。こんな大きいものを置ける家ってどんなだよ。

他にはナイロンで包まれたソファーベッドや、箱に入っているがおりたためられているテーブルがある。

浅霧邦春が蹴っ飛ばしてた木箱は、ひとつだけ中身が飛び出していた。それは収納ラックで、ガラス部分が割れ悲惨なことになっている。売り物だろうに。あまり物を大事にしないタイプみたいだ。そして。

世羅は俺が現れても顔を上げない。それが一番気になる。

兄貴だと思っていた相手が世羅だった。それはかなりの衝撃と混乱を俺に招いた。

（なんで世羅がここにいる？）

（じゃあ、兄貴はどこに行つたんだ？）

兄貴を追つてるはずだった。ここにはいない。

でもそうわかってても、こんな状態を見せられて、じゃあサヨナラつてわけにはいかなかった。

「おまえはあいつの弟か！あのとときいたな！」

やつの怒りがそのままこちらにスライドされた。こいつは最悪な男っていう先入観が、疑問もなくストンと胸におりる。

「なにやってんだよ！こんなところで！」

「それはこちらの台詞だ。誰の所有地だと思つてる！」

「殴る音が聞こえたんだよ！あんたまさか世羅を殴つたのか！」

答えを聞かなくても明白だった。倒れている世羅の近くには赤い飛沫。七分丈の袖の部分からちらりと見える痣。殴られたのは一発じゃない。

激しい憤りが俺を襲った。

べつに良い格好をしたいわけじゃないし、紳士になるつもりもない。

（だけど、ダメだろ）

こんなん許されないだろ。女を、義理とはいえ子どもをこんな扱い……。

自分と世羅が重複^{ダブ}する。

ムカつくっていう言葉だけでは収まりがつかない。何を当てはめても充分ではなく、感情がその上をいくんだ。

悔しい。こんなことがまかり通つてることが悔しいし許せない。

だけどヤツはなんでもないことのように鼻で笑った。

「こいつはおれの所有物だ。関係ないやつは出ていけ」

「なんだと！ てめえ、どのツラさげてっ」

「いやまてよ。そうか、おまえは餌になるな」

俺の激高を無視して浅霧邦春はひとりごちた。

餌ってなんの？ って考えた一瞬の隙について、邦春が出ていく。

追うように振り向くとすでにやつは外にいて、ニタリと不気味な笑みをみせる。

それからガチャンと扉を閉めた。

（あつ！）

瞬時にドアレバーに飛びついたけど遅かった。開かない。

「てめえ！ 出せよ」

「しばらくおとなしくしているんだな。仲間を連れてきてやる」

くぐもった笑い声を最後に、邦春が去っていく足音が聞こえた。

仲間を連れてくるって……だれのことだ？

（やっぱり兄貴か？）

どういうことだろう。これから会う約束でもしているのだろうか。

（んなことより）

いまは。世羅だ。

まったく起き上がろうとする気配がない。まさか。

「世羅！大丈夫か？」

世羅のもとへ駆けつけようとする。

「寄るな」

世羅から弱い声で、でもはつきりとしたはねつける言葉が出てきた。拒絶の意思が伝わってくる。

戸惑いながらも目が離せないでいると、少しずつ起き上がり、手だけで壁をつたいながら俺から離れていった。震えながら。やがて一番大きい家具に行く手を阻まれて、それにもたれかかった。

顔が見えると、かなり怯えた表情でいるのがわかる。目の下に殴られたあとがあつて、痛々しい。

「寄るな。おまえ何しにきた」

「なんか……あまり大丈夫そうじゃないな……なんとかここから出ないと」

病院つれて行かないと。あいつ捕まえないと。兄貴に知らせないと。

なんかやるべきことが多すぎて慌てる。

それなのに何回がちゃがちゃとレバーを引いても、抵抗されているように下がりきらない。

他には出口はないようだ。唯一、一階部分の位置に窓がある。俺が開かないことを確かめた窓のうちのひとつだ。ここにある家具を使っても届くはずがなかった。

「やばいな……マジで出れそうにない」

ということはこの空間に世羅と二人きり……。かなり気まずい。彼女には嫌われてるし。

「おまえ……私のこと嫌いだろう」

逆なことを、ある意味すごいタイミングで世羅がそんなことを呟いた。

「は？逆だろ」

「いろいろと反抗されて……あんなことをされて、嫌いにならない筈がない」

世羅はこちらも見ずに、斜め下の方を焦点の定まらない虚ろな目で見つめていた。声に力がない。

そして恐がっている。最初からずっと。

あんなこと……。そういえばあの教室での出来事からは初めて会うんだ。気づいたら益々気まずい。

「あのさ、わざと嫌われるように仕向けてなかったか？」

訊きながら俺も壁を背に腰をおろした。ちゃんと世羅と距離を保っていたのに、彼女はビクリと身震いした。俺が動いたことに怯えたんだ。

（俺が恐いんだ）

少なくともいまは。俺と密室の中にいるのが、不安がらせてる。

やっぱり教室では強がりを見せていたんだ。

いまはあのとときの気迫も強気も剥がれ落ちていて、弱いままの世羅だった。そういう虚勢すら張れないほど、余裕がなくなってるんだ。

原因がわかったところで、どうすれば安心してもらえるのか、信頼を得られるのかわからない。

でもいまの世羅の方がいい。あんな見え見えなやり方されても、切なくなるだけだから。

「私はおまえが嫌いだ」

「うん」

わかってる。

「でも俺はなにもしない」

「嘘だ」

「ウソじゃない。なるべくなら傷つけないって思ってる」

「嘘だ！おまえはすぐ怒鳴る！暴力だつて奮う。あいつと同種だ！」

ああ…そうか。世羅の中では、浅霧邦春も俺も同じなんだ。最低な野蛮人なんだ。粗暴で好戦的な…。

心外だと言うには、あまりにも心当たりがありすぎる。

きつと世羅は、自分自身に対しての態度だけを見ているんじゃない

いんだ。校内で喧嘩するところとか、他のクラスメートに対する態度も視野に入ってしまったてる。

知らなかった。いつも俺は発言するときもその行動も、目の前にいる相手のことしか考えてなかった。知らず知らずのうちに、第三者まで傷つけることがあるんだ。

（すごくキツイ）

きつくて厳しい。人間関係の奥深さを知った。

常に万人に好かれようと意識するのは不可能だ。好かれようと思つて好意を持たれるかどうかさえ保証はない。

（だけど嫌われて嬉しいやつはいない）

俺は嬉しくない。怯えられて平気でもいられない。

「悪い。……ごめん。もうしない……ように、気をつけるから」

「守れない約束などするな」

「……………そうだな」

そうだよな。いくら言葉で言つても、行動が伴わなかったら意味がない。

「優しくするな」

「おまえね……どうしろと言うんだ」

無然とする世羅に、膝を曲げてそのうえに肘を置き考えながら受け答える。相変わらず世羅の気持ちが悪くてわからない。恐がっていること以外はなにも……。

彼女は縮こまりながら両腕で顔を覆っている。

「私を、見るな」

「……………」

「私に女を感じるな」

「女、イヤか？」

「嫌だ。……………嫌だ！自分が男だったらと、どれだけ考えたかわからない！」

いきなりガバツと顔をあげると、世羅はいまにも泣いてしまっうんじゃないかっていう表情をしていた。ぐちゃぐちゃに歪んで、あ

の教室で玲華がみせた顔とダブる。

なにか言わないと……。気の利いたことを言わないと。だけど言うべき言葉がなにも出てこない。

こういうときなんて言えればいいかわからない。慣れてなかった。慰めることとかが下手くそで、できない。かえってヘタなことを言いついで。

やっと出たのが。

「うん」

（うんじゃねえだろ、バカ）

自分の不甲斐なさに呆れる。

「おまえはいいよな、男で」

また世羅は顔を隠して、自分自身を守るようにうずくまる。その姿はまるで、自分じゃないと自分を守れないと思ってるかのようだ。今日の世羅は饒舌だ。喋ってないと不安が増すのかもしれない。

「男で、力があつて。殴られれば、殴り返せて」

そんなことねえよ、俺にだって殴り返せない人がいるんだよ。

そう思ったけど黙っていた。いまは俺の話なんか関係なかった。

事件の話しも兄貴のことも、いまは聞ける雰囲気じゃない。

「それから、私の大事なものまで奪っていくんだ」

「え？それって……」

「私が男なら、手放さなかった」

すごく重大な話しに向かった気がした。どういうことが聞きたかったけど、阻まれた。

足音が耳に届いたからだ。

近づいてくる。

世羅がさらにきつく自分自身を抱き締めるのと、俺が立ち上がった扉を見るのが同時になった。

（足音がひとつじゃない！）

二人……いや三人？

数を確かめる間もなく扉が開いた。先頭に浅霧邦春がいて、満足

そうに俺たちを見た。

「ほら、お仲間だ」

脂ぎった顔に薄く笑い顔を作り、そう言つと太った体を移動させて後ろに回る。

邦春の体ですっぱり隠れていたけど、頭ひとつ飛び出していたから、そのお仲間の正体はすぐにわかつていた。

ああ……。やつぱり。

「兄貴」

兄貴は後ろで手を縛られているみたいだった。満面に苦渋を滲ませて、よろめきながら入ってくる。

押されたんだ、って気づいたとき、その押した人物が三人目として顔を覗かせた。

その人物はまったく俺が想像してない人だった。

（なんで……）

ナイフをちらつかせながら、そいつは最初に見たときと変わらないう、控え目な笑顔で佇んでいる。世羅が憎悪を含んだ罵声を浴びせた。

「柳田！貴様お祖父様を裏切る気か！」

（え？）

浅霧家の執事、柳田は余裕綽々じやくごにさりりと言う。

「お嬢様。もうすぐでお別れです。大人しくなさっておいででしたら長生きできたものを。非常に残念なことです」

「三人揃って死ねるんだ。寂しくはあるまい。一人で死んだ梶とは違ってな」

「あつ……」

このやりとりは……。

そうだ。つまり梶さんを殺したのは。

「てめえらが殺したのか？……いや」

俺が見たのは一人だけだ。

あの日の場面が浮かぶ。もう何十回も何百回もよぎった場面。犯

人の体格からいつて。

「おまえが、あの日、雨の中…梶さんを」

俺は柳田を見て言った。柳田の表情はピクリとも変化がない。

「まさかあの時間に人に見られているとは思いませんでしたよ。しかもこの男の弟とは……。世間は狭いですな。ですが何の弊害もありませんでした」

最後の方の笑い方が、不気味だった。眼光が鋭くなったのに対し、口角はさらに上がりニカツと齒をみせた。

これが人殺しの顔。

人の最大の禁忌を犯した人間の顔か。

ゾクリと背筋が冷える。

「わざわざ明かしてやることはない。柳田すぐ始末をするんだ」

「時間が押してますので今では駄目です。一度浅霧家に戻らないと、功男様に不信感を持たれます」

「ちっ。使えねえな」

「完全犯罪ではないと……。捕まっては意味がないのです」

「それはそうだな。おまえら、少し生かしておいてやる。その間にたっぷりお別れをしておくんだな」

ふざけた会話を続けて、二人揃ってこの部屋を出た。

再び鍵を掛けられる。ナイフの存在が、大人しくそれを見守ることしかさせてくれなかった。

（くそっ！ やつと犯人がわかったのに！）

「惣一さん」

ゆっくりと世羅が立ち上がる。

そこで俺もようやく兄貴に駆け寄って縄をほどきにかかった。

昨日の続きみたいな辛そうな顔をして、兄貴は大人しくほどかれている。かなりキツく縛られていた。その手首にはアトが残ってしまった。

「すまない。失敗した」

縄がほどけるとまず世羅にそう言う。

失敗したのか。こんな状況なのに俺はほっとしていた。恐らく兄貴の狙いは柳田だったのだ。

「いや、私が勝手な行動をとったから……。来るなと言われていたのに」

「来ずにはいられないだろうってことはわかっていた。完全に俺が油断しただけだ」

「あの帳簿は？」

「奪われた。邦春が来ているとは思わなくて、後ろをとられたんだ」
「もういいです。柳田は認めたのでしょうか？ だったら、あとはどうにでも出来る」

しおらしい世羅にも、温和な兄貴にも俺はすぐくびくりした。
どちらも俺には初めて見る一面だ。そういえば、二人の会話って初めて聞くんだ。

「証拠がまだ弱い。警察相手なら言い逃れができてしまう。やはり俺が直接制裁を加える」

「惣一さん」

「辛いなら君はやめてもいいんだよ」

「俺だけ話が見えないんだけど……」

頼むから説明してほしい。

なんとなくの話しは見えるけど、そもその根本的なことがわからない。なんでこんな状態に陥っているのか。

兄貴はようやく俺を見たけど、世羅に向けた表情から一変して陰しくなった。まったくコイツらは。俺と相性が合わないんだろうか。

「おまえ、またつけてきたのか？ 寝ているうちに出てきたのに……どうやった？」

「質問に質問を被せないでくれる？」

池田に昨日言われた通りに言ってみる。俺にはちょっとグサリときた言葉だったのに、兄貴は簡単に受け流した。

「見張られるのに慣れすぎて、自分も見張るのが上手くなったのか

？」

「なんだよ、それ。んなもん慣れるかつ」

そう吐き出したものの。久保田のは慣れたのかもしれない、って思った。いつからか、いても気にならなくなっていた。それが親に情報がいくつてところは、まだ納得がいかないけど。

「それより、帳簿って裏帳簿のこと？」

久保田と玲華が目をつけた脅しの材料。確か邦春とか、他の浅霧の兄弟たちを相手にするものだったはず。

「それでなんで柳田がノコノコ出てくるんだ？」

「なぜ神埼が知ってる？」

「なんか妙なことで知ってるんだ、こいつ。俺たちがRiverで会ったことも、刑事が俺たちをターゲットにしてることも」

「こそこそ嗅ぎまわっていたのか。あんなに消極的だったのに」

「それだけじゃない。昨日、功男さんとも話したそうだ」

「お祖父様と？貴様いつのまに…」

「ちょっと待て。ダブルで責めんな。マジきつい」

俺は片手を胸にあてて、もう一方で手のひらを二人に向けた。降参したい気分だ。一人でも厄介なのに。

玲華と拓真がタッグを組むのとは明らかに意味が違う。嫌悪感力ケル2だからな。

「まずおまえから話せ。信用できない」

「話せて…、俺はおまえらの秘密を知りたかっただけで…」

「刑事と探偵が裏にいるんだ」

世羅の疑問に兄貴が答えた。俺だけじゃここまでつかめなかったのは事実だ。刑事の方は別に直接教えてはくれなかったけど。

「探偵？なんだそのいかがわしい奴は」

世羅が訝しがった。

（まー、確かに胡散臭いけど）

それより世羅がもういつも通りに戻ってる。もう怖がってない。兄貴がいるからだろう。

そのとき、疎外感を感じて上の方を見た。
やるせない想いを誤魔化すためだけの、何気ない動作だったのだ
が。

（ええっ！）

それを目視した瞬間、度肝を抜かれた。

（なんでー…）

上の窓から、石を持って窓ガラスを叩き割ろうとする人影が見えたのだ。

「玲華！」

真っ先にその名を叫ぶ。えって感じで、世羅が反応して上を見たのが目の端に映った。

玲華がゴツゴツって何度も石を振りおろしてる。なんでここがわかったんだろう。いや、それよりなににする気だ。

いろいろなことが驚きの要因となっただけ、なにより一番気になったのは。

「あいつ…めちゃくちゃ怒ってねえ？」

気のせいだろうか。頑張って力を込めているだけだと思いたい。けどなんか、放つオーラがかなり怒気に満ちてるような……。

やがて玲華は、やってられるか！つとでも言うように、両手で石を振りかぶって 投げた。

ガラスは耐えきれなくなり、ガチャンと派手な音がして石とともに落下した。

「うわっ危ない！」

咄嗟に窓の下から俺は避ける。反対側に兄貴が世羅を庇いながら逃げたのが見えた。

先程まで俺が立ってた位置に、ちょうど石がある。そのまわりにガラスの破片が飛び散っていた。

（狙われた？……わけじゃねえよな）

嫌な予感はあるとか打ち消したい。こめかみ辺りから流れたこの汗も、ただ蒸し暑いからだとか誰か言ってくれ。

三人が茫然と見守るなか　俺だけ呆然だったかも…　玲華は下の棧部分だけ丁寧にガラスを取り、一旦隠れた。

次に現れたのは一本のロープだった。なにがしたいのか徐々にわかってくる。だけどロープは途中で止まった。短すぎて届かないのだ。

「おい！危ないぞ！」

顔を再び覗かせた玲華に、俺は声を張り上げた。

だけど玲華は無視して何かを落とす。カッンカッンって音がして見るとサンダルだった。ふたつで一足分。それからニョキッと窓から脚が出た。

（つておい、なんつーカッコしてんだよ）

玲華はドレスアップしていた。水色で膝丈のドレス。

「見んじゃないわよ！」

一言、玲華が注意を促す。つて…、やっぱり怒ってるな、あの声は。

スルスルとロープを伝って降りてくるものの、危なっかしくて見られない。けどもうすぐロープが終わる。

玲華は一瞬わずかに顔を引き締めた、と思ったらひらりと飛び降りた。ちよつと予測していたけど、まさか本当に飛ぶとは思わなくて焦って走り寄り玲華の体を受け止める。

「ありがとう」

につこり微笑む顔を間近で見て、確信した。玲華は俺に怒ってる。地に立つと先に降りていたパンプスを履いてから、玲華が強い眼差しを向けてきた。

「それで？あたしをのけ者にしてなにを遊んでいるの？」

やはり……。言わないで来たことにご立腹のようだ。

「遊んでいるように見えるのかよ、これで？」

「なんでもなにも言わないで一人で行っちゃったのか聞いてんのよ！鍵かかって入れないし！この部屋！」

「つか、どうしたんだよこのカッコ。どうやってここが？」

「訊いてんのはあたしよ？まあいいわ。あとで答えてもらうとして、一回に訊く質問はひとつにしてね。でも素晴らしいまとめ方で答えてあげる」

横目で睨みながら玲華が早口でまくしたてる。

「今日は親戚の結婚式だったの。式場についたところで久保田さんが現れてね、携帯用受信機を貸してもらって、飛び出してきちゃったわ」

飛び出していいのか？じゃなくて。

「久保田さん？あいつ無事だったのか」

「もーピンピンしてた」

「あ…、祥子さんに…」

「そこで会ったからもう教えたわ。居場所教えたらそれこそぶっ飛ばして行っただから、今ごろは叱り飛ばされてるんじゃない。久保田さん」

どうでも良いというように玲華は言い放つ。

うーん…叱り飛ばしてる祥子さんのイメージはないけど…。って

いうか、いまの今まで祥子さんを待たせていることを忘れていた。

(やば…)

「んなことより…世羅！」

突然、玲華は俺から離れて、世羅に飛びかかる勢いで抱きついた。唸然としていた世羅はよろめく。そのまま受け止め切れなかったようで、二人は倒れるように座り込んだ。

「バカ世羅！心配したんだからね！」

「玲華…。私より、神崎に会いに来たんだろう。もっと話さなくていいのか？」

世羅が戸惑った声を出して、玲華の身をどうするか迷うみたいに、手の所在が揺れていた。

「いまは世羅が優先なの！あの辺はついでよ、ついで！」

玲華は世羅の左側に顔をうずくませたままで、どこか投げやりに、人差し指で俺と兄貴を交互に振ってる。なんか酷くないか？

「私のこと、怒ってるんじゃないのか」

「怒ってるわよ！気づかなかった自分に腹が立つのよ！」

「なにを、言ってる…」

「だからっ！世羅がっ！」

玲華が声を詰まらせた。

（泣いてるのか…）

そう思わせる後ろ姿だった。

俺が見ても解るくらい、じわじわと世羅の顔から血の気が引く。

それから彼女はしばらく思慮しているような顔をして、やがて目を細めた。

「玲華……、私は玲華の重荷になりたくなかった」

「ならないわよ。なに言ってるんのよ、いまさらっ。何年一緒にいた
と思ってるの」

ふつと世羅が笑う。

「十年以上だな」

「十三年よ」

「そうだな。……もう充分だと、前に言ったな」

「本心じゃないんでしょう」

「なぜそう思う？」

玲華が少しだけ顔をあげる。

俺も兄貴も二人の間に入り込めなかった。邪魔できない、そんな
空気があった。

「ごめんなさい。全然気づかなくて。世羅があたしを…」

「そうだ。好きだった…もうずっと」

世羅の目から一筋の涙がこぼれた。

俺は息を呑む。

涙にまず驚いたけど、それよりもその言葉の内容が、すぐには理
解できないでいた。

「一生…言っつもりなかった。それこそ墓場まで持っていくものだ
と…」

「世羅」

「だけど神崎悠汰が現れて、君が惹かれていつてるのに気づいたとき、私は自我をコントロールできなくなっていったんだ」

世羅が玲華をきつく抱き締めた。どちらからかの嗚咽が漏れている。

私の大事なものを奪っていく。先ほどの彼女の言葉が蘇った。

（そういう、ことか…）

やっと理解した。最初から世羅にとって俺は邪魔な存在だったんだ。突然現れた部外者に、長年続いていた関係を壊された。壊した無礼者が俺。

「神崎がどうしても許せなくて…。どうしようもない嫉妬と、先の見えない不安とか、ドロドロした感情ばかりが増えてきて、怖かった」

世羅が両の手のひらで自分の顔を覆う。

「こんな私では玲華にいずれ嫌われる。いや、たとえこの気持ちを隠し通しても、玲華は離れていく。……気づいたんだ。いつまでも子供の頃のままではいられない。どうせ、いつか離れなくてはならない日がくるのなら……知られるっ…まえに、ばれる前に私から…離れようって」

世羅が泣きじゃくっている。きつとずっと抑えていた想いだったんだ。

耐えて耐えて耐えて……、そしてとうとう爆発したみたいな、そんな泣き方だった。

玲華は世羅の手に触れながら、なんとか押し出したような声を出す。

「そんなこと言わないで。あたしだって離れたくない。世羅が傍にいるのがあたりまえだったんだから」

「それは知らなかったからだろう！こんな穢きたない私を。幼馴染みとしてじゃない！君が神崎を好きなように私は玲華が好きだと言ってる

んだ！女なのに……」

白くなるほど拳を握りしめて床に打ち付けた。

「女なんかに、産まれなければ……」。男ならばどんなに良かったか。間違つて産まれたんだ私は」

世羅の想いは深い。

女は嫌だと、先ほども言っていた。あの中には様々に絡み合った、複雑な想いがあつたんだ。

両手で世羅の両頬を押さえると、玲華は自分の方に向けさせた。

まだ怒ってる、玲華は。

（そうじゃない。いまが迷つた果ての答えなんだ）

きつと、自分が気づいたことを世羅に言うか否かで迷つてたんだ。言うとしたら、どのように言うか。どう言ったら正確に気持ちが届くのか。

それには腹を据えて、気合いを入れて話さなければならない。適当に話したら適当にしか伝わらない。状況によつては最悪、もう二度と取り返しのつかない、修復不可能な関係になりかねない。

そんなことになったら……世羅が今以上に離れていったら玲華にもまた辛く耐え難いことなんだろう。

「人を好きになるのが、なんで穢いのよ！男でも女でも世羅は世羅だから良いのよ！」

「玲華」

「あたしがなに言つたつて、世羅には酷いものに聞こえると思うわ。応えられないもの。でもどんな理由でもいい。なんでも良いから一緒にいたいのに！」

「一緒にいていいのか？」

「だからそう言ってるじゃない」

「………気持ち悪くないのか？」

「ないわ！」

何度も言わせないでつて、玲華が言った。

世羅は一度目を見開き、それからまた泣いた。心なしか少しだけ

違う涙に見える。安心したような、開放されたような。

ありがとう、って言って言って世羅はまた玲華をきつく抱き締めていた。それから俺は見てしまった。

何気なく、横を向いてしまった。

ずっと黙って見守っていると思っていた兄貴が、なにかに耐えるように唇を噛みしめているのを。それは先ほどまでの世羅のものと酷似していた。

そうか、と俺は気づいてしまった。

（兄貴は世羅を…）

この世の中、なかなか上手くいかない。感情は理屈じゃないのに、届かない想いがいくつもある。

（理屈じゃないから）

だから。

人は泣くんだ。

第五章・・・ 2

二人が落ち着くまで、俺も兄貴もなにも言わなかった。

兄貴はもう抑制したのか、いつもの冷静さを取り戻していた。

「で…、君はどうやってここが？受信機とは何のことだ」

玲華に向けて、兄貴から話が戻された。まだ世羅にべったり抱きついたまま、玲華はちらりと俺に一瞥をくれる。言ってもいいかを決めかねているんだ。

俺はそれに頷いてから、自分から話した。

「オヤがさ…発信器つけてたんだ。俺はこの腕時計らしい。で、探偵がそれを利用してたんだと。父親がくれたもんだから、兄貴のも多分そのうちのどれかじゃない？」

自分でも意外なほど投げやりに聞こえた。兄貴は面食らったような、怒りたいような複雑な顔をしていた。

「知っててよくつけていられるな、おまえ」

「いや、今日はなんかの役に立つかと思ってただけど…」

これが終われば腕時計はどうなるんだろう。どうするだろうか、俺は。

知ったときはすぐにでも捨ててしまいたかったけれど、時計の存在に慣れてしまってるいま、外すのは心なしか寂しくもある。

新しいのが欲しいな…、……カネないけど。

「ならば俺のも腕時計だろう。だが俺は我慢ならない」

兄貴は思い切り嫌悪感を表情に出しながら、ポケットからナイフを取り出した。

バタフライナイフ。

兄貴の殺意を思い出した。間違いなく柳田を殺すつもりで来ていたんだ。嘘や冗談だとは昨日の態度では思えなかったけど、実際に凶器が目の前にあると、背筋が凍る。

それをどうするつもりだろう。

刹那、バカな考えがよぎった。不意に自分の首元に手がいく。

次に邪魔したら殺す。

いまがその次になるんだ。

固唾を呑んで見守っていると、兄貴は右手のナイフをすっと上げて、自分の左手首についてる時計の文字盤部分に振りおろした。

ガキッといって突き刺さる。そのままナイフごと腕時計を引きちぎって、床に投げ捨てた。

壮絶なものを見せられた感じがした。力加減を誤ると、自分の身まで傷つくだろうに。

兄貴は躊躇いなく、そんな壊し方を選んだ。

（それだけ許せないんだ）

兄貴は仕上げというように、腕時計を踏みにじる。

（もしかしたら兄貴も…）

俺と同じように。

（嫌気がさしていたんだ）

家族のこと、憤りを感じていたんだ。

兄貴はなんでも出来て、自分の意思で勉強を頑張っていて。満足しているんだと思っていたんだ。

だから池田は兄貴と話し合えと言ったのか。確かに、兄貴の存在を遠ざけていたときからは考えられなかった一面を、ここ数日にくつも見ている。

知らなかったんじゃないで、見ようとしてなかったんだ、俺が。

まだ知らない部分がありそうだ。

「兄貴はなんでこの事件に関わってんだ？もう教えてくれてもいいだろ！」

きっとそれがそこに含まれてる。

一度知ってしまえば知らなかった頃には戻せない。だけど、知らなくちゃいけない気がした。無ではないから。事実としてそこに、すでに有るから。

「昨日言ったこと忘れたのか」

兄貴はその一言のみで拒否した。

「イヤだ。教えてくれないと、イヤだ」

「子供^{ガキ}か」

「ガキだから…、どうせ上手い交渉術とかわかんねえけど。兄貴がそんな、殺意とか持ってるのはイヤなんだ！」

兄貴がジリジリと俺に寄ってきた。手にはまだナイフを持ってる。
「知ったところでおまえに俺は止められない」

「わかんねえだろ、やってみないと」

口からは立派なものが出たが、気圧されてしまつて、俺は兄貴が寄る分だけ後退した。狭い地下室ではすぐに壁に阻まれる。

「ちよつと何してんのよ！」

「動くな！」

玲華が立ち上がつて止めようとするのを兄貴が制した。

「ねえ…、ずっと気になつてたんだけど、悠汰の首…」

だけど玲華は黙つてない。兄貴は俺から目を離さず不敵な笑みを
見せる。

「うるさいから俺が絞めた」

「なっ……」

「息の根を止めた方が良かったか？」

最後のは俺に聞かれた。

死にたかつたか？

なぜかそう訊かれた気になつた。

おかしい。変だ。確かに怖いけど昨夜ほどじゃない。

（殺氣がない？）

これは威嚇だ。

殺したいのは俺じゃない。きっとそれは眞実。

なのに、息苦しさを、殺されかけた恐怖を、身体が覚えてるみたいに震える。

「絞められるのと刺されるの、どちらが良い？」

（っ　　！）

兄貴はナイフを持ってない方の腕を持ち上げ、再度俺の首に手をかけようとした。反射的に首をすくめる。

「惣一さん」

女性にしては低い声が届く。落ち着いたものだった。兄貴がピタリと手を止める。

「もう、やめよう。私はもういいです。柳田を殺さなくてもいい。すみません、半端なことを言って。迷惑かけて」

数秒なにかを考え込んでから、兄貴は俺から離れた。

それからやっとな呼吸をした。気づかぬうちに、息をすることを忘れていた。手を胸元にやる。心臓がバクバクと激しく脈打っていた。

「先ほども言ったが、証拠がまだ弱い。それでも？」

「ああ。復讐に人殺しなんてやつちゃいけない。それがわかったんです。だから惣一さん……」

「わかった。謝ることはない。なんとなくそう言うと思っていたよ」
兄貴は世羅と玲華の横を通りすぎ、一番大きい家具の梱包を、ナイフでザツクリと切り裂いた。

何を始めたのかと俺たちが見守っていると、一番大きい家具の全体が現れた。

縦二メートル横四メートルあるかと思う、黄褐色の棚だ。四つの細長い棚がくつついてる。まん中はガラス製の扉で中が見えるようになっていた。高級そうだ。

その棚の一番下の引き出しを、兄貴は引き抜いた。一番下から二つ分は、二列連なってるからかなりの幅がある。

それをまだ窓ガラスが散乱したままの場所に、裏返しにして置いた。窓から伸びているロープより少し手前。

（あ……）

意図がわかった。

その上に、次に大きい引き出しを乗せていき階段に見立てていく。それでも最初のひとつ以外は、すべて同じ大きさだったから、ロー

ブまではまだ届かない。

兄貴は階段として使えるように合計五段分を置くと、世羅の方を向いた。

「契約は破棄だ。いずれにせよ、もうこんな状態だから最初の計画も使えなくなってしまうたしな。君は自由だ。だが俺は本来の目的を果たすよ」

そう言う兄貴は世羅に微笑んでから、ロープを見あげた。それから、ふと思い出したように俺の方を一度見る。

それから兄貴は助走をつけて階段に飛び乗り、ロープに向かって跳んだ。

「足りない！」

焦りの声が出る。

でも兄貴は慌てず、勢いを足したすべての力で、バタフライナイフを壁に突き刺した。それを支えに左手を伸ばし、ロープにたどり着く。

すごい。こんな手があるんだ。思い付かなかった。

あとは腕力だけでロープを登っていき、窓から外に出る。壁にはナイフが取り残され、やがて落ちた。

「邪魔されたくないからロープは預かっておく。心配しなくても助けは呼んでおくよ」

兄貴はロープを回収すると、本当に消えていった。

置いていかれた。本来の目的をやり遂げるために、行ってしまう。本来の目的って？

回転が遅くなってる頭でなんとか考えられることは、唯一ただ一つだった。

（誰かを殺しに？）

誰かって？

柳田じゃない。柳田はもう殺さなくても良いと世羅が言った。

じゃあ誰だ。振り出しに戻った気分に戻った。

「神崎！惣一さんを止める！」

俺の思考を打ち破って世羅が言う。彼女はまた泣きそうな顔にな
っていた。

「え？」

「あんな優しい人に人殺しなんてさせたらいけない！きつと一生後悔する！良心の呵責にさいなまれる」

「え？」

もう一度俺は聞き返した。こんなことを世羅が言うとは思わなかった。驚いたというのもあるが、やっぱりまだ頭がちゃんと働いてない。

変わりに玲華が訊く。

「どういうことなの？世羅、ちゃんと最初から説明してくれる？」

「ああ。すべて説明しよう。私が聞いたことも含めて……私が知ってることは全部話す」

世羅は少し目を伏せて語り出した。

「ももとの始まりは、私があの人に再び目をつけられそうになったことだった」

「なんですって？」

玲華が眉をひそめて不快感をあらわにする。

「私の部屋にあいつが夜中に押し掛けてきたんだ。高校入学して一ヶ月くらい経ったときだ。成長したな、とかなんとか言っておぞましい笑い方をしたよ」

世羅が思い出したように青くなって震えた。本当にあの浅霧邦春はろくな男じゃない。

「それをたまたま梶さんが通りかかって、助けてくれたんだ。梶さんは本当に優しく、いつもこんな私の味方をしてくれていた。……そのとき、梶さんは言ったんだ」

一旦、世羅は言葉をきって空を見つめた。まるでそのときのことを思い出しているようだった。

「私はいつでも護れるわけじゃない。すべての原因を排除しなければ駄目だ……。そう、今から思えばそのときから梶さんは計画して

いたんだ。あの男の殺害計画を」

「ええっ？」

狙われていたのは柳田ではなく邦春？

「梶さんは返り討ちにあつたんだ」

「でも実際に殺したのは柳田だろ？」

「そうだったの？」

混乱して口を挟む俺の言葉に玲華が驚いた。そう言えば玲華には、ここに閉じ込まれている経緯をまだ話してない。それどころではなかったから。

「私も今日知ったよ。あの男を揺さぶるつもりが柳田が現れたんだ。最も呼び出して揺さぶる役は惣一さんで、私は大人しくしていなければならなかったんだが……。じつとしていられなくて来てしまったところを、あの男に見つかった。それで、もうひとつ所有してるこの倉庫に連れ込まれたんだ」

そうだったんだ。すぐに兄貴を連れて来ることが可能だったのは、この倉庫街のひとつで対面してたからなんだ。

「それで兄貴はどこから関わりを？」

「ああ、そうだったな。飛ばしてしまった。梶さんの話しに戻そう」
世羅は長い長いため息を吐き出した。疲労の色が見える。

「殺意を覚えた梶さんは、インターネットでいろいろな殺し方を検索していたようだ。完璧な殺し方を……。無論足がつかないようにネットカフェに行ったんだろう。そこである殺人サイトにたどり着いた。……。そこで知り合ったのが惣一さんだ」

「えっ……」

俺は言葉を失った。思いもよらなかったところで兄貴の名が出た。梶さんと惣一さんは、時々会って殺人方法を相談するようになったらしい。そこでお互いの情報を交換した。そのとき、神崎のことも聞いたんだろうな。……。そんなとき起こっていたのが通り魔事件だ。背後からタガーナイフで一突きで殺す方法。それなら出来ると惣一さんは梶さんに教えた。そう、二人が計画していたのは、交換殺人

だっただよ。この騒ぎに紛れてお互いの殺したい相手を殺そうと…。そうすればアリバイは完璧だし怪しまれることもない」

混乱する。

一気に入ってくる、卒倒しそうな情報が多すぎて、くらくらする。立っていらなくなつて、壁に沿ってずり落ちた。

だけどまだ終わりじゃない。ちゃんと聞かないと。誰を殺したいのか聞かないと、いけない。

「その話を、梶さんは私にだけは話してくれた。だからもう心配いらないと。惣一さんから聞いた殺害するのに必要な知識も私に教えてくれたよ。恐らくだが、そのとき柳田は聞いていたんだな。その帰り、梶さんは殺された。通り魔の犯人と同じやり方で！」

「どうして柳田さんは梶さんを？」

玲華がそつと世羅を気遣うように訊いた。

「そこは私も最近知つたが、お母様や叔父様たちは脱税をしていたんだ。柳田はそれを傍にいて知つた。そのなかであの男に目をつけ、脅迫して金を受け取っていたらしい。あの男が死ぬとせっかくの金づるがいなくなってしまう。それでだろう」

「それがあの裏帳簿つてわけね」

「知っていたのか…。あれは私が嗅ぎ付けて盗んだ」

「あら？ そうなの？」

じゃあ久保田さんは何してたのかしら、と玲華はひとりごちた。

「あの男が犯人だと思つたんだ。だけどヤツにはアリバイがある。他の人を使つただと考えた。でもどうしても梶さんを殺した証拠が掴めなかったから、脅しをかけよう」と

「それっていつ？」

「あのパーティの二日前だ。柳田含めた使用人たちが、いきなり決まったこともあつて準備に忙しそうにしていたからな。その隙に」「あたしたちも同じことを考えたわ。ちよつと遅すぎたみたいね」「パーティに兄貴が来たのは？」

久し振り声を出したら、ちよつとかすれた。世羅のトーンが少し

落ちる。

「梶さんが亡くなってから、私はずっと空虚だった。何かをしないとけない気はあったんだが、なにをすれば良いのかわからない。それで思い出した。惣一さんの存在を」

そんな素振りは感じなかった。俺は気づくことが少なすぎる。

「梶さんに学校を聞いていたから、会いに行くのは容易かったよ」
「高校まで行ったの？」

玲華が目を丸くした。

ああ、そうか。兄貴の高校は男子校だ。世羅はふっと笑って俺を見た。

「ああ。行っただ。私も必死だったんだろうな。顔を見てすぐにわかった。似てるな、神崎」

似てるなんて、考えてもみなかった。母親似だとか父親似だとかいう会話が、中学のころあったような気もするが、あまり覚えてないということは、適当に受け流していたんだろう。

「それで惣一さんに会った。惣一さんもニュースで見えていて、梶さんのことは気にしていたと言ってきた。そこで私は言った。梶さんの代わりに私と交換殺人をしよう」と

「世羅……」

「惣一さんは最初は反対していたけど、私のことも聞いていたんだろ？ね。私はあの男ではなくて、梶さんを殺した犯人を殺したいと言ったら……頷いてくれたよ」

悲しそうな、切なそうな顔で玲華は世羅の手を握ってる。俺は遠目ではんやりそれを見ていた。

「ならばまずその犯人を見つけないといけない。それで惣一さんはパーティについて行きたいと言ったんだ。まさか神崎も来るとは本当に思わなくて焦った。しかもおまえ、あんな大声で呼ぶし」

しょうがないな、というように息だけで世羅は笑った。

驚いたのはこっちだって同じだ。

でもそうなるひとつ解らないことがでてくる。

「梶さんは…俺に、兄貴に気をつけろって言って亡くなった…」
「なに？」

世羅と玲華が聞き捨てならないというような顔をした。そういえば、玲華にもまだ言っていなかった。なんとなく言うタイミングを逃していたんだ。

「最近、思い出した。梶さんは即死じゃなかったんだ。俺の目をしっかりと見てそう言った。……………なんだったんだろうな」

わざわざ最後に言った言葉だ。意味がないとは思えない。

「それは恐らく。惣一さんに伝えて欲しかったんじゃないか」

世羅が告げる。優しい口調だった。

「惣一さんに聞いておまえを知っていたから、伝えてほしかったんだ…。交換殺人の計画が漏れていることを。だから…」

だから気をつけろと？

あ…兄に、惣一に……………“と伝えてくれ”

すべて言いきる前に息絶えたということか？

「私が裏切ったことで、先ほど交換殺人の件は完全に破棄された。

確かにこんな一緒にいるところを目撃されたんじゃない、もう交換殺人の意味はないな」

世羅も警察にマークされているの、そのときは知らなかったんだろっな、と思う。

だから神崎、と世羅が続けた。

「惣一さんは自分の手で殺しに行ったんだ。彼は本当に優しい。この私が気を許したんだ。だから頼む！止めてくれ！」

そんなこと、なんで俺に言うんだ。今さら。

「世羅には優しいやつだったかもしれないけど、俺には一度も…」

一度もつてのはいいすぎかもしれない、と思って途中で言葉をとぎれさせた。子どもの頃はそう言えば…。

「なにを言ってる！これがおまえのための殺人でもか？」

「なに？」

聞き捨てならない話だった。人のための殺人なんてあるはずがな

い。

玲華が神妙な面持ちになった。

「それってどういう意味？」

「惣一さんは言っていた。俺も弟も両親に縛られている。俺は気の抜き方を知っているが、弟は真っ直ぐでばか正直だからいつも上手く逃げられないのだと」

そんな…。

だってそんなこと、思ってる素振りなんて、まったく見せなかったじゃないか。

「常に気遣っていたよ、彼はおまえのことを。一緒にいるとき、彼は殆どおまえの話をしてる。昨日だって……」

昨日は俺が見たあのときか。

あの柔和な笑顔を見せているときに俺の話を？ 信じられない。

「まさか…お兄さまが狙ってる相手って…」

きくな！

頼むから聞かないで、玲華。

俺は聞きたくないんだ。

「彼らのご両親だ」

（ああ！）

やっぱり、って想いが俺にはすでにあつた。世羅の話を聞いているうちに気づいてしまった。梶さんと知り合うずっと前から、兄貴にはそういう想いがあつたんだ。

いつから殺意になったのかはわからない。だけど一時の激情じゃない。だからきつと根深い。

だつたらなおさらだ。

「いまの見ただろ。俺には止められないんだ。止めたいなら世羅が止めるよ」

そうだ。兄貴はおそらく世羅のことを……。一緒に協定を結んで、密接に関わってる間に好意を持ったんだ。だつたら俺より世羅の方が適任だと思った。

「あれは威しだ！おまえにもわかっただろう。……昨日だって、弟は楽しむ食事すら知らなかったことが初めてわかって、哀しかった。俺がひとり逃げ道を作ってる間にも弟は苦しんでたから……」
世羅の眼がまた潤み出した。何のための、誰に向けた涙だろうって、ぼんやり思った。

どこか他人事に聞こえてしまう。

「弟が犬を飼いたいと言っていたが、でもうちでは飼ってやれない。両親ともそういう者を汚いと言って嫌がってるからって……。だから余計に決心したと……排除しなければ弟の望みはひとつも叶わないからって言ったんだ」

ちゃんと、聞いてたんだ。あんなに無視してたのに、本当は俺の話聞いてくれていたんだ。

「それでもおまえ止めない気か？それとも、好都合だ。では兄に殺してもらおうとも思っているのかっ！」

「んなこと……！」

思うはずがない。両親に縛られる感覚は絶えずあった。

いなくなれと念じたことさえある。だからと言って、死んでしまえばいいとまでは思わなかった。たとえ考えないようにしていただけだとしても。

止めたい気持ちはまだあるんだ。だけど慄然とする記憶が、身体への記録が、あと一步を欲しがっている。起動をさせるためのワンクリックが、足りない。

「ねえねえ。悠汰、悠汰」

低い姿勢のまま玲華が近づいてくる。俺の前でしゃがみこんで視線を同じにした。ちょっとその顔が微笑んでいる。

そしてたどしく俺の方へ手を伸ばした。

両手で頬に触れて、それから首元にゆっくり下がる。そのまま見えなかったけど痣の痕をなぞる感触を感じた。

「ほら、怖くない」

嬉しそうに玲華が言う。

「だから大丈夫よ」

ああ、もう……。どうして玲華はそういうところ見逃さないんだろ
う。

こんな好感を持ってくれてる表情で言われても、説得力がない。

（見当違いなんだよ）

実際問題、胸が高鳴ってしまつて、怖いとか苦しいとか、それどころじゃなかった。でもいまは、その言葉に頼りたい気もしていた。
玲華が言うから。

（玲華だから）

（ああ……そうか）

そうなんだ。

ああ、もう……しょうがねえな。自然に頬が緩む。

俺は玲華の手をとって離れた。これ以上近づいたら耐えきれない。
理性が、抑えられない。こんなときなのに。

「こつこつ……のつてさ、状況によるんじゃない？ だいたい玲華じゃ
無理だ」

「もっと絞めれば良かったかしら……」

「そういうことじゃねえ」

俺はがつくりと肩を落とした。

「玲華には敵意がないだろ」

「ああ、じゃあ世羅に絞めてもらつて？」

「嫌だ。触りたくない」

物騒なことを淡白に玲華が言つと、断固として世羅は首を横に振
つた。ちよつと傷つく言われ方だ。

「ちよつと世羅、あんなことしてまでよく言うわね」

「れ、玲華」

「あれは玲華が何を言つても大人しくしてないから……一時的に
も意気消沈して止まつてももらおうかと……」

本気か冗談かわからないふうに世羅がぼそぼそ答えた。いや、た
ぶん本気だ。目が座つてる。

「あつそう。あれで悠汰がやる気になって今があるのに、皮肉な話ね」

「なにっ、それは本当かつ」

「すごく失態って顔で世羅が睨んでくる。いや、俺に睨まれても困るんだけど。」

「でも結果良かったのよ。世羅も悠汰もお兄様を止めたいんでしょ？まだ間に合うわ」

玲華が持ち前のポジティブを発揮した。元の、いやそれ以上の耀きに満ちていく。

「そうだな」

玲華が勝手に設定したプレイリストのことを、趣味悪いと笑ったときと同じように俺は笑った。

笑ってみると、そのレベルのことだったんだって思う。深刻に考えすぎなのかもしれない、俺が感じる両親のことなんて。それよりも兄貴の陰謀の方がはるかに非常事態だった。明らかに死活問題だ。(止めるよ、兄貴を)

最初からやることは決まってるんだ。でもそれにはここを出なきゃなんない。

「おまえら携帯持ってるか？」

と、俺。

「私はあの男に最初に奪われた。玲華、眞鍋さんと来たんじゃないのか？」

と、世羅が言う。

俺たち二人に見つめられた玲華は、反射的にてへつと笑った。

「いやあ、フロントにバッグ預けたあとに久保田さんに会ったの。慌てたあたしは大騒ぎで飛び出そうとしたんだけど、眞鍋さんはお父様に言われて反対勢力に加わったもんだから、しょうがなく…つてゆーのも失礼か…。とにかくヒデのパパにお願いしてぶっ飛ばしてきてもらったわけよ」

ひと呼吸玲華が置いて。

「でえー、ヒデのパパだつて他に仕事あるし、他にもアシがあるだろうと思つてー、ロープだけ借りて帰つてもらつちやつた」

てへつと締めにもう一度玲華は笑つた。

ええつと、それつてつまり…。

「誰もこの状況を解つてるヤツがいないつてことか？」

「てへつ」

「てへじゃねえよ！」

「あ、でも久保田さん解つてるから来てくれるんじゃない？…きつと……たぶん」

「あー…もう…じゃ、久保田か兄貴が助けを呼んでくれんの待つだけか」

「その久保田つてやつはよく知らないが、惣一さんの助けはあてにしないほうがいいと思うが」

「なんで？」

「ぼそぼそ言う世羅に懽然として俺は訊く。」

「助けが来る頃にはすべてが終わつた後だと思うが」

「……………」

一瞬、この空間に静寂が包まれた。

「ただどそのおかげで気づいた。俺の耳に飛び込んできたエンジン音。もしかしくなくても、これつて…。」

（近づいてきてる）

「そしておそらくこの倉庫付近で、停まつた。俺たちは顔を見合わせる。」

「柳田がもう帰つてきたのか」

「ヤバいじゃない、それ」

「実際ヤバいんだよ。久保田さんつてなんで一緒に来なかつたんだ？」

「知らないわよ！でも自分は動けないつて…。あの人ずっと浅霧家にいたらしいのよ」

「はあ？何してんだよ。世羅知つてたのか？」

「知らん。本宅には最近まったく行っていないからな」

面白くもなさそうに世羅が答える。行っていないって自分の家なのに。確かに邦春とかいるし、行けないんだろう。でも。

（だったらあの人）

功男氏が気遣っていたこと、世羅は知っているんだろうか。後悔していると、教えた方がいいんだろうか…。

「勝手に悲壮感漂わせるな。なにを勘違いしてるかしらないが、離れに住むことを決めたのは私だ。本宅に寄らないのも私の意志だ」
ぴしゃりと戒められた。別に悲壮感なんて持つてはなかったが、誤解されたようだ。

世羅から離れたのか。

強いな、って思う。俺は出ていくことを考えず、不満だけ一人前でいたんだ。

こんなやり取りをしている間に、カツーンという足音が遠くで止まった。気配を消して近づいてきてるんだろう。

「悠汰」

「しっ」

玲華の喋りを止めると俺は兄貴が残していったナイフを拾った。殺すために買われたナイフだけど、いまは護るために使われる。

（そうだ。俺は誰も殺さない）

（護るんだ）

まるで呪文を念じるように自分の中で繰り返しながら、扉の端に寄る。

相手が入ってきたときに、死角になるように。
ナイフを握る手が汗ばむ。

迷うな。チャンスは一度きりだ。

壁越しに相手の気配をうかがいながら位置を計る。でもそのまえにレバーが動いた。

（しまっ…）

人影が入ってきたより一拍遅れてナイフを突きだす。と。

「あつぶねっ！」

人影がさつと横によけた。ナイフの先は目標位置より低い部位にあった。俺より背が高い。

「あれ？」

「あれ？じゃねえよ、殺す気か」

あっさりかわしたクセに、飄々^{ひょうひょう}と責めてきたのは。

「久保田！」

勝手に出て行って、みんなに心配をかけた久保田修次が、開襟シヤツに膝丈までのベージュの半ズボン姿でそこにいた。ラフなバージョンだけど眼鏡はかけていないくて、でも髪の毛は適当な感じだ。「なんだなんだ？呼び捨てするほど寂しかったか？」

意味がわからない。

「おつまえー！気配を消すな！紛らわしい！なにやってたんだよ！つーかなんで来て…」

「待った。おまえも後ろのご令嬢たちも何か言いたそうだが、せつかくだから車で話そう。時間がもったいない」

勢いが奪われた気がする。だけど…仕方なく俺はとりあえずは合わせることにした。

（久保田を殴るんなら世羅がいらないところじゃないとな）

第五章・・・ 3

緊張する。

それは従来感じていた重圧を含むようなものとは、やや一線を画していた。

これまでの期待に押し潰されそうになっていた感覚は、重くてじわじわ広がっていくものだった。今はどちらかといえば心臓が飛び出そうな、キリキリ痛むような、そんな感じ。

急激な極度の緊張。俺が止めなきゃいけないという。

（失敗したら…）

止められなかったら…どうなるんだろう…。

久保田の車に乗り込み移動しながら、その緊張をなんとか紛らわそうと口を動かしていた。なるべく意識しないように。

俺にはおなじみのコンパクトカーは、四人で座るといった方がいいっぱいな感じになった。

どうしても世羅が後ろがいいと言い張り、そうなると自然と玲華が隣に乗り込んだから、やっぱり俺は助手席に座った。

車を走らせてすぐ祥子さんのことを聞いたら、事務所に返したと答えた。

少しバツが悪そうな表情をしたように見えたのは、気のせいだろうか。

「で？言い訳あんなら聞くけど？」

俺の後ろで玲華が対角線上に冷ややかな声を送った。玲華もなんだかんだ言いつつ心配していたんだろう。

「言い訳って…いろいろ事情があつてな、いまはそれどころじゃないだろ。惣一の位置が分からなくなってる」

あ、逃げた。

そう思ったけど確かにいまは兄貴のことが最優先だ。

こいつがどこまで知ってるのかはわからないが、おそらく事態は

把握してるんだろう。そして兄貴の発信器もやっぱり腕時計だったのだ。

「おまえさ。本当は兄貴がどこに向かったのかわからなくても、見当くらいついてんじゃねえの？」

「さあな。おまえはどこだと思う」

「親のところだろ。どっちは知らねえけど……」

「けど両親は揃っては一緒にいない。母親の所在地も、少なくとも俺にはわからない。

となると。

「父親の病院？」

「そうだな。オレもそう思って向かってる」

俺の予想に久保田は頷いた。

「母親の居場所は知らない？おまえの依頼人だろ」

久保田は一瞥俺に向けてすぐに前を見る。その状態で、すごく言いにくそうに口を開いた。

「もう連絡した」

「……ふうん」

「それだけか？」

今さら驚かない。それが久保田の仕事なんだろう。

それが……、母親に知らせることが、これから吉とでるか凶とでるかはまだわからない。

（吉って…）

どうせあの女は一人大騒ぎするだけだ。役にも立たずに……。いや、むしろ兄貴の殺意を深いものにすることもしれない。

（それとも逃げ出して来ないか）

そこまで思い立って嫌になった。考えがあまりに陰気だ。

「なあ、おい。なんとか言えよ」

考え込んで何も答えなかったら、久保田に急かされた。

また俺がまいってるとでも思ってるのかも知れない。前みたいに。だけど今はそれどころじゃない。

「別に：いいんじゃないの」

「どうした？おまえ。なんか悟ったか？」

そんなんじゃない。今さらごちゃごちゃ言ったところで状況は変わらない。そんな状態が続いたから慣れもする。

「うっせえ。全部終わったら一発殴らせてもらうからそれでチャラにしてやる」

一瞬はあ？って顔を久保田はした。だけど俺が冗談で言っていないって気づくと、ふっと笑う。

「やれるもんならやってみろよ」

なんでそこで笑うんだ。マジなのに。ビビりもしないで余裕かまして。

最初からコイツには舐められまくってるから仕方ないか。

「なあ、後ろの二人先に送ってやって」

運転中の久保田に近づきこっそり耳打ちする。

したはずだったけど、玲華はぬつと後部座席から顔を出してきた。

「ちよつとなに寝ばけたこと言ってるの！」

それからヒールのままで、ゲゲシ後ろから蹴られた。シート越

しだから痛くはないけど、不快な感触はくるんだよ。

その音で状況を察知した久保田が不満を漏らした。

「あつ、コラ蹴るな。汚れるだろ」

「清潔感を気にしてるとは思わなかったわ、コレで」

「悪かったな！だからってさらに汚さなくてもいいだろ」

確かにこの車内は汚い。シートも座る部分だけなんとか綺麗にはなってるが、他はシミとかあるし、下には小さいゴミが落ちてたりする。

「とにかく悠汰。あたしたちを先に帰すですって？この期に及んでなんなのよ」

俺の家族はずっとぎりぎりのところで保ってきた。それが兄貴という起爆剤でこれから爆発する。きっと壮絶な展開になるだろう。

そんなところ見せたくない。

「危険だろ」

「あんたまさかそれで今朝も呼ばなかったんじゃないでしょうね」

「だって危険だろ」

「なによ！あたしのこと護ってくれるって言ったじゃない！あれは嘘だったの？」

確かに言った。あのときは本心で想ったことだ。だけど…。

「おまえの方はもう解決したんだろ。あとはウチの問題だ」

世羅のこと。仲直りしたんだから良いだろう。犯人だって分かったわけだし、もうわざわざ危険な場所に自ら身を投じなくても良いんだ。

「ふざけたこと言うんじゃないわよ。もしかして護る自信がないの？それともそんなにあたしが邪魔？」

玲華がさつき来たとき同様の怒りのオーラを放ち出した。そういうことじゃない。

「万が一ってことがあるだろ。心配してんだよ」

「だったら無用よ。今さら乗り掛かった舟、降りれるわけじゃないじゃない」

「そんなこと言って、さつきだって実際来たのがコイツじゃなかったら、今ごろどうなってたと思う？」

「おまえ…絶対オレのこと歳上だと思ってないだろ」

唐突に久保田が口を挟んできた。コイツってところで人差し指を差したせいかもしれない。

「思ってるよ」

思ってるに決まってる。こんなム力つくやつだけど、実際尊敬できるところあるし。絶対言ってやんねえけど。

「そうだな。神崎は言葉遣いを知らない」

ずっと黙っていた世羅が攻撃に応戦してきた。それに久保田が頷く。

「だろ、オマエとかコイツとかきてさつきは呼び捨てだもんね」

「だったら玲華だってタメ口だしアンタだろ」

「あらあ、だってあたしは久保田さんのこと歳上だと思ってないもの」

玲華の一言で久保田が凍りついた。…ように見えただけだけど、たぶん絶対そうだ。

「玲華は良い。ちゃんと敬語も使える」

「でしょう？ やっぱり世羅が一番解ってくれてるわ」

「俺だって使えるよ」

使わないだけで、たぶん。

俺が否定したら久保田がどこか遠い目をした。ちゃんと前見るよ。

「そうだよなー。ちゃんと功男さんには敬語だったそうだからな…」

「は？」

なぜそこで功男氏の名前が出る？ つーかなんで知ってる？

「てめえ、功男さんって……」

そういえば玲華の情報によると、コイツ浅霧家にいたんだった。

久保田がヤバいって顔をしたけどもう遅かった。俺の言葉を押し退けてすかさず突っ込んだ人がいた。もちろん玲華だ。

「もしかして久保田さんって浅霧家に潜り込んだところで功男様に見つかって閉じ込められたの？」

「ちっがう！ あれは不可抗力だ」

じゃあたりか。さすがは玲華だ。敵にまわすと恐ろしいが、こちら側なら的確に突いてくれる。

「どういうことなんだ。潜り込んだって」

「世羅が持つてった裏帳簿よ。あたしたちも狙ってたの。すつごく張り切って俺が行くって言ったまま行方をくらましたの」

「うるさいな、しょうがねえだろ。調べて行っただけど、あるべきところになくて。功男氏には見つかったんじゃないかって会いに行ったの！ 取り引きするために」

「そうね、世羅が一足先だったから」

「取り引き？」

世羅がぴくりと反応する。

「そう。功男氏はすべてわかっていた。息子達と使用人の行動を、だれが裏帳簿を持って行ったかもな」

だから“柳田はいかん”と言ったのか。

(にしてもあの人…)

「だから玲華嬢はともかく世羅嬢は返さない方が良い。今ごろあつちでも一悶着あるからな」

ここでまったく話が見えなくなった。

「一悶着？」

「まああちらは功男氏に任せよう。こちらの問題だけ考えていればいい」

「待てよ。じゃあ警察は？兄貴を追ってたはずだけど」

「気になるか？あの刑事の動向が」

意味深な物言いを久保田はした。

刑事って池田のことだ。確かに俺は警察全体より池田のことを気にしていた。叱ってくれたし、助言もくれたのに、俺は何も言えないうで逃げたままだ。

「ちよつと待つて。そつちだけで話を進めないで」

「そうだ。取り引きとはなんのことだ？なぜお祖父様は私のことをご存知だったのだ」

後ろから二人の声が飛ぶ。そういえば、また久保田に誤魔化されるところだった。

「ああ。それは功男さんに聞いてくれ」

なんかその言い方に、前に作戦会議と称して探偵事務所で名前を出したときよりも、功男氏に対しての気安さを感じた。

「もしかして俺が世羅の家に行ったとき、あんた功男さんになんか言った？」

「ああ、それ。悠汰が近づいてきているって受信機で分かったんだ。オレがそれを功男さんに教えたらさあ、功男さんから会いたいって言っただけ」

久保田が思い出したようににやけている。

「なんで？」

「どんなヤツか見てみたかっただと。世羅嬢の過ちをちゃんと止めてくれるかどうか」

かなり深い話を久保田と功男氏はしていたようだ。ということは、功男氏はすべてわかつている状態で俺と会話していたことになる。

（やつぱりあの人…）

なにがさあな、だ。なにが一理だ。

「あんのタヌキ爺いー！」

言えよな。知ってんなら！腹に一物の理由も含めてさー！

「おまえ！お祖父様に無礼は許さんぞ！」

俺の憤りたつぷりのぼやきに、世羅が鋭いキレのある声で切り裂いてきた。

（だけど）

功男氏が世羅のことを憐れんでいたのは本音だった気がする。本気で想っていた。あの後悔も。

「何を見ている。こつちを向くな！」

世羅の方を見ながら考えていたら、ものすごい拒絶をされた。まったく…。

「だいたいお祖父様もヤキがまわったようだな。こんな男に託すとは。実際に私を止めてくれたのは結局玲華だ」

それから腕を組んで窓の外を向いてしまった。世羅の方が無礼なこと言ってる…。

隣で玲華が呆れたような、力ない笑いを含めていた。

「世羅…。でもほら悠汰が来なかったらもつと危なかったわけだし、悠汰とお兄様の反応が同じ場所で止まっていたから、久保田さんもヤバいつて思っで、あたしも来たわけなんだしさ…」

玲華のフォローにも、納得できないといった態度でこちらを向こうとしない。いや玲華がフォローするから余計に気に入くないのかもしれないが。

長くため息を吐きながらようやく俺は前を向いた。

功男氏がなぜ好評価をしてくれたかなんて、俺にも解らない。

こんなやりとりをしている間にも、兄貴は着々と両親に近づいている。

（間に合うだろうか）

もし俺たちの予想が見当はずれで、すでに前もってどこかへ呼び出すなりなんなりしていたら、今ごろ……。

勝手なイメージが様々なシチュエーションで浮かぶ。

そのすべてが、駆けつけたときにはすでに遅く息絶えた両親の顔。自分の想像力が嫌になる。妄想の様な画に神経が蝕まれていく。やめなければ、無心にならないとやられる。

「大丈夫だ。絶対間に合わせる」

俺の様子を見ることなく前を向いたまま、久保田は言い切った。

久保田のこういうところ……ちゃんと気づいてこういうことを言い切れるところが、時にム力つくけどそれは嫉妬心からきていてだから内心では尊敬している部分なんだと、ふと思った。

* * *

病院の独特のにおい。

俺はそれが苦手だったりする。嫌なことを思い出すから。

父親の病院には一度だけ来たことがあるんだ。まだここじゃない、別の、もう少し小さい病院にいたときだ。

呼吸器科でも内科でももしくは精神科でもなく、外科に。

小学校高学年のときに自転車で転んだんだ。そのケガがわりとひどくて、膝がぱっくり割れていて……それで来た。

そうだ、近所の人が救急車を呼んでくれたんだった。

俺が来ると聞いて父親は慌てていた。

その時は心配してくれてるんだと思って嬉しかった。普段見せない顔だったから。

だけどそれから少しだけ大きくなって、解ってしまった。あれは

父親や母親が俺にシツケだと言つて殴つた痕を、周りに見せたくない。俺は思った。

今なら解る。それが社会的に問題視されてることも。隠したいと思つほどには、ヤバいと認識していたことも……。

結局、俺よりも周りの目を気にしていたんだ。いつもどおりだった。

おまえにはがっかりだ。

その時に言われた。周りにバレたのを俺のせいにしたんだ。

それからだと思ふ。

両親がさらに家に寄りつかなくなつて、金によつて手懷けた家政婦を雇うようになったのは。

病院に來ると、薬品のおいに満ちた場所にいと、あの時の落胆した気持ちを思い出す。だから苦手。

それ以來一度きりで病院という名のつくところには來てない。

だけど今は逃げるという選択肢はないんだ。

病院まではやっぱり玲華と、それから世羅まで一緒についてきた。世羅が「私だつて惣一さんを心配する権利と義務がある」と言い張つたからだ。

玲華は今さら帰る気も無さそうだし、言つても無駄だと思つても何も言わなかつた。また怒られるだけだからと、ビビつたわけではない。断じて違ふ………と言いたい。

でかい総合病院だからまず受付で父親の所在地を確認した。

神崎の息子だと名乗つたら、ちよつと年輩な受付嬢に少しびつくりした顔でこつちを見られた。

なんなんだ一体。

胸にわだかまりを感じていと、それを読み取つたのか目の前の女性は焦りながら取つて付けたような笑顔になつた。

「あ、内科医長の神崎先生ですね。ええと今の時間でしたら新館二階の医師室か、仮眠室か……ですなえ」

内科医長なんて肩書きだつたのか。それにしても受付の人の齒切

れが悪い。所在がわからないのだろうか。

そう思っていたら後ろの方から三人、同じ制服：薄いピンク色の白衣を来た若い女性が話しに加わった。

「きゃー神崎先生の息子さんだって」

「あー面影あるー、似てるわね、やっぱりー」

「なんかカワイー」

なんだなんだ一体。やや俺はたじろいだ。明らかに先輩の女性がそれを諫める。

「こら、静かにしなさい」

「あーでもー、さっきもうひとり神崎先生の息子さんって人が来ましたよー」

「あーあたしも見たー」

「えーズルいー」

「だから静かにしなさいと言ってるでしょ！」

「どこに行きました？その人！」

俺より先に久保田が、受付の薬とか受けとるための台に手をついて身を乗り出した。

兄貴もやっぱりここに来てたんだ。

「ええと…神崎先生に連絡したら院内のどこかに連れて行っちゃいましたけど」

なぜか久保田に赤面顔で、女性の一人が体をくねらせながら答える。

俺はそれを聞き終わらないうちに走り出していた。

「悠汰？」

「病院内は走らないでください！」

玲華と誰かの声が後ろから聞こえたけれど止まれなかった。

この中のどこかにいる、そう思ったらいてもたってもいられなくなった。

自分の理性と切り離されて、歯止めなく脚が動く感じはあのときと似ていた。事件を目撃するまえの。既視感。

（どこにいる）

だけどあのときより望んでいる。前に行くことを。臨む。
早く見つけないといけない。

「待て悠汰！落ち着け！」

それが拒まれて、ガクンって俺の体が止まった。

新館だか本館だかわからないけど、階段で二階に登ったあたりで
久保田に腕を掴まれたのだ。前に、行けない。

「闇雲に走ってどうする！ちゃんと考えろ！体力無駄に使うな！」

正論だ。まったく間違っていない。

「でもっ！早く探さないっ！」

「わかつてる！わかつてるから、一人で突っ走んな！」

「悠汰！あっち、あっちに行ったって」

玲華が通りすがりの看護師に聞いたように、階段の上の方を指さ
している。

そっか、人に聞くっていう手段があっただ。全然頭になかった。
これはホントに落ち着かないと。

「どこ！？」

聞きながらもすぐにまた階段を駆け上がる。

落ち着こうとする意識は車の中では確かに持っていた。だから逆
にいま余裕のない自分自身が信じられないほどだった。

「ああ…もう！」

久保田の舌打ちが後ろから微かに聞こえた。でもついてくるのが
気配でわかったからそれで良かった。久保田の心配は身に染みてわ
かる。

（もう前しか見ない）

だけど今はもう、前しか見れない。いま行かなくていつ行くんだ。
（そうだろ）

もう他のことに気がまわらない。不安だとか恐怖とか、そんな余
計なことに今は構ってられないんだ。

（兄貴！）

だから兄貴、間に合ってくれ。

「悠汰！こつちよ！」

玲華がまた後方から誘導の声を上げる。彼女はいつのまに確認してくれてるんだろう。

俺はどこをどう走っているのか認識できないまま、何人かの病院関係者に、すれ違うたびに叱られたり驚かれたりした。

その表情の印象だけ残像のように残って、そして消えていった。たぶん別の館に渡った。その三階の奥の方。病室とかもなくなってきた、関係者しか歩いてないような領域^{テリトリー}。

足を止めざるをえなかった。行き止まりだ。

後ろから数秒遅れて追い付いてきた玲華と世羅が、僅かに肩で息をしていた。

「この辺に来るのを見たって、さつきすれ違ったお医者さまがつ」
さつきっていつ？どの人？ふと思ったがその疑問もすぐに消える。熱くなっている頭のどこか片隅で、芯が冷えるみたいに冷めてる自分がいた。

目の前にある扉。

上の方に会議室って室名札が掲げてある。

（会議室…）

そついうの、病院にもあったんだ。どういつ会議をするんだろう。そんなことを考える間もなく、俺の腕が動いていた。

会議室のドアノブをまわす。

（！）

だけどそこは鍵がかかっていた。予感がした。勘とかそついう本能的な部分で思った。中にいる。

「兄貴！いるんだろ！」

恥も外聞もなくドアを拳で叩く。

必死だった。

ここで失敗したら、間違えたら二度と修復できない。崖っぷちの瀬戸際。そんな危機感を感じていた。

「おい、悠汰」

久保田が戸惑っていた。
なんで？

理由がわからない。

（だつて中にいるのに）

「ここ開けて！早く！」

開けてくれさえすれば、あとはなんとかするから。俺がちゃんと兄貴を止めるから。

また軽く舌打ちをして、久保田は方向を変えた。同時にしっかりと俺の目を見ながら言う。

「鍵借りてくる」

久保田の走り行く背中を最後まで見ずに、俺はまたドアに向かって叫んだ。

「兄貴！兄貴！兄貴！」

「悠汰」

玲華が俺の右腕を掴む。それから拳を包むように触ってきた。

気づかなかつたけど、酔っぱらいの頬のように、手が真っ赤になつていた。

（熱い）

空調の効いてる病院内で俺の拳が一番熱かつたんじゃないかと、そんな気がする。

「だけどっ！兄貴が……」

整理のつかない頭のままで玲華に泣きつくように口を開いたとき、ドアの鍵の部分からガチャガチャと音がした。

反射神経が猛スピードで反応して、俺の意識がドアに戻る。視線がノブに集中すると、そこはゆっくり開いた。

まず目に入つたのが中から開けた人物の手元。

地下室に置いていった、今は俺が持っているナイフより大きい、タガーナイフが握られている。

血が滴り落ちていた。

俺は視線を上げる。

「どうぞ」

たった一言。

そう言っで、中から兄貴が微笑を浮かべながら俺たちを招き入れた。

第五章・・・4

そこはそんなに広くない会議室だった。十五人くらいで定員いっぱいになる。

長机を四つ真ん中に置いて向かい合わせになるようになってるみたいだ。普段は。

今は散在していた。机のひとつが横になり、その周辺の椅子や机は端の方に無造作に押しやられている。

その奥で、壁にもたれながらうずくまる男性。白衣の裾あたりから血に染まっている。

いやよく見ると脚が…右の太ももあたりが一番酷い。父親だ。

脚を抱えて痛みをこらえてる。

入った瞬間には机が邪魔して見えなかったが、その隣、少し離れたところに母親が血だらけで倒れていた。こちらは父親よりたくさん血を流し、ピクリとも動かない。遅かった？

「死んで、るのか？」

ねとりと絡みつくと恐怖で喉が渇く。無理やり口を開いたら掠れた声が出た。

「まだまだよ。邪魔するから動けないようにしただけ。だって先に親父を殺^やりたいからね」

兄貴は俺とは相対的に落ち着いていた。玲華と世羅を入れてから、また鍵をかけたみたいだったけど、俺は両親から目が離せなかった。父親が……いる。ずっと脅威な存在だった父親が、今は苦しそうな顔でうつむいている。

本当ならば駆けよって、無事が確かめたり人を呼ぶなりするべきだと思う。

だけど動けなかった。

血の臭いが充満していて、あの日事件を目撃したときより、何倍

も怖い。知ってる人だからだろうか。

玲華と世羅がどんな顔でこの場にいいのか、窺う余裕さえなかった。だけど二人とも黙ってる。俺も、すぐには何も言えなかった。その中で兄貴が一人悠然と構えていた。

わからない。こんな大変なことを仕出かしている張本人なのに、なぜ堂々とできるのか、わからなかった。

「悠汰。思ったより速かったね」

ずっと笑みが消えない。嘲笑でも冷笑でもなく、本物の笑顔。
(なまえ…)

悠汰って…。名前と呼ばれたのは子どものとき以来だ。

この笑顔も世羅に向けていたのと少し違う。解放された、なにも隠すことがなくなったゆとりある笑顔。余裕の破顔。

子どもの頃に戻ってるんだろうか。精神が？

名前で呼ばれたのに、嬉しいはずなのに…いまはただ哀しいだけだった。

「あ、兄貴…」

兄貴が思いとどまるようなことを、言わないといけない。ちゃんと抑止力にならないと。

なのになにも言えないしていると父親がこちらを見据えてきた。目が合った。深い憎悪がそこに含まれている。俺に向けて。

あ…。

一瞬でわかった。

父親のなかで俺のせいになってる。理解するのと同時に、父親が荒い息を隠さず怒鳴りちらした。

「どこまでもおまえはお荷物だな！惣一になにを吹き込んだ！」

「俺は…なにも……………」

「嘘をつくな！足手まといなヤツめ。デキが悪いなら悪いなりに邪魔だけはするなと前から言ってるだろ！」

「あ……………」

父親の罵声は、俺に耳を塞ぎたくなる衝動にからせた。

聞きたくない。みたくない現実。

「まだそういう……」

兄貴からの発せられた本気の声で、何かの前触れを感じた。
背筋が冷えた。動く。

兄貴の足下が動くのと同時に、俺は全部の力を込めて兄貴の体を
押さえた。

「もうやめろよ！もういいだろ！」

兄貴の動く意志が止まって俺を見る。一瞬消えた笑みが戻っていた。

変わらないそれを浮かべながら、つとナイフを持つ手を上げた。

「悠汰もやる？」

誘ってきた。殺すかと聞いているんだ。

見たくなくて、顔を伏せながらも頭を振った。

「俺はしない！」

そんなことしたって報われるわけじゃない。本当の望みは叶わ
ない。

（望み……）

ずっと認めたくなかった。俺が両親の愛情を渴望しているなんて
……。

（そうだ。俺は期待していたんだ）

いつか両親が理解^{わか}ってくれることを。

考えないようにしてたけど、いつも家族の後を追いつつながらいたあの日……
背中しか見れなかったあの頃からずっと、振り向いて欲
しかったんだ。

最初は両親にだけだったけど、それは大きくなるにつれて兄貴も
含まれるようになった。

（俺も期待していたんじゃないか）

結局、みんながみんな、自分勝手に自分の欲望ばかり押し付けて
いたってことか。

「世羅に聞いたよ。なあ、俺のためってんならやめてよ。俺は嫌だ

よ、こんなやり方。全然嬉しくない！」

世羅の名前を出したせいかもしれない。兄貴が少しよろめいた。それからナイフを持つてない方の手で自分の顔を覆う。

「世羅、か……。世羅ね」

僅かに肩を揺らして息だけで笑う。

そして次に見せた顔には残虐な相貌になっていた。どのタイミングで切り替わったのかはわからない。

ゾクリとした。

柳田に感じたものと似ている。けどあちらは不釣り合いな、読めない笑顔。兄貴のはすごい重たいものを、かなりの量抱えたようなそんな辛さが兼ね備えられていた。

「まったく…失敗だったよ。梶剛志とは事務的なやり取りで済んだものを…」

「惣一さん」

世羅が慈しむように呼ぶ。

だけど兄貴は俺の方を見たままだった。

「違う。彼女のの前では格好つけていただけだ。本当は俺が我慢できなくなっただんだ」

「なんで？」

知りたい。兄貴のことをもっと。なにがそうさせたのか、ちゃんと聞きたい。

「あと二年我慢したら成人だろ。そしたら自由になる。兄貴ならあいつら説得することだって出来るだろう。出来なくなつて、力才広いみたいだし自立ぐらい…」

「それで？おまえはどうする？」

え……。俺？

不意打ちなことを切り返されて、頭が真っ白になる。

兄貴は俺から離れた。力が入らなくてすんなり離してしまう。だけれどすぐには父親のところに行ったりはしなかった。

「俺だって完璧じゃないんだ。ミスだってする。覚えてないか？俺

が今までで一番最低点をとったときだ。親父もお袋もおまえを責めた」

「え？」

あまり変わらない頭で、それでも探したけどそんな記憶はない。

「すべておまえに暴力という形で鬱憤^{うつぶん}が吐き出されたんだよ。見て
いるだけで俺まで痛かった」

「あ……………」

思い出した。

小学生のときはいつもビクビクしながら家に帰っていた。

その中で一度だけ帰ってすぐ、理由もわからずに折檻を受けたことがあった。たぶんそれだ。

前に夢で見た。過呼吸のときの会話。最後の声は兄貴の声だった？

（やっぱり…）

重荷。

（俺のせいなんじゃないか）

俺がいるから、兄貴は家から離れられなかったんだ。また同じようなことが起きないように、言いなりになってた？

考えたこともなかった、そんなこと。お荷物。否定できない。

「そうだ。俺は大事に育てたんだぞ、惣一。そのお返しがこれか？」

父親がまた声を挟んできた。

なんにもわかってない！浅はかな内容。

俺は苛立ちを覚えて叫んだ。

「うるさい黙れ！」

これまでなら言えなかったことだ。

（だってあいつは俺には言ってるじゃない）

いつもそう。俺は無視だ。けどいまは黙らせなければならなかった。

これ以上兄貴の殺意を刺激してはいけない。それだけだった。

俺も父親は無視してた。兄貴のことだけ。

「だったらなおさらっ！こんなことすんなよ！今ならまだ間に合う」

よ。なあ、出ようぜ、こんなところ」

「わかってないな、もう遅いんだと前に言っただろう？ここまできてやめるわけにはいかないんだよ」

兄貴がまた笑った。壊れた笑顔。

「俺はおまえを殺してでも実行する」

兄貴の標的が俺に向いてきた。母親と同じだ。

邪魔するやつから黙らせる。

あ・あ・なるのか俺も。

「すべてが壊れることは覚悟の上だ。俺はこれで解放されるんだ」

兄貴の腕が上がり、ナイフが俺に向かってくる。

（馬鹿野郎！）

もう何も兄貴の耳には聞こえない。届かない。抑止できない。

俺が後ずさるうとしたとき、ドンって右腕に当たるものがあつた。ずつと後ろで黙っていた玲華の頭が、気づいたら前にあつた。

「させないわ！」

「玲華……」

「冗談じゃない！悠汰は立ち向かおうとしてんのに、あんたはなに？解放されたいですって？」

「やめろ！玲華！」

兄貴は本気だ。本気で邪魔者を消そうとしている。

そんなときに出てくるな。

だけど玲華は止まらなかった。

「そんなことしても解放なんてされるわけないじゃない！余計に重いもの背負い込むだけよ！なんでそれがわからないの」

ばか！有無を言わさず玲華の腕を引く。

こんな庇われ方は嬉しくない！辛いだだけだ。

「君みたいな幸せな家庭の子にはわからないだろうな。いつも親の機嫌ばかりを窺いながら生活する子供の気持ちは」

俺と同じ。同じことを兄貴も思っていたんだ。もうずっと長い間。もっと早く知っていれば良かった。

「悠汰。おまえ昨日死にかけたとき、どんな顔をしたかわかったか？」

ふと思い出したように兄貴は言う。

「安らかな顔で笑ったんだ。これから死ぬってときに……。おまえは死にたかったんだって気づいたよ」

あるとき…自分がどんな顔をしたかなんてわかる余裕も手段もない。

だけど確かに諦めた。生きること。俺も解放されるって思った。だから最後まで止めをさせなかった。あときは辛かった。こんなに追いつめられてとは思わなかったんだ。いや、考えないようにしてただけだな…。自分の自由のために」

兄貴の後悔が伝わってくる。

（それは違うよ…）

俺はまだ追いつめられてない。何もしていない。できてない。

「惣一さん」

世羅が兄貴に近寄った。

そうだ、彼女になら止められる。俺の言葉が届かなくても、同じところを目指し過ちに気づいた彼女なら、俺より近い。

どこか悔しいけれど仕方がないんだ。

それに俺の勘が正しければ、兄貴は世羅が好きだ。梶さんみたいに事務的に計画が遂行できなくなるくらいには……。

（俺だったら玲華の言葉で止まる）

「そんなつくろうようなものではなかったでしょう？本心から神崎のことを想っていた。私にはそう見えました。だからもうやめに行きましょう」

「君は、理解してくれてると思っていたよ」

「いいえ。私は貴方と会う度に感情移入をしていました。貴方となら行くところまで行ってもいいと…。だけど私は間違っていた」

きっぱりと世羅は断言する。

「もっと早くこう言うべきだった。私は貴方を兄のように慕うよう

になっていたから。……でも、言えなかった。心のどこかで警告がなったのに」

「警告？」

「玲華の言う通りだよ。こんなことしても余計に辛くなるだけだ。貴方が辛くなる」

「俺が？」

兄貴の顔に迷いが見えてきた。

あと一歩！

あと一言足せば止まるんじゃないのか。

そう思った矢先だった。俺たちは皆油断していた。兄貴も動揺していたんだと思う。

俺たちの左側。窓の下から動く者がいた。

父親が……最後の力を振り絞り移動したんだ、と俺の目がとらえたときには、遅かった。父親はすでに兄貴に突進していた。

そして兄貴からいとも容易くナイフを奪い取ると、そのまま俺にそのナイフを……。

（え……？）

思考が止まった。あまりに思いがけない行動で、対応が出遅れた。兄貴の方が接触した分反応が速い。

俺は激しく引き寄せられ、何かが衝突した。兄貴越しに。

音はなかった。無音。

「あつ……あ………」

あまりの驚愕に言葉にならない。

息をしているかどうかわからない。苦しいかどうかわからない。やがて、兄貴は俺の足下にずり落ちた。背中が見えるようになる。そこにナイフの柄から先だけが見えた。そこから中心に液体が広がっていく。

その場所は知っていた。梶剛志が刺された部位と同じだ。

「ははっ……は………」

父親が力なく息だけで笑って座り込んだみたいだった。

瞬間的に感情が爆発する。怒りなのか憤りなのか哀しみなのか、わからない感情。

あまりに複雑でまず何から行動に移すべきか揺れる。父親を殴りたい。兄貴の血を止めたい。誰かに泣きつきたい。よくわからないなかで衝動だけが突き上げる。

「なにをしている！」

鍵がかかっているはずの会議室が開かれた。同時に聞こえる久保田の声。

それから何人もの大人が続いて入ってきたのが足音でわかった。それが合図になった。

「うあああああああああああああ！！」

濁った雄叫びを吐き出す。

そうしないと胸が押し潰されそうだった。少しでも感情が弱まればいい。目の前の映像が消え去ればいい。そう思って声を張り上げた。

なのに、いくら叫んでも目の前の状況は変わらなかった。

「悠汰！」

久保田の声がもつと近くから聞こえる。

押さえつけられる。

そう直感したら弾かれたように素早く俺の体が動いた。どこにそんな力があつたのかは知らない。俺は兄貴の体を抱き上げていた。そしてすべての人間から遠ざかるように、一番ドアから離れた奥の壁にぶつかるように背もたれた。

「誰も来んな！寄るな！近づくな！」

制限リミッターが外れて本能のまま叫ぶ。制御コントロールの仕方なんて知らない。

ただ兄貴を渡したくなかった。

もつうんざりだ。上っ面しかみない大人には渡さない。どうせまた子供おれのせいになれるんだ。

孤島のなかで兄弟ふたりだけ。そんな感覚に陥った。

俺が護るんだ。

護ろうとしたんだ。

護りたかったんだ。俺が。

「誰も近づくな！渡さない！渡さない！」

信じない。兄貴がいなくなるなんて。許さない。

兄貴を大人に渡したら離される。そんなことになったら二度と会えない。あの親ならきつとそうする。

ひどい。こんなのつてない。

やっと兄貴の本音が聞けたのに。もっとちゃんと話したかった。

「俺がっ馬鹿だったからっ」

声がうまく出ない。苦しい。

目の前が霞んできた。いくら焦点^{ポイント}を合わそうとしても、よく見えない。

「悠汰！落ち着け！」

久保田がなにかを言ってる。だけど見えない。それでいい。もう

何も見たくない。

「俺だけ…置いていくなよ、兄貴……」

当の本人は辛そうに顔を歪めたまま何も言ってくれない。

兄貴の体を支える腕にナイフが僅かに触れた。ふと気づく。そうか俺も同じになればいいんだ。同じことをすれば兄貴に置いていかれることはない。

「やめろ！抜くな悠汰！」

俺の意識はナイフにしかなかった。同じところを刺せば、息苦しさも消えるし兄貴と同じ……一石二鳥じゃないか。

俺はナイフに手をかけた。

「やめて！悠汰！」

別の声。久保田じゃない。

もっと高い女性の悲鳴のような制止。

（れい……か…）

玲華…。

ああ、そうだ。玲華がいたんだ。ここには。

他にも護らないといけないひとがいた。護ると約束したひとが。
「っ……！」

俺はナイフから手を離し、変わりにもつと兄貴を抱き締めた。
喉が焼けるように熱い。上手く声帯を扱えずに息だけが漏れる。
兄貴の肩あたりに額を押し付けて、ただ耐えるしかなかった。

水分が染みていく感触が伝わる。そこで、俺は泣いているんだと
気づいた。泣いていたからよく周りが見えなかったんだ。

気づいたところで、堪えられなかった。皆が見てるのに止められ
ない。

「ゆ……た………」

耳元に微かに兄貴の声が届いた。

生きてる。

兄貴の顔を覗くとうつすら目を開けていた。

（生きてる！）

「あ、あに………」

まだ声がつまく出ないで、唇だけがむなしく動く。

「悠汰……」

変わりに兄貴は弱々しくもしつかり俺を呼んだ。両の双眸に俺が
写る。

「なにを泣いてる？」

言いながら兄貴は右手をゆっくり上げた。

血に染まった手で俺の頬に触る。だけどまったく不快じゃない。

むしろ嬉しかった。兄貴が生きてる。俺の涙を拭ってくれた。ま
るで子供のときに戻ったみたいだった。

そうじゃない。もともと優しくかったんだ、兄貴は。変わらないで。
俺が気づかなかったただけだ。

兄貴の手のひらがそのまま俺の首元に移動した。昨日と同じ。

でもまったく違う、優しく触れる感覚。

「もう、怖くないか？」

ちゃんと気づいてた。地下室で反応した俺の恐怖に。それで気遣

つてくれている。

怖くないよ。

即答したかったけど、やっぱり声が出なくて、ただ首を縦に振る。あのととき玲華が癒してくれたんだ。

「良かった。トラウマをもうひとつ増やすところだった」

「あ……………うつ……………」

やっと出た声は泣き声だった。ちゃんと話さないといけないのに、嗚咽しか出ない。

（違うよ…違うんだ…）

「トラウマなんつ、てない……………。そうなるまえに、逃げたから……………」

何とか息を繰り返して、唾を飲み込み喉を整える。

「俺だつて同罪だよ、兄貴。逃げることだけ一生懸命で…………俺も、兄貴のこと拒絶してたからっ。見ないように…………避けて……………」

ダメだ。最後まで言えない。

ちゃんと兄貴は話してくれたのに。俺も伝えないと…………。言葉にしないと伝わらない。

「ごめん、兄貴。…………ごめん」

ガキで、苦労かけて、不甲斐ない弟でごめん。強くなるから。一人立ちできるくらいしっかりするから。

そのとき兄貴が笑った。痛みを堪えるようにしてたから、いびつだったけど一番清廉な笑顔だった。

それを見て安心したんだと思う。

俺もそこから意識がなくなった。

悔しいけど、気づかなかつたけれど、興奮状態が続いてあまり呼吸が出来てなかつたんだって、後から知った。

第五章・・・5

それから。

すごくバタバタしたようだ。

あんな凄惨な状況だったのに、場所が病院だったことが幸いしたようでとりあえず死人は出なかった。すぐ治療を受けられたから。

俺が次に目覚めたときには、父親の処置は終わっていた。普通に歩けるようになるにはリハビリが必要だが、命に別状はないと玲華が教えてくれた。

兄貴はナイフを抜かなかったのが良かったみたいだ。出血が抑えられたから助かったんだって聞いたときは。

ゾツとした。抜かなくて、本当に良かった。

母親は……。一番危険な状態だったらしい。手術は成功したけど、今もまだ眠ったままだ。

複雑な感情でそれを聞いた。

ざまあみろ、と思うにはあまりにも……やりきれない部分が残存する。一番つるさい人が一番眠ってるなんて変だと思う。

そして警察はすぐに来ていたが、池田さんは兄貴が助かったと一報が入ったところによく現れた。

池田さんにはすごく叱られた。

こっちでごちゃごちゃしている間に、浅霧家に行っていたそうだ。功男さんからの通報で柳田たちは逮捕されたらしい。

それは久保田さんから聞いた。

事態が取り敢えず落ち着いて、家に帰りたくなくて、久保田探偵事務所に行ったときだ。

もう帰れとは言わなくて、すんなり居させてくれた。

「功男さんとオレは情報交換をしたわけなんだが、浅霧家の誰が犯人かまではわからなかったんだ。だからそれで泳がせてみた。こんなに早く惣一が動くと思わなかったから、焦っちゃって」

「焦っちゃってじゃねえよ！」

まったくこいつだけは何も変わらないな。いい加減なところが。

「そうこうしてる内にお前も向かうしさあ。だから功男さんがここはもういいから行けつてさ。あの人は自分の持てる権力全部使ってあいつらを逮捕させたんだ。証拠なんか後から出るつて」

息子たち……世羅の叔父たちもその時一緒に連れていかれたと、久保田さんは言った。

「で？あんたは結局どこまで知ってたわけ？」

「梶氏と惣一が交換殺人を企てていたつてことだけだ」
ホントかよ、つて疑う。

散々嘘をつかれたから、なかなか信じられない。本当はどこまで知ってたんだろう。そう思ってたなら重々しく久保田さんが口を開いた。

「おまえがこのことを知ったら耐えられないと思ってた。他人の死にでも敏感に反応してしまうおまえには、どうしても隠しておきたかったんだ。だから目指す方向を、梶氏の手帳から浅霧家に向けるように言った」

今さらそんなことを言われても、返せなくなるだけだから卑怯だと思う。殴りにくくなるじゃないか。

「惣一を見張ることはついだったんだ。依頼人はあいた時間に惣一を見てくれれば良いと……。だが陰謀を知って事情が変わった。梶氏が亡くなるまではほとんど惣一を追っていたんだ。そのことは報告出来なかった。しておけば良かったと今なら思うよ」

(……………変わった、かな)

両親が知っていたら、この事は起きなかったのだろうか。兄貴の殺意は止められていたんだろうか。

もし、の話はいくら考えてもキリがない。

「じゃあ、姿を隠したのは？」

「功男さんだよ。あの人、オレの話を全部聞いたあと説教してきた」
こいつが説教されてるところ見たかったな。一生からかってやれ

たのに。

「オレがいるとおまえの為にならんっ！だつてさ」

「はあ？」

ウケケとやつは笑う。そんなことで雲隠れしたのか。

「そのあと功男さんから裏帳簿を盗んだのは世羅嬢だと聞いたんだ。それから功男さんの名推理もね。犯人が柳田だろうつて分かっていたのは結局功男さんだけだつたんだな」

暢気な口調がなんか腹立たしい。

「わからないから泳がせたつていま言わなかったか？」

「まあ単なる推理だからな。証拠がなにもない。権力を振りかざしてまで逮捕してもらうには、もうひとつ功男さんにとっての決め手が欲しかったんだと。……そしたら二人揃っていないだろ？それで決心したみたいだな」

ホント、久保田を上回るタヌキっぷりだな功男さん。

（大人つて……）

うんざりしていると、久保田さんがニヤニヤ笑いながら寄ってきた。

「なあ、おまえ、オレがいなくて寂しかったか？」

「ぜんっぜんっ！」

「うそつけ。ほんと頼りたかつたんだろ」

「言つとくけどな、おまえがいてもいなくても俺には屁でもねえんだよ」

嘘ついた。

ごめん。強がり。

玲華には正直でいたいとか言いながら、俺は素直になれない。変わりたいって決意したつてそんなにうまくいかないんだ。

いくわけないだろ。人間そんなに簡単には変わらない。

こんなやり取りをしていると、ずっと控えて聞いていた祥子さんがクスクス笑いった。そしてやはりお二人似てますねと言った。

前にも聞いたなそれ。

「……祥子君……。それはオレにくたばれと言っているのか？」

久保田さんが心外そうに呟いた。また何を言ってるんだこの人は。「ふふふ。先にそう仰ったのは玲華さんですよ。以前そういう話をしてたんです」

以前というのは恐らく泊まりに行ったときだろう。それしかない。女同士でなに話してんだ、まったく。

「先生は依頼人やターゲットに舐められないように、わざと上に見られるような振る舞いや出で立ちをしてる、と。だけど実際のところすごく精神年齢低くて、真っ直ぐで頭脳より感情で動くタイプですって。玲華さん見抜いてますねー。そういうところか考え方も似てるって。私もそれを聞いてからそういうふうにししか見えなくて」

舐められないように、わざとこんなだらしない格好してんのか。呆れながら久保田さんの下から上までを見てみた。

いつかと立場が逆だなと思っっていると、上に目線がいったとき、スゴい怒りのこもった顔をしていてビビった。

「あのアマー……余計なことをー」

拳が震えてる。てか、ちょっと待て。

「おい、玲華に八つ当たりすんなよ」

「おまえはこんなこと言われて平気なのかつ？」

「俺べつに、自分の部分は普通だもん」

「はっ！尻に敷かれるタイプだな、おまえ」

「俺にも八つ当たりすんなよ！」

先に先制しておく。

（どっちが尻に敷かれてるんだか）

祥子さんは、“私もそう思う”的なことを言ってるのに、怒りの矛先を祥子さんに向けようとしんない。

まったく。どこが似てんだか。不本意なことに変わりはない。

でも似てんなら、コイツの尊敬できる部分もいつか習得できるだろうか。

そんなことを考えていたら、久保田さんは怒りを吐き出すように

ため息をついていた。

それから思い出したように話を続ける。

「まあ、オレはもうお払い箱みたいだしな」

お払い箱？

「おまえの親父さんが、もう見張らなくて良いってさ」

それはまた勝手な話だ、と思った。

* * *

すべてやるべきことが終わったと思ったら、学校では期末試験が待ち受けていた。

というか、他の生徒は球技大会が終わってすぐそういうモードになつていたらしい。

なんとか全てやり終えた。結果は………このさいどうでもいい………ということにした。意外と学生つて忙しい。

玲華や世羅はきっと大丈夫だろう。普段から違うから。

そう思つて聞いたら、玲華に失笑された。

「一応毎日予習復習してるからね。テスト前にだけ勉強するなんて一番無意味なことだと思つたよ」

「……………悪かつたな」

どうせ無意味タイプだよ。普段のいつそんなことをやればいいのか？

いや、暇な時間は多少は……わりとたくさんあるが……。

試験が終わつたら、夏休みがきた。

これまではその時間を潰すことで必死だった時期。去年は純平が相手にしてくれたんだっけ。

懐かしい。たった一年なのに、遙か昔に感じる。

（内容が濃かつたから）

高校生活が。いろんな人と出会っているんな事があつた。これからもいろんな事があるんだろうな、って漠然と思う。

夏休みが入ってから玲華がよく訪ねてくるようになった。いくら止めてもいつもの強引な押しで、なし崩しに気づいたら毎日のように一緒にいる。

そこから眞鍋さんの運転で、久保田さんの事務所に行ったり、玲華の家に遊びに行ったり、たまに秀和の家に訪問したりして過ごすのが日課になってしまった。

（気を遣っているのかもしれない）

母親も兄貴も入院中で誰もいない家。

玲華にとっては放っておけないだけかもしれない。なんだかんだ言って、学級委員なみの責任感で一緒にいるだけかもしれない。

父親が咲田さんにまで“見張らなくていい”と言ったと知ったときには驚いた。

咲田さんはもう来ない。

いきなり自分のことは全て自分でしないとけなくなった。

相変わらず父親は帰ってこないから真意がわからない。

（とうとう見放されたのかもしれない）

俺が兄貴も母親にもお見舞いに行くことを、父親は拒んだからそう思わずにはられない。

考えると相変わらず胸が苦しくなる。

「きつとお父様もお辛いのよ」

夏休みが三分の一ぐらい過ぎた午前。

いつの間にかうちに居る時間が増えてきて、慣れ出した玲華がリビングの絨毯に寝転びながら言った。

というか俺がソファに飽きて地べたに寝ていたら、それにならって近くに座った。そこからやがて上半身も倒してきたのだ。

なんというか…居心地が悪いというか……。

（無防備すぎ）

パンツスタイルではあるけど、夏だから薄着だし目のやり場に困ってしまう。俺は主に天井を見上げていた。

なぜリビングかっていうと、家政婦が来なくなっただけで部屋が汚くな

ったんだ。

久保田さんのことをだらしがないと言っていたけど、やっぱり俺もそっち側の人間だった。つまりキレイ好きではないという……。

この歳になってそういうのがわかるのも、どうかと思うが。
「きつと、今さうどう悠汰と接していいのかわからなくて、悩んでいると思うわ」

そうだろうか。それならば兄貴とぐらい会わせてくれてもいいんじゃないか。まだ俺が元凶だと、疎ましく思ってるからこそ病院に近づけたくないんだらう。

（なにも変わってない）

兄貴に会えない分、もつと状況が悪くなってる気がする。

「でも良かったことだってあるじゃない？」

「良かったこと……」

「お兄様の気持ちを知れたじゃない。一人では難題でも子ども二人でタッグを組んで変えて行けばいいわ」

またあつさりと、いとも簡単なことのように言っただから。

「未成年のうちはいくらでも親に迷惑かけていいのよ。まー、あたしみたいに聞き分けの良いところも大事だけどね」

「泣くぞ。理事長が。いろんな意味で」

「なんでよ」

ムスツと玲華がふくれる。どこが聞き分けいいんだよ。

何回か玲華の家に行かせてもらってるけど、あんまり理事長には会ってない。学生と違って大人には夏休みはないようだ。

（会ったところで叱られそうだけど）

理由はどうあれ、ウチのことで結婚式を欠席してしまったからな。玲華も小百合さんも「大丈夫よ」って言っていたけど、そのときの様子があんまりすつきりとするものじゃなかったから、とてもじゃないが信じきれない。

「んでー今日はなににする？」

今日も遊ぶのが当たり前前みたいに、すでに最近では間違いなくキ

ーワードランキングの一位に輝いてる言葉を玲華が言う。
それから俺は、まるで合言葉のように「なんでもいい」と答える
のだ。

実際こんなこととしていて良いのかなって思う。一人だけ暢気に。
玲華について行けば、それはそれなりに楽しいのだけれど、心の
どこかに罪悪感が消えない。

「ねえねえ、悠汰ー」

ゴロンと玲華に背中を向けるように寝返りを打っていたら、後ろ
からその背中をつつかれた。

「じゃれんなよ」

「暇だよーどつか行こうよー」

「あのな、ガキが親にねだってんじゃねえんだから…」

「なにその喩え^{たと}。そだ、もうすぐお昼御飯だよ。なんか食べよーよ」

「さつき食ったんだよ、俺は」

「もう………」

玲華の声が途切れた。

冷たくしすぎたかな、ってちょっと当惑する。つい反応して顔を
向けたら、プニツと頬を人差し指で差された。

「やめろよな、そういうことすんの!」

はた迷惑なやつだ。

玲華の手を封じながら怒ったのに、当の彼女は楽しそうにひっか
かったね、と子どもみたいに笑った。

(いや、怒ってない)

本気で怒れるはずがない。玲華には。

迷惑なんて思わない。それなりに…じゃない。本当はすごく嬉し
いんだ。こうやって気にかけてくれることが。

気づいたら玲華の反応に一喜一憂してる俺がいる。気づいたとき
は、今より少し前で…。

玲華から目が離せないでいると、ふっと玲華から笑みが消えた。
目が合ったまま。

メイクをしなくても睫毛が長い。吸い込まれそうなくらい大きな瞳。

見つめたまま、それに俺は近づいていく。

玲華はそれでも逃げなかった。

それどころか、瞼がゆつくりと閉じられていく。

このところ様々な場面で動悸が速くなったけど、それらとは明らかに違う種類の高ぶり。高揚していく。

（あ…）

サツと心が引いた。

ダメだと気づいた。

（こんなんじゃないダメだ）

あと数センチというところで俺は勢いよく体を起こした。

「ちよつとなんなのよソレは」

玲華が怪訝そうな声で責める。そうされても仕方ないことを、俺はした。

わかってる。だけどいけなかった。

（それが答えだろ）

最近とくに頭にめぐることに。それが押し止めたのだ。

膝を曲げてそこに肘をのせ、全体重を傾けるように長いため息を吐き出す。憂いを含んだ面持ちで玲華も起き上がったのが視界に入る。

そんな心配そうな顔をすんな。俺が悪いんだ。玲華はなににも悪くない。

「まだ言ってなかったよな、俺の気持ち…」

「それはっ」

「聞いて！」

口を挟ませないように俺は遮る。

「悪い…けど、聞いてくれ……」

不服そうな顔をしてたけど玲華は黙った。ごめん。いつもこんなんで。

だけど最後にするから。

ふう、ともう一度長い息を吐き出してから俺は口を開いた。

「高校行っているんなことがあったけど、気づいたら玲華がいつも隣にいて。最初はなんだこいつって…正直鬱陶しかったんだけど…」

……」

「なーんですって？」

「いいから聞けよ、最初はつつたろ！」

まったく…。言葉はちゃんと選ばないといけないみたいだ。

「でもだんだん知っていくうちに、強さとか優しさとか目の当たりにして…、そういうところスゴく尊敬できるって思ってたし…俺は優しくないから」

優しくできない。余裕がなくて…。

「すぐ暗くなつてネガティブになるけど、玲華が隣にいと、変わっていくんだ。変わったんだ。…玲華がいなかったら今の神崎家はないよ。俺はいまだに両親が脅威な存在で、兄貴は目的を達成していたと思う」

真剣に玲華は聞いてくれていた。何も口を挟まないで、ただそこにいる。

「俺が動けたのは、毎回、何度も諦めないで背中を押してくれた玲華のおかげだ。感謝してもしたりない」

落ちる度に隣にいてくれたから。学校でもここでも、数えたらキリがないくらいだ。

「だから玲華が殺されるかと思ったとき本当に怖かった。怖いんだ、お前といると。いろんなところで」

俺は両の手のひらを見つめた。

「玲華が母親と口論になったときもそうだ。おまえが強く立ち向かっていったのに、俺は何もできなかった。玲華が俺んちのことで傷つくのは見たくない。嫌な思いをこれ以上させたくない」

玲華が身を乗り出してきた。そして遠慮がちに口を開く。

「あれは反省したの。あたし余計なことしたかなって…」

そんなこと思う必要ない。俺は頭を振った。^{かぶり}

「違う。あのときも救われた気持ちになった。俺は嬉しかったんだ。玲華が言ってくれた言葉は全部、俺が言いたいことだったから」

でも代弁者になってもうなんて、そんな甘えた考えは通用しない。本当は自分で言わなきゃいけないことだったんだ。

「だけどあの母親はそのまま俺なんだ。玲華との距離がこれ以上近くなる、ああなるんだってわかった」

意味がわからないというふうに、玲華が首を横に振る。俺はその目を直視した。

「血が、繋がってるんだよ。両親の血が。特に母親の攻撃性なところを俺は受け継いだみたいなんだ」

手のひらが震えだした。あのときと同じ。あの、兄貴に気づかされたときと…。

「いきなりキレることが、よくあるんだ。それが酷くなると物にも当たる。そういうのって人を不快にさせるってのはわかるんだ。でも冷静に抑えられる自信がない」

世羅が俺を怖がる理由。邦春と同じ人種。

「兄貴が自分にもその一面があったって言ってたけど、普段は冷静でいるんだ。兄貴はいれるんだ。でも俺はあんなふうにはできない。秀和みたいに気遣いができない。拓真みたいに穏やかではられない」

言ってるうちに涙が溢れてきた。何回玲華のまえでこんなに情けない姿を見せれば良いんだろう。

でも最後だから。最後にするから、これで。

せめて、きちんと正しく言いたいことが伝わるように、俺は喋るだけだ。

「距離を保って、節度ある間柄ならそんな一面も出ないと思うんだ。でもこのままいくと、俺はいつか玲華を傷つけてしまう。あのときの母親みたいに手をあげてしまう」

俺は深呼吸を一度した。腹式呼吸で息を整える。

「もういいんだ。おまえみたいな存在がいたって知れただけで。幸せだから。救われたから」

だから…。

グツと気合いを入れる。最後の一言を言うために。

「だから玲華。おまえもうここには来るな。俺ももう、おまえの家とかあの部屋とかには行かない」

玲華の眼が見開かれた。すごく驚いていた。それはそうだろう。

(ごめん…)

だけどこれでもう傷つけたりしないから。

つかの間…沈黙が流れた。すごく気まずい空気のなかで、それは永遠に続くんじゃないかと思った。実際には数秒だったと思うけど、俺にはそれくらい長く感じたのだ。

俺の責任だから必死に耐える。それから玲華がポツリと呟いた。

「冗談じゃ、ないわよ」

「玲華？」

窺うように玲華を覗き込むと、鋭い眼光を向けられた。本気で怒ってる。

「冗談じゃないわ！なんなのよそれ！バツカじゃないの！」

「なっ！ずっと真剣に考えて出した決断をバカだとっ！」

「馬鹿よ！人が黙って聞いてりゃー調子に乗りやがって！あげく最後がそれっ？信じらんない！！」

怒るだろうという予想はしていた。だけどそれは今まで見たなかで、一番激しい怒りだった。予想を遥かに超えてる。

「それだったら、おまえなんか嫌いだからっ！迷惑だからっ！顔も見たくないから二度と来んなって！そう言われた方がよっぽど清々するわよっ！」

ぼろぼろと、玲華の瞳から涙が溢れてきた。それを見て心が痛くなる。そんなこと言えるはずがないじゃないか。

「玲華……………」

「何よ！あんたの気持ちを教えてくれるんじゃないの？」

「だから言っただろう。いま言っただのが、俺の……」

「違うわよ！」

なんとか説明しようとしたが、ピシャッと遮られた。

「尊敬とか感謝とかこの際どうでもいいわ！あんたはあたしのこと
どう思ってるか答えなさいよ！……って、好きか嫌いかってことよ！」

「そんなの好きにきまってるんだろっ！」

勢いに押され俺も怒鳴る。抑えられない。

「なんでわかんねえんだよ！今の流れでわかんذار！」

「わかるかー！あたしはっ！あたしはずっとそこが知りたかった
のよ！ずっと……ずっと不安で……」

テーブルに置いてあったティッシュボックスに手を伸ばし数枚引き
抜くと、チーンと玲華は鼻をかんだ。少し呆氣にとられる。

（不安って言った）

玲華がずっと不安だったって…。

気づかなかったわけじゃない。ただ見ないようにしていただけだ。
心のどこかで、玲華なら鋭いから、言わなくてもすでにわかって
いるとも思っていた。俺が不安にさせていたんだ。

「好きならいいじゃない。あたしがさ、そんなことでやられるタマ
に見える？」

すんって鼻を吸うと、玲華が押さえた声で訊く。やはり簡単には
納得しそうにない。でも俺は説得しなければならんだ。

「玲華は強いと思う。俺なんかより何倍も。だけど力は俺の方があ
るんだ。何をしでかすかわからない」

俺でもわからないんだ。ちゃんと人と関わってきてないから。感

情の行き先が見えない。

「あたしは悠汰の助けになりたいの。迷惑じゃないなら、嫌いじゃ
ないなら傍にいさせてよ……」

なんでわかんないんだよ。だから駄目だって言ってるだろう。辛
いんだ、一緒にいると。いろんな想いが湧き起こって押し潰されそ
うになるんだ。

覚悟を決めて俺は言う。最大の禁句を口にするような気分だった。
「本当はお前が嫌いなんだ！迷惑だから離れよう！」

「なによそれ！馬鹿にしてんの！」
だけど玲華はすぐに見抜いた。

この方法だつて納得しないんじゃないか。さらに状況は悪化した
だけだ。

彼女は両手を上げて俺の胸元を叩いてくる。何度も何度も繰り返
し……。だけど全然痛くない。

（…っ！）

俺は阻止しようとその両手首を掴んだ。

（ほら、だから言っただろう）

少し意識を持っていくだけで、やってみると簡単だった。

（軽々と封じ込められる）

それから、そのまま玲華を押し倒した。手の動きを押さえ込んだ
ままで上から睨み付ける。

「こういうことされたらどうする！」

玲華は驚いていた。そして悲しそうに顔が歪む。だけどそれでい
い。

本意とは外れた行為。

これで嫌われても仕方がない。それで解ってくれるのなら安い対
価だろう？

「どうやったって力では女は男に勝てないんだよ！こんなふうに自
分の意思を無視されて！こんなことになってからじゃもう遅いだろ
！」

泣いて帰ればいい。そしたら二度と来れなくなるから。悔しいけ
ど、申し訳ないけれどこんなやり方しか見つからないんだ。

「あたしは……いいよ」

「！」

だけど玲華は澄んだ瞳でそんなことを言う。俺の方が意表をつか
れた。もう歪んだ顔じゃなかった。

「あたしは悠汰のこと好きだもの」

なんでそんなこと言えるんだ。

強がりじゃない本気の言葉。それが突き刺さり、雷に打たれたように震撼する。

でも、と玲華は続けた。

「こんなこととして、後から絶対悠汰は悔やむ。責任を感じて苦しむ」
「……………」

「だったらあたしは、あらゆる手を使って抵抗するわ」

全然怯えてない。だからといって怒ってもいなくて、力んでもない。真っ直ぐで曇りない目。

（バカ！）

だから無理なんだよ。その抵抗が出来ないんだ。

玲華は悔ってる。ただの脅しだと思ってるからこんなに余裕があるんだ。

（本気でやってやろうか）

これ以上修復できないくらいに、ぐちゃぐちゃに傷つけてやろうか。

どす黒い感情が渦巻く。

「ねえ。悠汰の方がつらそうだよ。……………いま、悠汰の方が辛そうな顔してる」

「っ！」

思わず、手が離れた。

心が折れて玲華の腕を自由にする。俺は、負けたんだ。

確かに辛かった。玲華の目を見てられない。

それでも玲華を受け入れられなくて、背中を向けた。あのときの兄貴もこんな気持ちだったのかもしれないと、ふと思った。

「おまえ……………。兄貴が俺にしたこと覚えてるか？ああいうことまで、俺はおまえにするかもしれないんだ」

卑怯な言い方をしてる自覚はあった。けどもう、どうすれば玲華に伝わるのかわからないんだ。

真っ直ぐ伝えても跳ね返される。どうしても負けてしまう。

「ねえ悠汰。あたしは本当に悠汰があたしを迷惑に思ってたんなら諦めるわ…。悲しいけれど、辛いけど頑張って諦める」

後ろから聞こえる声は静かで穏やかだった。すぐく時間の流れが遅くなる。そんな感覚に陥るくらい静かな間が空く。

「だけど……。今の話聞いてたら、悠汰はこれからもうやって他人と距離を置いて接するって、ことよね。遠慮してっ！引け目を感じながらっ！そんな生き方するんだったらあたし、許さないわっ」

（また泣いてる）

声だけで判然した。

さつきはあんなに堂々としてたのに…。

なんでここなんだ。人のことだろう。関係ないだろう。

（玲華はいつも他人の為に泣いてる）

すべて忘れて放っておいてくれたらいいのに。いつもそうだ。

（だから優しい）

だから優しくない俺には相応しくない。

「いくら、なにを悠汰が言ってたって、もう駄目なんだから。止まらないのよあたしだって」

もう一度玲華はティッシュを取ったみたいだった。気配でわかる。

「兄貴が言ったよな」

口を開いたら思ったより落ち着いている声が出た。一度落ち着いたら、もう先ほどのようなテンションには持っていけなかった。

「幸せな家庭に育った玲華にはわからないって…。あれ、すごく失礼な言い方だと思うけど、一理はあると思うんだ。暴力や虐待は連鎖を生む。それしか感情の表し方を知らないから」

そういうことなんだ。

両親から受け継いだものが真実としてここにある。善だろうと悪だろうと関係なく。連鎖は止めなければならない。俺は兄貴を止められなかったけど、これだけは絶対に譲れないんだ。

ドンって言葉を切った一拍くらい後に、いきなり軽い衝撃がきた。

（え…）

玲華が後ろから抱きついてきたって少し経ってから分かった。

「バカねえ。だったら、なおさらあたしといた方がいいわよ」

いつもの自信たっぷりな台詞を優しい口調で言う。

「あたしが教えてあげる。あたしが幸せな家庭に育ったってんなら、そんなあたしにしか出来ないことじゃない？それって」

心が僅かに動いた。暖かい心が接触している背中から伝わってくるようだった。

体温は熱く感じる。

（知ってる）

記憶にはないけれど、おそらく俺は知っていた。その暖かさ。母親に抱かれたことを体が覚醒する。おぼえて

玲華の言葉をもっとちゃんと聞きたくなった。だから彼女の方へ体を横に向かせた。

そしたら。

射るような視線でガンを飛ばしてきた。

今までとは違うところだとじろぐ。

「だいたいあんた深く考えすぎなのよ、しかも暗く！」

「玲華？」

「自分を大事にしない奴ってほんつとム力つくのよねー！しかも自分を知らなすぎるわ」

ずっと俺に抱きついたままなのに、その言葉はキツイ。先ほどまでの柔和さが皆無だ。

（なに……？）

頼むから誰かこの状況を説明してくれ。彼女はとうなったんだ？

「あんた今、自分は優しくなくて言っただわよね。あたしからすれば優しいと思うわ。あやなちゃんだってそう言っただじゃない」

「勘違いしてんだよ、櫻井は……」

「失礼なこと言うんじゃないの！あんたが言う優しさってなに？ヒデみたいによく気がつく感じ？萩原くんみたいに柔らかな空気を相

手にも与えてくれること?」

「関係ないだろ、いまは」

「大有りよ! いままでの悠汰は暴力だけじゃなかったって言うてんの!」

(あ…)

繋がってたんだ、ちゃんと。

「でも俺は…」

「悠汰、あたしが綾小路に押し倒れそうになったとき助けに来てたじゃん」

玲華の勢いが弱まった。少し気恥ずかしそうに、下を向いている。

「あんなの、誰だって通りかかったら…」

「助けない人だっているわ。もっと最低な男なら参戦してきたり、それをネタに脅すかもしれない」

「それは……………」

「それにあたしが気づかないとでも思った? 悠汰、あの日をきつかけに、しょっちゅう部屋に来てくれるようになったじゃない? 心配してくれてたんでしょ」

「あつ!」

つい大声が飛び出し慌てて片手で口を覆う。だけど玲華はしたり顔で微笑んできた。

バレてた。恥ずかしい。

確かに…、気になっていた。

いくら本人があっけらかんとしていたって、本音では怖かったかもしれない。そう思ったから。

「なんで……………」

「なんでわかったかって? バレバレよ。だってあんた毎日じゃなかったけど、基本的に綾小路が帰ったらすぐに自分も出て行くんだもの」

完全な敗北感。俺はがっくりと頂垂れた。

(敵わないなーもう…)

ほんとに。敵わない。玲華には。

もう、言つべき言葉が見つからない。何を言っても無駄だった。俯いていると玲華の手が動いた。後ろから、もう痕も残ってない首元にいく。

「ねえ。come with tomorrowの歌詞覚えてる？」
囁くように言ってきた内容は、また話が飛んでいた。きつと玲華のことだから何かに繋がるんだと思って、俺は頷いた。

あれだけ聴かされたんだ。嫌でも覚えていた。勝手に聴き続けたのは俺だけ。

「ああ」

「あれね、あたしの気持ちにピッタリだったから好きになったの。あたしが感じる悠汰への気持ちに」

「俺は……あまり好きになれなかった」
素直に俺は言う。

「どうして？」

「明日がくることの何が大丈夫か、どうしてもわからなくて。今日も明日もずっと同じような日々が続くと思っていたから……」

「これからは変わるわ。この歌詞はね、一緒に明日を迎える人がいるってことが幸せに繋がるって、そう唄っているの。だから一緒に歩んで行こうって誘ってるのよ」

ああ、そうかもしれない。

玲華がいるから変わる、のか。

これは認めざるをえない。

だってこんなに胸がスツキリとしていて軽い。

だからね、と言って玲華は俺の頬に触れて、顔を少し持ち上げられた。目線が合う。

そして彼女から近づいてくる。先ほどと同じところまで。

彼女の紅潮した顔をすごく近くで見た。

「いい？」

短く訊いてくる。吸い込まれそうで、即座に頷きそうになる。

だけどふと心が変動した。

泣きそうになるのを必死で堪える。

「ダメ」

そう呟いてから。俺は。

力なく降ろしていた手を玲華の耳の下辺りに触れて、自分からキスをした。

最終章

「んふふふふ」

「気持ち悪い笑い方すんな」

「だって嬉しいんだもん。世界中の人に報告したい気分」

「ヤメとけ。別に聞きたくないだろう、世界中の人だって」

何回かこんなやり取りをした。

兄貴がいつも座っていたダイニングキッチンところに、いまは玲華が座っている。

俺は昼食を作るべくキッチンに立っていた。

咲田さんがいなくなつて、少しずつだけど料理を始めてみた。レシピを見ながら作ると、意外だったけど俺でも出来た。ウマイかマズイかは別として……。

今日は別に作る予定はなかったのだが…。

あのあとから玲華からのボディタッチがすごい……。

前の会話はそのときにあったのだ。暑いのにべたべた触れてくるもともとよく触れてくるなとは思っていた。そういうスキンシップをするタイプかなつて。

（他の男にもこうだったらどうしよう）

余計な心配が増えた。

（綾小路には鳥肌立たせてたから大丈夫か…）

なんとか納得する。

つまりそれと料理がどう繋がるかというところ…。

そのままゴロゴロしていたら、真っ昼間だというのに抑えきれなくて一線超えてしまいそうになったのだ。

受け入れた直後そうなってしまうのは、あきらかに理性のきかない野獣がすることじゃないか。

だから誤魔化すようにキッチンに立った。

（まったく…）

自分も嫌じゃないから文句が言えない。

「あたしもなんか手伝おうかー」

横から恐ろしい言葉が降ってくる。

「いいから座つてろ」

「えー」

彼女としては何か手伝いたいらしい。やる気だけは充分だ。

でもさっき卵を割らせてみたら……余計な仕事が増えたのだ。

つまり殻を取り除くという行為が！

「もうすぐできるから！」

俺は炒飯を作っていた。火の音に負けないように怒鳴る。

ちよつと前までは自分でも想像できない姿だと思う。

こんな状態でも腐らずにすnderのは、そのすべてが玲華のおかげだった。

「オラ！出来たぞ。味は保証しない」

照れ隠しでわざと怒ったような口調になってしまった。自分の料理を人に食べてもらうなんて初めてだ。しかも相手は、いつも抱えシェフの料理を食べて舌が肥えている玲華だ。

どうするか構えるように見てしまう。

「美味しい！すごいよ、悠汰天才！」

少しホツとする。俺も向かいに腰を落ち着かせ口に運んだ。

「……………」

「どう？」

「普通以下。メシがべちゃべちゃしてる。あと何かが足りない」

「評価厳しいー」

「っーかおまえのはお世辞だろ！あきらかに」

ふてくされながら玲華を見ると、彼女はそれでもバクバク食っていた。

「いーじゃん。愛情込もってるんだから。実際食べれるんだし」

「……………」

そんなものだろうか。

というか愛情を込めたとは一度も言っていない。
でも明らかにコレは失敗だった。

（チャーハンなめてた…）
ちよつと落ち込む。

「ヒデに料理習おうかな」

「どうしたの？ 珍しくやる気」

「うつせえ。どうせやるならウマイ方がいいだろ」

「じゃ、じゃ、あたしも一緒に習うよ」

身を乗り出して玲華が楽しそうに言った。意外だ。

「やりたいの？ 料理…」

「うん！」

シェフがいるんだから必要ないのと思う。なんでも挑戦する姿勢はスバらしいけど。

「おまえに欠点^{ひが}がなくなったら面白くねえな」

「なにそれ？ 僻^{ひが}み？ でもそうねー本格的にやったらあたしの方が上達しそう」

どこから来るんだ、この自信は。見習いたい部分だ。

（挑戦心だけ）

なんか本当にそうなりそうでコワイ。

女の尻に敷かれるタイプ。

今さら久保田さんが言ってたことがよぎる。

でも確かに俺は玲華に勝てる場所がない気がしていた。

「俺、来年の球技大会本気で頑張るわ」

新たな目標を掲げる。リベンジを誓う。

そうしないと、どんどん腐っていきそうな恐怖に似た不安があった。

「あ、そう？ でも大丈夫よ」

不敵に玲華が笑う。この笑顔はよく知ってる。嫌な予感がした。

「その前に秋に体育祭があるから」

「……………」

「まさか知らなかったの？あんたってホント学校行事に興味ない人よね」

「なんでだよ！あんだだけ派手にやっというて、体育祭の変わりじやないのか？」

「誰がそんなこと言ったのよ」

（誰がつて……）

誰も言っていない。自分でそう思い込んだだけ……。

俺はスプーンを握りしめ、がつくりと肩を落とした。

「期待してるわよ」

なんの躊躇いもなく玲華はこんなこと言っし。

「また冷蔵庫でも賭ける気か」

目線だけ上げたから、ちょっと恨めしそうに見えたかもしれない。でも玲華はなにも気にしてないというふうに返した。

「うっん。あれはなんとかあったわ。お父様と仲直りの印しに戴けることになったの。今度はそうねえ、電子レンジにしようかな」

「おまえあの部屋に住もうとしてないか」

「お風呂と洗濯機がないわ」

さらりと玲華が食事を続けたまま言っ。

その二つが揃ったら、じゃあ住んでもいいのかよ。

「じゃあ体育祭でいつか目標」

「目標が欲しかったの？」

「今回なにひとつ満足いかなかったからな」

「そうなの？球技大会は不可抗力だと思っけど…ほかに？」

玲華の手が止まった。真面目に聞いてくる。

「兄貴：止められなかったし。結局犯人も俺が捕まえたわけじゃねえし」

何度も頭では巡っていたことだったけど、言葉にしたらさらに情けなく思えてきた。

そんな俺を見つめたまま玲華が真面目な口調を変えずに言った。

「もうひとつまだ結果出てないのがあるわよ」

「なんだよ……」

「あたしを護ってくれるってやつ」

「……………」

「なにその沈黙」

「もうその危険はないと思うけど……」

玲華が隠そうともせずにおもいつきり嫌な顔をした。

「そういうことじゃない？」

「……………」。じゃあおまえ大人しく護られてる？」

「……………」

「……………」

俺の切り返して玲華が絶句した。

やれやれ、だ。

俺は次に玲華がなにか言うまでなにも言わねえぞって、変な意地を持ちながら炒飯を食べた。玲華がそれを見ていたのがわかる。そして動かないまま口を開いた。

「とりあえずさ、一緒に体育祭頑張ろっか」

「おう」

短く答えると玲華も食事を再開した。

体育祭ってそんなに力むものだっただろうか。よく考えたらリレーぐらいしか、見せ場もなかったような気がする。

でもまあ、玲華の優勝したいって希望を助けるのも悪くない。注目されたくてやるわけではないのだから。

「午後からなんだけど、病院行かない？」

また突然そんなことを玲華が切り出すもんだから、俺を口の中のを全部吹き出しそうになった。無理矢理呑み込んでから、少し咳き込んで喉の調子を整える。

「知ってんだろ」

父親の拒絶を知ったうえで言ってるって、本当は分かっていたけど、なんでそんなことを言うのか理由が解らない。

「先週末世羅がお兄様のお見舞いに行っただって。もうすぐく元

「気だったって」

「そうか。」

俺には様子がわかる手段がなにもなかったから、こんな伝わり方でもホツとする。

「ちゃんと世羅が行ってくれてたんだ。」

「なんかそれも嬉しかった。別に俺が行かなくても、ちゃんと見てくれてる人がいるんだ。」

「じゃあわざわざ行かなくても……」

「余計に行かなきゃだめよ！」

玲華が力説する。

「だって元気があるときの病院が一番暇なのよ」

妙に納得してしまう言い方だった。俺は入院なんかはしたくないけど、時間を持て余しそうなことは理解していた。

「だからといって、父親がまつさらに無視できるわけではない。」

「そんなにお父様が気になる？」

「そりゃあ……」

「大丈夫よ。あんなに広い総合病院なのよ。四六時中ついてるわけでもないし、姿さえ見せなければバレっこないわ」

「あ、そっか……」

自信満々な玲華の物言いは、いつ聞いても説得力があった。

それより、なんでそんなことも言われないと俺は分らないんだろっ。

「おまえって優等生ってまわりから言われてたけど、そういうわけじゃないんだな」

「ただのいい子って意味ならそうね。当たり前でしょ。別に自分に非がない時まで遠慮してたらバカみたいじゃない？そもそも理不尽な言いつけなんだから」

「堂々と言い放つ。まったく頭が上がらない。」

（どうせバカだよ）

つけ入る隙がなくて、出来ることと言ったら拗ねることぐらいだ。

拗ねるならば開き直った方がまだいい。開き直るときに好転することがあるから。

「それにどうせ今後もお兄様が帰ってくるのはこの家なのよ。お父様だってお母様だっけそう。いずれそういう局面はくるわ。だって自分から行ってやりましょよ」

「そういう局面って？」

「あれから家族でちゃんとした話し合いってしてないでしょ」話し合いか。

まだ少し怖さがある。両親から否定されるという行為を、直接的に与えられると解ってしまっているから、立ち向かうには勇気が要る。

あの人たちは俺から見捨ててしまえばいい、と頭でいくら思っても…遠い昔にみた焦がれる気持ちにはくならない。

「どう、したらいいんだろうな」

どう言えば上手くいくんだろう。今まで一度も噛み合っていないわけだから、やり方が解らない。

「悠汰が心を開けばいいのよ」

まるで子供に教えるように玲華が微笑みながら言った。

「悠汰はまだちゃんと自分の気持ちを伝えてないから。まずはそこからだと思っわ」

確かにそういう意味では、俺はまだなにもしていない。上手く話しか出来るのか、伝えられるのかまだ自信はない。

けれど、言わなければならんだ。今後のためにも。いくら否定されても。

「大丈夫よ。学園内でも誤解してた人がだんだん悠汰のことわかってきてたりするの。だからご両親も絶対解ってくれるわ。絶対大丈夫」

力付けるように玲華は繰り返した。

（そうかもしれない…）

すべて玲華の言う通りかもしれない、と思えるようになってきた。

俺は考えすぎていて、気を張っている。

それを取り除いて、拙つたなくてもしっかり伝えよう。どうせ上手い言い方なんて知らないんだ。

なりふり構わずぶつかっていけば、意外となんとかなるような気がする。

（それに玲華がいるから）

否定的じゃない人が隣に要る。それだけで、何倍にも何十倍にも前に進む力が湧いてくるようだった。

「じゃあ行くか、一緒に」

俺がそう言ったら、なぜだか玲華はすごく嬉しそうな顔で笑った。きつと玲華には一生敵わないんだと思う。

だけど、それがまったく嫌じゃない自分がそこにはいた。

苦しくても明日はくるから

大丈夫だから 悲しまないで

顔をあげて 一緒にいこう

Will you go together in tomorrow?

row?

永久とわに 隣りで笑うから

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2078n/>

come with tomorrow ~ 新しい場所へ ~

2010年10月8日11時43分発行